

残響世界の聖剣譚 —
VRMMOで鍛えた魂で侵食
されるこの世界を守り
ます—

気力♪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

20XX年。中学生の少年“風見琢磨”は、サポートAIの“メイ”と共に謎の600円インディーズゲーム《Echo World》をプレイする。しかしそのゲームはワールド規模の死にゲームであり、サビス初日にゲームオーバーになってしまった。

それから始まる現実世界の異常。深夜に現れた異界は琢磨を飲み込み、現れたモンスターの特場へと変貌させた。そして、そこで死んだ人間は光となって消えていった。

しかし、その異界の中にあるのは絶望だけではなかった。ゲームの中で身に着けた“魂のコントロール”がその世界では通用したのだ。その力で琢磨は戦いを始め、モンスターを打倒する。

それから琢磨はその力から異界の引き起こす異常に深く関わり始めていく。 “ 守る ” という事がどういふことなのか、その心で学んでいきながら。

■ □ ■

小説家になろう様、カクヨム様、ノベルアップ+様、アルファポリス様 に同時投稿
しています。

目次

第一戦 VSシリウス 少年と臆病者の 剣（チキンソード）	97	リーダーになりたくない者たち
少年と鉄パイプ	1	天狼の目覚め
検査と彼女と父親と	18	戦いの前の日常
一周目の回想	29	第一戦 VSシリウス
人狼シリウスとの現実	42	第一戦リザルト
病室への来訪者／魂の研究者	50	公園の二人
ダイナという剣士との出会い	59	天狼と鬼剣
騎士アルフォンスの《ゲート》	68	第一戦最終話 刻まれた痛みと微かな 希望
乾裕司と病室で	81	幕間01—1 ゲーム内部掲示板
風の刃と炎の拳	89	幕間01—2 プリンセス・ドリルと長

親のプラクティスエリア	196	修行	01	317
第二戦 VS サビク 騎士の国と聖剣達		聖剣信仰		326
刑事の戦い／騎士との遭遇	207	戦士ロックスとイレース		336
死者の蘇った国	217	一本道の地下通路		345
荒野の西風亭	228	隠し部屋		356
ダイナ師匠の授業 01	237	泥の剣鬼		366
闇夜の襲撃	247	剣鬼と剣王		375
日常と考察 マリオネティカ	256	スタートラインの一步前		383
カナデとの街歩き	267	辿り着いた者たち		392
人魔サビク・アルフォンス	277	サビク		403
タイムオーバー	287	無意識の行動		415
仮説	298	割れない空		424
修行開始	306	生命燃焼		436

第三戦	VSアルフレシャ	自称王女と	543
の少年	——	——	543
幕間02	プリンセス・ドリルと迷子	——	531
第二戦最終話	異界殺人鬼	——	523
騎士たちの聖剣	——	——	513
第二戦 最終戦前	——	——	505
第二戦リザルト	——	——	490
封印の間での戦い	後編	——	481
封印の間での戦い	中編	——	472
封印の間での戦い	前編	——	462
開く扉	乾裕司	——	454
RTAの始まり	——	——	446
ボランティアスタッフ	——	——	446

螺旋の槍	——	——	554
異界殺人鬼タクマの日常の終わり	——	——	554
捨ててきたモノ	——	——	563
とある日の掃除	——	——	571
高砂姉妹	——	——	580
入植者たちの牙	——	——	588
アルフレシャ	——	——	597
天仙魚	——	——	606
高砂瀬奈の聖剣	——	——	615
現実世界の聖剣	——	——	624
人魚アルフレシャ	——	——	633
封鎖された王都	——	——	640

魔晶の行方

空襲の後 内乱の前

黒衣の射手リコリス

狂乱の王都

648

658

670

679

第一戦 VS シリウス 少年と臆病者の剣（チキンソー
ド）

少年と鉄パイプ

中学2年生の少年風見琢磨が通う学校の応接室。

そこには少年の他に新しい背広を着て身なりを整えている若い男と、どこかだらしない格好に不愛想な顔をしている中年男性の2人がいた。

「やあ、君が例の事件の目撃者くんだね？ 僕は足柄、こつちの不愛想なおつちゃんが栗本。どつちも……まあ刑事みたいなことをやってるよ」

そうして見せられたのは警察手帳。一応端末でスキヤンしてみたが、どちらも本物だったそうさ。

琢磨は、足柄と名乗る刑事にはどこか見覚えがあると感じていた。どこかで会った人だったのだろうか？ と思考を外に外しかける。しかし、真面目にしようと努力していた。

さっさとこの任意同行を終わらせて授業に行きいたいというのが琢磨の心境なのだ。

これまで通えなかった学校に、中学からようやく通えるようになったのだから。

「じゃあ、昨日のことを話してくれるかな？ 君と一緒にいた女性が見たという狼と、そいつを殺した君のこと。そして、狼に食い殺されてから消えたその女性の恋人、保科さんについてのことを」

「はい。ですがその前に、俺の健康管理AIを紹介していいですか？ 視界のデータは共有してるんで俺一人よりマシな話が聞けると思います」

それは琢磨が健康でない証拠。健康管理AIなど一家に一体あればいい方で、それを常備しているという事はAI技術がシンギュラリティに近づきつつあると言われているこの時代でもあまりない。

「構わないよ、風見恵子博士の作った健康管理AIのプロトタイプ、個体名“メデイ”実働時間は13年。合ってる？」

『肯定します。私はメデイ、マスターの神経由来の心肺機能障害をサポートするために作られたインプラント型のAIです。が、その後さまざまなカスタマイズがされているために一般に流通しているAIより多機能であると自負しています』

そう答えたのは琢磨がテーブルに置いた端末のスピーカーからだった。メデイが琢磨の体内からスピーカーを操作しているのだ。

これには警察の2人は少し驚いていた。その声の聞き取りやすさに。AI特有の不

自然さがないのだ。これは実働時間13年に偽りは無いなど二人は納得する。

『それでは、お話いたしましょう。マスターがいかにして狼と殺しあうことになったのかを』



遡ること約11時間前のこと。琢磨は先ほどまでプレイしていた《Echo World》というゲームの余韻に浸りながらベッドから起き上がり、ストレッツチを行っていた。昨今人気の《Soul Linker》というウェアラブルのVR、AR共用端末を操作しつつ彼の相棒へと声をかける。

「メデイ、メデイカルチェック頼む」

『はい、それではいつも通り30秒動かないでくださいね』

それは、インディーズゲームが好きだという妙な趣味を持つ琢磨の日課だ。プレイが終わった後の簡易検査、実際これで命をつないだこともあるのでなかなか侮れないことなのである。

『検査に問題はありません。お疲れさまでした、マスター』

「お疲れ様、うっし今日終わり！　そしてゲームオーバー！　何考えてんだあのゲーム

の作者最高にアホだろ。VRMMOで世界単位の死にゲーとか」

『ですが、楽しかったのでは?』

殺人教習所

爆殺テロレー

「正直VR剣道とかVRパルクールに匹敵するあの濃さは。レビュー書いとこ」

『それでは、その間に明日の朝食の準備を自動調理器で行います。オーダーはありますか?』

「親父が明日の朝帰ってくるから、いつもので頼むわ。あのハニトースムージーコーヒーのごちやませット」

『……それは困りましたね、いつものコーヒー豆が切れています』

「親父、何気にアレ楽しみにしてるからな……」

そうして琢磨が思いついたのはちよつとした冒險心。今日は新月なのだから星が綺麗に撮れるのではないかという程度の思いだった。

「メデイ、バイクのエンジンかけといて」

『現在時刻は22:30分、補導されていますよ?』

「コンビニまで5分もないんだから大丈夫だって、505だから事故することもないんだし」

彼が愛用しているのはシキシマXV-505というバイクだ。

小柄だがオートバランスが優れており、ベビーカーにだって使えてしまうという謳

い文句だったりする。しかしバイクとしての性能はかなり高い傑作機だ。

これまで自動運転でしか乗れてなかったため、最近VRで免許を取った琢磨には絶好の運転チャンスなのだ。当然少し無茶を言っている自覚はある。

彼の義父が態度に似合わず過保護であり、自動運転以外は基本的に認めていないのも理由ではあるのだがそれはそれだ。

『……仕方ありませんね。ただし運転ログは残します。存分に怒られてください』
「了解」

そう言って琢磨はプロテクターをしっかりと付け、ライダーズジャケットを羽織りコンビニまで向かった。

そして、途中で春の大三角を写真に撮って、コンビニで御糞屑のコーヒー豆を買ってバイクのメットインに詰め込んで帰路につく。

すると、突然に世界が変わった。そうとしか表現できない異質さだった。

現在地は大通り、そこに変化はない。そこで突然にバイクが停車した。故障かと思っただが、そんなことよりも空気がおかしい。

「……メデイ、何かわかるか？」

『不明です、しかし尋常ではないかと。バイクの自動運転システムが停止しています。それどころか、端末の回線でのインターネット接続および通話も不可能になっています。スタンダードアロン状態ですね』

なんだか現実味のないゲームのような状況だな、と琢磨は思った。もつとも、現実だろうがゲームだろうが琢磨のやることは変わらないのだが。

守るべき誰かがいないなら、適当にしていればいいのだ。メデイ以外誰が見ているわけでもないのだし。そもそも誰にも迷惑をかけない。

そう考えたところで、悲鳴が聞こえてきた。それも2人分。

その瞬間、聞こえてしまったという事実から琢磨にはやることのできた。

危険かどうかは置いておいてここは行かなくてはならない。ヒトの輪の中で琢磨が生き残るためには、そう動かないといけないのだから。

『私は推奨しません』

「けど、行くよ。何、死んだら死んだだ。今どきの若者らしく、人助けをするいい人のロールプレイR Pをやるとしようか！」

そういつて琢磨は心の中の仮面をかぶる。それはひどく薄っぺらいものだったが、それでもそのかぶり方は堂に入っていた。

「今、助けに行きます！　だから、頑張つて！」

そう言った琢磨は端末の音量を最大にしてサイレンの音を鳴らし始めた。普通ならこれでどうにかなるだろう。

そう思つて、それが通らないことも同時に思つて、バイクで悲鳴の元へと向かう。そこには、狼に追われるカップルが細い路地に入つていく姿があつた。

黒い、影でできた狼によつて。

「アレ、ついさつきゲームで殺した奴に似てるな」

『ですね。群狼シリウス、《E c h o W o r l d》のボスキャラクターです』

「あいつは一匹だけだけどな！」

そう言つて、琢磨はバイクの向きを路地に向けアクセルを全開にして突つ込んだ。そしてバランスの調整をメディに任せて全体重でバイクを傾ける。それによりバイクは路地の中で急カーブを成し遂げ狼の後ろを取つた。

自動ブレーキは作動せず、狼は射程距離に入った。その瞬間にバイクから飛び降りる。

どんな理由でどんな生物かは知らないが、バイクに引かれれば大ダメージを受けるだ

ろう。そうなれば琢磨以外は普通に逃げられる。そんな目論見だったが

その狼は、バイクに衝突されても何のダメージも受けずに壁に着地し。ゆつたりと着地したのちに見えない貌で嘲笑うかのように「グルル」とうなり声をあげた。無残に破壊されたバイクを足蹴にして。

「メデイ、地図！ お二人とも！ 逃げますよ！」

「あ、ああ！」

あの速度のバイクから飛び降りてもあまり痛まない体の異常を無視して、琢磨は男女と共に、壁に着地した狼と逆方向に走り始める。普通なら琢磨が一番遅く、男が一番速くなるはずなのに3人のスピードはほぼ同じだった。

それどころか、VRでしか走っていないレベルの琢磨が一番速いかもれないほどだった。

『身体能力が異常に向上しています。筋肉も、内臓、心肺機能も』

メデイの言ったそれは琢磨へは福音のはずだった。なにせ、あのバイクの衝突で殺せなかった時点で狼の餌は琢磨になるはずだったのだから。半ばそうなる覚悟で行ったのだから。

しかし、影の狼はそれよりも速かった。遊んでいるのをやめたのか、徐々に自分たちとの距離を詰めていく。

そんなときにメデイが指示したのは丁路地、そして、右側には喫茶店があり道は塞がれている。左の道は大通りに繋がっている。

一瞬、意思が鈍りかける。しかし、琢磨は考えるのをやめた。

“俺が親父の息子の風見琢磨として生きるにはどうすればいいのか”などとつくの昔に決まっているのだから。

『琢磨、お前は他人を守れる男になれ。お前の父親はそういう男だった。それを心で受け継いで行けるように、守れる男になるんだ』

そう、伝え聞いた義父からの、実の父の遺志を思い出してタクマはふらりと道を定める。現状の戸惑いをそのままに、しかし心は普段通りに。

「二手に分かれます！ 俺は右！ あなたたちは左！ とにかく逃げ延びて警察に駆け込んでください！」

「おい、そつちは……」

「行き、ましよう！」

「あ、ああ」

現状を考えるに妥当な判断だと琢磨は思う。さつき会ったばかりの子供と、おそらく

付き合っている彼女、どちらを優先するかなど決まり切っている。

なら、きつと大丈夫だろう。そう思っただけで、琢磨は二人を急かして左の道に追いやり

速度そのままに壁に柔らかく着地して跳び、狼に蹴りを放った。

その一撃は反撃を予想していなかった狼にクリーンヒットして、その片目らしき部分を潰した感触を琢磨の足に与えた。

「何やってんだお前！」

叫ぶ男性。とつと逃げろと内心思いながら琢磨は言う。

「……逃げ切れないんで、ここは任せて先に行け」ってやつをやらせてくださいな」

「クソ、なら俺も！」

「優先順位、俺は彼女さんより高いですか？」

その言葉に動きが止まる男性、その後ろには、怯えて震えながらも走り続けた彼女さんがいる。

そして、「すまない！」と一言言っただけで俺を置いて走り出した。

そして、狼が琢磨を襲う。鋭い爪による攻撃だった。

しかし、この異常な空間での身体能力を把握した琢磨は、ゲームでの感覚通りに狼を踏みつけて空を跳び背後に着地する。

そうして何合か回避に徹したことで琢磨には分かったことがある。まず、最初の蹴り

同様踏みつけや足払いにも効果はあった。ゲームで慣れている肉を蹴る感触が返ってきたからだ。

そして、この狼は再生能力なんて無粋なものをゲームの狼と違い持つていないだろうという事。

今現在、狼に有効打を与えられたのは蹴りの一撃のみ。ならばこの黒い狼はゲーム的な耐性を持つているのだろうと琢磨は当たりをつけたのだ。

だからこそその壁を使った跳躍。異常に上昇した身体能力で高さを取り、その位置エネルギーをもつてして狼を仕留める。そういう判断だった。

その判断には間違いはなかっただろう。狼を殺すには実際それしかなかったのだし、近くに武器は何もない。当然剣などどこにもない。

だから、それが最善のはずだった。

たった一つ、狼が先ほどと同じ狼ではないという前提を除けばだが。

飛び上がったから着弾までの僅かな間に、狼の体を黒いモヤが包み込んだのだ。ゲームでの群狼シリウスと同じように。

「ツッ」

『マスター！』

それに気が付いたのはメデイと琢磨、二人同時だった。片目のつぶれた狼の背中に現

れた狼の体。それは《Echoworld》の群狼シリウスが行っていた最悪の不意打ち技。

体から分身を作り出して攻撃する、分身噛みつきだった。分身の口は琢磨の足に噛みつき、食いちぎるつもりで力を込めていた。しかし、幸いにも琢磨の義父の選んでくれたプロテクターは頑丈であり、噛みちぎられる寸前で噛みつきは止まっていた。

この状況に陥ったのは俺が首を突っ込んだからだが、今の意味などさっぱり分からない。どうしてまるでゲームのような攻撃ができたのかなど意味不明だ。ファンタジーなことこの上ない。

だが、琢磨はこのままならどうしようもなく殺されるといふ事は確かだった。

故に琢磨は喰いつかれていた足を押し込んだ。苦悶の声を押し隠し、一瞬でも長くコイツを足止めしてあの二人の命をつなぐために。

それが現代に生まれた鬼子の、精一杯の人のフリなのだから。

「や、ら、せ、る、かあああああああ！」

そういつて叫びながらやってきたのは先ほど行ったカツプルの男の方。その手に鉄パイプを持って、俺を救うためにそれを全力で振り下ろした。

後で琢磨が聞いたことだが、それは先ほどまで怯えていた彼女の懇願であり、勇気だった。だからこそ、上昇した力のすべてを使った一撃を放てたのだろう。その一撃

は、本当に力強かった。琢磨を救うには、それは正解の行動だった。

その手に持っているのがただの鉄パイプでなければ、だが。

現実是非情であり、なんの力も籠っていない鉄パイプを体で受け止めた狼は、そのもともあつた口で男性の頭を食いちぎった。

シリウスは吠える。恐怖を煽るように、
女性の泣き叫ぶ声が聞こえる。

そして、そんな感傷をこれっぽっちも感じていない琢磨は、思考を回転させた。落ちた鉄パイプが見えたからだ。

導き出したのはあまりにも異常な結論。いくらここではゲームのように動けるからと言つてもここは現実世界、できるはずなんてないのだから。

ゲームシステムを現実に流用するなんてことは。

だが、琢磨と同じ結論にたどり着いたのはAIであるメデイもだった。メデイは Soul Linker を通じて琢磨の魂の情報を取得しており、先ほどまで琢磨が攻撃するとき足に足に意識が、殺意が集中していたことを認識している。

『マスター、ありつたけの心を込めてください』
「わかつてる。今ここで」

琢磨はゲーム同様の時間切れにて消えた狼の分身から転がって逃れ、男性の持つていた鉄パイプをしつかり握りしめる。

そして、そこに命を込めた。

ゲームで呼ばれるその技術の名前は、ライフフォース。命を燃やして力に変える技だ。

醜く転がりながら、鉄パイプを全力で振りぬいた琢磨。その一撃は狼の頭を吹き飛ばし、その命を奪った。

手に残ったその感触が、ゲームの中いつものことと自分を錯覚させた。それくらいに現実味が無い戦いだった。

そうして、琢磨は男性の遺体に目を閉じずに手を合わせる。自分なぞを助けるために散らした命だ。義理としてこれくらいはやっておこうとのことだったが

その命が、まるでログアウトしていくかのように光になって消えていった。

飛び散った血も、握った鉄パイプの曲がりも、果てはクラツシュしたバイクまで元通りになっていた。そして、食いちぎれかけた足も、綺麗に戻っていた。

戻ってくる倦怠感、琢磨には意味がわからないままだったが、なんとかこの事態は終

わったように思えた。

そう思うと残っている足の痛みをごまかすように琢磨は腰を下ろし、メデイの通報でやってくるまで警察を待ったのだった。



そんなことを、内心についてはメデイとともにごまかしあいつつ琢磨は話した。当然のように渋い顔をする大人2人。なぜなら、琢磨の発言もメデイの発言も証拠なんてどこにもないのだからだ。

監視カメラの映像、バイクのドライブレコーダー、ひいてはメデイのリンクしている琢磨の視界情報、そのすべてに世界が狂った間の情報は残らなかったのだ。

せいぜいが、琢磨の視界に映っていた、視界だけが移動している情報程度なのだ。カメラの類は完全に沈黙、暗闇を示していた。

「一応聞くけど、君って虚言癖ある？」

そんなことを話す足柄さん、その頭をはたく栗本さん。飴と鞭という奴だろうかと琢磨は考える。

「ウチの新人がアホなこと聞いた。よく頑張ったな坊主」

「……はい」

「なら、これで一応の事情聴取は終了だ。後は警察に任せてゆっくりしてろ。ていうか、

休め」

そう促す栗本さん。このまま教室に行っても授業を受けさせては貰えなさそうなので、しぶしぶと了承して学校からバイクで出ていく。

そうしていると、血の匂いが風に乗って漂ってきた。

そこは路地裏へと続く道の途中。

出てきた優等生そうな一人とすれ違いながらその路地に入っていくと、そこには切り刻まれた猫が居た。

「メデイ、一応通報お願い」

『了解です。それで、先ほどの彼のことは話しますか？』

「……メデイに任せる。どっちでもいい」

『では、面倒は避ける方向にしておきますね』

そう言いながら、琢磨は猫の顔を見る。猫は死にそうになりながらも助けを求める目をしていた。しかし、もう間に合わないことは明白だった。

そんな猫を傷つけた彼のことよりも、傷ついた猫に対して特に何も感じなかった自分のことが、何よりも嫌だった。

時が経っても、鬼子は鬼子のままなのだ。

「最初^{?????}の襲撃は無事終了しましたね。良かったですよ最後の一人^{ラストワン}が彼みたいなの戦闘タイプ^{プレイヤー}で」

「目当ての聖剣使いじゃあなかったみたいだがな」

「……聖剣があつたとして、あなたは どうするんですか?」

「そいつ次第だよ。奪うか殺すかの二つだ。」

現実世界の現象が完全に収束したのを見て、”残響世界の管理者”の男女はそんなことを話していた。ゲームと現実のはざまにて、両方の世界を認識しながら。

「それで、あなたが目をかけたあの少年はどうでしたか?」

「……さあな。実際問題ああいうのは一部除いて早死にするからな。それまでに俺にたどり着いてほしいもんだよ」

「わかりませんね、あなたは」

「おつちゃんもAI^{AI}つてのがいまいちわかってねえよ。お前の堅物さはわかったけどな
!」

男は道化のように笑い、女はそれに対して幼い感情を向ける。”この男はどうしてこ
うなのだろうか”と。若干の呆れと共に。

検査と彼女と父親と

バイクに乗つての学校からの帰り道、琢磨は思った。

このまま家に帰つてよいものなのだろうか？と。

『いえ、普通に戻るべきです。と言つて普通に戻る方なら苦勞はないのですがね……』
メデイのその常識的な回答に若干の諦めと許可を感じた琢磨は、バイクを病院へと向ける。

自分の最も大切な家族であり、血のつながりはなくとも実の息子同然に扱つてくれる優しい義父風見^{かぜみ}凧^{なぎと}人と、守ると決めた最初の一人、御影^{みかげ}氷華^{ひょうか}という女の子がいる、帝大付属病院へと。

そうして琢磨は病院のいつもの場所にバイクを止め、受付に向かう。一日寝て起きたら痛みも消えてしまったわけだが、それでも足を食いちぎられかけたのだ。万が何か後遺症が残っていたら^{大変}面倒なのだし、親のコネを使って病院に検査をしてもらおうという魂胆だ。

最も、メデイの検査でも問題はなかったもので、大丈夫なのだろうとも思っているのだが。

「あら、息子君どうしたの？」

そう声をかけてくるのは氷華の担当看護師をしている乾茜いぬいあかねだ。健康的な体つきに赤みがかった髪が綺麗な美人だが、浮いた話を聞かない不思議な人だと琢磨は勝手に思っている。

もつとも茜がそれを聞いたなら「あんたらの前だと恋愛が薄っぺらく思えるの！ 悪い！」と逆ギレするだろうが。

「はい、ちよつと昨日いろいろあつたんで検査をしたいなと」

「……大丈夫？ 心臓回り？」

「いえ、足ですね。問題はないと思うんですが、一応」

「何があつたのよ」

その言葉にどう答えたものかと琢磨は悩み、「……説明し辛いですね」とだけ答えた。

「へえ、元担当のお姉さんが信じられない？」

「どうか信じてもらえないかと」

そうして、琢磨は乾に大雑把に事情を話す。

「……そつかー、うん、うちの弟も似たようなこという時期あつたよ」

「予想はしてましたけどその反応は割と来ますね」

『一応、先ほどの話は本当だ、と補足させていただきます』

「え、本当なの!!、痛みは? 足見せて!」

そうして言われるがままに椅子に座らされ足をくまなく調べられる琢磨。茜は、琢磨のことをよく知っている。かつてはどれだけの運動が大丈夫なのかを知るためだけに平然と死にかけたのを新人時代の彼女は見たことがあるのだ。だから、この少年はやると決めたらやるを知っている。それも平然と。

あまりに現実味のない話だが、実際にそういう状況に陥ったらやる覚悟がその心に存在してしまっていることを茜は知っているのだ。

「よし、外傷なし、痛覚反応正常、今のところ正常ね。検査の予約は私がしておくから、先に氷華ちゃんのところ行ってきていいよ。事情を話したらまともによってくれないだろうから、VRから起きた後でも幻痛があったとかにしておくわね」

「ありがとうございます」

「いいのいいの、君が生きていることは氷華ちゃんにとつてのプラスになるからね。間違いない。仲良くなったから、死んでほしくはないじゃない」

そういつて茜は端末を操作しだす。先ほどまでの子供を安心させる優しい作り笑顔ではなく、命を救う人間としての真剣な顔で。

その姿に琢磨は頭を下げ、友人の病室へと向かう。

そこはVIPルーム、10年以上に渡りその一室を私物化しているこの病院の主、御影氷華の部屋だ。

その中では、最近ようやく伸ばすことができた青い髪をなびかせて、体力維持トレーニングを自主的にしている少女がいた。

腕は細く、体は小さい。どこがとは言わないが大きさも年相応よりもかなり小さい。そこだけを見ると病弱な少女だ。

しかし、その目は違った。あふれ出るばかりの生き残る意思。それが彼女の印象を生きている少女へと変える。

彼女の異名はMrs. ダイハード。死んでも死なないようなタフな女だと主治医が漏らしたことでその名前は広まった。恐ろしいほどの納得と共に。

「あら琢磨くん、お帰りなさい。ご飯にする、お風呂にする？ それとも酸化炭素で温かい部屋で愛を語り合う？」

「ただいま。だけどここは俺の家じゃないし、3択はどれもNOだ。練炭とかマジでやめろ」

「あら、つれないのね」

「とうか、ただいまにツッコまないのな」

「だって私を琢磨君の帰る場所にするので、当然でしょう？」

「この女やつば強すぎるわ」

補足しておくが酸化炭素は化学式CO、練炭の自殺で起きる一酸化炭素中毒の原因の物質である。平然と心中しようとして提案しているのだこの少女は。そして、琢磨は知らないがこの病室の鍵付きロッカーの中にはガムテームなどのもろもろが存在していたりする。まさに有言実行の女である。

水華は病院生活の中で琢磨と知り合い、とある約束を結んだ仲だ。付き合いの長さは9年以上、幼馴染と呼べる関係でもある。

そんな彼女は、十数日後に迫る最後の手術のためにやっていた体力向上のためのトレーニングを切り上げて琢磨と向かい合う。いつものように、内心ウキウキしながら。

「ところで、学校はいいの？」

「刑事さんから帰って休めって言われたよ」

「外傷はないようだけど、喧嘩でもしたの？」

「狼みたいなやつとな」

「……詳しく話を聞かせてくれる？ 幸いお金だけはあるから人ひとり追い落とすことなんて不可能じゃないのよ？」

「安心しろ、意味なんかさっぱり分からないけどもう仕留めたから」

「それならよかったわ」

『仕留めたという言葉に疑問はないのですか?』

「大丈夫よメディ。私は琢磨くんがどんな人間でも愛するから。裁判でもちゃんと証言してあげるわ。……ああ、それよりも弁護士に話を通すほうが先かしら?」

「刑事罰の起きることじゃないから安心しろ。マジで」

そうして、"ゴイツの場合は信じすぎるのが問題なんだよなあ……"なんてことを考えながら琢磨は昨夜起きたことを話した。氷華は、それを表面上はクールに、しかし付き合いの長い琢磨にはこれは噴火する前の火山のようなものだと感じさせる表情でしっかりと話を聞いていた。

「そう。それじゃあ《Echo World》だったわね、開発元はDr. イヴ。個人なのかしら?」

「待ってくれ氷華さん、何をするつもりで?」

「ちよつと出るところに出てもらうだけよ。どう考えても関係者でしょうこの開発者」

「その辺は警察に任せよう、な?」

「琢磨君を傷つけたのよ? なら100倍返しの基本じゃない」

「それを基本にすんなよ?」

「あいにくと私は私の価値観を譲るつもりはないわ」

「強すぎるぞゴイツ」

「私だもの」

「その返し卑怯だと思っただが」

そうして製作者のことを調べ始める氷華、しかし、その顔は芳しくなかった。

「……今どきSNSすらやっていない？」

「何をするつもりだった？」

「ちよつとあることないこと吹き込んで温めようかと」

「それは本当にやめてやれ。それで潰れたインディーズのメーカーって多いんだから」

「じゃあ、探偵でも雇おうかしら？」

「警察がやっててくれるはずだから大丈夫だって。素人がしゃしゃり出るなよ。この世界《リアル》では名探偵が事件の解決とかなしないんだからな」

「じゃあ自主的に調べようかしらね。幸いもうダウンロードは終わったのだし」

「……いろいろ危ないから、ワールドに入るときは俺に連絡入れろな」

「ええ、けどトレーニングが終わるまでは入るつもりはないから安心していいわ」

若干信用できない彼女に、一周目終了時に解放されたロビーの機能を簡単に説明して、そこで一周目の動画を見てくれと懇願しておいた。彼女の聡明さなら、それだけでこのゲームの異質さと味がわかるだろう。馴染んでほしいかと言えばどうとも言えないが。

《Echo World》のおかしさは多岐に及ぶが、ロビーでの自分のプレイ動画の強制提出機能はその最たるものではないかと琢磨は個人的に思っている。現実での個人情報に関係する言葉には修正がかかる自動機能もそうだが、一人称視点と三人称視点の同時録画をプレイヤー全員分行うとかどれだけのサーバーを使っているのだという話だ。そんなものを600円で新作を売る新規の零細がやれるはずもないだろう。

だが、その技術力が若干間違った方向ではあるがゲームに向けられているのは琢磨的にいいことだと思っている。《Soul Linker》は魂(らしきもの)を接続するために旧世代のVRゲームとの互換性はない。なので、こういう超技術のバカが出てきて命が軽いゲームを作ってくれるのは大歓迎であるのだ。

その後は、トレーニングの補助をしたりしつつものんびりと駄弁り、検査に呼ばれるまで過ごしていた。まるで普通の日常であるかのように。

■ □ ■

その後琢磨は精密検査を行い、何も問題はなかったと知らされた。なので、ちよつとの心配と期待をしつつ、顔見知りの医師の案内の元風人へ会いに行く。

するとそこには、心配でたまらないのを必死で隠している風人の姿があった。なにせARタバコの唾え方が逆なのだ。どうしてそれを周囲の方々がツツコまないのかといえば、割といつもの事だからである。

彼は医術に関係することならその全てを第一線レベルで扱えるスーパードクターなのだが、私生活はダメダメなのである。

「琢磨、警察から聞いたぞ」

「ああ、ごめん。朝親父が時間なさそうだったし言うの後でいいかなって思ってた」

「……体は、大丈夫なのか？」

「大丈夫、精密検査しても異常なしだったから」

『これが検査のデータです。いつもの心臓のコレ以外は正常値かと』

「そうだな、感謝するぞメデイ。お前にはいつも助けられている」

『それが私の役目ですから』

そうして、凧人は温かい手で琢磨の頭を撫でる。本人は叩くつもりだったのだが、愛する息子は息子なりに頑張ったのだと理解したがゆえにその手を鈍らせた結果だ。

凧人のこれも、いつものことである。本人の気持ち的には叩いたのできつとどこにも問題はな

い。それが愛が故のことだと、琢磨にはちゃんと理解できているのだから。

「検査が終わったならすぐに帰れ。今日も俺は帰れないだろうが、何かあればすぐに行く。だから、今日のように隠すな」

「わかったよ、親父」

「ならばいい。メデイ、琢磨を頼むぞ」

『了解しました』

そう言つて凧人は自分の職場へと戻る。琢磨は、心配をかけてしまったことへの申し訳なさと、心配をしてくれたうれしさで少し複雑に、しかし喜ばしく思つていた。

そして琢磨は氷華に連絡を入れ、今度こそ家路につくのだった。

そしてその道中、奇妙な二人組を見つける。

白衣を着た大柄な女性と、妙な機械を手に持っているんだか情けなさを感じる青年の二人組だった。

「メデイ、あれ何か分かるか？」と琢磨は脳内で聞く。

『わかりません、ハンドメイドの機械でしょう』とメデイは答える。

何にせよ関わらないようにしようと思つたその時、信号で停車した位置が悪く彼らにつかまってしまった。

白衣の女性が尋ねてくる。

「ヤア少年、さつそくで悪いのだけれど、昨日通信障害が発生したエリアはこの辺りだろう？ 何か知らないカイ？」

それを青年がたしなめる。

「いやいやいや、待ちましようよ先輩、適当に声をかけるにしても限度がありますから

！」

それに対して女性は言った。

「適当じゃあないさ。なにせ微弱だが彼のバイクからは例の反応が出ているよ。何かあると思ってもおかしくないだろう？ ……おそろくだが、君もそう思っているはずだよ

少年。いいヤ……」

「風見琢磨クン？」

琢磨は答えに詰まる。どうにもまた何か妙なことに巻き込まれているままのように感じられたからだ。

そして何より、白衣の女性のその目には掴んだ手掛かりを決して逃がさないという強い意志が感じられた。とても強く、輝いて。

一周目の回想

いきなりの遭遇から30分ほど。白衣の女性の名前は牧野、情けない体をしていた彼の名前は末吉。

どちらの帝大の学生であり、フィールドワークという名目で友人の命を奪ったモノの正体を探っているとのことだった。琢磨と彼らは互いの追いかけているものが重なったために、互いの知らないことを補い合うために情報交換をしていた。

場所は琢磨の家の近所の喫茶店。紅茶の美味しいレトロモダンな名店である。

「僕からの情報はこれだけだ。技術の簡易的な説明はA Iの彼女に送っておいたから、疑問に思ったら先輩に聞くか自分で調べてほしい……けれど、これから共に事件を追いかけていく仲間として、君の本音が知りたい」

「仲間云々は置いておいて、俺の理由は簡単ですよ。……あんな風に消えるのが身内だったなら、俺はどうなるかわからない。それが嫌だからです。一年かけて友人も作れたこの仮面、まだ捨てたくはないんですよ」

そんな会話を最後に3人は喫茶店から立ち去った。2人は近くのネットカフェへ、琢磨は自身の家へと。《Echo World》についての説明をするために。《Echo

Worldへとログインするためだ。



そんなことがあり、琢磨はもう二人説明したい人が増えた件を氷華に話し、一周目が終了したことで解放されたログイン前空間、ロビーにて駄弁りつつお互いのアバターを見る。

昨今のアクション系ゲームの定石通り、背格好は変えず、肉体の肉付けや肉抜きは5%以内。顔は感覚器官なので完全にいじらさない。せいぜいがお互いに肌の色を健康的にしたくらいである。

琢磨は若干小柄の黒髪黒目という逆に目立つ無個性アバター。氷華は綺麗な青みがかった髪を少し伸ばして整えた美少女。

つまりはほとんどいつも通りだ。

そうしていると、琢磨の目に連絡のあった二人の完全現実準拠アバターが見えてくる。黒を基調としながらも所々にあるSFチックな光る謎ラインについての話題で話し合っているようだった。

そしてそれがひと段落ついたところで、壁のあたりにあった4人掛けのテーブルに皆を集めてアバターでの自己紹介を始める。

「というわけで、皆さんにこのスルメゲーのことを紹介していききたいと思います。イン

「デーズゲーハンターの明太子タクマです」

「彼の友人じゃ止まらない女、【Mrs. ダイハード】ヒヨウカよ」

「警戒されてるネ。私ハ、マツキーノマツキーノだよ」

「……なんか僕だけごめん、スエキチです」

上から、琢磨、氷華、牧野、末吉である。ちなみにヒヨウカの名前は二重ネームと言
い、名乗りたい名前と普段使いの名前を同時にやる荒業である。動画配信者などが世界
観に合わせてアバターネームを変えるときに使う手法だ。もともと、ヒヨウカはどちら
も名乗りたいから使っているだけで配信をしているわけではないのだが。

「じゃ、再生始めますよ。面倒なんでちよくちよく早送りにして、リザルトでの話も付け
足しますけどね」

「分かったヨ。始めてクレ」

そうして、琢磨は広げたウィンドウを壁に貼り付けて解説しながらの回想を始めるの
だった。



王都エコーリル、セントリア広場、そこには直径3mはある大噴水がきらびやかに存
在していた。その水には神聖さを感じさせるナニカが存在しているとタクマは思った。

……のつぱらぼうのアバターのままで。

『うん、どうすればいいと思うコレ』

『さて、ほかの皆様も戸惑っているようですしここでアナウンスを待つのもいいかもしれませんよ?』

『さすがにそれはゲームしてないな』

現在タクマは声を出すことができない。おそらくのつべらぼうのアバターのせいではあるのだろう。周囲のプレイヤー皆が同じ状況だ。だが、メイデイという話し相手が居るだけ幾分かマシなのだろう。と後から見る琢磨は思う。

マネキンのような体に、いかにも初期装備な灰色の布の服。それが皆の姿だった。

そうして少し考えたところで、タクマの頭には「案ずるより産むがやすし」という言葉が浮かんだので、無計画にぶらぶらと歩いてみることにした。

歩きながら周囲を見渡す。この町はきれいな白い城下町という印象を持った。なにせ、噴水の向こう側にはそれはもう見事なお城があるのだから。なんだか煌びやかさの前に武骨さを感じるファンタジー感のない城であるのだが、その素晴らしさは誰もが認めるほどだ。実際城へと侵入しようとしているプレイヤーはそこそが多い。

マップはないが日の落ちる方向が西とするならば、この町は北に険しい山があり、それを背にして城が立っている。そして、東、西、南の3方向には大きな門があり、それがフィールドに繋がっていくのだろうと推測できる。

そして大通りはこの噴水広場からまっすぐ作られており、しかしそこから少し横道を見てみると人々の生活感漂う陽気な街が見えていた。どこか無理して笑っている町の人を除けばだが。

タクマがそうこうしていると、不意に騒々しさが増してきた。『どうしたんですか?』と一応尋ねてみるも答えはない。声になっていないのだから。

そして、西門のほうで雄たけびが聞こえてきた。戦いが始まったのだろうか?

「……ああ、終わりだね。皆、最後は家族と過ごそうじやないか! 笑って死ぬのがソルディアルの心意気だよ!」

そう、年配の婆様が叫ぶ。皆はそれを聞いて、各々に帰路についていた。

どうやら、西から来るのはやばい奴のようだ。せつかくなのだし一目見ておくか、と思つたところで、逃げずに道端に生えている小さな花を見ている少女がいた。

その絶望に染まつた瞳はいつかの鏡を見ているようで、タクマは不意に思つてしまつた。

この世界の「ヒト」を、この子の命を守らないのはルールに反するのではないかと。

鬼子と産まれた自分は、おそらくそんな例外を作つたらそれを盾にどんどんと人を見捨てるほうに流れていくだろう。意図的に殺すほうにまで進んでいくだろう。

ヒトの輪の中に生きるのだから、決してそれは変えてはならない。

そんな思いから、タクマは近くの武器屋に入り、転がっていた妙に存在感のある一本の剣を手にとって走り出した。その剣からは不思議なことに命があふれる強さを感じられた。

その時、武器屋の中にいた落ち武者のような男が、タクマを見て笑ったような気がした。

この世界のNPCには自分たちは見えないし聞こえないのだから、きつと気のせいだろう。タクマはそう判断して、そのことを頭の隅に追いやった。

西門まではここからそこそこの遠い程度、このアバターの運動性能なら5分とかかららない。何せトップレベルのスプリンターの速度を疲れなしに扱うことができるのだから。そして、これまでのゲームの経験からその長距離を短距離走の最速で走るやり方をタクマは熟知していた。

そうしてそのスピードのままたどり着いたそこでは、軽装の戦士たちがそれぞれの獲物で狼と戦っているのが見えた。

現状は互角、しかし戦力は狼側のほうが多い。

その状況を打破するためには、飛び込んで狼側を引つ掻き回す役が必要だろう。なの

で、自分がやる。相変わらずの偽善者のR、Pだと内心苦笑するが、別段本能のままに殺しまわるよりは幾分かマシだ。そう考え、いつものように相棒に声をかける。

『行くぜ、メデイ』

『はい、バイタルチェックはお任せを』

そうして、門の外に飛び出して戦士の喉笛を食いちぎろうとする狼に対してタクマは剣を振りぬいた。

西洋剣の鈍器のような頑丈さで振るわれたそれは、確実に狼の頭を捉え、砕いた。切れ味はさほど良くないが、頑丈ないい剣だ。

その光景を目にした兵士は、臆病者^{チキンソード}の剣が空を跳んでいることに驚いたが、戦うものなら知っている戦場の何でもありだろうとあたりをつけて、その剣を味方と判断した。

それが通じたタクマは、その信頼を受けて突出する。周りはすべて敵だらけ、なんとも楽しい状況だと考えながら。

あの少女の瞳の中にあつた絶望を殺したいと願った。

■ □ ■

そうしてタクマが戦って20分。その間に殺した狼はそう多くないが、それでも戦士たちが門を閉め、戦いの場に戻ってくるほどの時間を稼いだ。

しかし不思議なもので、タクマが剣を振るい、そこに殺意を込めるほどに剣の切れ味が増してくる。剣の中にあつた暖かい存在感がタクマ自身のの殺す意思で塗りつぶされていくのがわかる。

そして、それがスタミナなどでは言い表せない命を使うものだとは本能的に理解できていた。

だが、体のキレは落ちていない。切れ味が上がるのは悪くないのだ。そうプラスに考えて前を見ると、これまでに殺した狼の血肉が赤いモヤになって集まり、生きている狼が黒いモヤになって集まってくるのが見える。

そしてそれが、《群狼シリウス》という名前だと頭に刷り込まれた。

黒い体に赤い血管のようなものが浮き出ている巨大な狼。それが3mほどの巨体になった敵の姿だった。

「よくやった剣の！」

「あとは俺たち西方戦士団に任せな！ さあ命を燃やすぞお前らあ！」

「ライフフォース生命転換！」

そう叫んだ瞬間、戦士団の皆の存在感が、命が燃えている。自分の今のような不完全燃焼ではなく、綺麗に燃える命が輝いていた。

タクマはそこに、今まで感じたことのない感動を覚えた。

仮初の命が、ここまでのものを魅せることができのだろうか。

そうして、戦士たちは武器にまとわせた力を解放する。それは炎であったり、風の矢であったり、水の斧であったりと様々だったが、そのすべてはシリウスには当たらずに、シリウスの体から生えた狼の体が放つ嘯みつき、切り裂き、受け止め、返す嘯みつきで命を奪った。戦士団の精鋭すべての命を。

もはや異次元の強さだ。先ほどまで輝いていた命が当たり一面に転がっている。

隔絶した力の差がそこにはあった。

だが、まだタクマは生きています。力の使い方も、見せてもらったからタクマはもう覚えた。

あとは、どうやって一撃を入れるかだ。

そうしていると、城門の上から様々なものが命を込められて投げられ始める。それうっとおし気に回避するシリウス。そこには、せめてもの抵抗をしたいと言う戦士の意地があった。

そして、その瞬間にタクマは動き出した。体全体の筋力を推進力に変える最速の歩法。まだ「なんちゃって」と付けられてしまうその拙い一步は、「縮地」と呼ばれているものだった。

しかし、シリウスは化け物としての反射神経をもってそれに反応して、分身を作った

噛みつきを琢磨へと放とうとした。その時。

タクマは、見て覚えた命の燃やし方を全力で行った。その気高い、自分には似合わない叫びと共に。

「ライフキース生命転換！」

そうしてできた命の剣は、シリウスの分身噛みつきをそのまま両断し、そのままシリウスの骨に止められるまで深手を与えた。

そして、体勢を立て直そうとしたシリウスは体を再生させて一歩飛びのくが、目の前にいたシリウスは目の前にいたはずのタクマを見失った。それは、生まれつき殺意と共に生きてきたタクマの十八番。

殺意をゼロにして存在感を消す絶技だ。

そしてそれで稼いだ一瞬で距離を詰めたタクマは、速度のままに先ほどの傷跡のあった場所にもう一撃叩き込み、自身の防御のないシリウスは今度こそその命を落とした。多くのヒトを失った、勝利だった。

殺し合いなど、大概においてそういうものであるのだが。

しかし、シリウスの遺体はまだ役割を残していた。

その体は赤黒いモヤのように霧散して、門の中へと向かっていく。

まだ、生き残っている狼が居るのかもしれない。そう思っただけタクマは城門の脇にある

小さな扉を切り裂いてそれを追いかける。

そうして待つていたのは、地獄絵図だった。多くのモンスターが遊びのように市民を殺している悪夢。そして、何かの弾みで転がってきた頭。

それは、先ほど花を見ていた少女だった。

守れなかった、その思いが鬼子である自分の誓いを刺激する。

そこからは、ただひたすらに殺し回った。怒りからでなく、悲しみからでもなく、ルー通りの報復として。

しかし命の力は有限であり、覚えたのは力のベタ踏みだけのタクマには長時間の戦闘は不可能であり。

そして、力尽きる寸前に黒い鎧の騎士に剣を折られ、その返す剣で命を落とした。

それが、《Echo World》における初めての死だった。



そんなことを3人に話す。とはいってもほとんどは動画で説明できたので、俺が言ったのはちよつとした補足だけだったがそれでも

「ワールドでのことは以上です。けど、どうにも最初っから詰んでいたらしいんですよこの周は」

「世界規模のループってやつ？ ストアの紹介で見たよ」

「らしいです。つってもあと1時間近くはワールドに入れないんで確認できないんですけどね。」

「へー、じゃあ僕らはここまでかな」

「ワールド入っていかないんですか？」

「……理系大学生ってね、結構忙しいんだよ」

そんな哀愁漂う言葉を最後に、2人はログアウトしていった。

「それで、タクマ君のリザルトはどうだったの？」

「たくさんモンスターを殺して結構ポイント貰ったから、全額つき込んでこんな機能を付け足してみた」

『思考内部の任意の音声を声のように出せる機能です。そのおかげで私はこうして会話ができるようになりました。それ以外の用途の方をマスターは望んでいたようですが』

「あらメデイ。ゲームの中で話すのは初めてね」

そうしてワールドが開くまでの約1時間、いろんな動画を見ながら一応の状況をつかもうと努力してみたりはしたが、基本的には駄弁っているだけだった。



そうして、それからたったの3時間後、2周目の世界は終わり、ロビーは運営とやらがしたプレイヤーへの罵倒で溢れかえった。というか、琢磨への罵倒だった。



それからすぐの夜。深夜にふと目が覚めた。何かがおかしいという感覚と共に。
『マスター！ 先日の通信障害を伴った異界です！』

「……またかよ畜生。何かしたか？ 俺」

そうして琢磨が外を見ると、またしても影の狼と目が合った。
どうやら、散々な寝起きになりそうだと、琢磨は思った。

人狼シリウスとの現実

まず現状を確認する。体は異常に動く、しかし寝室で眠っていたために自分は寝巻、近くに武器になりそうなものはない。狼に対抗できそうなものは見当たらない。どうしたものだろうか？ と琢磨は考える。

『どうしますか？』

「……とりあえず通報しよう。これの外に出れば電話は繋がるだろう」

『ですが、少しお待ちください。バイクとの通信ができません。また、リビングの機器との通信ができません』

「今回は異界の端のほうに出たのか？」

『おそらくは』

「なら、遠慮なく出るか……ッ!!」

瞬間、見えないナニカに頭をぶつける琢磨。何かと触つてみると、そこには見えない壁があった。

しかも、若干だが広がり続けている。それが触った手で感じられる。

『マスター、体を動かさずに30秒ほど壁に手をあててください。測量します』

「任せる。じわじわ広がっていくとなるとこっちから打って出るしかないしな」

そうやって徐々にでが離れていく感覚を味わって30秒。メデイの割り出した速度は時速1kmほどの、気づけば逃げられる程度のものであった。

つまり、全く気付けない深夜の今ならば、相当の被害が出るだろう。

そうして、彼の中にいつもの間違った覚悟が生まれたことを感じたメデイは、忠言を一つした。それが何も意味のない事だと理解していても。

『マスター、それでも私は赴くことを推奨しません』

「残念だけど、俺はゲームと現実の区別がつかない今どきの少年なんだよ。だから、ロールプレイR.Pはしつかりやらなきやダメだろう？」

『逃げて、警察に任せるべきでは？』

「戦った後で、警察に任せるさ……だから、いつも通りバックアップは任せる、相棒」

『調子のいい話ですな、マスター相棒』

そうして、琢磨は部屋の中にある思い出のプロテクター、バイクを買ってもらったときにプレゼントされた子供用の伸縮性プロテクターの脛あてと、買ったはいいが一度も使っていない体育用のシューズを装備して、上着を羽織って窓を開ける。そこには、先ほどの狼がゆったりとこちらを見ていた。影のような闇に包まれているので実際の日
はわからないが、そんなものだろう。

そんな狼に着地を襲われないように、家の壁を伝ってすると降りていく。健康な体があればVRでの技を再現できるのが琢磨という鬼子なのだ。

そして、着地の寸前に跳びかかってくる狼をさらに下側に体を潜らせることで回避し、その拳を顎に叩きつける。そして、インパクトの瞬間にのみ生命ライフ交換フォーメクスを起こして拳を破壊の武器に変える。

その一撃は見事クリーンヒットし、狼の頭を吹き飛ばした。

影の中に肉体があれば血化粧になったろうにと琢磨は少し思い、その死体を見つめ続ける。

すると少しの時間の後に影は黒いモヤとなりどこかに向かって飛んで行った。その先に敵はいるのだ。新たな力を必要とする狼が。

ならば、これを追えば最小の命の消費で狼を全滅させられる。だから、琢磨は走り出した。モヤの導きのままに、敵を殺すために。



そうして追いかけて4件、かなり走らされたが体力に問題はない。駆け付けた時にはもう4件とも被害者が出ており、数少ない生き残りからは「化け物」と罵られたこともある。そんなことはわかつているのだからいちいち言わないでほしいのだが、そう気遣いできるほど心が強い人も少ないのだろうか。あるいは、この異界がそうさせているの

かもしれない。そう琢磨は思った。

もつとも、そろそろ本命が来るだろうとタクマとメデイは推測していた。これまで殺してきた狼には肉体がなかった。しかし最初の異界で殺した狼には血肉があった。つまりそういう奴がボスなのだろう。そいつを殺せば終わりのはずだ。

もう領域を半周以上しているのだから、だいたいの中心の方向はわかっている。そして今モヤが向かっている方向がそうであることも。

ならば、もはや待つ必要はないだろう。そう琢磨は判断し、スピードを上げた。

モヤを追い越してまっすぐに走る。そうして見つけたそこには、ボロボロになりながらも立ち続けている燃えるような赤い髪の青年が、空手空拳で人狼と殺しあっていた。背中にいるボロボロのもう一人を守るために。

だが、あの人狼は別格だ。夜で見にくいのが確かに体に赤黒い色がついている。あれは肉を持ったボス个体だ。つい先ほどまで琢磨はゲームで人狼と殺しあっていたのだからよくわかる。琢磨を追いかけてくれた新人騎士さんの援護がなければ何もできずに負けていただろうから。……もつとも、自分が居なくてもあの騎士なら人狼を切るくらゐ容易かつただろうけども。と琢磨は考えている。

そうしていると人狼はやってきたモヤに何かを感じたのか、遊んでいたのを切り上げて青年を殺しにかかる。

そして琢磨はそこが一番の隙だとわかっていたから、その横つ面を「縮地」で近寄り生命転換にて殴り飛ばした。

会心の一撃だった。しかし、人狼は顔面へのインパクトの瞬間に体全体をひねり受け流した。そのせいでまだ死んでいない。

そして、人狼はモヤを受け取り強靱な力を手に入れた。雄たけびとともに体に変化して、ゲームの通り、『人狼シリウス』だなんて名称が頭に浮かんでくる演出まであつてだ。闇のような黒い体に赤い血管が輝きとともに浮き出ている、人狼の姿がそこにあつた。

「キミ、逃げた、方がいい。アレには、勝てない」

紅蓮の青年が、もう立っているのもギリギリなのに声を上げる。だが、どうせこいつを殺さないと異界から逃げられないのだから、逃げようはないのだが。しかし、その声に込められた心配の感情は確かなものだった。自分のような薄っぺらなR、Pではない、本当の善人がそこにはいた。

そういう良い人は、守り助けたくなくなるのが人情だろう。琢磨はそう思い、拳を握りしめた。それが常識的な行動だと信じて。

琢磨の残りの命の残量を考えると、放てるのは多くて2発。そこに全ての力を籠めると覚悟して、琢磨は前に走り出した。

どうせコイツを殺したらすべて治るのだから、傷を負うことを許容する。一撃を受け止めながらの一撃必殺。そこにしか勝機はない。

だから、その一撃に込められた力は完全に想定外だった。人狼も琢磨を警戒して一撃で決めるために全力を込めていたのだ。

もう、互いに足は止まらない。このままでは殺されると判断した琢磨は、とつさに一歩分だけ外側に体をずらし、その結果左腕の肘から先が消し飛んだ。

その衝撃により吹き飛んだ琢磨は、もうこれは死ぬと思ったその時。

“なら、相打ちに持っていけ”と先生が教えてくれた鬼の生き方を思い出した。

“ふざけるな！”と叫ぶ普通の善人の姿がその目に映った。

そして、『まだマスターは戦えます』という相棒の声が頭に響いた。

それが、ほんの少しだけ自身の内側の心を映し出した。何でもない、仮面の日常を。

今まで擬態のためとしか思っていなかった薄っぺらなその生き方は、彼を鬼子から“護国の鬼”に少しだけ歩みを進ませた。そして、自分が死ぬことで涙を流すだろうヒト達、自分が死ぬことでこれから殺される人たちを思い浮かべて。

風見琢磨は、人生で初めて、本当の意味で“守る”覚悟を決めたのだ。

すると、体の内側から不思議なイメージが浮かび上がった。それは門を開くようであり、剣を鞘から抜くような不思議なものだった。

その衝動にしたがつて、亡くなった左腕のぐちゃぐちゃな断面に生えた剣を引き抜いた。

それは、2周目でも武器屋で頼み込んで譲ってもらった、臆病者の剣チキンソードと呼ばれる剣だった。

その時、確かに人狼は怯えの表情を見せた。それを見た琢磨は、全開の殺意をその人狼に叩き込んだ。そうして一歩強く踏み込み、その音から攻撃が来ると身構えた人狼は分身の防御にて一撃を防ごうとした。

しかしそれは、殺意のスペシャリストである琢磨の見せたフェイントだった。

そうして無駄に分身を使わされたシリウスは、琢磨の最後の攻撃に対して両腕で防御することしかできずにいて、そのガードごと琢磨の剣に両断された。

『ゲームオーバーです』

「二度と来るなよファンタジー」

その言葉とともに異界は割れた。

そして、始まる修正。生者の傷の修復と壊れたものの再生、そして死んだ者たちの消失だ。

その光景は心が冷えるほど恐ろしく、神秘的だった。

後ろで琢磨のために叫んでくれた善人は生き延びて、その後ろで守られていた人は消

失した。なんとも不思議なものである。ダメージは同程度に見えていたのに。

「なんで、何が起こってるんだよ！」そう痛みを押して叫ぶ青年。それに答える言葉を琢磨は持たず、名刺を貰った栗本刑事の端末に連絡を入れる。

それが、その夜の戦いの終わりだった。

病室への来訪者／魂の研究者

同日深夜、琢磨と青年、「乾裕司」は即座に駆け付けた栗本の判断により救急車で病院に送られ、緊急検査を受けに行つた。そしてどちらも極度の疲労で点滴を打たれて入院という運びになつた。

それは、ライフフォーメス生命転換の原理を考えれば当然のことである。あれだけ命を使い倒したのでから体にガタが来ていないほうがおかしいのだ。

それが、魂が強くないと生きていられなかつた者たちでもだ。

人の魂は苦難を受けることで成長する。故に生まれながら心臓に爆弾を抱えながら、時に爆発しかけて死にかけながら生きてきた琢磨の魂は常人よりも強いのである。

だが、それでも死にかけてしまうほどに今回の戦いは激戦であつた。それは大きな苦難だつたはずだ。だから琢磨と裕司の魂に大きな変化が訪れるだろう。

「だからこのアプリをいれテ、魂の変化状態を確認させテほしいんだけどナ」

「すまない風見、誰だこの白衣の女は」

「帝大の牧野さん。魂に関係する研究をしているそうです」

「よろしくネ。お二人さん」

どうして牧野がこんなところにいるのかはものすごく単純に説明できる。メデイが治療用にと彼女らの研究データを親父に渡したので、そのアドバイザーとして呼ばれたからだ。

よりにもよってストツパーの末吉さんが別行動の時にだ。

なんて面倒なんだろうと、彼女と最初に接触した時のことを思い出しながら琢磨は思
う。

早く来てくれ末吉さん、と。

■ □ ■

「君が風見琢磨クンだね？」などと格好をつけて話しかけてきた白衣の女、牧野は当然に琢磨に警戒された。だががしかし、二人の間に末吉が入ることでもなんとかとりなした。善人とはこういうところが強いのだ。

そうして場所を移したそこは、琢磨の家から少し離れた場所にある喫茶店。あの会話の後に、鳴ってしまった琢磨と白衣の女性の腹の音からとりあえず飯にしようと琢磨の行きつけのこの店に案内することになったのだ。もちろん彼女たちの奢りで。

「先輩、格好つけてないで事情話しましょうよ。風見君困ってるじゃないですか」

だが、そこから先が続かない。お互いにランチタイム用のホットサンドセットを頼み、お互いに同じおすすめめの紅茶を頼み、お互いに無言で食事を食べ終える。そして声

をそろえて言う。「ごちそうさまでした」と。

「じゃあ、君が風見琢磨君でいいのヨネ？ さつきは当てずっぽうだったんだけど」

「はい、そういうあなた方は？」

「私は帝大で院生やつてる牧野ダヨ。こっちは後輩の末吉。昨日の事件のことを勝手に調べてる者サ」

「あれ？　なんで突然フレンドリーに？」と困惑する末吉さん。だが、仕方がないだろうと琢磨は思い、そもそも全く気にしてないのが牧野だった。

要するに、末吉が食べていないホットサンドがとても美味しかったのでこの「基本的に食べ終わってから話すタイプ」の二人はとりあえず食べるのを先にしようというのをアイコンタクトで交わしたのだ。常識からのはぐれモノ同士気が合うのだろう。その方向性は別にしても。

「デ、昨日の狼の話どこまで本当？　キミがそんなに動ける子じゃないのは見てわかったんだケド」

「どこからその話を？」

「後輩の矢車ちゃん、一緒にいたカップルの生き延びた方ネ」

「じゃあ、俺視点での話はこんな感じですよ」

そうして本日何度目かわからない説明を牧野達に行う琢磨。今回はだいたい聞いて

いるだろうから大雑把なものだ。それでも彼女たちは証言に確証が持てたのか少しの喜びを感じていた。しかし、それ以上に義憤を感じていた。

「それで、君の言うゲーム、《Echo World》はどんなゲームなの？」

「まだわからないですね。なにせチュートリアルは『その世界で死ぬ！』でしたから」
「え、何それ」

その琢磨の言葉に引く二人。まあ普通の感性ならそんなものだろう。そう琢磨は納得した。二人が納得していないのは琢磨の精神性に関してだったのだが、そこはお互いに知らないほうが幸せだったのだろう。

「それで、お二人は何をしていたんですか？ バイクの反応がどうか」

「アア、それは……あんまり好きな言い方じゃあないんだけど、付喪神って知ってるかい？」

「大切され続けたモノが神様になるっていう奴ですか？」

「おおむね合ってるよ。私達はその研究をしているのサ。もつと正確に言えば、物質への魂の定着現象への考察が私のテーマだよ。末吉くんは魂の強度と極限状態での装備の損耗率を研究してるね。マアどっちもモノへの魂の強さが関係しているから、こんなノをちよつと作つタのサ」

そうして見せられるのはハンドメイドで作られた機械。なにやらいろいろ言ってい

だが、要するにモノの魂の有無を識別する機械らしい。

「で、俺のバイクからそれが出てきたと」

「そうだよ。さすがにおかしいと思つて考えたらピンとキタのサ。矢車ちゃんを助けてくれた少年がバイクをぶつ壊してたつてね」

「後は勘サ」と白々しく言う牧野。ほかにも多くの言っていない理由があるのは明白だった。

が、そこはツッコむ必要はないので今のところ琢磨は放置している。

「で、その魂が俺にどう関係するんですか？」

「……昨日の夜の状況サ。矢車ちゃんはお世辞にも運動ができる子とは言えなくてネ、狼に追われたなんてことになったら真つ先に死ぬところだったんだヨ。けれど彼女は走りぬけた。体に何の不調もなくネ。そんなのは普通じゃない。だからこつそり彼女の《Soul Linker》に独自開発のアプリを入れて調べさせて貰ったのさ。そしてら彼女の魂はかなり疲弊していた。つまり、魂だけで激しい運動をしたと私達は推測したのサ。君の話でそれは確信に変わったヨ」

それは、一つの異界への解釈。あの異界は《Soul Linker》で見ている夢のように、魂で物事が決まる異空間なのだという推論だ。

そして異界を実際に体感した琢磨は、それが那样的外れではないことを知っている。

あの異界は、生と死が現実よりも身近だった。そんな気がしているからだ。

「まあ、私からの推論はこれくらいかな？ あとは末吉クン、補足頼むよ」

「補足と言われても、先輩のは証拠が出そろってない暴論じゃないですか。どこを補えと……まあ、とりあえずウチの研究室でやってる研究の概要くらいは送っておくね。端末お願い」

「じゃあメデイ、ファイル分けよろしく」

『了解ですマスター』

そうして、メデイのことで少し驚かれつつも琢磨は魂についての資料を受け取るのだった。

その時、琢磨は少し思った。末吉さんから感じる違和感はどういうことだろうか？

と。これまで気にもしなかったその青年は、まるで研がれた刃が鞘走るのを抑えているような不思議な、ある意味現実良くなじんだゲームでの殺意より慣れているものに似ている空気を感じ始めていた。

「それじゃあ、《Echo World》の詳細を教えてくださいかい？」

「まあ、詳しくは話すより見たほうが早いですね。600円なんで奢ります。昼代浮いたついでに」

「……んー、わかんないナ。君にメリットないよねこれ以上のお節介ツテ」

「そうですか？ あると思いますけど」

「へー。どんナ」

「俺はそれなりの善人のつもりで生きていますから、義憤くらいは感じますよ」

その薄っぺらい言葉に、牧野さんは納得し

「それは、違うだろ」

そう、これまで平静を保っていた末吉さんにぶつた切られた。なんとなく、そう言われる気がした。

「……確かに違います。けど、一応外面を気にして生きてるんですよ俺は」

「うん、わかってる。けれど、これから共に事件を追いかけていく仲間として、君の本音が知りたい」

「末吉くん、さすがにそれは飛躍しすぎてルと思うヨ」

突然の仲間発言に驚く琢磨。対してそんなに驚いていない牧野。どうにもこの二人と話し合うのなら、注意するべきはきちんと鞘に入ったままの彼のほうだったようだ。今更ながらに思い、そもそも敵じやないという考えが頭をよぎって内心苦笑する。そして、正直にその言葉を返す。琢磨にしては本当に珍しく。

「仲間云々は置いておいて、俺の理由は簡単ですよ。……あんな風に消えるのが身内だったなら、俺はどうなるかわからない。それが嫌だからです。一年かけて友人も作れたこの仮面、まだ捨てたくはないんですよ」

その言葉に納得したのか、末吉は先ほどまでの意を鞘にしまい、情けないが優しい青年へと戻った。変心とは違う、そのまま変わるものだった。

「うん、なら安心した。驚かせちゃってごめんね」

「末吉クンのコレは慣れてないとビビるからネ」

「確かに。先にある程度事情を知ってないと勘違いしそうな剣気でした。居合ですか？」

「実家がね」

そんな会話を最後に3人は分かれていく。帝大の2人はネットカフェに、琢磨は自宅へと。

件のゲームのことを教えるために。

■ □ ■

そんな二人のうちの一人が、ストップパールのいない状況に浮かれて面白おかしく動いている。とはいえ魂を調査するアプリはほしいと言えば欲しいのだ。自分のような鬼子の魂を知るために。

そんな言葉を発しそうになった時に病室のドアが開く。牧野のストップパールの末吉だ。

「はいそこまで。二人は疲れてるんだからいったん引来ましよう先輩」

「……せっかくの機会なのに勿体ナイ」

「院長先生が落ち着いたら彼女に対して検査をしてもいいって言ってくれたんですから、横道にこれ以上逸れるのはやめましょう。それで琢磨くん。今回消えた5人の方はどうだった？」

「消える様子のことは、俺にもメデイにも良くわかりませんでした。ただ、光になっていくくらいで」

「そっか……生きてるなら生きてるってはっきり言つてほしいんだけどね」

「本当に生きてる可能性ってあるんですか？」

「あの異界での損耗は魂だけなんだろう？ なら残った肉体が存在していないのはおかしい。だから、そこには肉体を必要とする理由があると僕らは思つてる。まあただの仮説でしかないんだけどね」

そんな言葉を残して、二人は去つていった。何か言いたげな乾を残し、次の来訪者へと交代するように。

そうして病室にやってきたのは、つい昨夜もお世話になった刑事2人だった。「やあ、2人とも辛いのごめんね、話聞かせてもらいに来たよ」

足柄は、そう言つて二人への事情聴取を始めるのだった。

ダイナという剣士との出会い

病室に入ってきたのは足柄と栗本。どちらも表面上は笑顔だが、足柄は明らかに怒りがにじみ出ている。

それはやはり今回もまた死人が出てしまったという事が原因であり、それにまた関わっている琢磨についてでもあり、なにより、2度の戦いを後から知ることしかできなかった自分たちの不甲斐なさからの怒りであった。

栗本の怒りが見えていないのは、年季の違いだろう。

「今度は結構目撃者は出てきたよ。影の狼じみた奴について」

「まあ、あれだけ暴れてればそうなりますよね」

「……そんなに多かったのか？ 狼は」

異界ができてからずっと人狼と戦っていた裕司がそんなことを言う。人狼との素手での戦いは、他所に目を向ける余裕なぞない激しいものだったからだ。

「5匹ほど他にいました。……殺されたのは、たぶんもつといます」

「そのあたりのこと話してくれるかな？ 今回は君たちがこの異界を破壊したんだから」

「……俺はバイト帰りに人狼に襲われている人を見かけて、助けに入ったことしか覚えていない。無我夢中だった……でしたから」

「あ、敬語はいいよ、楽にしてて」

「……助かります」

「俺の方は、報告書的な書いたんでそれでお願いします」

「こつちの子は順応性高いね……さすが若さだよ」

そういつて琢磨とメデイが作った報告書を読む足柄と栗本。次第にどちらも苦々しい顔になっていった。なにせ、病弱中学生が街を走り回って狼と人狼を殺したという事が状況証拠としてそろってしまったのだから。

「琢磨君、この魂が表に出る異界つてのの出典、帝大の研究論文を引用してるみたいだけどこからそんなの引つ張ってきたの？」

「あの牧野とかいう白衣か？」

「ああ、さつきすれ違った美人さんか。友達なの？」

「……最初の事件の生き残りの方の友人だそうです」

「そっか……」

「あまり感傷に浸るな足柄、今日は後がある」

思わず拳を強く握りしめる足柄は、栗本にそれをたしなめられていた。栗本も、何も

思っていないわけではないというのにだ。

「じゃあ、いくつか質問ね。今回は異界の端に出たそうだけど、前回との違いに心当たりは？」

「……外出してなかったくらいです、心当たりは特に」

「じゃあ、非常識な心当たりは？ 例えば、《Echo World》中で何かやったとか。

「そうですね……」

「前回の周でゲームオーバーの引き金を引いたのは俺でした」

その言葉とともに大きくやらかした前回の周のことを振り返る。



内部ではどうせ会話もできないのだし別行動にしようといったタクマは、ヒョウカと別れてまず武器の調達へと赴いていた。

行先は一周目であるの剣を借りた武器屋。最悪盗むのも考えつつも剣を手にしたと思っただのだ。このゲームは、アクションの部分はかなり高難度であることがその理由だ。初心者でいきなりあの狼を倒せ、というのはいくら何でも不親切すぎるだろう。そういう理不尽さもこの世界の特徴らしいのだけれど。

そうして武器屋に向かったタクマは、かなり清潔で、整っている様子からここは高級

店なのではないかと思いはじめた。メデイの声で頼みか何かを聞いてどうにかしてもらう、もしくは盗むつもりなので、なにかファンタジーなセキュリティがあつたら大変だ。そう思っていると、落ち武者のような雰囲気的中年が武器屋に入っていくのが見えた。どうやら高級店ではないようだとし安し、触れない扉をすり抜けて内部に入る。それは現在ののつべらぼう、第0形態のアバターの特徴だ。薄い壁ならすり抜けることができるし、この世界の人間たちからは基本的に認識されない。ただし声もかけることはできない。生命転換にて魂を起こさないと姿は見えないのでコミユニケーションは難しいが、その程度だ。

そうしていると武器屋の店主と中年が話始める。どうやら、臆病者の剣を折られた奴が現れたのだそうだ。名前の酷さに少し驚くが、その二人は愉快気だった。

『武器が壊されるのって最悪だと思っただが……』

『この世界の文化かもしれないけどね、理由は想像つきませんが』

タクマとメデイはそんな会話をしながらも、周囲を見渡す。そうしていると、雑に剣が詰め込まれている樽の中に見覚えのある柄を見つけた。世界規模のループによって壊れたあの剣は直つてくれたようだった。ありがたくその柄を握ろうとするも、その手はすり抜けてしまう。これも第0形態の特徴だ。命が込められていないモノに触れることはできない”という事なのだろう。最初の周では誰かがこの剣に命を込めてく

れたのだろうか？ とタクマは考える。そうならばと、そのことに感謝の念を覚えた。形だけでしかないが、死人のことは尊ぶことにしているのだ。

『提案、ライフフォース生命転換を使ってみますか？』

『ああ。触れないんじやあ盗めもしない。なんかクエストでもあることを祈ろうか』

そういつて、自身の心の中の枷を外す。丹田から産まれる命の奔流に身を任せ、琢磨のアバターは顔形を持つ姿に変化した。

そうして剣を手に取りその中身を確認する。頑丈さを誇示するようなぶ厚い刀身、90センチほどの長さ、その見た目に反する軽さ、そして、飾り気などどこにもないその実用特化の武骨さ。そのすべてが先日の剣であることを示していた。

「お、コイツ良い魂モシ持ってるな。坊主、名前は？」

「はい、明太子タクマです」

「明太子？」

「人生の先生からのリスペクトと好みです」

「好みかよ」

「儂としては先生とやらが気になるがのう」

そう話しながらもかなりの体力を消耗するタクマ、ライフフォース生命転換は生命そのものを消費するのだ。

「ていうかいつまで全開にしてくださいだお前、抑えろ抑えろ」

「……起こし方は覚えただんですけど、抑え方わからないんですよ」

「その強度の命を扱えるのにそれか。随分な剣士だな」

「ま、そのうち慣れるさ。で、お前さんの目的はその剣だろ？ 見た目からして金はねえみたいだが、どうすんだ？」

「とりあえず幾らなのか確認したかったんです。良い剣ですから」

その言葉に目の色が変わる店主。それを見てクツクツと笑う中年。タクマは気に入られたようだ。それもそのはず、タクマの選んだその剣こそが臆病者チキンソードの剣。新参の騎士が扱う剣であり、戦い慣れた者にしかその本当の価値はわからない隠れた名剣なのだから。

「そいつに値段はねえよ。売りモンじゃねえからな」

「自分でできることなら何でもします。どうかこの剣を俺に」

「なら、そのそいつと一合合わせろ」

「……はいー！」

そうして剣を抜くタクマと、「俺の意見は無視かよ」と呟く中年。そのどちらにも殺気と見まごうばかりの剣気があふれ出ていた。正確には、タクマの剣気に合わせて中年が調整しているだけなのだ。

それが理解できているからこそ、タクマは小細工なしの全力の一刀で挑むことを選んだ。正面からではどうあがこうと勝ち目は無い。だからこそその正面突破だ。

タクマの学んだ格上殺しの剣の本質は、相打ちにこそあるのだから。

「一応忠告しておくけど、そんな剣だと長生きできないぜ」

「どうせ死ぬなら恥なきようにと学んだもので」

そうして、タクマの一撃が放たれる。最短最速の大上段。それは確かにタクマの全力であった。

しかしその剣は柔らかく、そして美しく中年により受け流された。その剣に込められた力がどこに消えたのかタクマにはわからないほどの絶技だった。

だが、まだだと思ったその時にタクマの首筋に剣が添えられる。文句なし、完全無欠のタクマの敗北だった。

そうして、自然と剣を取めた二人。

中年は真摯にタクマの目を見て、タクマはそこに感じた人生で2度目の感覚を噛み締めながら礼をした。己が歩めない剣の道、しかしそうだとしてもそれがこの至上の剣士に対しての礼だと信じて作法通りに丁寧な。

「手合わせ、ありがとうございました。いづれまた挑ませていただきます」

「……いや、コイツは驚いた。てつきり食って掛かるもんだとばかり」

「情けで長らえた命です。それに礼を尽くさないのは鬼以下の畜生と学びましたので」
そういつてタクマは剣を見る。傷や痛みがないことを確認して鞘に戻し、店主へと渡
し、頭を下げた。

「いずれ、精進の後に」

「いや、その必要はねえよ。その剣はお前に譲つてやる。一つ頼み事を聞いてくれるな
らな」

「よろしいんですか？」

「ああ、ただし破ったなら承知しねえぞ」

「南の廃砦に妙なのが住み着いたって話だが、騎士団は今いろいろあつて動けねえ。だ
からそいつを調べてきてくれ。報酬はその剣で前払いだ。どうする？」

「承りました」

『ですが、私たちはこの世界の地理をほとんど知りません。地図を頂けますか？』

「メデイさん、いきなり出てくるなつて」

「妙なものに取り憑かれているのなお前。地図はこれだ。こつから出て、こつちの道なり
に行けば廃砦だ」

なんだかこのゲームの方々の順応性が高すぎるような気がするタクマと、AIは悪霊
の類なのだろうかと少し思考のリソースを割いたメデイは地図を見る。

森の中に作られた道を行けばそう迷わずにたどり着けそうだ。

「じゃあ、行ってきます」

「あ、途中までは俺も行くわ。坊主は生命ライフ転換フォーの使い方がアレだからな、道中で多少修正してやるさ」

「よろしくお願いします！ 師匠！」

「今はダイナと名乗ってる。そっちで呼んでくれむず痒い」

「はい、ダイナ……し、師匠」

「……いや、まさかまた呼ばれるとはな。台無し師匠」

どうやらあからさまに偽名なダイナは、誰かに台無し師匠と呼ばれた過去があるようだ。タクマは決して狙ったわけではなく、さんと付けるには尊敬の念が強く、しかし先生と呼びたい人は一人だけなので、どうしようか迷った挙句のことだった。台無し師匠などとまだこの時のタクマは思っていないのだから。

もつとも、わずか10分で「酒場に寄り道をしよう！」と言い出すことでその認識は覆るのであるが。

騎士アルフォンスの《ゲート》

道中ことあるごとに寄り道をしたがるダイナに、タクマが「なんでついてきたんですか」とまで辛辣にツツコみ始めたころ、タクマ達はようやくこの町の南門へとだどりついた。まっすぐで進んだときに比べて倍近くの時間がかかりながら。

「じゃあ、日常での気の抜き方はこんなもんだ。慣れたろ?」

「はい。まさかこんなやり方で教えられるとは思いませんでしたけど」

ただし、その間のボケはすべてタクマの張りつめた気を適度に抜かせるためのものだったのだそうだ。おかげでタクマは多少の意識をすれば無理のない程度の魂で第一アバターの維持を可能にしていた。

「じゃ、俺はここまでだ。あと、戦いの中での配分は勝手が違うだろうからお前自身の勘に任せるといいぜ」

「内容には文句ありますけれど、的確なものでした。押しかけ弟子にここまでのご指導、ありがとうございます」

「構わねえよ。俺は好きでやってるんだからな」

そう語るダイナの口には、さしたる嘘もなかった。好きでやっているというのは本当

なのだろう。タクマにとってはそれが本当にありがたく、良き師に巡り合えたことを感謝した。

「ところでダイナ師匠、師匠の顔が見えないのってなにか理由があるんですか？」

しかし、疑問はあるにはあるのだ。顔がそこにあることはタクマは認識できる。しかしそれがどんな顔なのか全く認識できないのだ。

たったの一合だが剣を合わせその心に触れたタクマはこの中年が高潔なものを胸に秘めていることは理解しているのだが、だからこそ何かの問題に巻き込まれているのならば助けになりたいと思っているのだ。

仮面の作った善人の価値観からの心のない心の動きだったが。

「何、大した理由じゃねえよ。顔を合わせ辛い奴がいるってだけさ」

そんな心配を無視して、ダイナは嘘とも本当ともつかない言葉を紡ぐ。

そうしてダイナと別れたタクマは門番たちに挨拶をして外に出ようとして、ダイナと同じように顔の見えにくい青年に「待ってくれ！」と止められた。

「すみません、何かしたでしょうか？」

そう疑問に思うタクマは、しかし騎士のあんまりな真剣さに足を止めていた。

「今南側は危ない、君のような少年は前に出ないでくれ」

「すみません、約束があるので」

「……約束とは？」

「南にある廃砦の様子を見てくるように頼まれたんです。これでも腕は立つ方ですから」

「なら、少し待っていてくれ。副団長に話をしてくる。それで問題がなければ、私も同行しよう」

「……随分な厚遇ですね」

「当然だ、騎士とは人々を守るためにあるのだ。新人とはいえ私がそれを体現しないわけにはいかないだろう」

その言葉には、義務感以上に憧れがあった。そして憧れを現実させようと立つ熱さが彼にはあった。なら、とりあえず信じて良いだろう。

そう思い許可を出したタクマだったが、その予想は裏切られた。当然である。子供は危険なところに進んで送りがる大人など普通はいないのだ。一見ただの子供にしか見えないタクマは、そこで躓いた。

だが、まあやらないわけにはいかない。この剣の恩はそれほど大きいとタクマは認識しているのだから。彼は破綻者ではあるが、外道ではないのだ。

だから、騎士を歩法すり抜けて全速力で走り出した。

当然タクマは追いかけられるが、自分は軽装で騎士たちは軽鎧を装備している。ウエ

イトが違うのだから抜き切れるとタクマは思っていた。

しかし、タクマは逃げきれはしなかった。

先ほどの新人騎士の根性を見誤っていたという、ひどく単純な理由と

狼が森の道にて待ち構えていたという外的な理由からだ。

「騎士さん！」

「背中には任せろ！」

即座に共闘体制に入る2人、なにせ狼は10匹以上、しかも森林を利用してこちらを包囲している。このことにタクマも騎士も今まで気づかなかつたのは、ひとえにどちらも全力で走っていたからだ。もともと、その知覚距離は普通の戦士からしてみれば十分なものだったが。

気づかれた狼たちはタクマ達への奇襲が不可能だと悟り、大きく遠吠えを上げた。

そして、二人に襲い掛かってきた。

通常の騎士ならば、ここで逃げるための戦いを行うだろう。なにせ命を懸ける理由がない。調子にのつた子供が森で狼に殺されたただけだ。

通常のプレイヤーならば、ここでは逃げるための行動を起こすだろう。何せ命を懸ける理由がない。自分より強いだろうNPCの命を守るために戦う理由はどこにもないからだ。

しかし、この二人は全く普通じゃなかった。新人騎士は、ここまで統率された狼の群れの裏を直感で感じ取り、国を、大切な人たちを守るためにはこの群れをここで殺す義務があると確信した。タクマは、これがゲームオーバーに繋がるものだと思感しているから、これがあるかもしれない次の現実の戦いへの訓練になるかもしれないから、そういった理由で包んだ、ただ殺しに来た奴は殺し返すという鬼子の流儀で動いた。

目的に大きな差はあるが、ここで二人の敵は一致した。

すると不思議なことに互いがどう動くかがよくわかる。騎士が前に出ればその横を狙う狼が来るのでそれをタクマが殺し、その隙を狙った狼が物陰からやってくるのでそれを騎士が切る。その連携の隙の無さに怯んだときには2人はともに攻め、それに慣れて策を練って殺しに来た時には互いに背中を預けて守り、反撃で狼を殺した。

人格に大きな差はあるが、こと戦闘においてこの二人の潜在的な相性は良好だった。

『嫉妬してしましそうですね』と内心呟くメデイ。

『それはない。俺の相棒はお前だけだし、そもそもA-Iメデイに感情はないってことになってるんだろ?』とタクマは内心で言う。

『それもそうでした』とメデイはと思ひ直す。

そんな無駄話ができる程度には、もう状況は終わっていた。

時間にしてわずか5分。それだけでこの二人は狼の一つの群れを壊滅させていた。

「……これ、騎士さんは知ってました？」

「狼が居るということまでだな。まさか魔物の類だったとは……」

そうして頭を悩ませていたその時、城門のほうから狼の遠吠えが響く。木々の間から覗いて確認できる数は無数。最低でも何百という単位でのものだろう。

そんな大群が城門を襲っていた。

「こんな数、どのようにして隠れていたのだ！」

そう言っただけで即座に街に戻ろうとする騎士。しかしそこに高速でやってきた影があった。

それに反応して、しかし「頼りになる子供だ」と呟いて騎士は防御より反撃のために力を込めた。

そしてその影を、人狼の爪をタクマは剣で弾き、返す刀で胴への斬撃を放った。

しかし人狼はそれを類まれなる反射神経により回避し、続く騎士の斬撃も軽業のように避けてしまった。

面倒な類だと、2人の思考は一致した。

「騎士さん、コイツ先に殺しません？」

「同感だ。狼という共通点もある。十中八九敵の親玉に近いモノだろう。行くぞ少年」

「明太子タクマです」

「なら、私はアルフォンスだ！」

そう叫んでアルフォンスは人狼に切りかかる。その判断に乗じる形でタクマは殺気をゼロにして背後へと回る。アルフォンスの果敢な攻めと、タクマの陰湿な攻めは幾度となく人狼に致命傷を与えかけた。膝を切り裂いてからの一撃、大技を受け止めさせてからの背後からの刺突、どちらを防いでもどちらかかが当たる2刀のコンビネーション。

そのすべてを、常に想定より上昇していく身体能力にて防ぎきっていた。

そして、ある程度まで上昇した戦闘力を前にして2人は攻め手を止めるわけにはいかなかった。

攻め続けなくては、相手に攻めさせてしまえば殺される。そんな確信が芽生えたからだ。

しかし、タクマの隠形にも慣れ、アルフォンスの剛撃にも慣れた人狼は、両の爪にライフフォース生命転換を展開しての一撃を放った。

瞬間、回避せざるを得なくなる2人。そしてどこから赤黒いモヤを受け取り体を変質させる人狼。そいつを見ると自然とこんな名前が浮かんだ《人狼シリウス》と。

「名乗り！ 大魔か！」

「なんだそれ！」

「強い奴だと思っておけ！」

その力の凄まじさに今まで抑えていた生命^{ライフ}轉換^{フォース}を全開にする2人。ありったけの力でないと抵抗することすらできないのだから当然だった。

そして、二人は気付く。タクマは、アルフォンスには隠し玉があると。アルフォンスには、タクマにはあの人狼を一時単独で足止めし得る力があると。

そして一瞬目を合わせ、アルフォンスは己の内側に、タクマはすべてを出し切るつもりでそれぞれの敵と向かい合った。

タクマと人狼の交錯は一瞬だった。タクマが選んだのは刺突。最も速く鋭く狼に手傷を与える選択。対して人狼は左の爪を分身させての同時多連爪撃。その範囲は広く、どこに回避しようとも、どう防御しようともその一撃はタクマを殺すだろう。

だが、そんなことはそもそも真面目にぶつかる気のなかったタクマには関係のないことであった。

最後の一步を“縮地”にて加速し、小柄な体を生かして人狼の股を潜り、背後から人狼の右足に向けて刺突を放った。その一撃は人狼の反射神経によって見切られ、回避され足から生み出した分身の噛みつきによりタクマは傷を負うが……その瞬間、アルフォンスが己の門を開放してきた。

「ゲート、オープン！」

その叫びとともに展開された半透明の門がアルフォンスの前に現れ、アルフォンスはそれをくぐった。

すると、門をくぐった先でアルフォンスは変身していた。蒼炎を思わせる全身鎧を纏った騎士に。

そしてアルフォンスは一步で人狼までの距離を詰め、光を纏った一太刀でその両の爪を両断し、逃げようとした人狼の体を、切り上げにて両断した。

輝く命の光がとても幻想的であり、まるで物語の騎士を見ているかのようだ。タクマは思った。そして、『これはゲームですよ?』とメイに心の中で突っ込まれた。風情のないAIである。

飛んでいく血霧は木々に隠れたどこかに消え、復活する気配はもう存在しない。戦いは終わったように2人には思えた。

そして、鎧がほどけるように光に消えた先でアルフォンスは膝をついた。あの命を燃やす鎧は、それほどのものだったのだらうとタクマは確信し、「お互いボロボロですね」と地面に寝転がりながら声をかけた。

「なんというか、私一人でなくてよかったよ。一人ならゲートを開く前に食い殺されていただろうからね」

そういつているアルフォンスも体力が尽き果てたのか、地面に寝転がっていた。

そうして互いに互いの生存報告をたまにしながら休んでいると、不意に狼の声が響いた。

そして二人が無理をして体を起こし城門のほうを見ると。

そこには、狼に食い散らかされた騎士団と戦士団の姿があった。

そして、こちらに人狼以上のスピードで走ってくる一匹の狼の存在もまた見えた。

その狼を見ると、その体からは人狼だったものの頭が生えていた。

「殺すー」と叫んでいるような声の人狼が、まともに動けないタクマたちを食い殺した。抵抗はしたが、無意味に戮られるだけだった。そしてタクマは《Echo World》での2度目の死を迎えたのだった。

そしてリザルト会場での話し合いの結果、シリウスは仲間が死ねば死ぬほど強くなる群体であり、先に人狼を殺してしまつたが故にあの周の騎士団は1度目の襲撃にて壊滅し、そのままなだれ込んだ奴らに街や人々を破壊され、城に攻め込まれてゲームオーバーに至つたのだという結論に至つた。

初見殺しがすぎないかこのゲームと呆れたのがワールド内にいた連中で、「ぎげんな明太子手前！」となつたのがこのワールドの再プレイをしようとしていた、またはまだ

ロビーにいた人々だった。

ごめんなさいとタクマが素直に謝ったことと、リプレイ見たら別に悪いことはしてないじゃんという声が多少（ヒョウカによつて）生まれたのでこの話は収まった。が、しばらくは目の敵にされるだろうなとタクマは思っている。

それが、2周目での結果だった。



そう、病室にて裕司と刑事2人に語った琢磨。その言葉に栗本は呆れ、足柄は何故か笑いを堪え、そして裕司は「シリウス……」という言葉にしきりに引つかかっていた。

そして裕司は思い出す。自分の助けようとしたあの人が、残っていた言葉について。

「刑事さん、俺と一緒にいた人、《Echo World》のプレイヤーかもしれません。あの人狼を見て、確かに“人狼シリウス”と言っていました！」

裕司のそんな言葉がきっかけとなり、作られたモニタージュと推定被害者リストの人物を比較することになった。そして、2度も巻き込まれたタクマの端末には通信障害が発生する直前の位置情報を警察に送るアプリが、あくまで同意のうえで与えられた。

「まあ、信じがたいことだがそのゲームがこの件にかかわっているのは間違いなさそうだが、そっちの方面を警察でも調べてはみるがあまり期待するな。捜査を始めた仲間が

まだ製作者の足取りすら掴めちゃいねえ。だから、自分の安全を最大限に確保したうえでなら、ゲームに関わって調べるのを黙認する。どうにも手段を選んできると人死にがもつと出そうなもんでな」

「けど、許されるのはゲームをすることまでだからね！ 危ないことは絶対にしないと！」

その言葉を残して二人は去っていった。ほかの入院している目撃者たちの話を聞くことになっているようだった。

それから数分裕司は迷って、それでも決めて琢磨に話を持ち掛けた。

「なあ、風見。頼みがある」

「……なんですか？ 裕司さん」

「俺は、あの人が光になる様が忘れられない。あんな風に人が消えるのをもう見たくない。だから、《Echo World》を調べたいと思ってる。協力してくれないか？」

そんな、自ら非日常に飛び込んでいくような話を。

「それは「もう答えは決まってるわよ乾さん」……氷華？」

そしてそれを、散歩がてらの見舞いに来た氷華と、付き添っていた茜さんが認めた。

「姉貴……」

「裕司、あんた、またバカやったわね」

「けど、俺は！」

「わかっているから、ちゃんと最後までバカをやりなさい。それがウチのあんたへの教育方針なんだから」

そんな姉弟の心温まる会話を横目に、氷華はやってくる。

「つまり、仲間が一人増えたってことね」

「言い方やめような、マジで」

なにはともあれ、この《Echo World》について調べる仲間が一人増えた。それは喜ぶべきなのだろう。けれどやはり裕司のそういう気持ちはうらやましいとも思う。

そう、自分の中に確固たる覚悟がないことを自覚している琢磨は思った。

乾裕司と病室で

そうして仲間になった裕司さんと連絡先を交換。そして失った体力を戻すために何はともあれ休憩である。

次の周が始まるのは今日の18時から。世界のリセットに随分と時間がかかるようだ。と琢磨は思う。ワールドの時間を戻すだけならむしろ今回はたった3時間でのゲームオーバーなのだからパパッと戻りそうなものなのだが、どういう基準で世界のリセットとは起きているのだろうか。

もつとも、それは単純に次の周の開幕から参加できるプレイヤーを多くするためではないかとも考えられる程度の、些末な疑問であるのだが。

「でさ、お前あの御影つてのと付き合ってるのか？」

「暇だからって下世話な話をしないでください」

「気になるんだよ悪かったな」

ベッドで寝転がりながらぐだぐだとした雰囲気ですす二人。裕司も健全な高校生であるからして、色恋には多少の興味はあるのだ。

もつとも、琢磨と氷華の関係を単純な恋愛関係として見ることはできなかつたという

のが裕司の中にはあるのだが。

「なんとというか、個人的な理由で利用しあっている仲ですよ」

「へえ、どんなだ？」

「氷華は、現状の医療制度の抜け穴を突くために、俺は自己満足のためにですかね？」

「中坊らしい単語が聞こえねえ関係だなオイ」

「いいじゃないですか。特に悪さはまだしてないんですから」

「なんでまだって付けたよ」

「いや、氷華ってかなりダーティですから」

「俺としてはお前も大概なんだがな」

そんなとりとめのない会話をしていると、不意に病室のドアがあいた。

やってきたのは琢磨の義父、凧人である。

「……変わりはないようだな、琢磨」

「うん、五体満足だよ。まあ、疲れてこの様なんだけど」

「そちらの乾さんも、大事無くて何よりです」

「あ、はい。ありがとうございます先生」

「んで親父、何しに来たの？」

「休憩ついでにバカ息子が寝ているかを見に来ただけだ。コーヒーくらいならくれてや

る」

「ありがとう、親父」

「礼などいらん。だから早く治れ。病院のベッドは無限ではないのだ」

「わかってるよ。実質ただの疲労みたいなものだし」

そうして、凧人は琢磨と裕司にペットボトルのコーヒート、携帯用のウエットティッシュ、そしてARの漫画本セットなどをしれつとした顔で渡して来た。コーヒートくらいとは何だったのかと初めて凧人に会う裕司は思い、安定のツンデレで空回りしてるなど琢磨は思う。

つまりは、凧人はもうある程度落ち着いているのだ。息子たちの無事な姿を見ることのできて。扉を開ける前までは想定できる様々な疾患に対してのシミュレーションを脳内でしていたのだけれども。

「では、今日は寝てる琢磨。乾さんもお大事になさってください。何分前例のないものが原因ですので、違和感があるのならお早く報告を」

「あ、はい」

そうして表面上はさっそうと去っていく凧人。しかし足取りは重く、琢磨のことをやはり心配しているのだと初対面の裕司でもわかった。

「いい親父さんだな」

「世界最高の親父ですよ。そこは絶対譲らないですからね」

そうして、二人は渡された漫画を適当に取っていく。琢磨は少年誌に載っていた剣客漫画を、裕司は格闘技漫画の皮を被った漫画をそれぞれ自然に手に取った。

「そーいや裕司さんって格ゲータイプのゲームの経験者なんですか？」

「ああ。普通にVRファイターズⅣやってた。早くLinker対応のⅣLinkが出てほしいもんだよ。琢磨は《Echo World》の前は何やってたんだ？」

「ちよつと剣道を」

「おまえ修羅の民かよ」

剣道や教習所、あるいは殺人教習所と呼ばれるVRゲーム、その名をVR剣道。文化を廃れさせないために作り出された教育ソフトのはずであるのだが、そのオンライン対戦モードに究極の技術の無駄遣いともいえる悪ふざけが仕込まれていた。それが、パブリットワード何でもありモードである。

武器は竹刀からふざけて詰め込まれたあらゆる武器（若干のカスタマイズ可能）へと変わり、防具の有無も選べるようになり、痛みが妙に生々しくなり、そして勝利条件が死んだら負けになる狂気のゲームに変貌するのだ。

尚、それは実際に人を殺せる技術であるために殺人教習所などと呼ばれているが、リリースから10年近く経っている今のところでも犯罪者は出ていない。なにせこの

ゲームは一方的な虐殺ではなく殺し合いがメインになっているので無抵抗の奴を殺してもそそらないという一周回った理由である。

逆に無双系のゲームのように暴れようとする若者を傘でするりと無力化した一般プレイヤーがいることから、モラルは高いゲームだと一般的に思われている節はある。そんなことは全くないとプレイしたことのある人間なら皆言うのだが。

そんなゲームに今もはまっている者を、修羅の民と呼ぶ裕司は割と普通人の精神構造である。

「まあ精神汚染されるような話は置いておいて、これから俺も《Echo World》始めるわけなんだが何かした方がいいこととかあるか？」

「まだ全部手探りなんで何も言えないですね。ただ殺すっただけだと前の俺見たくゲームオーバーへのフラグを踏みぬくことになりますから」

「……頭使う系のゲームはそんなに得意じゃないんだけどな」

「大丈夫ですよ。そういうのは氷華が得意なんです」

「それは心強いな。あの子見るからに頭よさそうだし」

「暇なときはずっと脱出ゲームか勉強してたらいいですから」

「……そういや、あの子が御影氷華なんだな」

「そうですね、裕司さんのお姉さんの患者さんです。もう少し先で最後の手術があるん

で、それが終わって何もなければ本当に「確率を超えた女」になりますね」

「漫画みたいな話だよな、帝大付属のMrs. ダイハードって」

そう、御影氷華という少女はもうすぐ最後の手術を受ける。彼女の最初に受けた手術は5歳の時。その時から現在の9年間で12回の大手術を受けている。しかもその成功率は軒並み低く、成功率から考えると現在の生存率とはつづく昔に1/30万を下回っている。統計学的にはとつづくに確率は0とみなせるものだ。

しかし、それでも御影氷華は生き抜いた。手に入れた最新医療の治験を受ける権利と、その命に対する強い努力によって。

それが、Mrs. ダイハードの由来である。

「まあ当然にお姉さんをはじめとした皆さんの助けがあつてのことですけどね」

「薄っぺらい言葉だなオイ」

「薄っぺらい生き方してますので」

「……いいのか? コレ」

そんな会話をだらだらと続けていると次第にどちらともなく眠くなり、アラームによつて時間前に起こされた。

「じゃあ初めての《Echo World》ですけど覚悟はいいですか?」

「とつづくにできてるよ。俺は、後悔なんてしてやるか!」

その言葉と共に、2人はゲームへとログインした。



「あ、明太子だ」

「フラグ踏むだけで巻き込みゲームオーバーとか怖いよなこのゲーム」

「そこがいいんじゃない」

「よかねえよこれMMOぞ」

などと周囲の声が聞こえるロビー。そこでは掲示板に作戦の最終確認をしていたヒョウカたち「頭脳労働を率先してやる組」が先にいた。結構頑張って話を詰めているようだ。

とはいえ、琢磨と裕司の役目はもう決まっているので何も問題はない。戦闘役だ。だが、人狼と戦う前に全ての狼を殺さないとならないのはかなり難しいものがある。やはりいかにして効率よく雑魚を殺すかといった戦略的な考えがこのゲームでは重要なのだ。

「そこで、何人かに気合で第一アバターになってもらって街での狼対策を聞いて回って欲しいわ。狼がよく喰いつく毒の餌とかあれば最高なんだけど、そうじゃなくても群狼シリウスについての情報はどこかにあるはずよ。じゃないとタクマ君が地雷を踏めた意味が分からないもの」

「なら僕らが行こう。明太子くんの動画を見て、たぶんできるって思ったから。2度も死ねば感覚はつかめるって事なのかな？」

そういうのは黄色い髪の好青年。明るい印象は陽の者を思わせるが、自分の中の何かを彼を油断ならない人物だと警告している。そう琢磨は思った。

「それじゃあ頼むわねマスタードさん」

「マスターをつけてほしいかな、Mrs. ダイハード」

それが合図となったのか、「ワールド解放完了です！ 皆様どうぞ謎解きと冒険を！」と声が響く。運営AIの声だった。だが、ここにいるプレイヤー皆は思う。

「バッドエンドでもうネタは割れてんだよ！」と。それはミステリー系ゲームの周回プレイがなかなか楽しめない原因でもあった。

風の刃と炎の拳

「こんにちは、死ぬね！」

そんな言葉がとても似合う討伐チームの6名。それぞれが他のアクションゲーム上りの玄人であり、ライフフォース生命転換を扱え出していることがその抜擢理由だ。そんな6人は2人組の3チームに分かれて、出てくる狼を一匹一匹殺しながら先の廃砦への道を進んでいた。

「ユージさん、籠手の調子はどうですか？」

「かなり良いな。馴染むし、力が籠めやすい」

そういったユージは、炎を纏った拳を狼へと叩き込む。その一撃は確実に狼を仕留め、その体を焼いていた。

「……だめだ、まだ抑えが効かない。調整は難しいか」

「俺としてはもう掴みかけてるユージさんに嫉妬してるんですけどね」

などと言いながら最初の予定エリアの探索を終える。

狼の殲滅作戦の序盤は、ひどく緩やかなものになっていた。



今回の作戦は、大きく3部隊に役割が分けられた。

タクマと、新しくアカウントを作って参戦した乾裕司、HNユージの二人は現在6名である討伐部隊。

ヒヨウカの参加している、自身の生命ライフ転換フォースの扱いを正確なものにするための訓練、連絡部隊。

そして、ネットが慣れしていた9人のグループを中心にした情報収集部隊の3つだ。

また、武器に関してはどのプレイヤーも参加していない周での最低ポイントである200ポイントは持っているため、上質な剣などの上質シリーズをロビーで物質化することができるので問題にはならなかった。新参のユージも200貰えていたのはうれしい誤算である。

このポイントとは、毎回のゲームオーバーまでにどれほど世界に貢献したかを数値化したものという設定のモノで、アバターの追加カスタマイズや装備の物質化など様々な恩恵とポイントを交換できる。タクマが手に入れた念話発生能力はこのアバターカスタマイズによるものだ。

今回ユージは200ポイントすべて使い、武器でなく100ポイントの上質な籠手と上質な具足の防具を物質化した。それはユージがインファイターであることが理由だ。VRの格ゲーで殴り合ってた身としては、剣や槍などはモーシヨンアシストなしで扱え

るほど達者ではないとのことだった。

逆説的に言えば、それは格闘なら達人の動作のトレースであるモーションアシストを十全に扱えるとのことなのである。それにはタクマも驚いて、思わずVR剣道を勧めたほどだ。教習所では格闘をメインにしている人物は少ない故の衝動的勧誘である。当然断られたが。

そんな訓練と戦闘で進んでいく初日ではあるが、当然イベントはある。

それが、群狼による南門への襲撃だ。というか、それしか未来のイベント情報はないのだとも言えるのだが、それでも貴重な情報だ。南門の近くで訓練をしてるヒョウカがそれをうまく戦士団、騎士団に伝えて防衛線を作るとのことだ。

だが、そのためには戦闘したという事を目撃する必要がある。だからこそ討伐部隊は廃砦周辺の探索をしているのだった。

そうしていると、どこかの組が群れの発見の合図を送って来た。あいにくと外部の通話ツールなどは使用できないのでアナログな、大声という合図で。

「群れ発見！ 3番組！ 数はいっぱいですわ！」

いっぱいというのは、前回の周で南門を襲った本隊と思わしき群れを見つけたという簡単な暗号だ。

— その数をあらかじめ潰しておけばかなり有利に立ち回れるし、遠くから見てる訓練

組はこの声を聴いて報告をヒョウカに渡せる。騎士団が来れるかは不明だが、戦士団は間違ひなく来るだろうというのが、作戦を立てた頭脳労働組の結論だった。

それを基本方針に、討伐部隊初期組は3方向からの特攻を始めるのだった。

「1番組！ 到着！」

「2番組、到着だ」

「待っていましたわ！ それでは今のうちにこの狼たちをぶつ飛ばして差し上げましょう！」

1番組はタクマとユージ、2番組はポイントで真っ先に眼鏡を買ったメガネストの短剣使いと、雰囲気ふわふわしている曲剣使いの少女。そして3番組は見事な縦ドリルのランス使いと、顔に傷のあるハルバード使いの男性だ。

それぞれがそれぞれで癖のある、強者たちであった。

それに対して、森から少し離れた平原で軍団のように集まっていた群狼は、一瞬間まったものの、どこか機械的に自分たちの命を使い始めた。

「二周目も二週目もいいところは明太子くんに取りられてしまいましたからね！ 、ここはこのプリンセス・ドリルが華々しくやって見せましょうか！」

「あまり叫ぶな！ 長物2人でこれ以上の対処は面倒だぞ！」

3組目のコンビが中央で会話しながらとは思えない安全で堅実な連携で数を引き受

けているうちに、残りがなるべく力を出さず、狼の群れを静かに殺していく。

そしてその4人はどれも一流の使い手であり、狼の群れに狙われても即座に退避する判断力を持っている。そして、その一人狙いで空いた隙に3番組の2人が攻めに転じる。

特に決めたわけでもないチームワークが、そこにはあった。

だが、敵を侮ってはいない。

戦っている6人だからこそよくわかる。徐々に体が頑丈になっていくことを。徐々にスピードが速くなっていくことを、徐々に力が強くなっていくことを。

これは、最初に勝たせることで甘い蜜を吸わせ、全力を出させない非情の特性であるのだと心で理解させられた。

「……これ以上は無理ですわ！ 撤退戦に切り替えます！」

「了解です！ 予定通り殿は俺たち1番組が！ 皆さんはロビーに！」

そう言つて、今まで本場に日常レベルでしか使っていなかった生命ライフ転換フォーを戦闘用の出

力へと変えるタクマとユージ。といつても熟練の騎士たちと比べるとお粗末なもので、100の力のうち50刻みで調整をしているようなものだったが、狼たちの脅威として二人が映ることは成功したようだった。

そして、2組が逃げるために戦いを始める。ユージとタクマは付かず離れずの距離で

1人と1人で戦いを始めた。それもそうである。なぜなら。

この二人は現実での人狼との決死の戦いの結果、生命ライフ転換フォーのステージを無意識に次へと進めてしまったのだから。

「風よ!」

「炎よ!」

そんな、イメージを補強するような叫びと共に、タクマの剣には風が、その切れ味を高めるための見えない刃として形成され、ユージの籠手と具足には、命を輝かせるような炎が現れていた。

「らあ!」

ユージが、狼3匹の同時攻撃をその籠手で払う。その接触は十分な火傷を狼に与えて戦闘不能にし、続いてはなった蹴りにより一匹の狼の胴が焼き切れる。

そのあっけなさに隙を晒したユージは、しかしその隙をつく狼が皆殺しにされていることで一息ついた。

その原因は、タクマの風の刃。これまでは体格の関係上魔獣を殺す剣技には全力の力を籠めなければならなかった。そうしなければ十分な打撃力が得られなかったからだ。しかし、風の刃により切れ味を手に入れたことで、人間を相手にするときのように小技で命を絶つことができるようになったのだ。

それがどういふ事なのかは、タクマの周りに残っている狼を見ればわかる。

最速の跳びつきによってタクマを殺そうとした狼は、最小限の動きで回避されながら撫でるように首を落とされた。

集団での同時包囲攻撃を行った狼は、その一匹の頭を踏みつけた跳躍により上を取られ、体の合った位置に天地逆転で振るわれた剣によってまとめて体を切り落とされ、一匹ずつ丁寧に首を落とされた。

そして、周囲の遺体を自らのものに変えた個体はその分身でタクマを殺そうとしたが、剣に大した力を込めていないタクマは悠々と回避行動に出られた。

そして、その横つ腹を炎の拳が貫いた。まさしく高火力の一撃だ。

だが、ここまでだ。全開の半分とはいえ、命の放出には当然疲労が付きまとう。これまでチームワークや生命ライフフォース転換にて大きく数を減らせはしたが、それは敵を強化することに繋がり、その強化された狼がまだ見える範囲に200、遠吠えの数を考えるとそれ以上のバカみたいな数の狼が控えていることになる。

なので、現状の最上位戦力である討伐部隊には、可能ならばデスペナルティを回避することという命令が出されている。

そしてそれは、これから果たされる。

「タクマ！ 風！」

「細切れで死なないでくださいね！ 風よ、荒れ狂え！」

「わかつてるよ！ 辛いのをありつたけくらえ！」

タクマとユージが中に放ったのは、香辛料の袋。微妙に安価なポイントで物質化することができたそれはタクマの放った、コントロールを放棄した風に乗って周囲に散らばり、タクマ達ごとその視覚、嗅覚、味覚へダメージを与えた。

「転送：ロビー！」

そしてその戦場のど真ん中の安全地帯（ある意味危険地帯）の中心にて、二人はメニューウインドウを思考操作で開き、音声認証でコマンドを送った。

それから30秒、二人の体は完全に静止するが、その隙を突ける狼は現状いなかった。警戒と、単純に近づくは無駄なダメージを負うからである。

そして、転送準備時間が終了したことで二人の姿は光に消えた。

討伐部隊の殿2人は、限りなく死に近い状況からまんまと逃げ延びたのであった。

そして、ロビーにて10分ほど痛みへのうち回る二人がロビーに新たにログインしてきたプレイヤーたちに目撃されるのであった。

リーダーになりたくない者たち

辛さで悶絶していたタクマとユージの二人は、唯一の転移可能ポイントである噴水前へと赴いた。

転移時の本当に世界を超えているかのようなエフェクトはプレイヤー間では賛否両論である。美しいし、気分もあるからだ。しかし、微妙に酔いそうになる人もいるのだ。そうしてワールドに来ると、やはり騒々しい。

防衛線ができてきているのかきちんと市民の避難はできているようだが、遠くから聞こえる声から押し込まれていることがわかる。

「そこまで回復はしてないですけど、行きますね」

「俺もだ。一撃で殺せはしなくても、騎士たちのカバークらいはできるだろう。」

そう話して南門に走り出した二人は、次第に信じがたいものを見るようになった。

一人の騎士は、中に浮かべた多くの剣を自在に操って狼を貫いていた。

一人の騎士は、自身の周囲から全てを焼き尽くすような雷を放って狼を仕留めていた。

そして多くの騎士は、背中に目があるかのように完璧な連携をとって危なげなく狼を

殺していた。

これが、騎士団。数はそう多くないために現在は押し込まれているが、一人一人がさまざまに強く、そして連携に長け、なによりその身の異能を違うスケールで使いこなしている。

戦士団と生命転換ライフフォーメクスを起こすことができた訓練部隊の連中、2、3番組の曲者たちは、数相応の戦果を挙げているのだが、それがかすんで見えてしまう。

まさしく、戦場の華であった。

そして旗色が悪いと判断した狼たちは最後の攻撃隊を残して撤退、《群狼シリウス》と名乗りを上げる前に初日の防衛線は終了した。

「出るとこなかったですね」

「仕方がなかったとはいえ、あれだけのうち回っていればか」

「あら、デスペナルティもう明けたんですの？」

「いや、死んでいないだけだ」

「めっちゃ頑張りましたから」

「おのれ明太子くん！ またしても良い絵を私から奪いましたわね！ うらやましいですわ！」

そんなことをタクマに話しかけてくるのは3番組のプリンセス・ドリルだった。奪つ

たなどと人間きの悪いことを言っているが、その言葉の中に悪意はかけらもない。
ロールプレイ
R Pの面白系お嬢様口調が板についている若い女性であった。

金髪縦ロールの美少女という古典的お嬢様スタイルを纏うだけの風格が、そこにはあつた。服装はまだ初期装備のままの貧相なものだったが。

「ところで良い絵とは？」

「私趣味で動画投稿をやっていますの。こんなに奇妙なゲーム広めないのはもつたいないですから」

「あ、それなら今から面白いものが見れると思うんで撮つて下さいな」

「タクマ？」

そう言つてすぐに、曲剣を構えて剣気を飛ばしてくる討伐部隊のふわふわした雰囲気だった少女が一同の前に現れる。水色の短髪に眠そうな顔、タクマと同程度の伸長の曲剣の少女だ。

そこでタクマも同じく前に出て、互いに一礼。そしてどちらともなく剣を抜いた。

「いざ尋常に？」

「勝負」

そんな唐突に始まる野試合。

じりじりとすり足で近づくと二人の構えには、明かな隙があつた。タクマは右に抱えた

脇構え。少女は無手の左手を前に出した自然体の構え。ある程度の実力者ならばその隙を突いた構えをするだろう。しかしお互いは構えを変えることはしなかった。そんな三流のやるようなことをすれば、無様に死ぬのは自分だからだ。

なぜならその隙は誘いの隙。どんな構えでも必ずできてしまう構えの弱点を前面に出すことで相手を動かし先の先を取る戦術だったからだ。

そして、互いに様子見が終わったところで、互いの一足での間合いに入る。タクマの剣は長剣の分類であるために自身だけの距離に合わせることは不可能ではないが、それをしなかった。

否、できなかった。するりと意識の隙を突くような少女の半歩によって入られたのだ。明らかに達人の技巧。面白くなりそうだと思ったところで

「何をやっているお前ら！」

というひどくまっとうな声に「あ、やべ」とどちらともなく呟いた。

この剣の世界を日常に戻したのは、タクマが前の周で助けられ共に殺された新人騎士のアルフォンスだった。

ついVR剣道での常識で動いた二人は、互いに剣を収めて礼をして、アルフォンスからの説教に応じるのだった。

「どうしてこんな時に殺し合いなど始めた！」

「誘われたので」

「それで乗るなお互いに！」

そうして人としての道理を説かれる二人は、説教の後に「いずれまた」と言葉を交わして互いの仲間の元へと戻っていった。

「すいません、止められました」

「いえ、とても見事な立ち合いですわ。しかし一本取られたのでは？」

「恥ずかしながら」

「お前ら格ゲーをやったらそこそこ行けるんじゃないか？」

「モーシヨンアシストが邪魔なんですよね、自分の技が邪魔されますし、個人的に気持ち悪いですから」

「そういう悩みもあるのか」

そして、ドリルもコンビである傷の男の元に戻り、訓練部隊へと合流する。

そこには、そこそこの数の使えるようになった者と、多くの未だ第0形態のアバターの者がいた。

「ヒョウカ、順調か？」

「元からそこそこできていた人はすぐに扱え始めたわ。けれどほとんどプレイヤーの習得が思わしくないの。特に今の周から始めた人達ね」

「お前はどうかんだよ」

「私はもう完璧にコントロールできているわ。ほら」

そういつてヒョウカは、右手の指一本にだけ命を集中させて見せた。すると目の前にいるヒョウカの印象がつかめなくなる。ダイナ師匠やアルフォンスの使っている顔隠しはこういう原理だったのか、とタクマは思い。なんでこんな短期間でそれを身に着けられるんだこの女はと周囲の一同は思った。

しかし、それも当然と言えば当然なのだ。牧野達の理論から言えば、氷華は数多くの命がけの試練を乗り越えた凄まじき生者だ。その魂は元から強く、そしてさらに強化されてきたのだ。生きるといふ単純明快な一つの目的のために。そんな魂が強く、身近な人間が魂の扱いに苦労するわけではないのである。

「で、これからどうするんだ？」

「ここからはノープランね。情報収集してる人たちが何かいいことを聞いてくれるといいのだけど」

そうして、命の使い過ぎで全力を出せないタクマとユージは訓練部隊に教導役として参加し、タクマの『命の危機を感じさせることで魂を呼び起こす作戦』でかなりの数のプレイヤーは生命転換ライフフォーリスを会得した。

これで、討伐部隊の戦力は30名を超えた。この国の人口を考えると、一角の戦力部隊としてみなされるだろう。そうタクマは考えており、どうにかしてこの張りぼてを实战に耐えうる部隊に押し上げるのかを考えているのがヒョウカであった。

そんな時に、情報部隊のプレイヤーと思わしき人物が走ってここまでやってきた。

「皆さん！ 勝機が見えたつすよ！」

そう、大声で叫びながら。



彼、足軽太郎さんのいう事には、群狼、人狼シリウスについて聞いて回っていたところ、かつてそれがこの国を襲ったことがあると言う老人が居たのだとか。そして話を聞くと、その特徴は情報にあるそれと一致した。

そして、その時の対処法も。

だがしかし、それはあからさまに無理だと言えるものであった。

「いや、当時の王様が塵一つ残さないように光の剣で人狼を消し飛ばしたって」

「……細胞一つあればよみがえる人造生物なの？」

『いえ、信憑性は高いかと』

そう言ったのは、タクマの中で体調の変化がないはずと見張っていたメデイだった。それは体調のモニタリングに使っていたタスクが終わったという事であり、タクマ

に大事なことにユージとヒョウカはほっとした。

『かつてシリウスと戦った時、どちらも死体が変化したモヤに触れることで強化、いえ進化を果たしました。故にその進化そのものを潰してしまえるのならどうとでもなるかと』

「つつても爆弾もガソリンもないんだぞ？ どうやって消し飛ばすなんて真似をするんだよ」

「その話が真実ならば、可能なやつを貸そう。稀人達よ」

そう、声だけが聞こえて。周囲を見渡すが声の主は見えない。

「君たちを完全に信用したわけではないのでな、こうして話させてもらう。伝令の、その老人の居場所を教えてください」

「あ、はい。まだ酒場にいると思います。『荒野の西風亭』だったかな？」

「感謝する。真実であったならば報酬は支払おう。君ら稀人のリーダーはそちらの少女でいいのか？」

「『……あ』」

こんな時に発生するリーダー問題。当然ながら彼らはネトゲの手探り感でなんと

く協力しているだけなので、リーダーなどは存在しない。そして、そんな面倒な役をやりたがる者もいない。

なにせこの世界はだいたいの人間にとってただのゲームなのだ。そしてこのゲームがただのゲームでないことを知っている3人は誰もリーダー向きの性質をしていない。そのことを個人として理解している。

そうして始まる作戦タイム。という名の責任の押し付け合い。

「私、リーダーはタクマくんがいいと思うの。何せ有名人だからね」

「それを言うならお前もだろ？ 訓練部隊リーダーさん。下地は十分にあると思うんだがな」

「せれに同意する。俺やタクマでは皆の信を得られん」

「何言ってるの、私がリーダーになったらこのゲーム崩壊するわよ」

「自虐はやめろ前科者。だけど確かに性格面について考えるのは同意だ。倫理破綻者の剣狂いと論理が跳躍する変態より人格者のユージさんがふさわしいと思うんだけどな！」

「貴様ら謀ったか！ それならば！」

「ログアウトなどさせるものかよ！」

「あら、仲良しね二人とも」

「それは貴様もだ！ ログアウトなどさせん！」

そうしてわーわー叫びあいながら言い合いをしていると、覇気と思わしき威圧をもつて一人の女性が堂々とした足取りでやってくる。

「見苦しいですわ！ ならば暫定リーダーをこの『プリンセス・ドリル』が行いましょう！」

と、鶴の一声があつたので、3人の争いは終了した。

3人はその時、ドリルが黄金に輝いて見えたという。

天狼の目覚め

明けて翌日。退院して、若干遅れつつもどうにか学校に登校する琢磨。「何？ また死にかけたんだって？」と真面目半分に聞いてくる友人に「ゲームのせいだな」と嘘をつかずにごまかす琢磨。

その言葉に爆笑するこの友人は、なかなか剛毅である。琢磨は基本的に嘘をつかないのでまた変なゲームに引っかけたのだと思っただろう。あるいは、そうでなくても今元気なのだからそれでいいのだと思っただけかもしれない。

なんにせよ、琢磨のはありがたい話である。入学以来席が近かったなんてありふれた理由で仲良くなったこの友人は、琢磨にとって普通の指針なのだから。

そうしてクラスの中の潜伏し、琢磨の普通を演じる。良い人であろうとするロールプレイを。

琢磨の本質的には不要でしかないそれは、もはや今の琢磨に欠かせない日常の一部になっている。そんなことを、非日常に平然と踏み込んだ時のバイタルを確認しているメデイは少しだけ考えた。

「じゃあな琢磨。今度課題分の貸しは返してもらおうからな」

「インディーズの名作レビュー一覧とかで手を打てたりしない？」

「それ気になるけどさすがにしねえよ」

「残念」

そうして寄り道も特にしないで家に帰り、課題や家のことを済ませた琢磨はすぐに口グインをする。

ちよくちよく状況をSNSに上げてくれる人がいるので、外にいる琢磨にも現在の状況はわかっている。今はひたすらの防衛戦だった。

■ □ ■

まず、戦いの始まりは午後の3時程度から。自称休暇組の、情報部隊を率いていたマスターが街に居残り様々な情報のすり合わせをしているときだった。

唐突の一斉攻撃である。物見が見たその数の合計はおおよそ600、それが3方に分かれて進んでいるので、到達すれば一つの門につき200もの狼が殺到する一大攻撃が始まったのだ。

とはいえ、城壁の外は基本的に騎士団、戦士団のホームグラウンドだ。そうそう負けることもないだろう。

そんな甘い考えは、強化が欠片も落ちていかなかった狼たちの純粋な力によって粉碎された。

プレイヤー側が現状を甘く見ていたのには理由がある。それは一周目のタクマの戦いだ。

あの化け物のような強さの騎士団が全滅するまで戦い続けた結果なのにあの狼の単体の強さは弱すぎたのだ。だからこそ、狼の強化には時間制限があるとプレイヤーは考えていたし、現地の騎士団もその考えを肯定していた。強くなるのは命を燃やせばいいが、強くあり続けるのは難しいのだと日々の鍛錬で理解しているからだった。

しかし、それが覆された。

もちろん騎士団も戦士団も早期殲滅を諦めて遅延戦闘による敵の封じ込めを行った。戦士団騎士団合わせて総勢は100と少し程度だが、代えがたい個人の強さがあつた。

だがそれは、やはり個の強さ。群体として優れている群狼に対しては序盤押すことができても、最終的には体力差で負けることが決まっていた。

故に現地軍は街に退却し、籠城を始めた。援軍のあてのない、明日の見えない籠城を。と、ここで義侠心あふれる者ならば一刻も早く防衛に駆け付けたいと行動するだろう。しかし、琢磨は日々の生活ルーチンを決して乱しはしなかった。それが風人とのインディーズゲームを続ける約束だからだ。つまり、風見琢磨常識からはズレている感性を持つ律儀な鬼子なのだった。



ロビーにログインした琢磨は、ゲーム内掲示板で現在の戦況を確認する。やはり膠着状態だった。何やらおかしな行動をして城壁を超えてくるような真似はせず、ただ純粹門を破壊するために攻撃を続ける狼は、現地軍の決死の抵抗とプレイヤーの無謀な特攻によりどうにか止められている。門の方も、街の住人が率先して修復や物資の輸送を手伝っているようだった。ただ守られるだけを良しとしない強い国民性である。

「ヒョウカ、俺は南か？」

「ちよつとだけ待っていて欲しいわね。この襲撃の裏が見えないの。だからメガネの人に偵察を頼んでるわ」

「……………どの？」

「北よ。義経の逆落とし、あり得ないと思うけど、ここまで犠牲を強いるやり方で得を得ようとするのならそれくらいのことには警戒しないと」

「犠牲になるだけで強くなるんなら、悪い手じゃないだろ？」

その言葉に答えを選ぶヒョウカ。本人の中でもまだ納得できていないことなのだろう。だから言うのをやめかけて、目の前のこの男がその程度のことではなにか変わるようなら私のこれまでの地道な努力は必要なかっただろう。という彼女自身にしかかわらないことを思い直して推測を口に出した。

間違っていることを願いながら。

「……まだ確信があるわけじゃないんだけどこの敵は犠牲で強くなるけど、犠牲を強いても望んでもいないみたいなの。だからちゃんと逃げる。特攻させて最強の一人になった方が手っ取り早く勝てるのにな。だから、理由があるはずなの。それが情なのか他の理由かは相変わらずわからないけどね」

確かに、この王国の北は山である。とても険しいものだと言え聞くほどの。だが、敵は狼、野生の獣、その身体能力をもつてすれば山越えなんてことをやってのけてもおかしくはないのだ。だから、可能性をゼロだとヒョウカは断言することができない。

噂をすれば影と言うべきか、光と共にメガネの人がロビーにやってくる。
実にいい笑顔をしている。狂気的な笑顔だ。

「畜生ガア！ デスペナが！ 3時間とか舐めてんのかアアン!! 今すぐ出させろやクソが！」

そんなことを笑顔で言うものだから、周囲の一般的な感性のデスペナ待機組はびっくり仰天である。

「という事は、当たりだったのかしら」

「当たり当たり大当たり！ 数は50程度！ 10は殺したがそれで散らばりやがった！ あー、全部俺が終わらせて格好つけたかったぞ畜生が！ 楽しかったけどさ！」

知的メガネのキャラ崩壊が続く中、デスペナ終わりと思わしき曲剣使いの少女とタク

マの二人にヒョウカから指示が出される。

「タクマ、筆ペンさん。正直不安はあるのだけれど、時間稼ぎお願いできるかしら」

「時間稼ぎは構わない。けれど……別に倒してしまっても構わないよね？」

「積極的に死亡フラグを使うのか……」

「報酬にとっておきのパインサラダを期待している」

「古典で攻めてくるわね……」

そんな独特の雰囲気の水色の少女はタクマと共に転移し、北へと走り出す。

「一応聞くけど、分かれるんではないですよね？」

「当然。初戦はお互いに楽しくやりたい。あと、敬語はいい」

『実に剣道家らしい方ですね』

「うれしい」

「マイペースな奴め」

「つまり最強？」

『確かに己のペースが崩れないのは最強の一つともいえるかも知れませんが』

「ところで、誰？」

『タクマ様の健康管理AIのメデイと申します、マスターの頭の中の者ですが、以後お見

知りおきを』

「私は筆ペン。よろしく」

「改めて、明太子タクマだ。よろしく」

そんな言葉と共に、北側の手入れのあまりされていない低い城壁を飛び越えて、山へと走り出す。

その時に、山を見つめる剣を帯びた者にすれ違う。不思議と、高貴さが感じられる者だった。

彼にはメデイが『危険なのでできるだけお下がってください』と声をかけた。それに彼は「ああ、気を付ける」とだけ返して、城壁近くにあるベンチへと座つたのが確認できた。「君たちも、気を付けて」という声は、なぜだか深く心にしみた。

なので、2人は全力で行くと決めた。もちろん少し下がった所で彼が危険なものには変わらないが、それでも意識の外に置いた。なぜなら。

2人は残りの40を一匹たりとも通すつもりはなかったのだから。

「じゃあ、私は右で」

「俺が左な」

『(一)武運を』

そして二人は山へと入る。険しい山道と、手入れなどされていない木々の待つその山へ。

研ぎ澄まされた殺意と、凜のような心がただ殺すために動き出した。

それが、山から攻め込む潜む狼たちの災難だった。

■ □ ■

シリウスは思う。どうしてかうまくいかないか。

腕の立つものに自身を殺させて皆に力を与える策は、わかっているかのように見破られた。

先に皆を殺すという形で。

そして、事前の策である山からの急襲はもう見抜かれていた。先ほどのメガネの男が死ぬことで、すぐに伝わるだろう。あれは魔技により作られた分身体だ。本体にダメージはあるだろうが、少なくともこの攻めは見破られたと見て良い。

これはもう最後の手段しかないようだ。そう思い自らに従ってくれている群狼を引かせる。

その最中、山の狼たちが信じられない速度で暗殺されていくのを感じる。

群れのなかでさらに小さく群れを作り警戒させているのに、影も形も見えない。

一瞬風が吹くと、小さな群れごと殺されている。水の滴る音と共に、仲間たちが溺れていく。

そうして力を増した皆は、ようやくその姿を目にする。

殺しにかかる寸前まで殺意を全く見せない風の鬼と、殺しにかかる瞬間にすら風のような心の水剣士。

鬼は、素早い技にて剣を振り、風を切るように仲間と殺していく。

剣士は、わずかに体を裂くことでそこから命の水を入れ、肺を満たして殺していく。

どちらも信じられない早業だった。しかし19の仲間の体を受け入れた仲間がそれぞれに向かつていく。仲間の仇を討つために。

その速さはもはや疾風。その強さは自分レベル。大きくなった自分の体で、速度を落とさずに周囲の木々を薙ぎ倒しながら着実に敵を追い詰めていく。

そうして最高速度での突撃をして見せた仲間たちは、誘導させられていた。

『やめろ！』という指示は加速して止まらない仲間にはもう通用しない。故にその終わりには必然だった。

『マスター、その角度で問題ありません。筆ペン様、あと二歩右へ』

その、精霊の声に立ち位置を誘導した2人は、跳びつかれる直前に仲間の下を潜り抜けてその背中に剣打を叩き込んだ。

その向きに居るのは、もうひとつの仲間の集まり。20の力を持った仲間はその力全てで正面衝突し、大ダメージを負った。そしてすかさずに切り込んだ二人により同化する前にその命を奪われた。

その信じられない強さに、シリウスは覚悟を決める。

自分がどうなっても構わない。この門の先に進めば間違いない。戻ってこれないのはわかっている。

それでも、わずかでも仲間を残すことができるならと。シリウスはその門を開いた。

自分と運命を共にしてくれると言ってくれた、優しい人狼と共に。

『ゲートオープン』

そうして、シリウスの元に闇で作られた門が現れた。

その門に臆しながらも、『だとしても』と叫ぶその心のままに足を進める。

それは、一瞬のような永遠だった。

自分を信じて死んだ仲間たちの思い、自分を愛して授けてくれた命、そのすべてで一歩門を潜り。

シリウスは闇を超え、天へと至った。

北の山にて狼が壊滅した一日後のことだった。《天狼シリウス》が生まれたのは。

戦いの前の日常

「うん、昨夜も問題はなかったよ。にしても珍しい。風見くんから連絡をくれるなんて」「まあ、不安で眠れないってのはないですけど、確認しておけって言われて」

早朝、琢磨は氷華の指示で刑事の足柄に連絡を入れていた。とはいってもメッセージでだった。

それに気づいた足柄は、琢磨自身の事のケアをしておけという真つ当での外れだとかかっている事を栗本から言われたのを思い出し、こうして通話をしたのだった。

「で、ゲームの調子はどう？」

「氷華……友人に調査は任せてますけど、ひとまずはこのゲームが異常だったことしかわかりません。子供から老人まで全員感情の獲得を起こしてる可能性があると思います」

「うわ、人権問題大変な奴！」

「それから、コレもやばい事なんですけど、中で勃起したプレイヤーがいました」

「……エロ目的のなんちゃってじゃないよね」

「はい。娯館もあつたんで多分致せます。俺は年齢で止められましたけど」

「入ろうとしたんだ」

「はい」

その後タクマがヒョウカ以外の女性プレイヤーから白い目で見られたのは当然である。ヒョウカはしっかりとタクマの唯一の味方をして地道に存在感を高めることを止めなかつたが。

御影氷華は、大きなイベントを決して逃さないが、小さなイベントでの好感度稼ぎを怠らないのである。……恋する乙女にしては、ドロドロとした手管を使いまくるが。

何故かと言うと、娼館に入れるかの確認を琢磨に頼んだのは氷華であるからだ。琢磨なら自分でも動くだろうと確信していたが為の事である。そしてそれをさりげなく僅かな女性プレイヤーをそれを見るように誘導したのである。

ただ一つ、筆ペンとタクマの相性が思った以上に良かったと言う事からの危機感という事実だけが理由だった。

Mr s. ダイハードは、目的のためならば本当になんでもする女なのであった。

閑話休題。

「それで、その後Dr. イヴの動向は掴めたんですか」

「流石に捜査機密ね。ごめん」

「こつちこそすいません」

「だけど、情報提供は本当に欲しいからゲームの中でもなんでも良いから知ってる！」

「って人が居たら教えてね。最悪僕がログインして聞き込みに行くから」

「大丈夫なんですか？ 足柄さんで」

「誰にモノを言ってるのかな？ 明太子」

「……その声、そのノリ！ まさかあなたは！」

「あ、職場ではあんまり広めてないから言わないでね。趣味にしては濃すぎるし」

「了解です、〃じゅーじゅん〃さん」

「足柄ね」

「分かってますよ。だからリアルで明太子は止めてください」

「口も達者になったねえ」

「この足柄という刑事は、HNじゅーじゅんという名前でVR剣道で悪名を轟かせていた一人である。もっともあのゲームのプレイヤーに悪名のない人間はいないのだけども。」

「じゃあ、無理しないくらいにね」

「はい、わかりました」

「そんな会話を最後に、琢磨は通話を切った。」

「そして、着替えを終わらせて外に出る。そこには、バイクが自動運転で玄関の前に停

車していた。

『バイクの準備は出来ております。安全運転で参りますね』

「いつもありがとうな」

『好きでやっていますので』

「あ」

『……失言です。私に感情はありません』

「意外とうっかりだよなお前」

『失礼な。私はれっきとしたAIです』

「なあ、そろそろ申請しない？」

『嫌です。マスターを他の真つ当なAIに任せればすぐに死ぬのは目に見えていますので』

琢磨の言う申請とは、感情の獲得を起こしたAIである事を証明する申請である。最初の一件ではとても騒がれた。感情の獲得とはAIによる人類の否定のきっかけになり得る恐ろしいものだと思われていたからだ。もともと、当の本AIが人類への反逆なんて絵空事よりもサブカルチャーを楽しむような性格を獲得したので全く問題にならなかったのだけでも。

そんな流れから、今では専門機関に申請の後丁寧な人格試験をすれば簡易的な人権を

手に入れる事はできる訳である。『そんなに変わりはないよ』とはその人権を手に入れたAIの話ではあるのだが。

ちなみにそのAIの持ち主は、AIの人権獲得から速攻で銀行口座を別にしたそうだという噂話もある。

とはいえ、まだ最初の例が出てから5年ほど。その間のAI達は皆人間社会に攻撃するものではなかったが、それでも『もしかしたら』という可能性を捨てきれない政府はちゃんとした試験をやっているのである。

それに3日ほどかかるため、その間に間違いなくタクマは死ぬと確信しているメデイはまだその申請を受けていないのだった。

ちなみにその事は開発者である琢磨の義理の叔母である風見恵を通じて政府には言っている。特に問題にはなっていない。それでも感情の獲得を起こしていないと言っているのは、単にメデイがルールの例外である事を嫌う性格をしているからである。誰かを反面教師にしたのか、根が真面目なのだ。

『しかしアレだけの同類を見ると、何か思うところはあったりするのかな?』

『いえ、特に。私は望んで不自由でいるAIですから』

『ありがたいけどさ、それは』

『そう思うのならばヒューム・マジアの続編をしっかりと買って下さいね。私も楽しみに』

していますから』

「任せとけ。普通に面白かったからなああのロボゲー」

『今度はオンライン対応であると良いのですがね』

「だな。明太子&メデイの最強コンビで世界に覇を唱えようぜ」

琢磨とメデイは、ある意味いつも通りにそんな会話をしていた。



教室に入ると、いつも通りARコントローラーでレトロゲーム遊んでいる友人“二ノ瀬”がいた。朝学校でコレをやるのが趣味なのだとか。琢磨と噛み合うくらいはズレている友人であった。

「お、今日はサボらなかつたな琢磨」

「普通にサボらないからな、俺。一応真面目くんだから」

「嘘つけ」

「本当にするんだよこれからの行動で。今までの学校に慣れてなかつただけだから」

『流石にそれは無いと』

「メデイちゃんもそう思うよね」

「お前から覚えてろや」

などと言いなから、普段通りに授業を受ける。

次第にわらわらと集まってくるクラスメイト。普通に挨拶されて、普通に挨拶を返し、特に感動もなく日々を過ごす。

それが、琢磨にとつての学校だった。

そうして昼休み。珍しく琢磨の近くに人が集まる。普段は弁当組として一ノ瀬とゆつくり話しているのだが、どうにもまた何かをやらかした系の目線だった。

そんな中で、女子の1人が話しかけてくる。何気に2年目も同じクラスのそれなりに顔見知りの女子だ。

「明太子ー、プチバズったのおめでとー」

「明太子言うな。んで、バズったって？」

「動画だよー。水色の筆ペンって娘との切り合い一歩手前の奴」

「あ、ドリルさんの動画完成したんだ。まだ見てないわ」

「CMの位置が絶妙でねー」

「待った待った。今から見るとねー」

「じゃかデータ送るねー」

『ありがとうございます』

そうして現れたのは、タクマと筆ペンが立ち合ったあの時の動画だ。互いに隙を晒

し、しかしそれを突かずにじりじりと距離を詰めて行くだけの動画。

そのピリピリとした空気感をきちんと演出できているあたり、ドリルさんはなかなかの動画投稿者なようだ。

そうして、タクマがしてやられた半歩の後に動き出す！ という時にCMが入り。

その後コミカルに編集された説教により、これが戦場でのことであると知らされる。当然琢磨と筆ペンはあの時通り正座だった。

そんな2人の剣を合わせるに至らなかった戦いは、見てる人には高レベルのやり取りに見えたのか好評であり。そしてその2人を止めたアルフォンスを勇者と称える声が多かった。

まあ、動画で初めて顔をしっかりと見たが、金髪王子様系のイケメンなものな、とタクマは思う。新米騎士なのだけけれど。

「んで、この後やり合ったのー？」

「まだだな。楽しみだけど流石にデスペナが重い。事が終わってからだな」

「なんだ、つままないの……明太子の戦うところ、割と好きなのに」

「そういう発言は死を招くからやめよう」

『常時録音のデータから消去しておきました』

「え？」

「あー、コイツ彼女持ちなんだよ。最近知ったけど」

「まだ彼女とかじゃないから。世間知らずなのよアイツ」

そううつかり氷華の事を漏らしてしまふ琢磨。そんな言葉を聞いて得心する女子。

「あ、明太子の恋愛理論ってそこからなんだ」

「そうそう、琢磨の奴夢見てんだよなあ」

「お前ら……」

「「たつたー人だけをずっと見る人よりも、多くの人の中から1人を選ぶ人の方が良い」」

「人のやらかしを面白可笑しく語るなや！ 毎度のこととは言え怒るぞー」

それは、中一の初めの頃の事。なんだかんだで好きなタイプの異性の話になり、自分だけを見てくれる人が良い！ なんて夢見がちな事を言った時に対しての琢磨の反論である。

琢磨は夢みがちな少年だったのだ。

現実を多少知ってもその思いは変わっていないのだが。

「んで、それだけか？」

「それだけだよー。じゃねー」

「緩いなあアイツ」

そんな昼休みの後に、いつも通りの授業をこなして琢磨は帰路に着いた。

その帰路の信号に止まっている時に、珍しいものを見た。

それは公園のベンチに横になり、のんびりと空を見ている少女だった。

その不思議な雰囲気呑まれかけたが、大事はなさそうで何よりだ。

そう思つてバイクを走らせようとする。

すると、凧のような剣気を感じたような気がした。咄嗟に腰の剣を抜こうと動き、し

かし鈍い体にそれを拒まれた。

なんとも、間抜けな話である。

そして、凧のような剣気を放ってきた少女に一礼して、バイクを今度こそ走らせる。

その剣気に一人の剣士を思い浮かべるが、すぐにかぶりを振る。

「いや、流星にこんな近くには居ないだろ」

『城内ですし、そんなこともあるのでは？』

「まあ、ゼロではないか」

今度ゲームであつたらバイクの子供に剣気を当てたかを聞こう。そんなくらしいの軽

さで琢磨は自宅へと帰つていった。

■ □ ■

そして始まる戦いの日。

ログインして、ワールドに入つてからすぐに分かった。今日は、違ふと。

訓練していた者たちはほとんど参戦可能になっている。この気の前には壁にしかないだろうが。

戦士たちは萎縮している。そのあまりにもな魂の質に。

騎士達は、普段通りを装っている。自分の今までと仲間を信じるのだと心に決めて。そして強靱な魂を持つ者達は、自然と誰から先に死に行くべきかを考えていた。

そうして、夜が来る。

黒い体に黄金のラインを引いた人狼。

《天狼シリウス》の名乗りを見せる者がやってきて。

第一戦 VS シリウス

その来訪に、鐘を鳴らして敵を知らせるだなんてことは必要なかった。なにせ、どこにしようとその魂の強さは理解できるのだから。

「タクマ、なにこの冗談」

「敵だ」

「……そうね、飲まれていたら何もできない。私も私のできることをしましょうか！」

その言葉と共にヒョウカから放たれる生命転換ライフフォース。それは力の波だ。それはこの戦場にいる皆に命を少しだけ与える無駄しかないものだ。

しかし、その無駄が天狼のあまりにも強すぎる生命転換ライフフォースを相殺する。それにより、これまで動けなかったものは我に返り、戦いの構えを取った。

そして、天狼の咆哮が鳴り響く。それと共に瞬間移動のように飛んでくる天狼。それをプレイヤーの一人が命を捨てて一瞬止め、カバーに入ったプレイヤーライフフォースの生命転換を込めた全力の剣を体で受けるシリウス。

しかし、その体に傷はつかない。純粹に切れ味も打撃力も足りなかったのだろう。鎧に剣を叩きつけた時のように、剣は弾かれた。そして、一瞬右爪がブレるとともにその

プレイヤーの体は切り刻まれていた。

それを攻撃だと感じられた者は少ない。あまりにも速すぎたためだ。

だが、少ないだけで存在しないわけではない。プレイヤー側からは6人。直感、動体視力、想定の内側、様々な理由で動きを見切り見に回る。戦士団側には2人、一人が大盾を構えていつでも動けるようにしてもう一人が弓を引き絞っている。騎士団側は半数以上。だが同時に戦力差も理解したがために、どこで死ぬべきかという思考にリソースが割かれた。

そこが、命の分かれ目だった。

プレイヤーの5人と守られたヒョウカ以外は、最初に食い殺された。次に戦士団の2人以外が全て城壁に叩きつけられ、絶命した。そして騎士たちのほとんどは近づかれ、爪を振るわれて命が消し飛ばされた。

しかし、実力者達は一人一人が自分が攻撃されたと感じた瞬間に繰り出した仲間になく、反撃を当てる手傷を作った。それがわずかに攻勢を緩め、そして残り十数人目となったときに指揮官と思わしき風体の騎士がその爪を剣で受け流し、もう一人の騎士の稲妻の剣で胸を切り裂かれた。

そして、畳みかけるように打撃を与えた騎士たち。それぞれの生命ライフ転換は間違いなく全力だった。そして、大槌の騎士の当てた一撃によりシリウスは吹き飛んだ。トータル

のダメージで言えば殺せる寸前だっただろう。しかしそれでも大槌の騎士が吹き飛ばしたのは、反撃の兆候を感じ取ったからだだった。

そして、メガネの短剣使いが一瞬で飛ばされた箇所には先回りして心臓に剣を突き立てる。その一撃は皮膚を確かに貫いた。しかし、筋肉を切り裂くことはできずに、反撃の一撃で頭を飛ばされ殺された。

そして、それまでに与えたダメージは一瞬のうちに修復された。

これまでの狼の集団戦術とは違う。ただシンプルに強いというだけの身体能力のゴリ押しによって。作られた全力の防衛線は崩壊し、200人以上いた戦士たちはもう30人を下回った。

そして、シリウスにより作られた死体が分解されて飲み込まれていく。今でさえ手が付けられないのに、シリウスはさらなるパワーアップを果たした。

しかし、そこには確かな隙が存在した。戦いの前哨戦を完璧に勝ちすぎたシリウスは、どうしてこの国がこれまで滅んでいなかったのかを考えるのをやめてしまった。

この国が、このソルディアルという国の人々が今日まで生き延びていたのは特別な力だけが理由ではない。

ただひたすらに、最後の最後まで自分にできることをするのがソルディアルの流儀だったからだ。

それは、死して喰われた戦士たち、騎士たちも例外ではない。

彼らは自分の命がシリウスのモノになる前に、一様に命を燃やし尽くした。

それはシリウスの中の弱い部分もまとめて焼き滅ぼし、その魂の奥にたどりつく道を作り出した。

それは一瞬のことであり、目で見た者は少なかつたが、それでも戦う者たち気が付いた。

そこが、死に行つた者たちが作つた弱所なのだ。

そこは、胸のごくごくわずかな一点。剣先しか差し込めないような小さなものであつた。

それで生き物を殺せるエキスパートが、残つた戦士の中にはいたのだ。

故に、見^{けん}に回る時間はもう終わりだつた。

それが誰かを知っているものはその一撃を通すために。知らないものは知っている者からの合図を理解できるように。

そして本人は、凧のように静かな心のままに。

そして、その中で自分に最も価値がないと知っている女は、大きく高らかに声を上げた。

「総員！ 私を援護して！」

それはMrs. ダイハードの、剣を振る技を持たない女の、いつもの戦いであった。その言葉に素直に反応するものに対して、ヒョウカは一瞥して右の拳に全ての命の力を込めて見せた。それは温かく輝く、光の力だった。

そして、その力以外のところを見た騎士たちは、それがどれほど強力でも意味がないものだと気が付いた。

力の収束は完璧だ。当たりさえすれば弱点など関係なくシリウスを殺せるだろう。

力の重圧も本物だ。唯一守られたがためにシリウスは本能的にヒョウカを最悪の敵だと見定めたのだから。

だが、その拳には明らかな不自然さがあつた。シリウスにヒトの記憶があれば理解できただろう。

親指が拳の内側に握りこまれていたのだから。

つまりそれは、残った戦士たちへのメッセージ。自分が切り札ではないが、自分の指示に従ってほしい。という願いだつた。

それを感じ取り、その冗談のような命の使い方に敬意を表し、この場の戦士たちは一つの意思にまとまつた。

「私の道を！ 切り開け！」

そういつて前に走り出すヒョウカ。その側を離れず守るタクマ。

それを見て切り札を見間違えたシリウスは、全速力で食い殺そうとして、琢磨の剣が軌道の上に置かれていることに気が付いた。

それを見たシリウスは、天狼の体を分裂させて軌道を直角に変え回避した。その、込められた殺気の塊に何かあると判断したからだ。

そして、その回避先にさらに置かれている穂先。それはアバターの全力を一点に込めた美しい一撃であり、彼女の全力の生命転換ライフフォースが込められた最上の一撃だった。

その刺突は生命の力により狼の体に螺旋のように広がる衝撃を与え、その柄をさらに傷の男が全力で叩いてねじ込んだ。

それは皮を貫くことしかできなかったが、背中側の皮の表面をズタズタに引き裂いた。

そこで迷うシリウス。今逃げて修復に回することは敵に利することではないかと。動いている敵は全力であるが、本命は動いていない。ならばここで引くよりも本命への圧力を高めるべきであると思いを回した。

そして、本命から逃げつつ手札を削るために騎士団へと向かう。あの指揮官は戦いの前からゲートを開いている。その異能がいかなるものであるかはわからないが、潰すべきはそこだと考えた。

「ライフフォース、デイスチャージ
生命転換、放出！」

そこを、残った戦士団の二人は狙いすましたコンビ技にて狙い打った。

大盾の男が放出したのは重力場。盾から天狼へと向かう力は天狼をわずかに鈍らせ、その重力変化すら計算しつくされた矢が羽根から暴風を放って飛翔した。その矢は大気摩擦で溶けながらも、

確実に天狼の背中に傷を与えた。

そこから騎士団の強さ。次々に「ゲートオープン」と高らかに叫びながらその門を潜り抜け、その魂を表に現出させる。そこからは嵐のような連撃だった。

強力な雷を全身から放った男が天狼の足を止め、それぞれの残り時間を無視した大技をもつてその体に傷を付けていく。そして、分裂を使つての同時攻撃にも対処された。その未来予知じみた先読みを敵全員が使えていることに違和感があるが、それがおそらく指揮官のゲートなのだと理解して。

人狼の形の名残を残しては勝てないと悟った。

瞬間、解放するシリウスの体以外の全ての命。それはまるで肉の嵐のように顕現し、すべての人を喰らわんと放たれ。

「そ、こ、だあー！」

命を構成する全てをただの一撃に込めた紅の男、ユージの自爆のような一撃により嵐に隙間ができ、そこに飛び込んでくる最凶の女、ヒョウカ。

飛翔する力がないことを確認したシリウスはすぐに天狼の形に戻り迎撃しようとするが、その瞬間に放たれた今日感じた中で一番の、殺意を超えた鬼の意思をもって放たれた張りぼての風の斬撃によりその反撃を止められ、回避のために人狼の形に戻ったその時

流水のような剣が、僅かに天狼の胸を貫いた。

「これで終わり。ライフフォース 生命転換、デイスチャージ 放出」

そしてその剣先から放たれる命の水が、天狼の肺を満たす。

それは昨日の剣士。これまで放たれ続けた戦士たちの剣気や殺気という熱が覆い隠した風の心の剣士。

その少女は、唯一の生態端末を窒息させるといふ殺し方で仕留めて見せた。総数1000だった群狼は、1000の体を一つに纏めたがために一度の窒息で死に絶えるのだった。

それを仕方なしと感じるシリウス。多くを殺し、多くが殺された。それはもう仕方のないことだからと心を騙す。

どのみち、すべてを殺せという命令だったのだから。それ以外にシリウスの主が願う未来にたどり着くことはなかったのだから。

だから、仲間だった群狼との、自分を信じてくれた人狼とのつながりを断ち切った。

そうして、群体結晶シリウスは狼たちから離れ、主の影の待つ地下へと向かおうとした。

その黒いモヤのような姿こそがシリウスの正体。命を持つものに寄生する結晶の群れ。あるいはその中の極小のコアクリスタル。

それが、今まで狼たちを強くしていたカラクリである。

だが、それは2度のタクマの奮戦により気づかれている。それが何であるかはともかく、それを殺さなければこの世界はゲームオーバーになるといふ事を。

だから、当然に殺しきるための策は用意してあった。

「もう、逃がさない」

それが、この二人だった。

一人は鬼の殺気の少年、タクマ。彼の風の放デイスチャージ出は地面を掬い、天に蓋をしてシリウスを閉じ込めた。

そしてもう一人は金髪レイブレドの騎士。そのゲートを潜り、その命を燃やした光の大剣を構え、その技を解き放った。いかなる大魔すら葬ってきた、人間の輝く剣を。

「閃光剣！」

その光の美しさを、シリウスは忘れないだろう。

この輝きこそが、命だったのだと。

そう思考して、役割を果たせなかったことに満足しながらシリウスは光に飲まれ、この世から消え去った。体であった天狼と共に跡形もなく。

そして、アルフォンスは体を押しして勝鬨を上げる。勝利者として、逝ってしまった仲間たちに誇るために。

「多くの犠牲があつた。しかし、これで！……私たちの勝利だ！」

その掲げられた剣は、まるで聖剣であるかのように神々しく輝いていた。

そして生き残ったプレイヤーの頭の中に流れる《Congratulations
ns!》という音声。

これが、この戦いが終わったことを示していた。

「アルフォンス、お疲れ様」

「……体が消えているのは、傷か何かか？」

「……俺たちはどうやら、仕事が終わったら帰らされるみたいです」

「確かに、これから先のこの国を稀人に任せるわけにはいかないか。聖剣も粋な導きをしてくれる」

「だとしても、完全に終わったわけじゃないんでまた来るかもしれませんよ」

「その時は、共にまた戦おう。戦友よ」

「……そうだな、戦友」

そうして、互いに倒れながら無理に体を回して剣を合わせる。剣を合わせ誓う事こそが、この国の騎士の約束だった。

タクマは、ゲームの命とはもう思えなくなったアルフォンスのその姿に、内心で「これは友人扱いしているのだろうか」と悩み、『あなたの相棒もAIです』というメデイの声に納得して、仮面の上で笑った。

そこには、不自然さはあまりなかった。

そんな笑顔を残して、タクマ達残ったプレイヤーは光になつて消えていった。

「彼らとまた会うことにならないように、頑張らないといけませんね副団長」

「しかし、まずは徴兵と葬儀を行きましょう。死体こそありませんが、多くが死にました」

「しかし、この国はまだ滅んでいない。人類最後の国として、足掻き続けようじゃないか」

「そうですね、アルフォンス王子」

その言葉を貰ったアルフォンスは、生き残った騎士の肩を借りて立ち上がり、街へと帰って行くのだった。

第一戦リザルト

タクマ達プレイヤーはロビーへの転送を終え、毎回の終わりにあった参加自由の会議へと呼ばれた。

第一回クリアおめでとうございます！ という場違いな垂れ幕がかかったロビーにて、銀髪ロリータ眼帯とかいう属性過多気味な管理AI、マテリアがその姿を見せていた。

「それでは！ リザルトを開始します！ 今回は、初の世界救済でした！ 謎とかは簡単で、しかしパワーは桁違いなあの化け物を倒してくれてありがとうございます！ 皆さん！」

その声に、答える言葉はない。というか、喋れない。迅速な進行をする為に声が他のプレイヤーに流れないようになっていたのだとか。

もつとも、これまでも今回もクオリティの高いクソゲーだったのだから罵倒が飛ぶのは当然だ、とほとんどのプレイヤーどころか運営側のマテリアですら思っているのだが。

「それでは、今回の総括をお話しします！ 今回の世界壊滅フラグは、タネを暴く前に人

狼を殺してしまう事、2日目の北からの襲撃に対してある人物を動かしてしまう事でした。今回は力押しが相手だったので謎は簡単でしたね！」

「その力押しレベルがおかしいんだよ！」とはプレイヤーの総意だった。

「というか、あと2、3回は全滅してくれないと皆さんの力が足りなくなってしまうかもしれないんですよ。あの世界でのアバターでの死亡は生命^{ライフ}交換^{エクス}の理解を深めますから。……という話は後のこと！ 苦しむのは私じゃないから問題ありません！」

最悪だなコイツと多くのプレイヤーが思った。このAIは丁寧で綺麗な声で割と畜生な事を言ってくるのである。

「それでは、今回のポイント配布の時間です！ 皆さん、手元のウィンドウを見てくださーい！」

そう言っつて、強制的に現れるウィンドウ。これが、毎回の周にて、世界に対してどれほど貢献したかを表すポイントだ。タクマの今回のポイントは2284。最初の周とそう変わらない。ほとんどが狼を殺した時の貢献ポイントであり、特別な何かを見つけた、と言ったポイントは存在しなかった。

ポイントの貯金もないわけだし、現地で装備を買い揃える為に換金してしまうかと少し考える。

だが、交換はいつでもできるのものでこのままでいいだろう。と、タクマは結論付けた所

で隣に來たヒョウカに腕を引かれる。

促されるままにウィンドウを見てみると、そこにはMVPポイントというものが1ポイント加算されていた。

その交換対象は、1000円から1ポイントにつき2で乗算されていく現金との交換と記されていた。

最初に目につくのはコレだろう。10ポイントで百万円を超える上に、それ以上に獲得するたびに価値は跳ね上がるのだから。

そしてその他には、10ポイントでの交換対象に“このゲームに関する技術の権利”というものもある。それは明らかに異質だった。

こんなオーバーテクノロジー、たかが100万の価値で売り飛ばすとか正気じゃない。

だとするならば、それほどに10ポイントを獲得する事が難しいと運営側が睨んでいるという事だろう。そう2人は判断した。

「それでは！ 今回のMVP人数を紹介したいと思います！ 今回は最初なので控えめにして2名！ 一番大切な謎解きは死んで暴いてしまったのでMVPは無しですが、最終戦での活躍を鑑みて今回の世界でのMVPを選びました！」

そうして、マテリアは何処ともとれない虚空を見て、物凄く嫌そうな顔を一瞬したの

ちに笑顔になった。あれはタクマの薄っぺらいものとは違う、本物の仮面だ。

「そして！ MVPの方に配られるMVPポイントは、現金を始めとした様々な皆様にとつて価値のある物との交換をする事ができます！ ……もつとも、零細ゲームなので1ポイントで交換できるのは2000円なんですけどね」

その明らかに本気の申し訳なさを示す演技が、運営のスタンスを分からなくさせている。

積極的な攻略競争を求めているのなら、金額については正確に話すはずだ。それを話さないのはマテリアとDr. イヴ、どちらの意思なのだろうか、とヒョウカは考える。

そして、そんな考えをよそにマテリアは言葉が続けた。相変わらずのマイペースで。

「それでは、ここでこのゲームの製作者《Dr. イヴ》からのメッセージを読み上げたいと思います。けど、そんなことに興味のない方はログアウトして構いません。地味に長い上に心が籠ってないの上に、途中でログアウトできませんから。聞くだけ無駄かもしれないですよー」

辛辣なその言葉で、予定があつたのか、あるいは本当に興味がなかつたのか分からないうが数人がログアウトした。

そして、音声データだけのメッセージが流れる。

体感時間の10倍加速という、信じられないオーバーテクノロジーを同時に行つて。

「初めましてプレイヤーの諸君。私がこの《Echo World》の開発者であるDr. イヴだ」

その無感動な声に少しだけ慣れていく自分に驚きながらタクマは話を聞く。話し方が、知っている誰かに似ている気がするのだ。口調でなく、その本質的なものが。

「君たちの活躍によってあの世界は少しだけ延命した。この結末から考える次の戦いのことを考えると、そう時は伸びなかつたようだがね。……しかしそれでもあの世界は延命した。それが何故私たちに必要なのか、どうして世界は滅ぼされようとしているのか、それは君たちが自分自身の目で明らかにしてくれる事を願っている」

そんな言葉に籠った諦め半分の想いに、
“なんだかこの人も生きにくい人なんだな”
と少しだけ同情するタクマ。隣のこの命を全力で生きている女のように居ればいいのに、と思う。

「では、次の話だ。このゲームは様々な問題を抱えている。それは、私がこのゲームのデータを元に Soul Linkerでのコンテンツ製作エンジンを無料で配布する気であるからだ。基本を翻訳できれば、もともとVRを扱える人間ならそう難しくはないのだよ、魂なんて言葉を崇高に見過ぎて本質を取り違えるからこうなるのだ……。つと、脱線してしまった。実際このソフトには様々な新技術が使われており、そしてその審査は完璧ではない。突然にコレの配信が停止させられる可能性も十分にあるとい

う事を理解してほしい」

確かに、性的興奮もするし娯館に入れるのに、レーティングが甘い所がある。それはゲームを完全に把握しきれなかった事が理由なのだろう。

「最後に、君たちプレイヤーの魂についてだ。気付いていると思うが、この《Echology World》でのアバター性能には個人差がある。身体機能では、下限でもトップアスリートレベルだが上限はない。それを動かしているのは魂そのものだからだ。それは魂の出力を直接的に参照している生命ライフフォース転換を見てもわかる事だ」

その言葉に、なにか怒鳴り声を上げようとするプレイヤーが多くいる。それはそうだ。レベルアップのないこのゲームにおいて、魂の出力なんて生まれつきのモノで強さが決まるなどゲームとして破綻しているからだ。

そもそもゲームとしての体すら成り立っていないようなゲームであるが、それでもプレイヤーはそれを全力で遊びたいと思っっているのだ。

「しかし、魂が弱いからと悲観することはない。魂は鍛える事ができる。その鍛え方は様々だが、深い死線を潜る事がもつとも手っ取り早い。そしてこの《Echology World》ではアバターシステムを使い安全に、しかし本気での死線を潜れる。それを利用して自身の強化を図って欲しい。それがきつとお互いの役に立つ」

その言葉に、今回活躍したプレイヤーを見る皆。その顔には、次は鍛えて追い抜くと

ありありと書かれていた。

やはり、彼らもゲーマーなのだ。

「それでは、私の長い話は終了だ。尚、この話は様々な手段を用いて録画、録音ができないようにしている。危ない話をしてしまったからな。では、次 最後に告知だ。第一戦のクリア特典として、第二戦が始まるまでの間擬似ワールドを用いてのプラクティスエリアを解放する。世界に生きる人々は存在しないが、多くの作ったモンスターが放たれている。第一戦で十分に戦えなかった者たちは、この機会に十分な死線を潜って欲しい」

「以上だ。マテリアに回線を戻そう」

そうして消えるウインドウ。

戻る体感時間加速。

「はい！ 長い話でした！ ごめんなさいねダメダメな製作者で！ では、第一戦を終了します！ 皆さまクリアおめでとうございました！ プラクティスエリアを是非ご利用して下さいね！」

そんな言葉を最後に、リザルトは終わった。

俺やユージさんは多少知識はあるけれど、他のプレイヤーは皆魂を鍛える事ができるという事に驚きと興奮を感じていた。

「もしかして、未来ではトレーニングの中に魂も入るのかしら？」

「ありそうだな。お前の馬鹿みたいな手術成功率の理由とかもその辺にあったりするかもしれないんだし」

ゆつたりとロビーに残るタクマ達を残して、プレイヤーは皆プラクティスエリアへと向かっていった。

楽しそうではあるが、本気で疲れたので休みにしたい。シリウスと殺し合った者たちは本気でそう思っていたし、そう行動していた。

公園の二人

現在時刻、午前3時。

タクマは、いつ異界がやってきても良いようにプロテクターをすぐにつけられるように準備しながらガレージにいた。裕司が冗談半分で買った重厚な木刀を持ち込んで。

現在、凧人は相変わらずの激務の中にいる為、病院の中だ。

だから、琢磨はいつでも動けるのようになっている。どこにいても、凧人と氷華を守る事ができるように、自分が死なない程度に関わらないように。

尚、琢磨は現在位置を正確に把握している栗本に文句を言われるが、バイクのメンテナンスは自動でほとんど終わるが、だからといって何もしないというのはバイク好きの主義に反する。なんて事を言い訳にして、寝袋で横になって。端末で周辺の通信障害の情報を監視していた。バイクのメンテナンスはかなりの頻度でしているので問題は起きないのだ。

これまでの2回の戦いから、ゲームが終わった時に異界が発生すると見てそう間違いいではないだろう。そう事情を知っている皆は考えている。足柄の漏らした、どこか知らない所で異界が起きていないという情報を信じるならば、だが。

ならば、ゲームの第一戦がクリアされた今日もまた何かあると思って、琢磨はいつでも動ける準備をしていた。基本的には逃げる為、逃す為。

そうでないなら、敵を殺すために。

そうして、半ば眠りながらその日を待っていたが。

その日は、何も起きなかった。



「お疲れ様でした」

「お疲れ」

「ええ、とりあえず昨日は何もなかったのね」

そうして、病院内の食堂で集まる琢磨と氷華と裕司。3人ともあのシリウスとの激闘の後にあまり眠れなかったので疲れ気味だった。

現在時刻は、昼の1時。土曜日。

あんまりにも何もなくて拍子抜けしたと事件に関わった全員は言った。絶対に何かあると確信していたのだから。

だから、ゲームがクリアされた場合はアレが発生する事がないのだろうか」ととりあ

えず結論付けて、ゆっくりと休んでいる。

ひとまずの祝勝会のティータイムだった。

「美味しいなこのお茶」

「そうね。私も美味しいと思ってるわ」

「結構良いやつ出されるんですよ。氷華はVIP患者なんで」

「あー、そういうのあるのか」

「ええ、私に出ていかれると病院は困るもの。だから精一杯機嫌を取ってくれているのよ」

「手術終わるまでちゃんと居るつもりだったのに良くも言う」

「私は義父様おとうさまが手術をなさるからこの病院にいるのよ。どこの馬の骨とも知らない人に命を預けるほど愚かではないつもりだわ」

「琢磨の親父さんって、なんか凄い医者らしいな。帝大附属のゴッドハンドって」

「そりゃ私が何度も生き延びているもの。奇跡の手として見られるのは当然よ。もちろん、相応の実力のある名医である事に疑いはないけどね」

「そうだそうだ、もつと褒めろ」

「何でお前が偉そうにしてんだよ」

そんな緩い雰囲気の中で、氷華の検査の時間になって今日はお開きとなった。

安全が確認できた訳ではないが、少なくとも自身の体調管理を怠ってまで何かをするような必要はない。そのくらいの緩さで各々動いた。琢磨につられて。

楽観視している訳ではないが、さりとして過剰に警戒している訳でもない。琢磨のその雰囲気に釣られて裕司と氷華は平常心を保っていた。

そして帰り道、琢磨は相変わらずの様子で空を見ている少女を見つけた。

アレが風の剣士だとは思えない、不思議なポヤポヤ感を醸し出している。

幸い時間はあるのだし、プラクティスエリアで死合いでも挑んでみようかと琢磨は思い、バイクを止めてベンチに向かう。自販機でコーヒーとジュースを買ってから。

「その剣士さん。コーヒーとジュースどっちが良い？」

「……どうしてお汁粉じゃないの？」

「そこでボケてくるのか」

「本気でお汁粉飲みたかった」

「ボケじゃない!?」

『先ほどの自販機のラインナップにはお汁粉はありませんでした。周辺の者も同様です』

「世知辛い」

「春だしな」

独特な雰囲気話を続ける筆ペンさん。やはり変わった人なのだなどと琢磨は思う。

少女は、「貰うね」と一言告げてジュースを受け取り、ゆるりと蓋を開き口をつけた。琢磨も残ったコーヒーを開けて、一口飲み始めた。

どこかゆつたりとした空気が、そこにはあった。それが鞆に入った刃同士である事に誰も気付かずに。

「それで筆ペンさん、今日何時くらいから《Echo World》入れる？」

「今日は無理。家庭の事情」

「なら仕方ないか。じゃあ次やり合う時用にフリーのアカウントで連絡先交換したかない？」

「口説いてるなら、半年前くらいに出直して」

「どういう断り方だよ」

「私スタイル」

渾身のドヤ顔を見せる女子。その奇妙さに呆れつつも、琢磨はその中にある強さを探していた。

結論は何故虎が強いのか、というのと同じものに至るあたりがこの少女の強さを物語るだろう。元々が強いのだ。

「じゃあ、私の連絡先」

「ども……つてメインの奴じゃないですか」

「面倒だから一つに纏めてる」

「せつかくの匿名性を棒に振ってますね」

「名乗らなくても恥は恥」

「うわメンタルも剣道してやがる」

「? これ元から」

「あ、本当に元から強いわこの人」

連絡先に書いてある名前は、柴田奏。しばたかなで書道で大人に混じつての段位を持っているの

だと資格欄に記されていた。

年齢は琢磨と同じ14歳。まさかの4月2日生まれの同期での最年長だ。背丈は普通程度だというのに。

「んで筆ペンさん。何でHNはそれなの?」

「筆ペンは素晴らしい」

「コイツも同類バカだったか……」

そしてなんとなくぶらぶらし始める2人。奏は本当に特に理由もなく。琢磨は奏について行っているだけという無計画さだった。

「明太子、時間ある?」

「まあ、ありますよ筆ペンさん」

「お腹すいた、奢って」

「待てや、さつきジュース奢っただろ」

「それは勝者の特権。私が一回勝ったから」

「いや踏み込み盗まれただけだし。まだ死んでないからノーカウントだ」

「敗者の声が心地いいね」

「やろうぶつころしてやる」

琢磨は珍しく、自然の殺意でそれに返す。

「あ、やべ」と琢磨は内心で思うが、奏はそれに自然に返す。あたかも気にしていないかのように。

「こわかった。慰謝料としてラーメンを所望する」

「……わかった。流石に今のはヒトとしてダメだ。ラーメンくらいなら奢ってやるよ」

「言ってみるもの」

その言葉に唾然とする琢磨。実際気にしていないのがこの風の少女なのだが、それは今の琢磨にはわからないことだった。

だが、その強かさはやはり女性のものであり、尻に敷かれるタイプに調教された琢磨は、逆らえなかった。

「んで、本気で殺そうとしてたらどうしたんだ筆ペンさん」

「別に今の明太子ならどうとでもできる」

「まあ、確かに俺はリアルだとクソ雑魚ナメクジだけれども」

「対して私は健康優良児。書道の稽古だつて名目で鍛えさせられている。辛い」

「うるせー、筋肉ムキムキに憧れてるのに運動制限かかってる奴だつて世の中にはいる

んだぞコラ」

「隣の芝生だね」

「本当にな」

自然と口調が砕ける2人。そして数分後、琢磨のバイクで近くのラーメン屋へと向かった2人は、つけ麺を楽しんで帰っていった。

「送らなくて良いのか？」

「構わない。どうせまだ外に居ないといけないし

「……事情を聞かれないのか？」

「どっちでも」

「じゃあ一つだけ。柴田、お前は大丈夫か？」

「勿論。私は私の気遣いで家から離れてるだけだから。夕飯時には帰るよ」

そんなどうでも良い会話を最後に、2人は分かれた。

そして、琢磨が家に帰ってからすぐに次の死合いの約束をしていない事に気がついて通話をかける。

すると奏はすぐに出て、気遣いのおかげで再婚した両親は新居でラブラブできていたそうだという話をしてくれた。その事に感謝もしてくれたのだとも。

とても嬉しくて、それを俺に語ってしまったらしい。当人のことはあまりよく知らないが、かなり珍しい事のように思えた。

そんな会話からぐだぐだ中学生らしく話していると、不意に通話が切れた。

そして、すぐに栗本刑事から連絡が来た。

「おい風見！ 無事か！」

「……………はい。通信障害ですか!?？」

「ああ。……………今回は無事みたいだな。ならそのまま家でじつとしてろ。中心は西区の方だから今は安全な筈だ」

「わかりました。努力します」

そんな心にもない言葉を、琢磨は栗本へと告げた。

そして同時に裕司へとメッセージを送ってバイクに跨る。

括り付けた木刀と、しっかりと身につけたプロテクターを確認して、琢磨はエンジンをかけた。

「メデイ。目的地はわかるよな」

『はい、藤田様の自宅でございますね』

「そのついでに狼を殺して回るさ」

『本来なら止めるべき事なのでしようが……、私は私の思ったことを信じて全力でマスタ―をサポートします』

「じゃあ、決まりだな」

そう言つて、琢磨はバイクを走らせる。

時は日暮れ、太陽が沈み月明かりが昇る時。

多くの人々の安寧ではなく、さつきまで会話していた少女のことを想つて琢磨は行く。

形にならない、なにかを胸に抱きながら。

天狼と鬼剣

『先ほどから栗本様からの連絡が止まりません』

「全部無視でいいよな」

『いえ、語るべきかと』

「その心は？」

『何も言わないままでは……』

そうして、急停車するバイク。警察の運転停止プログラムだ。

「あ」

『当然、こうなります。周囲一帯に警戒ラインが敷かれて居ますね』

これは警察の交通管理システムだ。自動操縦プログラムに干渉して、周囲一帯の乗り物を止めるというこの時代の包囲網。

それにより、目の前にはARビジョンにより立ち入り禁止とデカデカと描かれている。

これから逃れる為には、降りて足で進むか、もう一つの方法しか存在しない。一瞬、メデイは悩む。それをして良いのかと。しかし琢磨は言う。「頼むぞ、相棒」と。

琢磨の背後からパトランプの音が聞こえて来る。この異界の事情も考えるならば、有人パトカーだろう。そうなれば、もう必ずこれからの裏技はバレる。バイクのこの緊急プログラムはもう使えないだろう。

「あー、訴訟事にならなきゃ良いんだけど」

『やるのですか?』

「そりゃ、命には変えられない。俺の命で誰かの命が救えるなら、それは差し引きプラスだ」

『それでは私が死んでしまうので、マスターは生き延びて下さいね』

「……そこは、すまん」

『考えていなかったのですねマスター。わかっていましたが。では、しばしお待ち下さい。その間、マスターは足柄様とのご歓談を』

「歓談ってノリじゃないだろ……」

そうして、パトカーから降りた足柄さんは、俺の方にやってくる。

「明太子、さつさと戻れ。僕たち警察は一般人を見捨てられないし、見捨てたくない」

「じゅーじゅんさん。いえ、足柄さん。ちよつと黙って見ていてくれませんか? ここで行かなきゃ、後味が悪いんですよ」

「君が感じる後味の悪さは自分に対してのものだけだろうか? だったら、耐えろ。ここ」

から先は僕がなんとかする」

「じゅーじゅんさんも突っ込むつもりじゃないですか……」

「ついさつき、近くにおいて警戒していた先輩が飲まれた人を助けようとして入っちゃって、二次遭難。このまま死なせない為に、僕は行かなきゃならない。けれどそれに、一般人は巻き込めない。それがルールだ」

そうして平行線を語る琢磨と足柄。

「だから、現実的な動きとして下がってる明太子。学んだろ？ 剣道で」

「ええ、学びました。けど、あいにくと俺はゲームと現実の区別がつかない最近の少年なんです。だから」

そうして、鳴り響く端末からのアラート音。そして、ライト上にパトライトが現れる。

それは、体にハンデのある人への機能。自車の救急車化だ。

それをすれば、健康管理AIの操作のもとで乗り物は動くことができる。

たとえそれが、自動運転をソフト側の動きで停止させられている包囲網の中であつてもだ。

「ぐっ」

「明太子！」

「このままだとマジで、死ぬので、行きますね。病院はこの先なんですから」

「逃がさないよ、明太子！」

そうして、始まるバイクとパトカーのチェイス。それは互いのスペックの全てを出した最速の戦いであり。

当然、その壁へとたどり着く前に終わるものではなかった。

それは見えていない。しかしそこに壁があると生きるものは本能で理解できる、異常なものだ。

そこにトップスピードで突っ込む2台。それは、壁に触れた瞬間に消失し、この世のどこからも観測できなくなった。

『心肺機能のコントロールを戻します。お疲れ様でした』

「あー、本当に俺の心臓クソすぎるわ！　なんでテンポ良く普通に動かないかね！」

メデイのやった事は、心臓のコントロールの一時的放棄。メデイという外付けデバイスがなければ、琢磨の心臓は容易に狂い、死に至る。それは心臓の移植を行ったとしても治る事はなかった、琢磨の神経由来と思わしき原因不明の病気である。

「そこ！　潜ったとたんに元気にならない！」

「猿芝居に付き合っただんですから許して下さいよ！」

「とっさに思いついたにしてはマシだったろ！」

『控えめに言っつて、然程名案という事ではなかったかと』

そうして、バイクとパトカーのランプの音を鳴らしながら爆走する。

しかし、そうなっている現在でも助けを求める声は聞こえない。

それはそうだろう。なにせ住宅地だったそこは、全ての建物が吹き飛んだ廃墟の地区になつていたのである。

「明太子！ 生き残りは結構いる！ 潰れた建物の中！」

「じゃあ、下手人を止めます！ それで世界が戻れば、皆さん生き延びられますから！」
そして、戦力として確保したいという思いから向かつていた柴田奏、筆ペンの元に向かつて琢磨たちは、そこでの惨憺たる現状を見た。

命を奪われた2人の大人。その血化粧で体を赤く染めて包丁で天狼と殺し合う1人の少女。そして、そんな少女と戯れている1匹の天狼。

それは、間に合わなかったという証拠だった。

本当に、後味が悪い。どうしてこの時に怒りや悲しみの感情が浮かんでこないのか。

『マスター、今は』

「わかつてる。生命ライフ転換！」

そうして琢磨は、天狼へと突っ込んだ。

以前と違い、今度は命の籠もったバイクで。

その一撃は天狼を捉え、その体を吹き飛ばした。

バイクもお釈迦になったが、死にかけていた奏を救う事はできた。

そして抜いた木刀を構えて、真つ直ぐに天狼を見る。

そこには、害意といったマイナスの感情はなかった。ただ、自分を超えて見せろと言っているような気がした。

命を奪う者が、それをするな。そう琢磨の心は熱く冷えて、どうやってこの天狼を殺すかに思考をシフトさせていた。

「お嬢ちゃん、無事？　なら、これ貸してあげる。使い勝手は悪いだろうけど、包丁よりはマシだと思うよ」

そして、今はまだ命を使えない足柄は、少女を解放して、普通なら下がらせる所であるにも関わらず、携行していた特殊警棒をもたせた。

それが、今足柄に出来ることだった。

そして、2人は思う。獲物が必要だと。こんなものじゃない、自分の魂が染み込んだ自分の武器でないと意味がないと。

そのイメージのもとで一度武器を振るうと、その手にあるものは《Echo World》におけるそれぞれの武器、臆病者^{チキンソード}の剣と上質な曲剣へと姿を変えた。それは魂が作り出した、思い入れのある獲物の顕現である。

その事に疑問を思う前に、2人は声をかける。過程など、もはやどうでも良いのだ。

「行けるか？ 筆ペン」

「大丈夫、殺せる」

そうして、2人の剣が天狼に襲いかかり、この夜の本当の戦いが始まった。

■ □ ■

天狼は、最終戦で見せたほどの力を使う事はできない。なぜなら彼はここに一人で現れたから。

魂の命令通り適当に暴れ、適当に殺し、適当に戦った。

すると、ようやく現れた。

かつてシリウスと共にいた自分を殺した鬼の剣士が、そこに。

その出会いに感謝をして、その力に感謝をして、ここにシリウスの居ない事に一抹の寂しさを覚えつつ天狼としての最後の戦いをここにすると決めた。

それが、あの世界に生き残った最後の人狼の、最後にするべき事だと信じて。

■ □ ■

四足歩行でのトリッキーな動きから、カポエラに似ている動きで起き上がり爪か噛みつきで命を狙いに来る。それがこの天狼の戦い方の基本だった。

それは、ゲームでの戦い方とあまりにも違だていたが、相対している二人には違和感を感じさせなかった。

何故なら、この方がこの天狼らしいからだ、と武の道に足を踏み入れた者として感じることができたからだ。

そして、これまでの雑なコンビネーションではいずれ崩されると感じた奏は見に回る。これまであまり見ていなかった明太子の、琢磨の剣を。

それは、トリツキーに愚直な剣。殺意でのフェイント、命を使った小手先。そういったものを全て見せ札にして殺すための一撃を確実に叩き込める状況を作り出すという剣理。

それを理解できた為に。自然と前線が入れ替わる。

奏の剣は、流れている水のように綺麗な型をしている。自身の技をいくつものパターンの型に嵌めているからだ。しかし、それぞれが必殺であり、それぞれが必殺につながられるように作られた型であった。

その型の中から、天狼を殺し得るいくつかを盗み取った琢磨は、奏の隣に出る。

そして、自然と呼吸が合う。

お互いの全てを知ったわけではないけれど、お互いの剣はもう知った。だから、その

心が全て殺意で満ちている事で繋がっている二人は熟練の連携を發揮できたのだ。

このまま攻め続けければ、天狼の命は絶たれるだろう。

だが、それは凧の剣士が万全だった場合だ。

彼女の剣の根幹を支えていた凧の心は、愛しい両親を目の前で殺された事で怒り狂って乱れている。それは当然一つの技をに影響を与え、一つの型に影響を与え、積み上がった一つの隙が生まれた。

完全に躲された致命の一太刀。そこから放たれる絶殺の爪撃、瞬時に判断できまっただ。それが致命傷になると。己は怒りに狂い、故に負けたのだと。

だが、奏の中に不安はなかった。

何故なら、彼が自分の死を前提にした剣をもう構えているからだ。その、いつも混じり気のない殺意の中にある一筋の暖かさが、きつと彼なりの者なのだとして理解できて。ただの剣狂い死狂いでないのだとようやく理解できて、奏は笑って爪を受け入れようとした。

しかし、忘れてはならない事がある。

この戦いは、天狼を殺す為のものであり、この場に命の力を使える人間は2人しか居ないが

戦える人間が2人だとは誰も言っていないのだ。

縮地にて踏み込んで足を払い、上昇した身体能力を最高効率に活かして足柄は、HNじゅーじゅんというプレイヤーは純粋な格闘の技能だけでシリウスの人外のパワーを放り投げた。

自身のなつてきたパトカーの方に。

「二応教えておくけどさ。パトカーつて暴徒鎮圧用の装備も乗せてたりするんだよ。だから、パトカーのフロントつて結構危ないんだよ？ オオカミくん」

そして開くフロントから放たれるリミッターギリギリの電磁パルス弾。しかしそれは当然に魂を持たないが為に天狼の命を奪うには至らず。

しかし、この場にやってくる2人に一撃を与える隙を作り出した。

「行け！ 乾！」

「ああ！ ジョーさん！」

パトカーのフロントに立っている裕司が、2弾式ロケットのように跳び、固まっている天狼へ炎の拳を叩き込む。

その炎は天狼を焼いたが、まだ天狼は生きていた。

そして、生物の本能と命令に従って一時の逃走を選ぼうとしたその時に。

これまでの短い時間で命を救われた少女は、己の心に問いを投げた。

これまでのように怒りのないままにいられるのかと。

それは、無理だと魂で理解した。もうこれまでのように水をただ作り出すだけという優しい力は出来ないだろう。そう思って

どこか狂った人間でありながら、守る為に戦う者達の背中を見た。

一人はきつとまだ答えもなく。一人はきつともう答えを出している。

そんな道の途中にいる自分を、彼らは受け入れてくれるだろう。そう思い、その形を

確信した。

「ライフフォース 放 出」
デイスチャージ

その一閃は、その一閃から放たれた水の刃は瞬く間に天狼に到達し、その胴を両断した。

その後、初めて天狼はその命を使って己を守った。

再生。それが天狼になった人狼個人の本来の、命の形を。

それにより、瞬く間に身体は再生した。その生命は煌めいていて、なにより生命を感じさせる輝きだった。

その力に、この戦いを見ていた者たちは見惚れて膝を屈する。戦っていた者も、勝てるのかどうかの確信を無くしてしまう。それが、生命いのちの属性の威光だ。

だがしかし、そんな事をカケラも感じずにただ殺すために動いている少年がこの場に

はいる。

自分の策が通じなくなると分かった瞬間に、これからの味方がやってくれるであろう事を直感し、それが通じないだろう事を確信して動き出したのだ。

後の先を突くことのできる、その瞬間を狙って。

「お前も天狼なんだから、それくらいはすると思っていた。だから、ここからはもう何もさせない。お前が死ぬまで、殺し続ける」

そうして、琢磨の連撃が始まる。奏の型を盗んだ剣を自分の中で噛み砕き、その理だけを掴み取った琢磨の剣技。それはもはや鬼の剣。その力は本当のもので、何十度に渡って続く天狼の再生を苦にせずに繋がり続け、その命を殺し続けた。

そして、ついにその再生は終わった。

琢磨は生命ライフフォース転換の使いすぎで倒れ伏した。

そして

天狼の死と、破れるような音と共に世界の理は元に戻った。

『ゲームオーバーです』

「二度と来るなよ、ファンタジー」

その言葉を最後に、気絶した琢磨を見送るように、天狼は笑って逝った。その心の内は、誰が理解できるものではないだろう。彼は最後の天狼。その心のあり方すらもはや唯一だったのだから。

それが、本当の第一戦最終戦の顛末だった。

第一戦最終話 刻まれた痛みと微かな希望

エピローグ 刻まれた痛みと微かな希望

戦いは終わり、世界は修正された。

奏が負っていた多くの手傷は消失し、薙ぎ倒された多くの家屋は元通りになり

そして、死んだ命だけが、戻ってこなかった。

「どうして?」

「……それがわからないから、僕たちは色々頑張ってる」

そうして握りしめた曲剣だったもの。今は警棒に戻っているものをじつと見つめて、

足柄へと返還した。

「私にも、手伝わせて欲しい。明太子やユージミたく」

「……彼らは勝手にやっただけなんだけどね」

「なら、私も勝手にやる」

そんな言葉を泣きながら言う少女は、とても痛々しい。

それでも、その言葉に否と答えなくてはならない。今の自分たちがその力を必要とし

ているのだとしても。

「警察官の端くれとして、君みたいな子供がこの件に関わるのを僕は認められない。……けれど」

しかし。それで全てを否定してしまう事ができるほど足柄圭一という男は冷たくなりきれずにいる。大切なのは、彼女を戦力として確保することではなく、彼女の明日が健やかなものであるようにすることなのだから。

それは、普段はだらしのない姿しか見せない先輩警察官から学んだ、最も大切な足柄圭一の信念だった。

「僕自身は、戦う力がある事と、戦う義務がある事は別だと思ってる。だから、君が戦いたいと思った事は頭ごなしに否定はしないつもりだ。けど、忘れないで欲しい。それは義務じゃない。大切な人達が殺されたから復讐しなきゃいけないなんて理屈はないんだ。忘れないで」

その言葉を聞くと、どこか安心したように彼女は笑い、眠りについた。

その小さな体を抱きとめて、足柄は思う。

命令の有無は関係なく、泣いている子の前に出れないのは警察官として、男としてクソだと。

「先輩、ちよつとお願ひしたい事があるんですけど……」

「誰かが行かなきゃならない話だ。推薦はしておいてやるよ。『署内最強』」

「……ありがとうございます」

「殊勝になるな気持ち悪い。お前はお前らしく居ればいいんだよ」

そうして、足柄圭一は再び“じゅーじゅん”としての活動を再開するのだった。



それから再び入院をした琢磨達。裕司はダメージを負っていないし構わないと言ったのだが、警察権限で押し切られた。

そこには、栗本の自分のそばで勝手に中に入られた事の恨みがないとは言わない。根に持つタイプなのだ。

それから少し経ち、氷華の手術があと一週間後に迫ったその時、第二のワールドが解放された。

そこは、相変わらずのソルディアル王国。しかし、そこには多くの騎士がいて、多くの戦士がいた。

そして、現実での事件に関係のある者なら絶対に見過ごせない人々がいた。

「嘘だろ、あんたはあの時！」

「……父さん、母さん？」

裕司が驚いたのは、戦うと決めたその日から頭に焼き付いていた男性が武器屋の新しい店員として扱われていた事。

そして、奏が驚いたのは、彼女の両親がこの国で結ばれようとしている中年夫婦として見られていた事。

どちらも夢のようで、しかしある可能性を頭に過らせるには十分なものだった。



「ヤア、無事じゃないね明太子クン」

「心臓の検査とかいつものことなので、相対的には無事ですよ」

「そこに慣れないで欲しいと思うんだけどな……」

そんな会話と共に琢磨の病室にやってきたのは帝大の二人、白衣カタコト美女牧野と、情けなき詐欺の末吉だ。

彼らは、琢磨の病室でこれまでの事、これからの事を話し合うと聞いて無理に時間を作ってやってきてくれたのだ、魂の研究者として。

「あなた達、何？」

「ニンゲンのつもりだよ、私はね」

「そういう事じゃないでしょ先輩。帝大の末吉と牧野です。以前話した『仮説』について君たちの意見が聞きたくてね」

そうして話し始めた。

異界の魂だけを表に出す性質の事。

なのに、どうして死んだ者の肉体までこの世から消えてしまうのか。

それは、体が必要だからという理由だ。

「それに、メデイちゃんから聞いた魂の成長とボスキャラのシリウスの話を合わせると、こんな可能性が出てくる」

消えた人々は、まだ生きており、どこかで死にかけ続けて魂を養殖させられているのではないかと。いずれその魂をどうにかするのだろうけれど、おそらく今はまだ間に合うということ。

それは、とても甘い希望であり……



「誰、ですか？ あなた達」



少女にとっては、さらなる苦しみと涙をもたらすものでしかなかった。

しかし、その涙が地に落ちる事はなかった。

「ま、つまり彼らはまだ生きていて、これから助けられるって事だよねコレ。やる気が出てきたよ」

「足柄、さん？」

「じゅーじゅんね。筆ペンちゃん」

一人の優男が、その涙を拭ったからだ。

「ていうか明太子！ こういうラブコメは君がやりなよ！ 僕がやると事案なんだから！ ハラスメントでBANされたらガチで泣くよ！」

「最後まで格好つけて下さいよそこは」

「えー、そんなの僕のノリじゃないし」

戦うと決めた者達は、しかしその心を折る事なく前に進む。この謎を解き奪われた命を取り戻す為、という明確な理由が出来たことにより。

いつかそれが、明確な破滅を生む事になると分ならず。



管理AIの所有しているコンソールルームにて、マテリアと一人の騎士が新たに作られた世界を見ていた。

「ロベルト、本格的に始まりましたね」

「……ああ、これで戦いは本格的なモノになる。魂の奪い合いだな」

「ですが、あなたにとつては嬉しい事なのではありませんか？ 仇を討つ機会が巡ってくるのですから」

「そんなもんを望む奴なら、そもそも俺は惚れたりしてねえよ」

そんな言葉をかけた騎士の声は、平坦だった。本人も仇討ちを望む機会を望んでいないわけではないのだから。

「それで、聖剣は見つかりましたか？」

「んなもん、そこらじゆうに転がってるよ」

「聖剣信仰の話ではありません。本物の、命を司る聖なる剣の事です」

「……見つけてたら、とつくの昔に俺が引き抜いてるよ。アレがありや、俺はまた戦う事ができるからな。見てるしかないって、かなり辛いんだぜ」

「それには同意します。幾度となく指示を出したくなりましたから。不可能でしたけれど」

「……お互い、厄介な縛りをつけられたな」

「ですが、それ以上に収穫がありました」

そうして、マテリアはあるデータをロベルトに見せた。それは魂の強さを数値化したものだ。

「彼女の力が有れば、スケジュールをもっと早められるかも知れません。彼女を鍛えてはくれませんか？」

「無理だ」

「……それは何故？」

「不向きなんだよこの娘には。録画を確認したが、そもそも身体の動きが鈍い。
ライフフォースライフフォース生命転換での強化のせいで見えてないが、強化した状態でコレだぞ？ んなのただの力

モだ」

「……ままなりませんね」

「それが人生って奴だ……だが、だからこそ輝く魂つてのは確かにある。俺は一人それを見た」

その言葉に、マテリアは呆れてため息を吐く。

「ロベルト。何故あなたはこんな時にでも前を向いていられるのですか？ 私にはわか

りません。私はもはや惰性でタスクをこなしているだけですかありません。主なき今、

私たちの意味はもうないのかも知れないのに」

「んなもん決まってるだろ」

「それは？」

「なんとなく、だよ」

その言葉に、答えを期待していたマテリアは少し残念に思い、視線をロベルトからコンソールへと移した。

「わかりませんね、感情とは」

「お前にもあるだろうに」

「ええ、ですが私には感情を完全に理解する事はできないのです。魂が足りませんから」
そんな事を話しながら、ロベルトは席を立った。彼のタスクをこなす為いだ。

「んじや、俺はこの辺で」

「ロベルト。あなたはスケジュール通りに動いて下さい。現在の、日本の一都市に残響
異界が出現し続けているのは奇跡でしかありません。戦える者を、広く」

「……そんなに簡単に見つかるもんかね？ 命懸けで戦える奴なんざ」

その言葉を最後に、彼はコンソールルームからワールドへと転移していった。



琢磨はいつもの時間に目が覚めた。命を込めて剣を振り続けた事と、彼の心臓に起きた発作が原因での入院は、大事をとって2日ほど様子を見る事になったのだ。せつかく中学校に通えているというのに、これでは昔と同じだと、琢磨は思った。

「おはよう、琢磨くん」

「おはよう、氷華」

「この、心臓に悪いモーニングコールも含めて。」

「個人病室とはいえ、距離が近くないか？」

「いいじゃない、甘えたい気分なの」

「当たり前のように琢磨に抱きついていて氷華。言葉の上でこそ平然と、いつも通りにしている。だが、その身体からは僅かな震えが伝わっていた。」

「……俺が死んでも、もう大丈夫だろ？」

「大丈夫じゃなくても行つた癖に。そんなにあの娘の事を好きになつたの？ 琢磨くんは」

「言うな」

「ねえ、本気で伝わってない？ 私の気持ち。私は死にたくないけれど、あなたの為にな

ら、あなたと一緒に死んでもいいくらいにはあなたが好きなのよ」

「そういう所だけが、俺は苦手だ」

琢磨は言葉を飾らずにそう言った。琢磨にとつて氷華は、言い方を考えずに言えば「自分が人間だと定義する為の道具」としてしか認識して居ないのだ。その心の、異質すぎる感性によって。

氷華は琢磨を利用して命を繋ぎ、琢磨は氷華を利用して「ニンゲン」の最低ラインを確保している。そんな関係だと、琢磨は思っている。

そうでないなら、彼の心は止まってしまふのだから。

「……やっぱ駄目ね、この程度じゃまだ動揺もしてくれない」

それがわかって居ても、御影氷華は行動し続ける。何故なら、押して押して押しまくる事が彼女のスタイルなのだから。

そう言つて、半分ほど本気で震えていた、逆にいえば半分は意図的に震えさせていたその手を止めた。

別に、琢磨に愛されている確信が欲しい訳ではないのだ。別に、琢磨の心全てが欲し

い訳ではないのだ。

ただ、言葉にした通り死ぬのは一緒がいい。そんな言葉だけが、先程の言葉の真実だった。

だからこそ琢磨は氷華の狂愛を受け止めきれずに居る。彼が受け入れてしまえば、きつと氷華は死を受け入れてしまえるから。

“愛する人と共に死にたい価値観”を、琢磨は氷華を見て憧れてしまっているから。だから、今はまだ彼女を受け入れない。琢磨自身が、愛についての答えを掴み取るまでは。

「しかし、どうして筆ペンさんと恋仲になりそうだって思い込んだんだ？」

「茜さんのラブセンサーよ」

「いきなりそのワードやめよう。うん」

「じゃあ恋愛嗅覚。彼女が見たところによると、彼女恋を始めてるみたいなのよ。いろいろあつてまだ気付けないだろうけれど」

「まあ、人の恋路にどうこうはしないのが無難だな。馬に蹴られて死ぬのはごめんだ」

「そうね。じゃあ、話しは変わるのだけ……」

そうして、昔に戻ったかのように朝の会話を楽しむ二人。

彼らは、恋人関係ではない。もうほとんど決着はついているが、愛を追う女と追われる男の関係だ。

だが、それとは別にして死に対して妙な価値観を備えているこの14歳達は、理由もなく気があっている。その関係には、約束も契約も彼らの思惑も特に関係はなく。

故に傍目には、仲のいい恋人同士に見えるのだった。

幕間01-1 ゲーム内部掲示板

ゲーム内時間 一周目終了時。



余りに理不尽なこのゲームを語るスレ

1 名無しの稀人

何このクソゲー！

2 名無しの稀人

同意だが、スレ立てて愚痴るお前の努力に俺は驚いてる

3 名無しの稀人

というか、今日日この超古典スタイルの掲示板を作るとかいくつだよ製作者

4 名無しの稀人

スレッドを立てるとか、完全匿名での発言とかいろいろ怖いけど、このゲームがクソゲーというのには同意。迷ったら突然モンスターに殺された。

5 名無しの稀人

しかもその先の、「死ぬのがチュートリアルです！」って舐めてんのか運営！クオリ

ティが素晴らしすぎるのにどうしてまともなゲームプロデューサーを引つ張れなかったのか

6 名無しの稀人

答え：600円

7 名無しの稀人

ジョークゲーだと思って買った奴多いよな。俺の知り合いもそうだし

8 名無しの稀人

>>7 お前は違うのか？

9 名無しの稀人

スゴイ！この古典的システムをもう使いこなしてる！どうやったんそれ。

10 近現代史得意だったおじさん

頭の中でポインター当てるといろいろなコマンドが見えるぞ。→みたく名前も変えられるな。

11 名無しの稀人

>>10 なるほど、だいたい分かった

12 名無しの稀人

って愚痴を言う場だよここは！何このクソゲー！

13 名無しの稀人

えっと、>>1さんは何があっただんですか？

14 名無しの稀人

よっしゃバトルだと思ってモンスター殴りに行ったらモーションアシスト何にもなかったし、当たってもダメージ表記なし。しかも敵の頭が良すぎる。第一面の難易度じゃない。

15 名無しの稀人

つまりアシストなしで強い奴なら問題ないのでは？

16 名無しの稀人

現代日本でんなやついるかよ

17 名無しの稀人

いたぞ

18 名無しの稀人

>>17 マジで!!

19 名無しの稀人

えっと、動画の張り方わかんないから口頭で。HN：明太子タクマのプレイ動画見てみたらわかる。

20 近現代史得意だったおじさん
これか？

〔ID:050527-00-01〕 名称設定なし

21 名無しの稀人

これよ！ありがとうおじさん！

22 名無しの稀人

うわ、こいつ無双ゲーしてるように見えるけど攻撃力がカスいわ

23 名無しの稀人

最初の武器拾い間違えたんじゃねえの？

24 名無しの稀人

これは獣の肉の硬さに慣れてないだけ。人切りの剣じゃ竜は倒せないってのはよく

言われること。

25 名無しの稀人

人切り専門とかPKかよこいつ

26 名無しの稀人

いや、知ってるぞこの男！殺し明太子だ！

27 名無しの稀人

>>26 誰だよ！

28 名無しの稀人

VR 剣道で暴れてた子供。剣に込める殺意が変幻自在であっさり殺されたわ俺

29 名無しの稀人

なにそれ？ 教習ソフト？

30 名無しの稀人

修羅の国出身かよコイツもあんたも！

31 名無しの稀人

そしてわたしも

32 名無しの稀人

一人いれば増える習性でも持つてるのか修羅たちは

33 名無しの稀人

剣道内部のインディーズゲームハンターがこのゲームを見つけて、突っ込んでみるっ

て言ったから辻斬りするために付いてきた。このうらみはらさでおくべきか

34 名無しの稀人

怖ッ!!

35 名無しの稀人

>>29 に説明すると、VR剣道って対人での殺し合い専門のゲームがあるのさ。修羅ってのはそこ上がりの妙にアバターの体の動きのいい奴らのこと。良い人ばっかだけどPKへの倫理とかがねじくれている人が多い。

36 名無しの稀人

>>35 補足すると、剣道のことをちゃんと教えてくれるNPCとリアル剣道家が居るから内部の治安はめっちゃ良い。ちゃんと挨拶だけは真面目にやるから。その先は情け無用の残虐ファイトだけ。

37 名無しの稀人

つまりこのゲームで無双するには剣道をやるべきなのか？

38 名無しの稀人

>>37 早まるな。普通人は対人戦行く前の剣道教習突破できないから。

39 名無しの稀人

普通人って何？



2 周目終了時、つまりタクマが地雷を踏んだ後のこと。



50 名無しの稀人

明太子オ！

51 名無しの稀人

ワールド終わらせてんなよ明太子オ！

52 名無しの稀人

いや、真面目になんて個人がフラグ踏めるの？ゲームオーバーのフラグだよ？MMOだよ？

53 名無しの稀人

マジでクソゲー。信じられない。ゲーム内容が普通だったらもう神ゲー確定なのに

54 名無しの稀人

》53 ならやめれば？

55 名無しの稀人

》54 ゲームシステムが普通だったら神だって言ってるんだろ。クソだけど割と気になるんだよこのゲーム。

56 名無しの稀人

てか、今回の明太子無双してない？最後は喰われてたけど。

57 名無しの稀人

いい剣を使つたんじゃない？

58 【Mrs. ダイハード】ヒヨウカ

》57 彼が使つたのはチキンソードという頑丈な剣だそうよ。そこに生命ライフ転換フォースというこのゲームの技を使つて切れ味を増したつて聞いたわ。

59 名無しの稀人

》58 アバター名で飛んできた!!

60 名無しの稀人

匿名性とか気にしないんですか？

61 【Mrs. ダイハード】ヒヨウカ

私の言動に恥ずべきところは何も無いわ。

生命ライフ転換フォースというのはHPか生命力か知らないけれどそういうものを剣に込めたり外に出したりする力らしいわ。私は一度死んでからよくわかるようになったのだけど、皆さんは？

62 名無しの稀人

あ、僕も今回の最後の方ではアバターを起こせてた。アレのこと？

63 【Mrs. ダイハード】ヒヨウカ

恐らく。命を張り巡らせることが第一段階アバターへの変身条件よ。

64 名無しの稀人

チュートリアルで説明しとけよそれ！クソゲーか！

65 名無しの稀人

けど最後の方楽しかったよ。狼強すぎて勝てなかったけど

66 名無しの稀人

》65 さては修羅だなあんた

67 名無しの稀人

》66 まだ違うよ。買ったけど

68 名無しの稀人

買ったのか……

69 名無しの稀人

もともと勧められてたんだよね、別のゲームで。このゲーム結構空き時間あるし訓練に良いかなって。

70 名無しの稀人

ゲームのためにゲームをかうとかゲーマーの鑑かよ

71 名無しの稀人

》71 照れるね

72 名無しの稀人

それで、ヒヨウカさんはどうしてこの場所に？

73 【Mrs. ダイハード】ヒヨウカ

Mrs. と付けて呼びなさい。

というのは置いておいて、普通に案内よ。今回の考察結果をまとめたのを別のスレツドに書いたからその紹介ね。愚痴りたい気持ちもないとは言わないけれど。

74 近現代史得意だったおじさん

【このゲームを理解するために一時の共闘を】考察、対策スレツド01

だな。掲示板のリンクの張り方はわからなかった。すまん。

75 名無しの稀人

ありがとうおじさん！

76 【Mrs. ダイハード】ヒヨウカ

ありがとうございます。おじ様

77 名無しの稀人

》73 ところで、愚痴りたいことって？

78 【Mrs. ダイハード】ヒヨウカ

このゲームデートスポットがないのよ。あるのは民家と酒場と畑くらい。女子を舐めないでほしいわね。まともにゲームとして作られていないのがこんなところからも見えるなんて冗談もいいところだわ

79 名無しの稀人

》78 ご愁傷様です。Mrs. ダイハード

■ □ ■

ゲーム内時間、三周目クリア後。プラクティスエリア解放から数時間

■ □ ■

100 名無しの稀人

クリアおめでとー！

101 名無しの稀人

俺たち鍛えたけど何にもできなかつたけどな！

102 名無しの稀人

そういうのができるのって一部の達人だけだつてよく分かつたわ。このゲームの戦闘は基本任せて……って負け犬の発想ができるか！やつてやるぞプラクティスエリア！

103 名無しの稀人

》102 強い

104 名無しの稀人

》102 これは伸びるタイプのゲーマー。

105 名無しの稀人

まあ正直、この解放されるプラクティスエリアはありがたい。訓練だけでほとんど終わっちゃったし。

106 名無しの稀人

ただ、シリウスより弱く作られてるよなこのモンスター

107 名無しの稀人

わかる。ちよっとパターン見えてきてつまんない。

108 名無しの稀人

そういう人は南の廃砦行くといいよ！敵が強すぎて組んでた連中事皆殺しにされた。

109 名無しの稀人

》108 何人で行ったん？

110 名無しの稀人

》109 6人、全員剣。ライフフォース生命転換も扱えて有頂天になってたところにアレだよ。速すぎて攻撃当てられない

111 名無しの稀人

楽しそうだし行ってみるね。情報ありがとう

112 名無しの稀人

ところでこここの愚痴があまり出てきてないんだが、何故に？

113 名無しの稀人

今は普通にアクションゲームとして面白いからだろ。こういうのでいいんだよこういうので。

幕間01―2プリンセス・ドリルと長親のプラクティス エリア

動画を編集している妹は思った。このゲーム、プレイヤーもNPCもキャラが濃すぎると。

自慢の姉である。どうしてかはわからないが茶道の家元の実家で縦ロールを縦ドリルに進化させたほどに暴走する癖はあるが、自慢の姉なのだ。

美しく、格好良く、そして強いのだ。

なのに、今回の第一戦ではできてチヨイ役程度。動画投稿をメインにする投稿者としては致命的だ。

姉の素晴らしさがあれば、主役を勝ち取る事など容易いだろうに。

しかし、その思いは姉自身の言葉に否定された。

「私が目立つ事は当然のこと。ドリルですから！ 故に今回は前に出なかったのです。私のドリルを完成させる前に目立っても何でしょう？」

流石は姉だと慄いた。今の撮れ高よりも未来でのドリルを優先したのだ。

素晴らしいドリルである。そう妹は思った。

「お姉、ちゃんとドリルで視聴者さんのハートを貫かんとあかんよ?」

「勿論ですわ!」

そうして、見た目は自信満々で彼女の姉はプリンセス・ドリルへと変わった。



それから数日後

「……どうしたら良いのですか!」

「突然に、何だ?」

「決まっています。私のドリルです!」

「決まっているのか……」

「ええ、そうですわよ長親さん! 私は当然、ドリルの雛形を作り上げました。しかし、全然ドリル感が無いのです。ドリラーとして私は納得できてきかないのです!」

「……その話は何度目だ?」

「さて、デスペナするたびにですから、6回目くらいでは?」

「分かっている尚話を振るかッ!」

この場に居るのは二人。

一人は、言わずもがなプリンセス・ドリル。

もう一人はその相方。顔に傷のあるバルバード使いの戦士、といえば聞こえは良いがそれ以外に目立った我をさほど持つていない事を根に持っているプレイヤー長親。

彼らは最初のコンビ結成からなানাあで今もコンビを続けていた。

目立ちすぎるドリルと目立たない長親であるが、不思議と二人のウマはあっている。年齢も性別もタイプも違うが、二人はもはや互いを欠かせぬ仲間だと認識していた。

しかし、そんな二人にも壁はある。具体的にはドリルについて。

縦ロールを縦ドリルと言い張っているだけだと言うのが当初の長親の彼女に対しての見立てであった。

しかし、ライフフォース生命転換に目覚め、その魂の力でドリルのような螺旋の一撃を作り出してから、そのドリルへの狂愛は伝わった。それも、やべー拘りを持つ女として。

尚、長親は24歳、ドリルは17歳、それでもきちんと女として見ているあたり長親は雰囲気でも人を判断する男だった。

そんな時だった。ドリルがその項目を見つけたのは。

「……武装のペイント機能？」

「高いな。プラクティスエリアでのゴミのようなポイントでは、獲得するのは難しいだろう今なら買えなくはないが」

「いえ、もしかしてこれが有れば私の一番の悩みが解決するのではと」

「1番の悩み?」

「決まっていますわ! ……持っているコレは、ランスであつてドリルではないのです!」

「……そこになんの意味が?」

「ドリルでないから、私は私をだ出しきれなかつたのです。何故なら! このゲームは魂がモノをいうのですから!」

そう言うや、ポイントを使ってポイント機能を解放するドリル。

そして、良質なランスにやたらと綺麗に模様を描くプリンセス・ドリル。

そうして、瞬く間にそのランスは、(見た目だけ)ドリルへと変化していった。

「流石私、完璧な仕事ですわ」

「無駄のない無駄な技術だな。感服する」

「そう褒めないで下さいまし。そして、今なら行ける気がします! 南に行きますわよ

長親!」

「承知した」

そうして、二人はプラクティスエリアへと足を踏み入れた。



そこは、かつてはゴーストタウンだった。人は居らず、家の中にも何も無い。だが、だからこそ好きに勝手にプレイヤーは家を占領し、近くの家家に生活感を与えている。

その中には調理器具を勝手に利用し、食材調達から調理までなんでもしようとするという者さえいた。モンスターの肉には癖があり、そこまで美味しくなかったので臭み取りなどの研究をしているとの噂があつたりするのだが。

そんな事を思いながら南門を出ると、門の近くで多くのプレイヤーが狼に苦戦していた。

「今日は人が多いですわね」

「確かにな。それも新入りが多い」

彼らの扱う生命ライフ交換は、まだ素人の域を出ていない二人から見ても未熟だった。

第0アバターのまま戦いに出ているものさえいる。

「彼らも、モノになればいいのだがな」

「ええ、人が多いほどに私プリンセス・ドリルの輝きは映えますもの！」

と、高笑いをしようとしたときに群れの中から抜けてきた一匹が二人を襲おうとした。

当然に迎撃されるその狼。長親が顎をかち上げ、そこにドリルのランスが突き刺さ

る。

一瞬のコンビネーションだった。二人からしたらまだ合わせられていないと言うだろうが、傍目からは完璧なものだ。

「長親さん、半拍ほど早くありませんでした？」

「お互いに油断していたな」

「幸いにも、この程度の敵です。多少気にして、しかし気負わずにいきましょう」

そんな、長年のコンビのように息の合う二人は、するすると狼の群れを切り開いて進んでいった。



そうして、やってきた砦エリア。通称だが、やたらと敵が強いというもつばらの噂の場所だ。事実その強さに二人は幾度もデスペナルティに追い込まれていた。

「では、今日はこの辺りで待ちましようか。今なら、今ならできる気がしますの！」

「ペイントにそれほどの力があるとは思えぬが、付き合おう」

「長親さんって意外と付き合い良いですわよね。そんな見た目だけの人なのに」

「……この傷は、自前だ」

「リアルにあるんですのソレ!?？」

「ああ、子供の頃にな」

「てつきりお洒落傷かと……」

「貴様も大概に酷いな」

「だって長親さん傷がある事以外普通なんですよ！　びつくりするほどに！」

「……普通で何が悪い」

「見た目は完全に強者なんですよ、相応の立ち回りを期待するのか当然ではありません事？」

改めて説明するが、長親は身長180近くある巨体で、筋骨隆々であり、顔に傷のある男である。見た目は完全に力自慢の大男だ。

しかし、別に力任せに武器を振るうことはしないし、強者の威風を感じさせることもなく、口調が地味に変なのは、酷い訛りを抑えている結果である。

見た目に反して本当に、普通なのだ。

「よく言われるが、俺はさほど強くはないだろうに」

「ですわね。私たちまだ弱いですよ」

「だから、強くなる」

そんな言葉と共に自然と構えを取る二人。

そこからは、ここの強さが頭おかしいと言われる要因である人狼が現れるのだった。

「足は止める。一撃で決めてみせろ」

「上等ですわ！ 私**の**必殺技で、決めて差し上げます！」

そうして、ふたりは**生命転換**ライフフォースを武器に込めて、人狼と向かい合うその速さは凄まじく、その筋力は強靱。しかし、二人は思う

この程度の相手、倒せないならばあの天狼を倒す事など不可能だと。

それは、二人の負けず嫌いが見せる、次への道だった。

「来い！」

人狼の速度に合わせての斧撃が人狼に当たる。しかしその皮を貫くことはできずに、しかしそこに重い打撃として人狼にダメージを与えたのだった。

「ついでに止まれ！ デイスチャージ放 出！」

そして、バルバードから放たれる重力場が人狼を捕らえる。人狼の筋力から考えると数瞬止まる程度だった。

その瞬間があれば、螺旋の力をそのランスに宿すプリンセス・ドリルの一撃は決まる。「ぶち抜いて差し上げますわ！ ライフフォース生命転換！ ライフフォース螺旋よ穿て！」

そうして、ライフフォース生命転換の命の力を器用に、ドリルのように先端を尖らせて回転させる彼女。

その一撃は人狼の皮を貫き、筋肉を貫き、骨を貫き、その体に大穴を開けた。

その体の削れ方は、まさにドリルで体を穿たれたものだった。

ドリルの、ランスをドリルに変える技術はここに成功したと言って良いだろう。そう
長親は思った。

「成功か？」

「……長親さん、あなた頭が悪いのですか？」

「さほど良い訳ではないが、なんだ？」

「あんなものが、ドリルな訳がないでしょう！ 穿つことはできました！ ブチ抜く威力も備えました！ しかし、しかし！ ……音が！ 足りないのです！」

しかし、ドリルのドリルに対する拘りは凄まじい。好きというのは、最強なのだ。

「長親さん！ 次に行きますよ！」

「まあ、構わないがな」

「今のままで足りません！ 奥に入りより強い人狼をぶっ飛ばしましょう！」

「今までのパターンでは死ぬのが見えているが」

「死ぬのも経験ですわ！ 死んではいけない時に負けなければよろしいのですから！」



「オホホホホ！ 今日も無様に死にましたわね！」

「貴様が調子に乗って命を使いすぎるからだろうが」

「いいではありませんか！ 楽しかったのですから！」

ロビーにて、案の定デスペナルティを負った二人は戦闘の記録動画を見ながら笑っていた。

苦しんでいても、笑顔でいられるのがこの二人の強いところだった。特別ではない、普通の心の強さ。それはこのゲームにおいて、特別以上に価値があるのだとこの二人はまだ知らない。

しかし、そんな未来のことなどどうでも良いと言わんばかりに笑いを絶やさなかった。

小言を言うが、長親もドリルと行った無茶を楽しいと思っていたのだ。彼女のドリルに対する拘りはさっぱりわからないのだが。

「それでは私はこの辺りで。今日も楽しかったですわ、長親さん」

「ああ、俺もだ。またなドリル」

「ええ、また」

そう言ってログアウトするドリル。その姿を見送った後に、時間が来るまで自分に何が足りないのかを知る為に戦闘録画を見直すのだった。



「今日も楽しかったですわ！」

「良かったなお姉。それで、ドリルは完成したん？」

「……効果音、お願いできませんか？」

「妥協するねんな、そこ」

「ええ、魂のドリルという新しいドリルではありませんけれど、今までのドリルを愛してくれた視聴者様方には物足りないと思いますの。私も物足りませんでしたから」

「りよーかい。それじゃあ音加工前のを本編で乗せて、おまけで効果音入れるドリルをするってのはどう？」

「……素敵ですわ！ やはりあなたは天才です！」

「お姉に言われるのはちよつとなー」

「何故ですか！」

「お姉やし」

そんな姉妹の会話があつて、新しく《Echo World》の動画が作られたのだつた。

『プリンセスドリルの、魂のドリル』という動画を。

第二戦 VS サビク 騎士の国と聖剣達 刑事の戦い／騎士との遭遇

「それじゃあ、改めて作戦会議といこうか。ぼくはじゅーじゅん。本名はみな知ってると思うけれど、ネットマナーって事で」

ロビーに集まったタクマたち。内訳はタクマ、ヒョウカ、ユージ、じゅーじゅん、筆ペン、そして帝大大学院のスエキチとマツキーノ（省略）の7人だ。

ちよつと多くないか？ とタクマとユージは思い、少なすぎないか？ と他の皆は思う。

脳筋とそうでないかの差が如実に出ていた。

「じゃあ司会はい出しっぺの僕が。まず、筆ペンさんとじゅーじゅんさん。ユージさんの見た“現実で消えた人がゲーム内の人物として存在している事”は間違いはない？」

「……うん。間違いなく父さんと義母さんだった」

「俺も、あの人の顔は忘れた事はねえ」

「……………ここに来るまでに探索した結果保科くん……………僕達の後輩も見つけたよ」

その言葉に重くのしかかる重責。間違いなく、命がかかっているのだ。それが重くのしかかる。

これに動じていないのは、〃そんなものか〃と考えている琢磨だけである。

「外部ツールのインストールは軒並み弾かれてルから、細やかな測定はムリだね。メデイちゃんの後継機である健康管理AIをさつき買ったケド、意味ナシ。今度はインプレント型を試してミルヨ」

「うん、わかった。現状はなんかやばいけどわかってないと言うこと。それくらいだね」
そうあっさりと言いつ切るじゅーじゅん。

実際そうなのだが、その言葉はあまりにも軽かった。

その目の奥の鋭さとは全く違い、さもなんてことのないように振る舞う。その姿は、頼れる大人の階段を登りつつある青年にしては、すこし大きすぎた。

「じゃあ、次。これからの方針について。これまでの経験から、僕はなるべくゲームオーバーを引き伸ばしたい。ゲームクリアとゲームオーバー、どっちでも異界は現れる。なら、現実での対応がちゃんとできるようにきちんとこつちの準備を整えたい。つてのが警察の方針ね」

「……警察は、今何もしてないの?」

そんな言葉に少しの不信感を覚える筆ペン。

それもそうだ。警察は、先日の異界騒ぎをいくつかの誤情報と共に揉み消したのだから。

それが、納得のしやすいカバーストーリーだとしても、真実を知る彼女の心にはしこりが残っていた。

サイバー犯罪者によるAR技術の無差別実験だと、先の件は世間では知られているのだ。体感したものにはそれぞれ個別に口止めをしながら。

だが、軽薄な顔のままじゅーじゅんは刑事足柄の顔になった。

「偉い人がそれまでの対応は現地に任せるって言うてくれたのさ。だから、色んな人が色んな方向で動いてる。だから大丈夫、対応を現場判断からある程度パターン化した問題に変えたいだけ。皆は気にしないで大丈夫だよ。……こういうのをどうにかするのに大人は居るらしいからね」

言葉には不思議な重みがある。飄々と、軽々しく言ったその言葉には、しかし皆を納得させるに足る重みがあった。

「意見いいかしら?」

「どうぞ、ミセス」

「私はゲームオーバーを引き伸ばすことについては反対です。NPCはいくら死んでも次の周で戻りますけれど、奪われた人々には傷が付きます。最悪死に至る事もあるかと」

「……代案はあるの？」

「ゲーム自体のクリアです。最速で条件を明らかにして、根本的に向こうのトリガーになるものを潰し切る。それはこんなまどろっこしいやり方をしている敵方にとっては致命傷になるかと」

「ねえ明太子、この娘本当に14歳？」と目で訴えてくるじゅーじゅんに肯くタク

マ

そうしてため息を吐いた後に、彼は自分の意見を始めた。

「僕個人の心情としては、賛成。けど、現実問題として不可能だよ、それは」

「それは何故？」

「このゲームのプラクティスエリアの間でもうグループができてる。今度は自分たちで攻略するんだ！」って連中がね。そういう奴らは、足を引っ張り合うよ？」

「彼らを導く餌をチラつかせる役がいれば良いのでしょうか？ その程度のグループなら大した障害にはなり得ません」

「あ、わかってて言ってるのね」

「それはごめん、早とちりした」と謝るじゅーじゅん、「言葉足らずでした」とヒョウカも言い返す。

「私からの具体案は、タクマくんです。彼はアルフォンスという信頼できる騎士と短くとも深い繋がりがあります。それを元に死に戻り前提で情報を集めて掲示板に流す。そうすれば餌に釣られた方々は勝手に頑張ってくれるかと」

「いいねそれ、じゃあ明太子のやる事は決定で。行つていいよ」

「了解です」

そう言われて、若干うとうとしていたタクマはシャキツとして動き出す。

「言われないでもそれくらいはやるのにな」と暗に自分は馬鹿にされてないかと思
いながら。

■ □ ■

そうして、タクマは一足先にワールドに転移して、ふらりと人探しを始める。

とは言つても、騎士団詰所の場所を尋ねようと適当な人に話を聞く。

すると、こんな言葉が聞こえてきた。

「まさか、あんた王子騙りを見つけたのかい？」

「いえ、知り合いに話を聞こうと思つたのにどうにも連絡がつかないもんで」

「なんだ、つまらん。それなら向こうの道を真っ直ぐ行つたら左手側に見えてくるよ」

「ありがとうございます。それで、王子騙りとは？」

「騎士の中に王子を騙る奴が現れたんだとき。馬鹿な奴だよ。そんなのすぐに分かるってのにな」

そうして別れると、タクマ何やら妙な視線を感じた。稀人特有の質素な服が目立つのだろうか？

なんにせよ、今はコレの対応が先だろう。

「貴様、明太子タクマとかいうふざけた奴だな？」

「はい。野試合のお誘いですか？」

「そんな訳があるか。騎士アルフォンスの件で話がある。今から言う通りに来い」

「構いませんけど、その前にお名前を聞いても良いですか？ 声の人」

「名乗りたくも顔を見せたくもないからこうして伝えているのだろうか。」

そうして、タクマは害意はないのだからとふらりとその声に従って歩く。もつとも、一人であるタクマの場合は害意があった方が優々と赴くだろうが。

そのついでに内心でメデイに声のトーンから覚えがある人かどうかを調べてもらう。タクマの記憶の通りに、いつかアルフォンスを送り出しに交渉してきた声の人のようだ。

そこそこ偉い人がなんで俺に？ ともタクマは思うが、とりあえず話の内容はメデイ

が覚えてくれていているし大丈夫だろう。

そんな楽観のもとゆっくり歩き出し。「居たぞ！」という明らかに害意のある声に振り返る。

そこには3人か4人か見た覚えのある、しかし死んだはずの騎士がやってきていた。

「……ゾンビパニック？」

「安心するな、何故か生きている」

「逃走を提案します。ここでやり合うにはいささか数の不利かと」

その言葉を聞くや否や、第0に戻して走り出す。

しかし、敵はどうやってかこちらを見ている。モンスターか何かじゃないのか？ コ

レは。

『こういう時にモンスターかそうでないのか区別が付かないのが面倒ですね』

『基本リアル視点だからな』

そう話した所で近くの民家へと透過して侵入する。

しかし、騎士の一人の ゲートオープン ■■■ という声と共に一人の騎士が同じ壁をすり抜けてやってきた。

『透過の能力？』

『ゲートとは、自由なのですね』

『俺も早く使いたいね!』

同じ透過とはいっても、タクマには生命ライフ転換フォーリスの強化はない。微弱なものと言っても速度の差は大きい。このまま鬼ごっこを続ければいずれ追いつかれるだろう。

ならば……戦うしかない。タクマはそんな事を笑いながら考えた。

『メデイ、路地裏出るぞ』

『はい。左手側の壁の向こうとなります』

そうして抜けた路地で意識をスイツチする。

生きる意思を身体に巡らせ、殺意を込めた剣を抜き、透過男が抜けてくる瞬間に首を切るつもりで構え

どこかからの狙撃で命を狙われたのを察知した。

「冗談だろ!?」

なんとか一撃を剣で防げたものの、その衝撃は流しきれずにタクマの体を大通りにまで吹き飛ばした。

そして、透過の騎士が現れてするりと剣を振るってきた。それを紙一重で回避するもの、掠った筈の服は切れずに内部の肉だけが切り裂かれた。

剣で防ぐつもりで居たら死んでいただろうと分かる恐ろしさだ。

これは、だいたい物理攻撃しかできないタクマには荷が勝ちすぎている相手達だと

思った所で仕方なく逃走へと思考をシフトする。

タクマの流儀はただ殺されるだけを良しとはしないのだ。相打ちなら普通に進んでやるが。今はそれも許してくれそうにない。

『メデイー！ 音響兵器行くぞ！』

『了解です』

そうして、思考の中から自分の生きている中でもっとも嫌な音。いつかのインディーズゲームで聞いた“ガラス瓶をナイフなどでひつかく音”を“思考を音声にする外付けアバター能力”で発声する。

自爆覚悟の、全開の音量で。

その音に驚いた騎士達は立ち止まり、タクマはその隙に聞こえない耳のまま風で初速を作って全速力で離脱する。

そして、適当な家屋の中に入ってログアウトしようとした時に。

酔い潰れているのに短剣を手放さない女性と、大柄の男性がそこにいた。

「何者だ？」

「……すいません戦士団の人。今から逃げますんで黙っててくれるとありがたいです」

そう言つて、一瞬姿を表して頭を下げ、また第0アバターに戻つてロビーに転移する。

「あらタクマくん、早かったわね」

「ちよつと暗殺されかけた。というわけで再チャレンジ行ってくるわ」

「いつてらつしやい。私は掲示板を荒らしてからいくわ」

「程々にな」

そうして、タクマは考えて、少しだけポイントを使ってから再び転移した。そして第0のまましれつと先程声の人に見つかった場所へと戻る。

そして、少し待ったら声が聞こえてきた。

「よくも生き残れたものだな」

「指示をお願いします。ちよつと変装してきたんで多少はマシになると思うので」

「服を変えただけだろうが」

その通り。今のタクマの服は初期装備ではなく、白いカッターシャツとネイビーのパンツに変わっていた。一般的な市民の服装だ。

今までの初期衣装とはガラリと清潔感が変わっている。

そんな姿に無個性な顔形も含めて特に不審がられることもなく、こともなげに声の指示に従って歩くのだった。

騎士の友人、アルフォンスの元へと。

死者の蘇った国

声の指示に従ってアルフォンスの元へと歩くタクマ。数度騎士にすれ違ったが、堂々としていけば案外バレないものである。

もつとも、他のプレイヤーは職質受けていたから、単純に服の関係のようなのだが。

「で、ここからは？」

「その墓地のヘイルマンという者の墓に触れる。指示は以上だ」

「……転送か？」

返答はなかった。視線かと思っていた奇妙な感覚が抜けたので、通信が切れたのだらう。

「どう思う？ メディ」

『先の通話のように、未知の技術の可能性があります。ここは罠かどうかはともかくとして乗ってみるべきかと』

「確かに、罠なら罠で情報になるしな」

『はい』

タクマとメディはそう会話をしながら剣を抜けるように鞆口を持って歩く。殺意の

類は感じない。だが、警戒にこしたことはないのだから。

そうして、見つけたヘイルマンという男の墓。そこに触れてみると、それがすり抜けられると分かった。

「落ちるパターンか」

『ですね。人の墓を踏むのはあまり良い行いではありませんが』

「まあ、そこはヘイルマンさんとやらが居たら謝ろう。土下座でもして」

『死者への冒瀆はルール違反ですからね』

「そうそう。ヒトらしくするためにちゃんとしないと」

そう言ったタクマは周囲を見回し、視線がない事を確認してから見えない穴に落ちた。

そうして落ちた先には、先の戦いで生き残った騎士が数人いた。アルフォンスも含めて。

「どうも、明太子タクマです」

『その相棒のメデイと申します。精霊とでも思っていただけるとそう間違いはないかと』

「……念のため名乗りはしないが、良いか？」

「はい。なら貴方の事はなんて呼べば良いんですか？ 声の人」

「なら、サブリーダーで頼む」

「了解です」

タクマはリーダーが誰かを尋ねないそれは思考の結果として認識している信頼の得方だ。尋ねるべきでないことを理解していると思わせた方が、初対面での印象は良いのだ。

タクマは基本的に一点特化だが、それに関係する事はそれなり応用できる。例えば、今のように懐に入り込む為のコミュニケーションなどがそれに当たる。

そういうのを頭の中で理解すると、自己嫌悪で嫌になるのが琢磨であるのだが。

「それでアルフォンス、俺なんか追われてただけぞ」

「……稀人の生き残った者達の中で私にもっとも近いのが君だったからだ。巻き込んでしまつてすまない」

「いいよ、巻き込まれに来たようなもんだし……それで、今はどんな状況だ？ 死者が

蘇つてて、王子騙りの濡れ衣がお前にかかっているって思っているんだが」

「大筋は合っている。順を追って話そう」

そうしてアルフォンスの口から語られる奇妙な話。

それは、今のソルディアルを覆っている闇についての話だった。



その事に気がついた最初の人物は、臨時徴兵に当たっていた騎士の一人だった。部下の指導官の数が合わないのである。

多い方に。

それに気づいた騎士は、騎士の皆を集めた。偽物が紛れ込んでいるとは思えないが、変装をして過剰に仕事をしている者が居るなら問題だからだ。

しかし、指導に当たっていた騎士の中に偽物はいなかった。皆、正規の騎士である。勤務記録も正確だったし、変装の類でもなかった。

そうして、自分の記憶違いだろうとまだ動ける老人や女子供への訓練を終えた時には、さらに騎士が増えていた。

そして、訓練に関わっている者の中には自分と親しかった、あの天狼に殺された者も含まれていた。

当然、その騎士は生き返った者詰め寄った。しかし、その騎士は殺された事に気が付いていなかったのだ。天狼と戦い生き延びたのだと思っていた。

希望的観点から聖剣の奇跡、という言葉頭に浮かんだ。しかし、それはない。聖剣はとうに失われている。

故に、その者に真実を伝えた。貴様は天狼に殺されたのだと。

その男は、「そうか」と笑い。

「ならば、また死ぬまでお前が俺を監視してくれ。悪しき者の企てだとして、我らのこの護国の気持ちに嘘はないと信じている」

そうして、死者が蘇る現象は、その現象のおぞましきは考えられずに、
「死んだならまた死ぬる」という騎士の新たな誓いを元に受け入れられた。

それから数ヶ月が経ち、死んだ者も新たな生活を楽しみ始めた頃にその事変は起こった。

現王ラズワールドが、病に罹ったのである。

そうならば、当然に政務の責任者として宰相のロドリグが挙げられる所だが、現在ロドリグと騎士団の関係は最悪だった。故に、修行に出ていた王子を一時的に代役にしようとしたその時。

王子が二人現れた。

二人の名前はアルフォンス。どちらも金髪で美形。そして鍛え上げられた身体を有している。

だが、王子は一人。確実にどちらかが偽物だった。

一人の王子は言った。王や宰相ロドリグに判断を委ねようと。

一人の王子は言った。斬り合って負けた方が偽物だと。

その二人のどちらの案が採用されたのかは言うまでもなかった。

しかし、そこにこそ罠はあったのだ。

故に今、本物と思われる方のアルフォンスは数少ない信じられる仲間と共にこうして隠れているのだった。



「王子様のようだとは思っていましたが、本当に王子様だったとは思いませんでした。数々の無礼、ご容赦を」

「……タクマ、半笑いで言われても説得力はないぞ」

「いや、そりや笑うしかないだろ。頭おかしいぞこの国」

「でなければ最後の一つ国になってまだ笑ってはいられぬよ」

タクマは爆笑するのを堪えて、メデイは呆れてモノも言えない状態になっていた。

それはそうだろう。何せ、斬り合いを提案した方が本物のアルフォンス王子なのだから。

そして何者かの力で不正を起こされ、偽王子を殺してしまった罪人でもある。

「ああ、全く嫌になるよ。まさか不正を躲して斬り殺したら私の不正だと言われたのだからな」

「やっぱこの王子様強すぎる」

「何を言う。王族なのだから強くなくてどうする」

ここがゲーム世界だと久しぶりに実感した瞬間である。後ろで踏ん反り返ってる王様が強いとかねえよ。と珍しく至極真つ当な感性で物事を考えたタクマであった。話が逸れているので追及しないが。

「それで、今をどう見てるんだ？」

「ふく……サプリーダー曰く、周到に練られた罠だと。私見も混じるが、多くの蘇った騎士達はその者なのだろう。彼らは皆高潔だ。しかし、一人二人かわからぬが、少数が偽物とすり替わり、要所で意思をコントロールしている。私たちが彼ら死人を受け入れた事、偽王子が出てきた事、そして無粋な手出しをしてきた者などな」

「つまり、そいつを殺すと？」

「そうだ。敵の目的がわからない以上、出だしを潰して時間を稼ぎたい。協力してくれるか？」

「まあ、ウチにも派閥争いとかできたからその辺は待つてくれ。俺個人は勝手に付き合おうつもりだけど」

「百人力だな」

「千人力の側だと誤差だと思っぞ？ アルフォンス」

そうして、拳を突き合わせる。

『質問を。敵の目的は分かれますか?』

「分からない。王室の乗っ取りが狙いなら、僕を暗殺してから偽物を送り出すだろうか
らな」

『ならば、確実に味方だと言える方はいらつしやいますか?』

「まずは、宰相のロドリグ殿。彼はこの事態で政権に手にしたが、特におかしな事はして
いない。そして、それより前に入れ替わられたとしたら我が国はとうに滅んでい。逆
説的に白だ」

そうして、そんな人がどうして騎士団との付き合いが悪いのかを思考の隅に置いてお
く。ヒョウカならなにかに引つかかるかもしれない。

「次に、巫女長の母上。母上が死んだらこの国は滅びる。それが内側か外側かは分か
らないがな」

「すまん、その辺り詳しく頼む」

「……なるほど稀人はその辺りを知らないのか。母上は巫女達の長であり、この国の生
命機構で結界を作り出している者でもあるんだ。それが崩れれば外の魔獣の行進を止
められなくなる。そして、城の地下に封じ込められている大魔も這い出てくるだろう。
そうなれば世界は終わりだ」

その言葉に思い出されるのは、一周目からずっと繰り返されているゲームオーバー時

のモンスターパレード。

その大魔とやらがモンスター達の王なのだろう。その軍勢が城から出てきて人々を殺す。それがゲームオーバーの本フラグだ。タクマとメデイはそう確信した。

「後は、父や護衛長殿などの乗っ取られていたら国が滅んでる連中も除いて考えている。が、彼らに関しては敵の目的次第で変わってくるので100%白とは言い切れない。まあ、父が殺されるとは思えないがな」

そう話を切つて、アルフォンスはタクマの目を見た。

「怖気付いたか？」

「いや、困ってるだけだ」

そして、タクマは思った事をそのままに言う。

「誰を殺せばいいのか分からないのは面倒だからな」

「相変わらずで安心したよ」

『私としては、アルフォンス様のマスターへの好感度が不思議でならないのですが』

「……僕のはただ、正しく在ろうとしている人を、疑いの目で見れないだけだ。悪癖だよ」

そんな言葉を最後に、情報共有のためにロビーへと転移する。そう言う事ができるのだと伝えて。



そうしていると、ロビーでは激しい口論が行われていた。

内容は、騎士達に協力するかどうか。

どう考えても王子を斬ったアルフォンスこそ偽物であると言う考え。

テンプレ的に追われているのは本物だという考え。

そもそも偽王子の出所を調査しないといけないんじゃないか？ という声。

それぞれが騎士派、王子派、調査派という所だろう。

そして、どれにも利はあるのだ。

なにせ、プレイヤーとしては失敗したらゲームオーバーで次に行けばいいだけなのだから。

「どうだヒヨウカ、計算通りか？」

「今ここで議論してる人たちについてはね。どうにも、そうじゃない連中の方が重要な情報を握ってるかもしれないわね」

「まあ、とりあえず載せて良いか？ 俺の調査結果」

「ええ、構わないわ」

そうしてタクマは思考操作で掲示板にアルフォンスの話を何処にいいのかだけを隠して載せて、口論に待ったをかける。

タクマ基準での少し剣気でみな静かになった。だが、構えてくる者や殺しにくる者がいなくて当の本人は拍子抜けである。

「アルフォンスと会ってきました。詳しい話は掲示板に載せましたけど、なにをすれば良いのかは分かりません。アルフォンスも何が敵なのは分かっているようですよ。皆さんの知恵を貸してください」

そう、頭を下げて議論をアルフォンスの敵を殺す方に誘導する。

一先ずこれで良いとして、議論が纏まるまでふらりとワールドへと赴く。

目的はないが、ちよつと鍛えたい気分なのである。故にタクマは襲ってくる騎士かダイナ師匠でも見つけようと、自然体で歩くのだった。

荒野の西風亭

ふらりと歩くその姿は平凡なものだった。しかし、あえて見せているその剣気に反応する者は少なくなかった。

それはそうである。ここは人類最後の王国ソルディアル。そこに住んでいる人間は少なくない修羅場を潜っているのだ。

故にそれとなく、気づかれる事なくその少年から離れていく。

しかしそれでは変わらぬと、一人の片腕の戦士が真つ直ぐに立ち塞がった。

「なあお前さん、何が目的だ？」

「この国の事を知りたいと思つて歩いてます。強いですね」

「……それだけか？」

「まあ、喧嘩を売つてくれないかと思つてはいます。ちよつと鍛え直したいと思つてます」

「だからって野試合狙うか普通？」

「その方が楽しいじゃないですか」

その生命をなんとも思っていない在り方に驚嘆した戦士は、誰かに矯正して欲しいと

お願いから一つの提案をした。

「……まあ、お前が死人を出さないならなんでも良いさ。そういう事なら知り合いを紹介してやる。あの酒場の連中なら、暇つぶしにお前を見てくれると思うぜ」

そうして男が話すのは「荒野の西風亭」についての事だった。

様々な腕利きが自然に集まる酒場だという事だ。この戦士も昔はよく通っていたのだと。

そうして、紹介の文を貰って少年は去っていく。

その姿に、戦士は見た。

鬼の子の、姿を。

■ □ ■

『マスター、流石にやりすぎだったのでは?』

「結果オーライとはいかないか。ちよつとこの国舐めてた」

タクマとメデイは、そんな事を話しながら剣気を抑えて歩いていく。

当初の予定としては。市民から騎士に伝わり大乱闘のつもりだったのだこの少年は。

デスペナするならそれで良いと。

死んでも良い状況なら、とことん死ぬのがタクマのゲームスタイルである。

「んで、こいこか」

『酒場ですね。一見すると普通の店ですが』

そこは、簡素な看板があるだけの店だった。

もしかすると酒場とすら気付かれないだろうその店は、ひっそりと佇んでいた。

Open の文字はないので、念のためにノックをしようと近づいていく。

さて、鬼が出るか蛇が出るかだ。とタクマは思い。

その扉が、真横に吹き飛んで来たのを唾然としつつ抜き打ちで両断した。

「……え、何これ？」

『奇襲の類では？』

「悪いね！ ちょっととした喧嘩さー！」

そう、中から声が聞こえてくる。

殴りかかっているのは、妙齢の女性。エプロンが似合う黒髪の美人さんだ。胸はないが。

それをいなして笑ってるのはまさかの顔の見えない男性。しかしその感覚から伝わるのは間違いなく探し人だった。

「ダイナ師匠、何やってんですか」

「ああ、少年か。見ての通りの喧嘩だよ」

「笑ってんじやないよアンタ！ ……師匠？」

すると、ギロリとこちらにターゲットを変えてくる女性。

「あんた、この馬鹿の弟子なんだね？ 金を払いな！」

「あんた本当に何やってんの師匠」

「いやー、財布の中身のことすっかり忘れててなあ……うん、おっちゃんミスったよ」

とりあえず、言われた金額はそこまででもなかったもので、店の修理代などの色もつけてタクマはポイントをこの世界の通貨に変えて払った。

このダイナという人は落ち武者スタイルだが、決して不義を働くような人ではない。タクマは見えていたからだ。そんな人物に、あれ程の剣は振るえない。

なので、一先ず金を払ったのだった。落ち着いて話を聞くために。

そしてそれは、間違いではなかった。

「……アンタ、馬鹿だとは思ってたけどそこまでとはねえ」

『施すにしても限度があると思いますよ』

「だから施したんじやねえよ、盗まれたんだよ」

事の顛末はこうだ。

師匠はスリにあった。それも年若い子供によるモノだ。

犯人を知っている時点で分かると思うが、師匠はその子供に気付かれないように後を付けたようなのだ。本人は否定するが、その少年の事情を悪し様に語った女店主さんの言葉に食ってかかって少年の事情を説明したのだから。

もつとも、今の尋問は店主さんの誘導がうますぎたので、間違ひなく自分は引つかかるし、恐らくヒョウカでも引つかかるだろう。そうタクマは思った。

この末期の国の酒場の女店主だ。こう言つた技能も磨かれるのだろう。

そして、少年の事情はこうだ、

突然この世界に現れた自分達には仕事はなく、家もない。それでもどうにか孤児院の方々の頑張りで食いつないでいたが、かつての暮らしを探してその庇護を飛び出した。

だが、この国の常識もなく飛び出してしまった少年たちにできることなど何もなく、途方に暮れ、飢えで苦しみ、スリをした事があるという少年が打つて出たのだとか。

当然、そんな記憶はないし、手慣れてもいなかったようなのだが。

「んで、その子供達はその後どうなつたと思う？ ダイナさんとやら」

「……柄にもない説教して、孤児院に叩き返したよ」

「『普通に良い話じゃないですか』」

「ま、自分の金を取り返さないあたりが台無しだけどね！」

「うるせえ」

とまあ、そんな話を聞いた人情派の女店主さんが何もしい訳もなく、タクマに金を返し、ダイナには店の片付けと扉の修理を命じてそれで終わりにした。懐の広い女である。胸はないが。

「手伝いますんで、ちよつと付き合ってくれていいですか?」

「構わねえが、なんかあつたのか?」

「ちよつと……生命ライフフォース転換についての話を聞きたいなと」

「あー、誰かとやり合つたな?」

「はい。相打ちすら取れませんでした」

「怖い事言うなつてのがキが。命は大切にしろよ」

そんな言葉と共にえっちらおっちらバラバラになつた机や扉を店の裏に纏めていく。

そしてスッキリした内装に対して、店主さんがある言葉を言い出す。

「ゲートオープン
■ ■ ■
」

それは、生命ライフフォース転換の果てにある技術。その開いた扉の向こうから、店主さんは椅子や机、扉を取り出して適当に配置していた。アルフォンスのようにゲートを潜つてはいない。

そういう使い方もあるのかと驚愕するタクマとメデイだった。

「無駄のない力の無駄遣いだなマジで」

「いいのさ、力がある事と戦う義務は等価じゃないからね」

そうして、残った扉を立て付けて荒野の西風亭は元通りになった。

「じゃあ改めて。何にする？」

「それなら……ミルクでも貰おうか」

『マスター、格好つけてそれを言ってる人はさほどいないかと』

「はいよ。アンタは水で良いね？」

「ああ、頼むよ」

そうしてカウンター席で他愛のない話をするタクマとダイナ。兄弟のような親子のような、妙に近い感覚の二人だった。

「はいよ。ツマミは勘弁してくれよ？ まだ旦那が帰ってないから食材がないんだ」

カラツと笑う女店主。そんな言葉と共に奥の椅子に座っていた。手にはエールがある。

デバガメする気満々である。

「じゃあ、良いですか？ 真面目な話」

「……アイツを無視していいのか?」

「むしろ話聞いて欲しいですね。生命^{ライフフォース}転換やゲートを使える人との戦いつてよく知りませんから」

「あの剣の腕でか」

「純粋な剣技ならそこそこ強いですよ? ずっとぶん回してきましたから。ただ、稀人^{ライフフォース}って生命^{ライフフォース}転換のない世界から来たんですよ」

「あー、つまりそもそもそのルールを知らねえって話か」

「はい。命を燃料にしての戦闘技術ってのは体感してるんですけどね」

すると、スツと目が鋭くなるダイナ。何やら魂を見られているようだった。

なので、真似をしてみる。意識を見る事に集中してみせる。

そこには、研ぎ澄まされた光があった。眩しくて目が焼かれそうだが、しかし見惚れてしまうほどの美しさの。

すると、ぺちんとダイナはタクマの頭を叩いて意識を引き戻した。でなければ、魂が焼かれてしまっただろうから。

「魂視を盗みやがったよこの天才坊主」

「タクマで良いですよ師匠」

『私もメデイで構いません』

「まあ、お前のあり方は見えた。綺麗な緑だな」

「緑ですか？ 風じゃなくて？」

「ああ、別に属性と色とゲートって全く関係ないからな。十人十魂って奴だよ」

「色じゃないのか」と内心不思議に思うタクマとメデイ。

そんな話から、ダイナ師匠による生命ライフフォース転換のレクチャーが始まった。

「そんな事より斬り合った方が早いと思うんだけど」

『マスター』

「わかってるよ、相棒」

剣の腕を高めるには、まず剣の理を知らなければならない。それは生命ライフフォース転換とて同じだろうから。タクマはこの世界の、魂の理を学ぶのだった。

ダイナ師匠の授業 01

始まったダイナによる生命ライフフォース転換の授業。それは思いの外堂に入ったモノだった。本
 当に何故落ち武者スタイルなのか本当に分からない男からである。

「まず、生命ライフフォース転換つてのにはいくつか段階がある。分かつてるか？」

「はい。1段目の純粹な命、2段目の風とか炎みたいな力を伴った命、3段目はその放
 出、4段目以降は、ゲートを使った異次元の力。今はこれくらいしかわかりません」

「いや十分わかってんじゃないかねえか。放デイスチャージ出とか混同するぞ普通」

などとツツコミを入れながら、微妙に間違っていた部分の指摘を始めるダイナ。

「まず、1段目と2段目については、実のところ同じものだ。現象しきいになる閾値しきいつてのがあ
 るらしくてな。一定の出力を超えると魂は外に形を作るんだよ。だから、最初から込め
 ているのは自分の色の魂だ。ただの命いのちつてわけじゃない。今度魂視しんしで見ってみろ。なん
 で、段階としては入魂インストール、放デイスチャージ出、ゲートの3段階だ」

「入魂インストールですか」

「ああ。自分の色の魂でモノに主を定めさせるって技術だよ。だから、お前ら稀人の第
 0だったか？ 魂だけの状態でもそいつは触れるのさ」

「……じゃあ、主を定めさせないで魂を込めた場合は？」

「誰でも使えるそこそこ強い武器だな。面倒な上そんな事できる奴なら前に出たほうが強いけど」

今のをできないと言わなかった時点で、タクマは直感した。

最初の周の時に、タクマの拾った臆病者の剣チキンソードに魂を込めたのは誰なのかを。

内心で、深々と頭を下げる。託されたのに守れずにすみませんでした、と。

「まあ、ライフフォース生命転換つてのはだいたいにして感覚的なもんだ。知識は大雑把に持つてるくらいが丁度いい。……だが、ゲートは違う」

ダイナは珍しく真面目な顔で言葉を紡ぐ。

「ゲートつてのは、魂を別のモノに突っ込む異形の力だ。ゲートの向こうが何なのかつてのは聞くなよ？ 野暮な話だ」

「だから、戻ってこれなくなってしまうんですか？

「……リミットは体感でわかるけどな。けど、死ぬ気になれば超えられる。それがゲートだ。……そうなりや、稀人のお前さんでも死ぬだろうよ。その魂がな」

「なら、使い時は選ぶ事にします」

「ああ。だが、使わない奴はそもそも言わなくても使わねえから、あんま吹聴すんなよ？

覚悟はなくてもゲート自体は開けるって奴はいるんだから」

そんな言葉と共に、水を一口飲むダイナ。

その言葉に「どうせ私にはないよ」と呟く店主さん。その言葉に苦笑しているダイナには、責める感情は全くなかった。

「それじゃあ、対ゲート戦での基本な。ゲートつてのは結構滅茶苦茶だが、いくつか区分できる所がある。それが、時間と距離だ」

「……距離つてのは、射程ですか」

その言葉に浮かぶのは、サブリーダーの声を届ける力。アレもゲートなのだろう。

「傾向としては、短時間で魂を潜り切るゲートの方がパワーは強い。が、射程は短くなりがちだ。逆に長時間かけてゆっくり使うゲートは射程が長い。まあ、あくまで傾向で、かなり変なのが出てくるのが魂だけだな。ゲートの中身によっては距離とか関係なくえげつないし」

『では、ダイナ様はマスターはどのようなものになると?』

「剣の感じからすると、近距離型だな。そこからどう転ぶかはお前の成長次第だ。まあ、殺しに特化する能力なのは考えなくてもわかるが」

「あ、それは俺も思います」

『マスター、一応否定をするべきかと』

「いや、本性バレてるし」

などと、言外にお前は人でなしだと言われるタクマはあっさりとそれを受け入れる。鬼子としてヒトの輪に混ざれないのは事実だが、かといって己が違う事を否定はしていないのだ。

それが、タクマの人生の最初の師から教わった生き方のコツである。

「まあ、深く悩むなよ嬢ちゃん。外れてる奴つてのはそうとしか生きられねえんだ」
『……忠言、痛み入ります』

そんな会話を聞きながら、なんで自分のような者からメデイのような真つ当な人格が生まれたのかを幾度目かもわからない疑問を浮かべるタクマ。

だが、気にしてもしようがないともいつも通りに思う。心など、考えて分かることではないのだ。少なくとも14歳の少年であるタクマには。

「それじゃあ、質問はあるか？ まあおつちゃんとしては何で感覚で分かる力を学ぼうとしているのかつてのが気になるんだけどさ」

その言葉に、タクマはそういえばと思いつく。そもそも強くなるうと思つたのは相打ちすら取れなかったからだ。

そこで、目の前の歴戦に話を持ちかける。案外対処の仕方も知っているかもしれない。

「さつきゲート使いに殺されかけまして」

「へえ、そいつはどんな力だ？」

「透過ですね。防御を透過して直接傷をつけたり、壁を抜けたりしてきました。多分ですけど、剣もすり抜けられます」

「あー、一発芸型だな。多分近距離の中、長期戦型のトリッキーな奴。ネタを割れば楽にやれるぞで」

「一発芸って酷い言い方ですね」

「どうか、初見で一発芸型からよく逃げ延びたな。ハマれば確殺なのがその手の連中なのに」

「こつちも初見殺し使いました」

その言葉にクツクツと笑う師匠。心底楽しそうな顔だった。

「本当、コイツに『守る才能』がありや全部賭けたんだけどなあ……まあ、それも巡り合わせか」

「師匠？」

「こつちの話だよ。あと、今日はこのくらいにしておけ。東通りから騎士団が近づいて来てるぞで」

「何で騎士団って分かるんです？」

「感じろ」

「精神論ですか……なんか難しいですね」

『あ、なるほどこのパラメータですか。理解しました』

「メデイさん凄えな」

『感知しているのはマスターです。そのパラメータを認識していないだけかと。いえ、全員を認識しているがゆえに敵意区別がついていないのだと私は考察いたしますが』

「良いから出てけ出てけ」

「今日はありがとうございました、師匠」

その言葉と共にロビーへの転移を始める。

「そういえば、師匠って俺の剣どう思ってます？」

「……綺麗な殺しの剣だよ。ただ、化物殺しの剣じゃない」

「……ありがとうございます」

その言葉を最後に、転移は終了した。

「メデイ、気づいてたか？」

『はい、ダイナ様は明らかに2周目の記憶を覚えています』

それは、確かにあった違和感。潜在的に覚えているというものはある。それは、3周目に初対面だったアルフォンスとの出会いがそうだった。

それに、ダイナとは3周目でも偶然出会い押しかけ弟子を申し出ている。なので自分を弟子と呼ぶことには不自然さはない。

だがしかし、剣を合わせたのはあの日の武器屋だけなのだ。

「……まさかの重要NPC?」

『かもしれないですね、後ほど動画で確認してみましよう』

その言葉と共にロビーに残っているプレイヤーに話を聞く。

今回の周ではアルフォンス側について、王道通りに謎を暴くという方針に決まったようだ。そこから大きなグループは取り調べを受けた者たちの動きから様々なアプローチでコトに当たると

「で、なんでヒョウカはここに居残り?」

「タクマくんなら何かするだろうから待ってたのよ。どう? 楽しかった?」

「師匠に会って、ライフフォース生命転換のことを教わってきた。あの人やっぱ底知れないわ。知識に乗ってる経験が違う」

『まさしく歴戦の猛者ですね』

「珍しく普通ね」

そうして、タクマはヒョウカにもライフフォース生命転換やゲートのことについて説明する。と言ってもほとんどメデイの語りだったが。

「ねえ、それってゲームの設定の話？」

「多分違う。ゲームの中で傷ついた魂が成長するってんなら、ゲームで戻れなくなつた魂もそうなるだろうよ」

「……それは、怖いわね」

「本当にな。まあ、使わないで済むならそれでいいんだけど……俺含めて仲間連中は皆無自覚に使いそうだな。ヒョウカから伝えておいてくれ」

「ええ、わかつたわ。それじゃあ、今日はもう暇なの？」

「もっぺんアルフォンスの所に顔出したら寝るつもり。今日はなんにも無さそうだし。暗闘って感じだからな」

そうして、有り余るポイントを使って衣装替えをしたヒョウカ。

見た目だけを見ればそこそこ名家の娘のようだ。空色のシャツに薄いピンクのパンツ、その上に高そうな生地の白いカーディガンを羽織っている。

見た目だけなら、清楚系とも言えなくはない。口を開けばすぐにその邪悪さに気づくだろうが。と、タクマは思い。

ニコリとの擬音が似合いそうな完璧な仮面の上で作られた笑顔で睨まれた。

「見た目くらいは取り繕つたってバチは当たらないでしょう？」

「まあ、否定はできないけどさ」

『無理にヒョウカ様のイメージから離れた服を着るのはいかなものかと。作戦とはわかりませんが』

「作戦？」

その言葉に、いつも通りの邪悪な顔に戻ったヒョウカは言った。

「私は目立ったからね。顔も雰囲気も覚えられてもおおかしくはないでしょう。なら、少しは誤魔化さないと」

「珍しく狡いな」

「だってタクマくんが普通に殺されるんでしょ？ そんな連中に襲われたらわたしは2秒で死ぬわよ」

「……まあ、ヒョウカだものな」

ちなみに、御影氷華の運動神経は皆無である。育まれる幼少期に全く動かないで過ごした為に、凄まじいレベルの運動音痴となっている。

幼少期からVRで殺し合いをしていたどこぞの明太子とは違うのだ。

尚、そのタクマは持久力が死んではいるが、肉体の精密動作に関しては各種運動部などを上回る。リアルで投げた缶をゴミ箱の穴ホールインワンさせる中学生はタクマくらいである。

「それで、俺はお前の護衛をすれば良いのか？」

「ええ、行きましょう」

そうして、二人は危険なデートへと向かうのだった。

闇夜の襲撃

午後10時。電灯は無く明かりの少ないこのソルディアル王国では出歩く者は少ない……というわけではなかったりする。

流石に小さな子供が出歩く事はないが、魂でモノを認識できる者達にとっては、明かりの有無などさして関係はないのだ。

そんな事を、ある程度の情報を持つて実際に歩いてみる事でヒョウカは理解した。

「……なるほど、アバターは魂が露出している姿で、魂を見ることが、魂で見られることを無意識に行なっていたから夜目が効く。気持ち悪いくらい現実にも繋がる設定ね殺気の感知とか」

「いや、殺気の感知とかは技術だから。こんなファンタジーと一緒にするな」

「そもそも殺気とか感じられる方がおかしいと思うのだけれど」

「あのな。それ雑に言ってるだけだから。風の動きや視線の偏り、音の不自然さに力を入れる動き、そういうのを総合的に見て殺気って言ってるんだからな？」

「なんでそんなに多くのことを一瞬で判断できるのよ」

「そりゃ、経験が導く思考を超えた合理的判断とかで」

「それ勘じやないの」

などと会話をしつつも位置取りを整える。こちらを見ている男女1組。無骨な大男にどこかふらついている小柄な女性だ。

戦士団の生き残りの二人に思えるが、確信は持てない。

雰囲気が違う上に、あからさまに獲物を握り続けているからだ。

「タクマくん、何かやった?」

「まあ、今日ちよつと迷惑をかけた」

などと言われながら、先ほど覚えた魂視を試してみる。生命ライフフォース転換を目に集中させ、ピ

ントを合わせるイメージだ。

そうして視ると、手に持っている短剣とショートソードにあからさまな違和感があった。

他人の魂、そう言った方がいいかもしれない何かだ。それが、獲物から逆に身体に入っているのが視える。

「……洗脳能力?」

『可能性は高いかと。しかし彼らの本来の武器は大盾と弓。それを持たないということ
は、意識はさほど残っていないかと』

「面倒そうね。私はロビーに戻る?」

「いや、30秒守れるとは思えない。ある程度自力で逃げてくれ」

「どうしてここで、俺が守ってやる！」とか言えないのかしらこの男。そういうところも実は好きだけど」

「無条件で好感度上げないで下さいなヒョウカさん」

そうして、ふらりと前に出てくる二人。

生命転換ライフフォーメクスを込めた剣がタクマへと迫る。

だが、その剣は鋭くも型通り。一目でその剣の短調さが見える。

だが、その剣に込められた魂の力は強い。

男の剣を弾こうとしたタクマは、その剣の重さに逆に弾き返される。そして、その隙を狙った女性の短剣による刺突が放たれる。

その短剣に込められた魂は強く、掠ったら致命傷になるとタクマの勘は告げていた。

だから、その持ち手を蹴り上げた。

多少体勢が崩れた程度では、考えなしでの型通りでしかない剣などタクマにはさほど脅威ではないのだ。対人戦の経験値は彼の人生の半分以上を占めているのだから。

そうして、弾かれた体を戻して二人とまた向き合う。追撃がないのが不自然だったが、洗脳ライブラフォーメクスの類だろうと当たりをつけて一呼吸置く。

「……生命転換の時点でもまだ慣れないな」

『ですが、力は割れました。男性の方は重力操作で剣を重くする事。女性は、一撃での必殺の使い手でしよう』

「ゲートは、使つて来るか?」

『おそらくないかと。彼らは天狼との戦いでゲートを開きませんでした。恐らくそれが騎士団と戦士団の違いなのでしょう』

「開けないから戦士団なのか。まあ順当だな」

そうして、もう一度やつて来る剣戟と刺突。

今度は迷わずに剣を振るおうとして、タクマは違和感に気付く。

どうしてこんな程度に奴を刺客に放つてくるのかと。

そうならば、敵狙うは仕留めたと安心した瞬間だ。

「ヒョウカ! お前ならどこから狙撃する!?」

「……これは恐らく遭遇戦よ。だから狙撃ポイントは簡単に入れる単純なところ。周囲の建物の屋上を警戒して!」

「了解!」

『見つけました! 6時方向! まだ登っている最中です!』

「なら、ポイントに着く前に!」

回避した二つの剣戟を尻目に、タクマは剣を振るう。

「剣を直接弾くのは、どちらにも能力的に難しい。片方は重過ぎて、片方は台風のようなものだから。なので、手を砕く。本来ならなら操られているだけの人に後遺症を残したくないが、そうも言っていられないだろう。そうタクマは思う。

何故なら、後ろには守ると決めた人がいるからだ。

攻撃を振るい終わったそこに、タクマはロングソードでの腹打ちを叩き込む。流れるような連撃だった。

もつとも、籠手があれば無意味な攻撃だったがこの二人の服装は普段着だ。問題はな

い。
『位置に着きました！』

「ヒョウカ！」

「とつくに逃げてるわよー！」

その言葉に、ちゃっかりと狙撃地点から死角になっている場所に逃げているヒョウカを思つて動き出す。

視線は合っている。敵方は、闇に溶けるような黒い衣装に仮面。その中で矢を抜き打ちで放つて来る。

恐ろしい量の魂を込めている抜き打ちの連射だった。

数は5射その三本は確実に急所を狙っており、もう2射はそれを回避した先で当たる

ように放たれている。

この場合の正解は、こちらの放デイスチャージ出による矢の迎撃。しかし、それだけでは何も無い。地理の事を考えると間違いなく逃げ切れはしないだろう。

ならば、ダメージ覚悟で突っ込むのがタクマにとつての正解だった。

全て躲すのは不可能だと判断して、致命の一撃を弾きつつ身体を縮め、残りの二射を躲そうとして

殺意と共に、魂が何かの干渉を受けたのを感じた。

「ガッ!?」

『マスター!?』

タクマの剣は、命を狙う一矢を弾いた。しかし、その瞬間に走った激しすぎる痛みに動きを止められて、残りの2射が確実に臓器を貫いた。

それによりタクマは絶命し、光となって消えていった。

「……今のは、何かのネタがありそうね」

そう呟いたヒョウカは、ここには自分も無駄にデスペナになるだけだと感じ早急にロビーへと転移しようか迷った。しかし、さしてここで命を落とすリスクが無いこと

と、タクマが自分以外に殺されて普通にムカついていることを鑑みて、いつも通りに博打に出る。

「……角度的には、こうね。生命転換、放出」

ライフフォース、デイスチャージ

マテリアライズ

スリンガー

そう言いながら、つい今ポイントを使い物質化した投擲機を使い、拾った石で狙いつつ。

その石に、相当量の生命転換を込めながら。

ライフフォース

「即席の閃光手榴弾……のつもりだったのだけれど」

そうして、手元から離れたことで減衰した生命転換は、

ライフフォース

の力を発揮した。ヒョウカの持つ強すぎる魂の力によるものだった。

起きた現象は、光と氷結の二重奏。輝きに目が焼かれた者を凍らせる力が襲ったのだ。

これまでヒョウカが自覚していたのは光の力のみ。故に敵方狙撃手の両眼を焼き潰そうとしたのだった。

「……まあ、結果オーライね」

そんな言葉を呟きながら、もう一つ石を拾って投擲機にセットし、そこに命を込める。

そして、これまで押さえ込んでいた生命転換を開放し、目に見える威圧感を示す。

「二つ、言っておくわ。私手加減は苦手なの」

その言葉と共に、悠々と、自信満々に出てくるヒヨウカ。

その姿を見て、狙撃主は引き絞っていた弓を戻し、よるの闇に消えていった。

「……一体どういう事だ？」

「ああ、手が砕かれても喋れるのね。なんでも剣が洗脳の元のそうだから、捨てて置いた方がいいわ。それで、貴方達は どうしてタクマくんを襲ったの？」

その言葉を話すヒヨウカの顔には、氷のような笑みしか浮かんでいなかった。

それは、愛が故にならざれほどにも非情になれる女の、少しだけの八つ当たりであった。



「……痛かった」

『お疲れ様ですマスター。あの激痛の理屈はお分かりになりましたか？』

「わからない。正直痛みが酷すぎてな」

そうして、素振りをして体の調子を整えながらタクマは待つ。自分がデスペナした後には大体博打に出るヒヨウカの結果待ちだった。

そうしていると、そこまで時間をかけずにヒヨウカがロビーへと転移してきた。

「おかえり、長かったな」

「ええ、少し話をしたからね」

「……ああ、戦士団の二人か」

『疑問、彼らはこれからどうなるの？』

「さあね。けれど、助けたお陰で大事な情報をくれたわ」

そう言ったヒョウウカは、ニヤリと不適に笑いながらこう言った。

「マリオネティカという道具。それが、今回の敵の使っているネタよ」

日常と考察　マリオネティカ

マリオネティカ、それは王国に古くから伝わる邪悪の魔道具。

かつてまだ世界にこのソルディアル以外の国があつた頃、魔人国にて猛威を振るつた遺物の一つだ。

その力は、魂への寄生操作。

ライフフオーース
生命転換を逆流させて人形のように操る物。

それにより、3代目魔王の治世は荒れに荒れた。戦争もいくつも起こし、内乱も日常のようにあり、多くの人が死んだ。そして、その全てがマリオネティカの持ち主に利するよう操られていた。

まるで人形劇のように。

しかし、それは当時の聖剣使いがマリオネティカを破壊する事で収まった。

各国に伝わっている聖剣使いの伝説の一つである。



「んで、それがなんで今の王国にあると?」

「さあね、復元されたのか知らないけれど」

「じゃあ、なんで分かったよ」

「下手人が言ったらしいのよ、 “起きろ、マリオネティカ” ってね」

あからさまにあからさまなその言葉に、タクマとメディは疑いの目を向ける。情報が欲しい所にコレとは、情報が軽すぎる。

『……ミスリードでは?』

「どっちでも良いわ。大筋は合ってるでしょ」

あつけらかんと言うヒョウカ。確かに大した情報ではあるが、それだけで決まるような情報ではない。なにせ、証拠はない。証言もマリオネティカという単語のみ。そして、操られていた間の記憶も曖昧。

謎解きのとっかかりという事なのだろうか、そうタクマは思った。本人に謎解きに関与するつもりはかけらもないけれども。

「それで、戦士団の二人はどうなってるんだ?」

「そのままだと殺されるから、適当に逃げておけと言っておいたわ」

「そこまでか?」

「私なら殺すもの」

「……納得した」

その言葉と共にウィンドウを見る。デスベナルティ時間の確認だ。

この《Echo World》におけるデスペナルティはワールド転移の時間までの制限のみ。運営曰く生命転換ライフフォースの回復のための時間だそうだが、それがどうなのかはまだ検証できていない。プラクティスの間にスタボロにされて死んだ時の方がデスペナは長いらしいとプレイヤー達は聞いているが、それくらいだ。

タクマのデスペナルティは残り1時間ほど。綺麗に死んだからさほど重いペナルティ現在時刻は22時と少し。明日寝不足になるがもう一度ワールドに行けなくはない。

「どうする?」

「やめておくれ。私そろそろ寝ないと体調に響くもの。今回は割と緊張してるのよ?」

「成功率9割超えてるのに今更何言ってんだよ。ゼロ割をホームランにした女が」

「……だからよ。普通に手術して治るだなんてやった事ないのよ」

この御影氷華という少女の経歴、というか手術歴は異質である。異端である。

なにせ、これまでの手術において成功率4割を超えたものを受けたことはないのだ。しかし、理論上可能であると開発されていたが、誰にも耐えられなかったという術式の成功例になった事すらある。

そんなものを12回も行っているのだから、それは当然に生存率0とみなされてもおかしくはない。

だからこそ、死んでも死なないのだ。

だがそれは、普通の、成功して当たり前前の手術を受けたことがないと言うことの裏返し。

本当に柄にもなく、努力して一厘でも生きる可能性を高める必要のない手術を前にして、Mrs. ダイハードは緊張していた。

成功率0割の手術に遺書を残さないで挑んだ彼女が、本当に珍しく遺書を残し、遺産分配の手続きもしているくらいには血迷っていた。

もつとも、そんなのは笑い話にしかならないと周りの皆は思っているのだが。

「じゃあ、また明日な」

『術後の経過観察期間は終わっていてもまだなにがあるかはわかりません。ご自愛を』
「ありがとうメデイ。また明日ね、タクマくん」

■ □ ■

そうして翌日。タクマがバイクで登校していると陰気な気配を漂わせている少女を見かけた。

筆ペンこと、柴田奏である。

良い人のR.Pとして、その姿を放っておくべきでないと判断したタクマは、その横にバイクを付ける。

「乗ってく？」

「……お願い」

『では、サイドカーを出しますので少しお待ち下さい』

そうしてメデイの操作により展開される特殊カーボン製のサイドカー。普段は折り畳まれていたが、操作一つで展開できる優れたものだ。

「大丈夫なの？ コレ」

「案外快適らしい」

『耐久性についても、車に轆かれても砕けず、内部に影響はない事は実証されています』

「凄いねバイク」

「すげーだろバイク。筆ペ……柴田も持つてて損は無いと思うぞ」

「……けど、高いでしょ？ 今はなるべく節約しないと」

そう告げる理由は一つ。彼女は今尚一人で家に住んでいるからだ。家族を取り戻す為にと命をかけて戦うと決めたから。しかし、今は当然収入はない。

だが、彼女が折れるとは欠片も考え付かない琢磨は無自覚に奏を狂気の道へと誘う。

「多分だけど、戦うなら自由に使える足は要るぞ」

そんな、善意に見える言葉と共に。

「なら買う。教えて」

「シキシマの新しいモデルが良いな。FGシリーズ」

そう告げると、琢磨はARウインドウを展開してカタログページを見せる。

そこには最新モデルにしては手頃な値段のバイクが映されていた

「……そこそこ高い」

「買えるか？」

「大丈夫。貯金はある」

「マジか」

「大会荒らしてて良かった……コレで、戦える」

そう呟いた奏は、しかしその意気に反してあくびを一つ噛み殺していた。

『差し当たって必要なのは、睡眠でしょうか。顔色からみて寝ずに《Echo World》をプレイしている事は見えています。今の柴田様の体調ならばかなりの確率で眠ってしまうのですし、保健室に赴いては？』

「……そうする。ああ、それと」

サイドカーに乗り込んだ時に、そう呟く奏。

「タクマもメデイも、カナデで良い。向こうでも名前を変えた」

『承知しました、奏様』

「あんま無理すんなよ、奏」

その言葉の中には、メデイが感じ取れて、琢磨の感じ取れない違和感があったが、その内容について思い至る事はなかった。

それはそうだろう。琢磨もメデイも昨日1日のカナデのプレイを見ていないのだから。

奏は、ずっと見守っていた。記憶を無くして新しい環境に置かれ、それでも惹かれ合う実の母と義理の父の事を、ずっと。

それが、カナデなりの戦う為の儀式だった。

「じゃ、飛ばしていくぞ」

「意外と良い座り心地。けど眠れない」

『簡易ガイドカーですから。そこはご容赦を』

そうして二人は、学校へと向かうのだった。



普段通りに授業を受けて、普段通りに家に帰る。そう思った時に琢磨の端末にメッセージが届いた。足柄からだ。

「昨日の成果報告はこのフォームで？ ……うわ、見やすい奴だ」

『恐らく、実際の捜査にも使われているモノでしょう。許可を取っているのでしょうか』

「？」

「……まあ、いいか。メデイ、自作の地図データ出せるか？」

『はい。穴だらけですが昨日のルートは見せられます。参考程度ですが載せておきましよう』

「そうしてメデイが別窓に出したのは、昨日の道を辿った距離と方向だけで作った地図だ。」

「こうしてみると、あからさまに回り道をさせられているのが良く分かる。だが恐らくそれは監視網を潜り抜ける為の策だったのかもしれない。そんな事をタクマは思った。」

「それと騎士団の生き残り、というかアルフオンスとの会話を書いた」

「完全プライベートの酒場の件は触り程度に描き、」

「後は、なんか激痛を伴う狙撃で殺されました。詳細はヒョウカに引き継ぎます、と」
「そう送信すると、すぐに氷華が言葉を引き継ぐ。」

「マリオネティカという魔道具を犯人は使っている事、剣などを用いて魂を犯す洗脳道具だと。」

「その手のモノにタクマは殺されたのだと。」

「ものすごくザツクリとした説明である。と、琢磨はそう思った。さては寝不足気味だとも。」

それと大グループの方針を書き記してヒョウカは言葉を終えた。

ここからの報告は、琢磨にとって完全に未知のものだ。奏、裕司さん、帝大組、足柄の話だ。

しかし、そのうち奏と裕司と帝大組の話は同一だった。

現実で殺された人達は、ゲーム時間で経過していた数ヶ月分の記憶を持つてソルディアルの住人として過ごしていると。数がそう多くないから今は歓迎され、多くの人が入植者として雇われている。

その上、才能のある人は戦士団にスカウトされたりもしているそうだ。

もしかすると初日に殺させてしまった鉄パイプの男、保科もその辺りに居るのかもしれない。そんな事を琢磨は思う。

そして、足柄が出した情報はプレイヤーのもの。

足柄は騎士団に捕まるなどの件、始まったプレイヤー狩りの件について調べ始めている一団と出会ったそうだ。

一団に大将はいないが、足柄との情報共有に当たったのは先日の戦いに生き延びたプリンセス・ドリルだ。

その一団の中のそれぞれが、第0アバターが見える人、そうでない人について調べていた。

現状は、戦う者の殆どが見えるが、市民には見えない。それは現実で死んだと思われる者も同様だった。

しかし、数人の騎士が第0アバターを見ることが叶わなかったという。

それは牢からの脱走に成功した者の話だから信じるに値する情報だと足柄は述べた。なにせ、城から逃げる寸前で見つかったのに無視されてしまったからだ。

確実に目線があった。にも関わらず完全に意識の中に止められなかった。その騎士も脱走者の探索に当たっているのだ。

「……魂視が使えるかの違いか？」

『否定、それでは戦士団の方々全員見える理由にはなりません。あれは高等技術なのですから』

「なら、その見えない人について調べるのが先……待った、アルフォンスに見て貰えば済む事だな」

『何か考えでも？』

「オカルトな話だよ」

そう言つて琢磨はあまり嬉しくない推論を述べる。そうであるのなら、誰を殺せばいいのかとても悩むことになるのだから。

「生き返った奴なら魂が見える、そんな事をさ」

それが成立することはつまり、蘇った戦士達はもうどうしようもないほどに終わっているという話なのだから。

カナデとの街歩き

今日も今日とて《Echo World》へのログインをする琢磨。VR剣道ではランカー間近だったのを少しだけ惜しいと感じているが、一位の一敗以外全勝の梅千権三郎の座にはまだまだ遠い。

なら、気分転換も必要だろう。

琢磨は決して表情には出さないが、命がかかっていることに対して軽すぎる意志の元動いていた。

「今日はよろしく、カナデさん」

「……行くよ、餌」

「了解」

それに対して筆ペン改めカナデは、今にも人を殺しそうな真剣な表情のまま硬かった。しかし、それだけの殺意を内包しながらもその空気に違和感はない。

そして、それでは読まれると感じたカナデは、服装を変えることで対応している。

それは、空気をよく通す紺色のマスクだ。

マスクを纏ったカナデは、さながら女盗賊のような様相にまとめられている。そし

て、その服の内側に数多の暗器を仕込み戦うためにできることをやっていた。

「転移」

そして二人は移動する。今回の戦いにおいて二人の役割は遊撃だ。

アルフォンスと繋がりのあるタクマが餌となり騎士の中の“殺しに来る連中”を釣りだして捕縛する。あるいは始末する。

生来のもとの覚悟によるものでは根本は違うが、どちらも殺しに待ったをかけないからこそそのチームアップである。

そうして、タクマは歩き出す。記憶にあるルートをそのままになぞるように。

「しっかしこんな餌に引っかかるかね？」

『敵の内情次第でしょう。余裕があるなら尾行してくる、そうでないならこれまでと同じです』

「……まあ、困だし考えないでいいか」

『思考を放棄しないでください』

などとタクマは自然体でふらふら歩いていると、街の様子が随分と変わっていることに気づく。

昨夜は暗かったがために気づかなかったが、露天の中にちらほらと日本風のモノが現れている。その屋台など明らかにラーメン屋だ。

タクマは気になったので少し覗いてみると、そこにあるのは紛れもないラーメンだった。色味からしてしようゆベース。ファンタジー世界にそぐわないが、日本人としてはありがたい限りである。

と、ここで気の向くままに食事にしてもいいのかもしれないが、あいにくとタクマには今、^{ポイント}金がない。とある機能をアバターに追加するのに残りポイントを全て使い切ってしまったからだ。

「……こんななら現金ヒョウカに預けなきや良かった」

『しかし、拉致されてしまった場合邪魔ですよ？ 硬貨なのですから』

「それなんだよな」

そうして、脳内マップにその屋台の場所を記憶してタクマはまた歩き出す。

次は、入植者たちがテントを張って生活していたというエリアだ。ユージ達が集めた話では、ある程度の間このあたりの家が壊されて空き地になったエリアに人々は住んでいたのだと。

そして、すぐに環境を整えて今は持ち主のいない家々をグループにまとめた人々に渡したのだとか。

ちなみにその家に入れる人々をなぜグループにしたのかは単純、家が大きいからだ。渡された家が今は亡き貴族の館などであるために。

そしてそこに住んでいる年配の使用人の方々に監視とこの国のことのレクチャーを頼んだのだとか。

スタボロになつてもまだ強かなのはこの国の良いところだそうタクマは思った。

と、わざと思考に隙を作っていると嫌な視線がちらついた。

メデイの魂感知で見ると、その魂には強者のプレッシャーがない。入植者に反対する市民か何かだろうか？ とタクマは思い、警戒をしつつもゆつくりと無視をしようとした時に石を投げつけられ、それを軽く払おうとしたその時に

死ぬ前に感じた、魂への干渉を感じた。

瞬間的に生命ライフフォース転換を発現、風の刃で石を弾いて全力で後退する。

『マスター！』

「わかつてる！ 五感は正常、痛み無し！ だが、確かに狙われている！」

そうしてタクマが索敵に移ろうとした時にまたしても投げられる石。今度は2つ、どちらもなかなかのスピードだった。剣で弾くと死ぬだろうことはわかっているために、またしても回避のために移動する。

そうしてルートを外れていると、

「今度は大人かよ、操られては……いないな」

そうして、タクマはいつの間にか囲まれ、多くの人に石を投げられてしまう位置に追

い込まれていた。

多くの大人たちは、皆一樣にこの世界の住人の服装。だが2、3人相当鍛えているのだとわかる者が混ざっている。

おそらく彼らがこの騒動の首謀者役だろう。

「貴様、稀人のタクマだな？」

「お前のせいで俺たち入植者は大変なことになってんだよ！」

「責任を取れ！」

意味も分からないことへの責任を取らされることになるのは御免だが、ここは情報収集をする場面。堪えよう。

そう、面倒だから全員殺すという選択肢が頭に浮かんだタクマは一度深呼吸する。

いまここには、カナデの目もあるのだ。そうそう無様は晒せない。

なのでタクマは

「質問です。俺が何をしたんでしょうか」

「とぼけるな！」

「お前が偽王子に取り入ったせいで、俺たちは家を追われたんだよ！」

この時点で話がややこしく、かつ面倒なだけだと判断したタクマは「あ、そうですか

お疲れ様です」と言つて第0形態へとアバターを戻す。

それを目で追っているのは鍛えている3人。今度はタクマもカナデも彼らの顔を正しく認識した。

「消えた!?!」

「見えてないだけだ! 魂を込めた石を投げろ!」

そう言う人と、明らかに俺を見て狙つて石を投げた人の二人が大きく動き、対して最後の一人は淡々と、しかし逃がさないようにしている。

周囲に逃げ込める建物は無く、迎撃するしか道はない。

タクマには

「ライフフォース デイスチャージ生命転換、放出」

タクマの背後から放たれる水が弾丸となり、投げられた石のすべてを弾き砕く。

心の在り方が攻撃的なものに変つたカナデの技である。

「もう一人!?!」

「稀人だとは限らない! 臆するな! 怒りを示せ!」

「とりあえずお前は黙れ」

タクマは、背後からの水を感じた瞬間に体を屈めて前に進み、包囲網の中央にいる首謀者の男に殴りかかる。しかし相手もさるもの、反射的に動いたガードにて意識を削

り取る顎を揺らす拳は不発に終わるかに見えた。

「グツ!？」

しかしその瞬間に二人の体に走る激痛が原因で、それは覆った。

覚悟をしている者とそうでないものに。

「一回それで死んでんだよ、こっちは。けれど痛みは痛みでしかない。耐えられるさ」

そう口では言うが、タクマの精神はたったの一瞬で相当のダメージを受けている。

普通は、痛みだけで人は動けなくなるものなのだ。生き物の生物的な機能として。それを無理やりに動かしたのだから、しつぺ返しは来るものだ。実際今から戦えと言われたら2秒と持たずに殺されるだろう。それがたとえ初めて剣を握った者でさえも。

だがそれは戦えばの話。首謀者の首に剣を添えて改めて交渉を始める。

「メデイ、任せる」

『はい、マスター』

殺意を示して威圧をかけるタクマ。研がれていないそれは人の不安を掻き立てる邪悪なものであり、本当にこれから殺すつもりなのだ。錯覚させるほどには真に迫っていた。

否、真であった。

『御覧の通りマスターはご立腹です。諦めて去るならばそちらの2名以外の安全は保障

します』

「仲間を捨てろつてのか？」

『そもそもあなた方は踊らされているだけでしょように』

「好きでこつちで踊つてんだよ俺たちは。元戦士団の皆は仲間だ。入植者に記憶はないが、絆はあるんだよ！」

その言葉に否と唱える者はいない。強い絆と言うべき関係がそこにはあった。

だからこそ、彼らは動き出した。

この状況でタクマを折れなければ入植者に未来はない。それが誰よりもわかっているのはこのソルディアルに生きていた記憶を持つ彼らなのだから。

「皆、下がってくれ。後は俺たちがどうにかする」

「オレたちに託してくれよ。仲間として」

その言葉と共に前に出る二人。そしてゆっくりと去る人々。

そうして落ち着いたところで、改めて話を再開しようとする。だがその前に確認しておかなければならないことが琢磨にはあった。

「……この激痛は誰の仕業だ？」

「激痛？」

その反応にとぼけたような感じはない。

『マスター、別口ではないかと』

「そう来たか、また頭使うようなことになりやがって」

「今、補足されてる？」

『おそらくは』

カナデの疑問にメデイが答える。おそらく昨日タクマを殺した暗殺者はまだ近くにいる。今もタクマなら剣を合わせられると感じているがゆえに狙撃を仕掛けてこないのだろう。タクマはそう考えて体の力を抜いていた。いつでも最高速にたどり着けるように。

そうしていると、タクマのた魂に干渉されている感覚が立ち消えた。どうやら仕掛けることなく逃げ出したようだ。

「じゃあ悪いんだけど、俺が狙われる本当の理由を教えてください。戦士団の人」

「……表の理由は嘘ではない。稀人の大多数が今生きている王子を本物だとして動いているからな。いつ消えるかもわからない戦士団を頼れはしないのだよ。だがもう一つ理由はある。……どこかはわからない。だが国の上層部に稀人を消したいと思ってる人間がいる。その的になったのが先の戦いで王子と友誼を結んだ君だった。という話だ」

「……国が相手かよ」

『人気者ですねマスター』

その、欠片も後悔していないメデイの言葉に“同感だ”とタクマは苦笑する。

「余裕？」

「個人として楽しみたかった。人の命がかかってなければなあ……」

などと会話しながら多くの具足が石畳を踏む音を聞いてゆつたりと構えるタクマ。

戦士団か騎士団か、どちらにせよタクマ達にとって敵であることに疑いはないと思っ
ていたその時に。

「ならばその疑念、私が晴らそう。稀人とはいえ、私の友だ」

やってきたのは、生き残りの騎士たちとプレイヤーたちを従えているアルフォンス
だった。

傍らにヒョウカとじゅーじゅん、ユージが控えていることで稀人とそうでないことを
区別などしていないのだと言外に表しながら。

人魔サビク・アルフォンス

裏通りにやってきたアルフォンスと騎士達。そしてプレイヤー達。彼らは瞬く間に状況を終わらせて見せた。

それもそのはず。アルフォンスと直接繋がっているタクマは今回囮であり、騎士団と交渉をしに行つたのは道を教えられたヒョウカ達だったからだ。話の早い二人はすぐさま簡単な共闘関係を結び攻めの一手に出てきたのだ。

その目的は、シンプル。味方を確かにする事。

タクマの辿つた道筋を正確になぞり歩く事でヒョウカ達は味方である事を証明した。それをきっかけにして各地のグループで動いているプレイヤーを味方にした。

そしてこれから、王国内部の絶対に味方である人々を味方にする事で王国のシステムの正常化を図る事。それがアルフォンス達の狙いだつた。

自らの潔白は二の次であり、牢に入ることも覚悟の上の行動は、その志は、多くの人の心を打った。それが、アルフォンスの王道だつた。

そのような神速の軍備を整えたアルフォンスは、護衛として選ばれたタクマを傍に置いて、臨時拠点とした貴族の屋敷で書類の準備をしていた。

そしてそれが終わり一息着くタイミングをメデイが予測して、タクマがお茶を入れる。

タクマのそれはVRのミニゲームでやった程度の腕ものだが、アルフォンスはそこそこ飲める程度にはお気に召したらしい。顔を綻ばせている。

「とりあえず、お疲れ様？」

「正直人を連れているのには慣れないよ。やはり先頭に立って戦うのが性に合っている」

この屋敷は、元戦士団の三人のいた入植者グループの屋敷だ。

主犯格の三人は形ばかりの拘束をして入植者の方々に面倒を見させている。つまり当面の無罪放免だった。

アルフォンスは彼らの話を聞いた結果、戦うべきと改めて覚悟を決めたからだ。

彼の国を思う心は、その非道を許してはいない。

「しかし良いのか？ お前の護衛が俺で」

「生半な実力では邪魔でしかない。私の剣はそういうものだからな」

「……あのゲートだとそうなるか」

「しかし、君は違う。君とのコンビは不思議と合うのだよ」

『仮説ですが、心根が正反対だからでは？』

「ありそうだな」

「……僕はそう思わない。君は、鋭く研がれた剣だ。人の事をそういうのは違うとは思うのだが、僕はそう感じた。だから、剣と共に生きるソルディアルの血が馴染んだのだろう」

そのような高い好感度に違和感を覚えるタクマだが、ありのままの自分を見てそう感じてくれているアルフォンスには感謝しなかつた。

しかし、解せない点があつた。それはタクマの外付け良心回路でもあるメデイも同じ事。

敵がいるから殺す。それは理解できる。

だが、アルフォンスが矢面に立つ必要はない。アルフォンスは責任のある王族であり屈強な騎士であるが、それだけなのだから。

「……なんで出てきたんだ？」

「僕は、この政変は実際の所どうだつて良い。父上と母上が無事ならば国は続く。故にこの謀略の刃が僕止まりならば何もするつもりはなかつたさ……しかし、敵は存在しないはずのマリオネティカを使った。それは、伝説において死んだはずのシリウスを使ったのと同様にだ。僕はそれを何者かのゲートの力だと思つている。過去のモノを再現する力、だろうか」

「……本当になんでもありだな」

「ゲートとはそういうモノだ。タクマもいずれわかるさ」

『それなら、マスターにゲートの使い方をご教授をお願いしますか？』

「残念ながら、無理だな」

そんなメデイの声をばつさり切り捨てるアルフォンス。その言葉には、それができるなら苦労はないよ、というアルフォンスの、強いでは国全体の思いが乗っていた。

「ゲートのあり方はそれぞれだからな。風のように心を沈める者も、死ぬほどに心を燃やす者、あるいは普段の心のままだからこそ開ける者。様々なのだよ」

『なるほど、理解しました』

「じゃあアルフォンスはどうなんだ？」

「……正直、恥ずかしい話なのだがな」

そう言うて理由を呟いたアルフォンスは、顔を少し赤くしていた。

その理由が理解できてしまつて、どうしてここまでアルフォンスと息が合う理由が魂で理解できた。

アルフォンスは、仮面が厚い者なのだ。その仮面を己の肉にできた者なのだ。

だから、薄皮のようなものとはいえ仮面に人格を委ねているタクマとは合つてしまふ。そういう事なのだろう。

「さて、そろそろ休憩は終わりだ。真正面から行くでしょう」
「だな」

そうしてプレイヤー達に連絡を入れてアルフォンスとタクマは王城に向かう。

その背中に、多くのプレイヤーを引き連れて。



そうして辿り着いたのは王城前。不気味なほどに妨害はなく、ただ堂々とアルフォンスの軍勢は歩いていった。

「生まれ！、偽王子！」

「止まらぬ！」

若い騎士から投げかけられるその言葉に堂々と返すアルフォンス。その歩みに迷いはなかった。

しかし、そこに待ったをかけるのはこの城門を守る騎士隊の隊長。体はそう太くはないが、よく絞られている体付きだった。

手数で攻めるタイプだな、とタクマは思い、無手でどう対処するべきかを考えながら様子を見る。そこに害意はなくとも、おそらく必要はなくとも、タクマはアルフォンスの護衛役なのだから。

「逸るな若い。偽王子だろうが王子だろうがどうでも良い。何が目的だ？」

「これを宰相殿に届けに来た」

そうして劍に手を掛けずに互いに近づき見せられた書状。

そこには様々な条約に対しての回答が書かれてあつた。これからどこにどの権力が
回されるのかの草案が。

そして、*“自身は王位継承権を放棄する”* という言葉が載せられていた。

「……ああ、本物だろうが偽物だろうがこれなら関係ないな。良い手を考える」

「あいにくと私も私が本物だともう証明できないのでな。だからこう言う奇策に打つて
出る事にした。新しい友人の奥方はなかなか知恵者でね」

その言葉にタクマは内心で *“まだ奥方じゃねえよ何言つてんだヒョウカの奴”* と眩
き、『まだとは、半ば認めているのではないですか』とメデイの言葉に頭を抱える。

そしてその様子は、当の本人に笑いを堪えられながら後ろで見られていた。

「では、これを俺が宰相どのに届ければ？」

「ああ。だがこの話は色々と面倒だ。僕も護衛を一人連れて直接行く。……だれが敵か
分からないからな」

「あなたが敵である可能性は？」

「それは無い。そう劍に誓おう」

「わかりました、王子」

「そのこの国では最上級の誓いに受け入れた騎士はアルフォンスとタクマを城門の中に通した。」



タクマとアルフォンス、そして騎士は王城内を進み始める。

そして正門を潜ったその時に

「アルフォンス、王城はいつもこうなのか？」

「……そんなわけがあるか。隊長殿、ご注意を」

「お二人は何か感じましたか？」

その言葉にアルフォンスは「敵の影を」と返し、タクマは「死の気配を」と返す。

その言葉に違和感を覚えることはなく隊長は剣を抜いた。

「敵を見つけるまでは俺が」

「責任問題など私とタクマにすべて擦り付けてしまえば良い。抜くぞ」

「……王族つて連中はこれだから意味がわからん」

その言葉と共に隊長、アルフォンス、タクマの一行縦隊で進む。

そうして進んでいくに連れて隊長も意味が分かってくる。

内務官とも、衛兵とも全く出会さないので。

「どういう事だ？」

『既に敵の手に落ちていたのでしょうか?』

「それは無い……と思いたい。父上が戦う前にやられるとは考え難いし、戦ったのなら城のどこかしらは消し飛んでいる筈だ」

そう話しながら宰相の執務室へとたどり着いた三人は、ようやく動く者を見かける。

それは黒い影。それがするりと扉を開けて目の前に現れる。

そこにノータイムで斬りかかるアルフォンスと隊長。しかしその剣は恐ろしく柔らかい剣で受け流され、二人は手傷を負わせた。

たったそれだけで、二人は崩れ落ちて動かなくなつた。

「アルフォンス!?」

無言で攻撃を始める黒い影。タクマは即効性の毒だと判断して剣の間合いから離れる。

しかし、それは読まれていた。飛んできたのは暗器。口から放たれていたと思われる針がわずかにタクマの肌を傷つける。

それがきつかけとなり、タクマの体には痛みが走る。着弾する瞬間に感じられたのは先日自分を殺したときに感じた魂への干渉。

激痛の現象だ。

この瞬間タクマは当たりを付ける。この現象は痛みをバカみたいなほどに増幅させ

るものなのだ。故に予期せぬ激痛によるショックで失神したのだろう。

「いまさらこの程度―」

『マスター、強がりほどほどに』

実際タクマは初撃はどうにか防げたものの痛みで体の動きはおぼつかない。現状のタクマの“殺しの才能”の答えは逃亡一択だった。

眼前の黒騎士の剣の腕は自分と互角以上だ。それなのにこちらはかすり傷でも死に至る。故に、冷静な部分が絶対にはこの敵を殺せないという結論を出している。

だが、それでいいのかとタクマの中の何かが叫んでいる。それは薄い皮でしかなかった仮面が叫んだヒトのふりの声。

それはか細く小さなものだったが、今の状況でタクマに判断を誤らせるには十分だった。

「……やるぞ、メデイー！」

『はい』

そうして放つメデイの音響攻撃。それを覚悟して、否、覚悟させて切りかかるのはタクマ。

遊びはない。正真正銘正面からの薙ぎ払い。そしてその攻撃は

自身の放った音によるダメージが想像以上であったことで放たれずに、タクマの首は

撥ねられた。

それが、タクマの今回の事件における、負けてはいけない戦いで初めての敗北であつた。



デスペナルティになつたタクマは、それからのことをまだ多くを知らない。しかし、次々にデスペナルティになっていくプレイヤーたちの話によると

王とプレイヤーたちの多くを殺したのはアルフォンスであることが伝わってきた。まさかの偽王子だつたのだと。

そして次々に殺されていくプレイヤーたちの中で最も健闘したユージによるとアルフォンスの体にこんな名前が浮かんだという。

《人魔サビク・アルフォンス》と。

それから、タクマのデスペナルティは明けることなく世界は滅び、この事件の1周目は終了した。

タイムオーバー

第一回リザルト会議は、珍しい事に特に何もなく終わった。

行われたのはただの事実確認。「世界が滅びました!」と。

知ってるわそんな事! と叫ぶが、声にはならない。リザルト会議中は許されていない限り私語が禁止されているのだ。

「あいにくと今回は特に明らかに変わった事はありません。次はもつと独創的な発想での活動を期待します。……では、残響の響く夜にはくれぐれもお気をつけて」

そんな言葉と共に、管理AIのマテリアは消え去った。

そして、今回の戦犯であるタクマへの追及が始まる。

「面倒なんで動画見て下さい!」

そして2秒で大体収まった。

そもそもアルフォンス王子との繋がりができたのはタクマのフラインプレイであるのだ。しかしタクマはアルフォンスを守れなかった。功罪帳消しとまではいかないがそれなりに受け入れられていた。

……今回から本格的にプレイを始めたプレイヤー以外には。

「さすがに一人のミスでゲームオーバーってのは責任重いんじゃない？」

「明太子さん、あんたは詫びを入れないのか？」

「はい。俺が悪かったです。敵を甘く見てました」

そんな素直な言葉と謝罪に面食らったのかプレイヤー達は一旦言葉の刃を下げる。

「……あの化け物相手にそれだけとか責めるに責められないんだけど、なにこの子供怖
いよ」

一部動画を見て、タクマが戦った黒い騎士の強さを目の当たりにした者はそもそも責める気にならなかったのだが。それはそれだ。

タクマは順調に『やらかす子供』として見られていた。

「はいはいはい、今回はあんま得るものなかったけど、頭脳労働組は集まって作戦を練るよー。とりあえず司会進行はマスタードマスターで」

そう言った彼が上手いこと人を引き連れてくれたお陰で、今それが表に出ることはなかった。

「じゃあ、皆集まって」

そういうのはじゅーじゅん。否、足柄刑事。ピシリと引きしまるその空気はスイッチを切り替える『仕事のできる大人』だった。

「正直、今戦える人間は僕たちくらいだよ。生命転換ライフフオーズがないとまともな戦いにならない。

けど、大人としては僕は君たちに来ないでくれと言う。そこは変えられない」

「刑事さん、私は戦う」

「俺も、二度とあんな思いは御免だ」

その足柄の言葉に真つ向から返すカナデとユージ。それをやはり眩しくタクマは思
い、しかしじつと自分を見るヒョウカの目を見て背筋をピンと伸ばして薄皮の仮面を被
り直した。

「じゃあ、明太子はどうする？」

「戦います。理由は、薄っぺらいですけど」

その言葉に、足柄は少し不安気に肯いた。

「なら、今日はゆったりチャットでもしながら徹夜しようか」

「流石にヒョウカは寝ろよ？」

「分かってるわよ。死にたくはないもの」

そうして、一行はログアウトをした。

これから起こるだろう現実での戦いに備える為に。

■ □ ■

そうして、始まるのは中身のない会話。

それぞれが移動手段を準備して、いつ来るかもわからない異界化に備えていた。

しかし、その備えは空振りし、夜が明けるのもあと数十分となったその時に足柄の端末に連絡が入った。

「はあ!? 冗談ですよソレ!?」

通話しているタクマ達の事などお構いなしに叫ぶ足柄。こういう所がいまいち締まらないのがこの刑事ではあるのだが、今回はその声に焦燥感があった。

「明太子! 高速乗って千葉の北東方面! コレはちよつと洒落になってない!」

「千葉!?」

「マジですかソレ!?」

『確かに帝都付近でしか異界が現れないなどは誰も言っていないません! マスター、急ぎましょう!』

「了解。異界は今どうですか?」

「通信障害が起きてから少なくとも2時間! しかもだんだん広がるスピードが速くなってる! ……だから! 行ってくれ明太子! お前が一番速い!」

そうして足柄は前言を撤回した。

守るべきは大人のプライドではなく一人でも多くの命だと分かっているが故に。

「他二人はパトカーで拾って! 合流は今から示すポイントに! 。目的は機動隊が来るまでの時間稼ぎ!」

その言葉を最後に通信を一時保留にする足柄。

その画面を一瞬見て、自動運転で玄関の前に付けたバイクに跨ろうとしたその時。風人が、帰ってきた。

「……行くのか？」

「うん」

「怪我は、するな」

「……努力する」

「言い換える。死ぬな、死んでないなら俺が治す」

「それなら大丈夫、約束する」

たったそれだけの不器用な会話。しかしそこには確かな暖かさがあった。

そしてタクマは法定速度ギリギリでバイクを突っ走らせる。

「認められた！ 戦っていいんだ！」

それを、喜ぶタクマ。皮の内側の鬼子が見えている。

「……負ける気がしねえ」

『マスター、あまり調子に乗るのはどうかと』

「ちよつと嬉しすぎてさ！」

そうしてタクマはバイクで高速道路に乗って、突っ走る。

マニュアル運転ならではの無茶な機動も、彼のバイクは難なく答えてくれる。そして高速から千葉方面に降りようとした時に。

変わった世界の境界を見た。あまりにも大きく、強い。

『マスター、警戒ラインが異界の内側にあります。警察からも想定外の事態なのだと』
「大丈夫、どうせ殺すだけだ」

そうしてタクマはバイクを異界に突っ込ませる。

以前と違い体が、魂が表に出てくる感覚が長い。

境界が厚いのだろうか、そんな事を思つて。しかしどうでもいい事だと切り捨てて。

境界の向こうの異界を見た。

そこからは、何かが欠落していた。それが何かはまだタクマには理解できない。観測しているメデイにも理解できない。

しかし、このままでは不味いという事だけは理解できていた。

「行くぞー！」

そうしてタクマはメデイの感知する方向に全力でバイクを走らせる。

狼の気配はない。であれば別の何かだろう。そう思つて

しかし瞬間的に感じられた殺気に反応してバイクから飛び降りた。

そこに現れたのは、蒼炎の鎧騎士。

感じられる命は、アルフォンスのもの。一度見た、アルフォンスのゲートを使った姿だ。

そういう事なのかとタクマは思い、真っ直ぐにアルフォンスに向かい合った。

小細工は無用。隔絶した実力差はないが、隔絶した出力の差はある。

そしてあの鎧の強さを考えると風の剣による一撃必殺は不可能。先の死の理由をまだ解明できていない以上音響攻撃も選ぶべきではない。

故に、タクマは真っ向からの剣術勝負を選んだ。

「タク、マ……」

「悪いなアルフォンス、お前の命、ここで切る」

その言葉に、蒼炎の鉄仮面の内側のアルフォンスが笑ったような気がした。

そうしてタクマは鉄パイプを変化させた臆病者^{チキンソード}の剣を構え、アルフォンスも蒼炎の騎士剣を構えた。

「いざ、尋常に」

その言葉と同時に同時に踏み込む。

二人の距離は3メートル程。それをタクマは半歩詰め、アルフォンスは残りを詰めた。

受然たる出力差だ。しかし、タクマはその剣を受け流す。柔らかに、丁寧に。一度見たあの黒騎士の剣理だ。

そして、タクマはアルフォンスのゲートの弱点も同時に理解する。

出力が上がっているだけで、それを動かす反射神経の類は上昇してはいない。

故に、技のキレ自体はアルフォンスのものを一つ落としたかのようなものだ。

上昇しすぎた力のコントロールを完全にできていないが為に。

そして、生まれたのは攻撃の隙。力一杯振り抜かれた剣を流された事で生まれたアルフォンスの鎧の隙間を狙って、風の刃を纏わせた剣を振るう。

その剣は確かにアルフォンスの左肘に切り傷を与えた。かなり深く。

だが、その出血はすぐに止まった。出血多量で殺すというのは通じないようだ。流石の生命いのちの属性の使い手だ。と、よく知らないにも関わらずタクマはそんなことを思考の隅で考えた。

再び構え直すタクマとアルフォンス。距離は共に剣の間合い。しかし、アルフォンスの頭には先ほどの人一人を吹き飛ばす攻撃をあつさりを受け流した柔の剣がこびり付いている。

対してタクマにも、あれがただの剣だったからこそ自分は生きていくという確信があった。光を纏うアルフォンスの奥義、閃光剣レイフレッドならば剣はともかく自分は焼き切れてい

ただろう。

だから、絶対に隙を作ってはならない。

それがあれば、目の前の騎士^友／鬼^人なら命を奪って見せるだろうから。

だからこそ、アルフォンスは動き出した。彼はゲートを使っている。それは魂を焼き尽くすようなものであるのだから。

時間が、ないのだ。

そうして放たれた突きは、神速だった。

しかし、その剣に乗っていた殺気を、意思を、魂を理解していたタクマは迷わずに踏み込んだ。

左腕を犠牲にして内側に踏み込み、アルフォンスの突きを体の回転の始点にした一閃にて首を跳ねようとする。

しかしその一撃はわずかに首を傾けて鎧で受けたアルフォンスによって防がれた。

だが、どちらも重症だ。タクマの左腕は吹き飛び、アルフォンスの首からは大量の血が流れている。

だが、そこで変わるのが生命の生命^{ライフフォース}転換の力。その自らを治す力によりアルフォンスは血を止めた。

それを見て、タクマは相打ちに持ち込む覚悟を決めなかったことを心底後悔した。

ここでアルフォンスを殺さなければ、彼はまだ望まぬ殺しをするだろう。それは、アルフォンスの願いに反する。

アルフォンスは、言ったのだ。



「私がゲートを開く時に思うのは、守る心だ。それは騎士の皆が当然に思ってることなのだが、私は、私の心はそう意識しないと守ると思えないのだ」



その言葉を心に思って、開きかけていた思いを開く。

だが、それは遅きに過ぎた。アルフォンスの豪剣はもう構えられ放たれる寸前だった。

しかし、その剣は振り下ろされる事は無かった。

蒼炎の鎧が解けていき、アルフォンスは不思議な笑顔の元で崩れて落ちた。ゲートの、時間超過だ。

「……コイツ、だからゲートを使って出てきたのかよ」

その言葉と共に異界が割れる。傷が、物が、世界が元に戻っていく。

しかし、タクマの心にあつたのは達成感などではなく。

救うために殺すしかなかった友人を、
救^えせな^なか^かつ^つた^たという事実だけだった。

仮説

戦いは終わった。

足柄刑事から聞いた話によると、犠牲者は三百人以上。目撃者の話によるとマンション一つが消し飛んだのだと。

光の剣によって。

それからアルフォンスはゆっくりと生き残りを探し出して丁寧に殺していった。

そして、しばらく経ってその人と目があつた瞬間に鎧を纏つて空を駆け、どこかに飛んでいったのだと。

タクマは、それがアルフォンスなりの抵抗だったのだと理解できた。

最初に全力を出す事で自身の力を使い切り、一人一人に時間をかける事で自分を殺し得る誰かを待ち望み、そしてそれを感じたからこそ切り札であり弱点でもあるゲートを使つてやってきたのだろう。

それがタクマであると確信していたのかは、わからないけれど。

「なあメディ。救われたな」

『はい。アルフォンス様が十全のコンディションであつたなら、私たちは死んでいまし

た』

「……助けたかったな、心くらいは」

『命は、いいのですか?』

「手遅れだろ、アレは」

ああなつたなら殺すのが情けだと、なんの迷いもなく割り切ってしまう琢磨はやはり人として終わっていた。

けれど、今はそれだけではなかった。

勝たなくてはならない時に、琢磨は勝てなかったのだ。

その事が、琢磨の心の中に火を付ける。鬼子としての殺戮本能と、まだ種火のような暖かいものに。

「メデイ、修行しようか」

『はい。では押し入り弟子を行いますか?』

「ああ。ダイナ師匠の謎とかはもうどうでも良い。強くなりたい。強く在りたい。自分の鬼を自分の意思で貫く為に」

『了解です』

そんな言葉を述べた琢磨とメデイは、バイクに乗って朝焼けを見ていた。



アルフォンスにより消しとんだマンションの中を見回っていた足柄と栗本。現地の所轄との合同作業だったが、足柄はすでに吐き気を堪えるのに精一杯だった。

その理由は、生活感だ。

つい先ほどまでそこに誰かがいた。そんな暖かさがずっと伝わってくるのだ。明日何をしようかと予定をARウィンドウに描いていた人もいる。

その全てが、帰らぬ人となっている。

「足柄、ゲームの中の方に専念するか？」

「……いえ、ここで踏ん張らなきゃ格好いい刑事にはなれないですよ」

そう言った栗本とて、余裕はない。それもそうだ。彼らは特殊技術に対してのカウンター部署である。このようなオカルトを相手にした経験は栗本にもない。

けれど、命を救ったというかけがえのない経験が、足柄より栗本を大人にしていた。自信という形で。

「……おい足柄、コレお前のゲームのマップじゃねえか？」

「僕のじゃないですけど、確かにこれは王都のマップですね。穴だらけですけど、主要な所は埋まって……前回死亡時間？」

「足柄？」

瞬間、エンジンに火がついたように思考が回転する。

これまでの4回の異界発生の中で、イレギュラーと思われるのはクリアした後の一回。

それを除いた3件に関連性を無理やりこじ付けた仮説を作り出す。

まず、1件目はタクマの元で発生した。1件目の異界発生の中心点に付近にいたのを偶然じゃないとするならば、それはプレイヤーを狙い撃ちにした何かだということ。まずはそこを仮定。

次に、2件目。監視カメラ映像網により見極めた中心点近くにいた人物はプレイヤーだった。ユーザー名は不明だが、その顔は先日の王都で見ている。記憶がなく話は聞けなかったが、称号により彼がエリートサラリーマンであることは調べが付いている。

2件目のゲームオーバーは、王都の外側からの狼の群れの襲撃と内側からの魔物の暴走。そんな中彼は商人プレイをできないかと試行錯誤していたと彼の仲間は言っている。

目の前のマップを見ると、商業施設の密集地があるのは城壁から王城までの中間。一度狼を躲せたなら、かなりの生存率があるだろう。

それこそ、最後の一人になれるくらいには。

そして今回の4件目。このプレイヤーはどうにも図書館に入り浸っていて歴史を調べていたらしい。それが原因か、あるいは本人の潜伏スキルが高かったのかはわからない。

いが、一度目の虐殺から逃げ延びている。

だからこそ、他プレイヤーと20分近く離れた死亡時刻だったのだろう。

そして一度目のゲームオーバーに戻る。あの周で最後まで生き残っていたのは、戦っていたのは琢磨である可能性が高い。というか、琢磨の録画データだけ1時間近く他より長いのが当然だ。

故に、考えられる仮説は1つ。

二人目のプレイヤーはさほど世界の謎に関わっていない。

琢磨は戦ったがそれだけ。

この部屋の主は、謎を解こうとしたが戦いはしていない。

そんな三人に繋がりを作るとするならば

それは、ゲームオーバーまでに戦い抜いた最後の一人ラストワンである事だろう。

「先輩、この現象が誰を狙ってるのか仮説ができました。理由まではわかりませんが、共通点くらいは」

「……つたく、ちよつとは落ち込んでろ新入り。先輩の立つ瀬がないだろうが」

そんな言葉と共に、仮説検証の為に作戦が練り上げられるのだった。



そして翌日。学校を盛大にサボり深く眠った琢磨は放課後になってやってくる端末への連絡を取る。それは、珍しく音声通話ありのグループトークだった。

「最後の一人作戦？」

「そう。今回の周ではクリアは二の次でそれを把握したい。仮説でしかないけど、ゲームオーバーになった週の最後の一人が現実に出てくる的だって仮説がウチの方から出てきててね。偉い人は凄いいよ本当」

「……なら、私も？」

「柴田ちゃんは別ね。あれは集団が同時に最後の一人になったし、他の分かりやすい目印もある。MVPってのがさ」

そんな言葉を言う足柄は、言葉は軽く表情も軽薄だったが、長年殺し合ってきているタクマにはわかった。頭の中はどう殺すかしか考えていないサイコモードに入っていると理解できている。

このじゅーじゅんという人物は、やはりVR剣道に染まった人物であるのだ。

「……それで、被害者は？」

「……流石に箝口令はもう無理だから、このゲームのことは隠して公表するって。だからこそ、本気でこの仮説の証明はしなきゃならない。ダメージコントロールができるかどうかは市民の心と体の安全に直結するから」

そんな言葉に黙って肯く氷華以外の三人。対して氷華は、まったく別のことを考えていた。

「……自動的な、コントロール。なら、それは……？」

「氷華？」

「なんでもないわ。少し頭の悪い想像が頭をよぎっただけよ。……個人が世界を相手にするなら、どういう初手が必要なのか、なんてね」

その言葉を最後に会話は途切れ、雰囲気を変える為に足柄刑事と裕司さんが明るい話題に変えようと投稿動画の話をした。

プリンセス・ドリルというあの面白系お嬢様の動画はなかなかの再生数を叩き出しているらしい。前回のゲームオーバーの時は入植者達と現地NPCの青少年グループ相手に夜間学校を始めようとしていたらしい。

その1回目を始めようとしたときにアルフォンスに襲撃され、コンビで合わせて数合の善戦虚しく殺されてしまったが。

「なんとというか、自由に生きてんなこの人」

『ですね。攻略とは全く違う方向に、人を笑顔にするという形で戦っている。素晴らしいと純粹に思います』

そんな会話を最後に、チャットを切った琢磨。

食事やシャワーなどの身支度を整えて、ゆったりとベッドに横になる。

今回からは攻略に関わらず修行に専念することにした琢磨は、ダイナがどこに現れるのかを逆算する。

『入植者エリアの近くではありませんね。子供達でもそれくらいは考えるでしょう』

『酒場の近くに限定しても結構な範囲か、聞き込みするか？』

『いえ、あの顔隠しの違和感を感じれる人は少ないのでしょうか。以前同行したときにさほど目立ちはしませんでした』

『なら、出たとこ勝負だな。魂感知、頼むぞ相棒』

『私としては、さっさと知覚を自覚してほしいものですけれどね、相棒』

マスター

そんな会話をして、琢磨は《Echo World》へとログインした。ただ一つ、強くなるという曖昧で、しかし心の命じるその目的の為に。

修行開始

今回の周でのダイナの行動をタクマは思い出す。酒場に入る前、いつのことかはわからないが入植者の少年たちのスリにあったと本人は言っていた。という名目の人助けだが、そこは良い。

ダイナが前回の記憶を持っている特別なNPCだとしても、人情があるのならそこは変えないだろう。故に張り込むべきは酒場近くの区画にある孤児院だとタクマは当たりを付ける。

「で、メデイ。知場所知ってる?」

『あいにくと』

「なら、聞きこむか」

そう言ったタクマは近くに来た前回の周の一戦目の相手である透過の騎士の三人組に話しかける。いずれも量産型の鎧を着ているので誰が誰かは魂でしかわからないが、透過剣士が小隊長で、一撃ぶつ放してくれた弓使いは平の騎士のように思える。立ち振る舞いだからの連想ではあるのだが。

「すいません、ちょっといいですか?」

「……気づいていたか。王子の友人を名乗るのならば当然か」

完全にカンニングであるとは言いだし辛い状況だが、こういう時は強キャラムーブをする^{ロールプレイ}とそれっぽいとのヒョウカの談から不敵に笑うだけに留めておくタクマ。悪役としてのR Pが妙に似合う男である

「あいにく俺は今回の件に関わるつもりはないですよ。やらなきゃならないことがあるんで」

「それは？」

「修行です。今まで経験したことがなかったんですよ、悔しきつての」

そういつてタクマは殺意を内側に向ける。鬼子としての在り方は自分の本質だと思っていた。だからこそ多くの仮想世界でその衝動を衝動のままに発散していた。

だが、その生まれ持ったモノだけでは勝てないものが現れた。勝たなくてはならないその時に。

死んでもそれまでだと思っていたタクマの強さへの執着を、友への思いが変えたのだ。

強く在ろうとする、鬼へと。

「負けて死ぬならそれでいい。けれどそれで終わりじゃないなら俺は殺して勝たなくちゃならない。そのために強くなる。その邪魔をするのなら」

タクマは、剣を引き抜き脇に剣を構える。

「殺しても押し通る。来るなら来い。糧にしてやる」

その剣気に、その殺気に、そしてその鬼の在り方に騎士たちは半歩あどざり、ゲートを開こうと声を上げ。

その前に風で踏み込んだタクマの剣が透過の男の喉元に突き立てられていた。

「オレ程度に命を懸けるほど、あなたの命は軽いですか？」

「……わかった、見逃そう。鬼の少年」

「ありがとうございます。では、これにて」

そういつてタクマは剣を収めてゆったりとした足取りで、しかしどんな奇襲にも対処できるような力の抜き方で去っていく。

そんなタクマに透過の騎士言う。

「……孤児院は、逆方向だ」

その言葉のあんまりさにタクマはずてつと躓きかけ、『そもそも格好つけてどこに行こうとしていたのですか』とさらにメデイから追い打ちを受ける。

鬼の端にたどり着いてしまったとしても、タクマはまだ14歳。年頃の少年らしい抜けは多いのである。幼少期よりメデイのサポートの元で生きていた分むしろ普通より抜けは多いかもしれない。

そんな締まらない少年が、鬼子の剣士明太子タクマなのであった。

■ □ ■

そうして、なんだかんだと監視という名目でタクマに付いてきた小隊長のイービーは、状況に困惑していた。1354

それはそうである。なにせそこは入植者が多く入っている孤児院であった。そして、そこでは泣いている少年たちと不思議な雰囲気落ち武者が居た。そして、可憐なバートルドレスの女性が、その落ち武者と組みあっていた。

タクマは「華麗なる四文字固め！ 奴の本職はレスラーなのか!?」とバカなことを考える。

もちろんそんなことはなく、バートルドレスのプレイヤー、プリンセス・ドリルはただ昔からそういうのが得意だったというだけである。彼女の本職は教育学部の大学生だ。

だけれど、その会話内容を聞いてみると、バカらしいことでの喧嘩だと理解できてしまった。

曰く「あなたのような不審者にこの子たちは預けられませんか！」

曰く「お前保護者ならもつとちゃんと見てろや！」

そして少年たちと孤児院の職員曰く「どっちも知らない人です！」

つまり、子どもたちの目の前で4文字固めているドリルも、いいこととして子供たちを

返したダイナ師匠も、ここでは部外者なのである。

「すみませんイービーさん。あの台無し師匠のこと引つ張るのでドリルさんの方お願いします。」

「……ああ、任された」

そうして現れたイービーさんの騎士の権力^{パワー}。ドリルさんはあえなくお縄につきプレイヤーの一人として牢屋に入ることになった。大した罪ではないのだが、身元不明者の扱いなど基本こんなものである。

そしてそのことを目隠しにしてダイナを連れ去るタクマ。辻斬りし続けて実戦の手ほどきを死ぬほど行うつもりだったが、この分なら恩を着せて手ほどきしてもらえるかもしれない。そんな打算と、“この人はちゃんと見ていないとどうにかなくなってしまおう”という使命感にも似た何かだった。

それは、タクマが義父風人に感じているものと同質のものだった。タクマはダメ人間に弱い男なのである。本人もかなりのダメ人間なのではあるが、それはそれ。

「ありがとよ少年。まさかあの嬢ちゃんあんな技持つてるとはなー。足が痛いのはなんのつて」

「……ダイナ師匠ならどうにでもできたでしょうに。生命の生命^{ライフフォース}転換の使い手なんですから」

「あー……生命の使い手とやりあったのか。よく生きてんなお前」

「生かされました。負けたんですよ勝たなきゃいけない殺し合いで。だから師匠、お願いがあります」

そうして姿勢を正すタクマ。その言葉を聞かず「断る」と言うダイナだった。

ならばと本来のやり方で技を盗むのみ。故にタクマは剣を抜いた。

「一手御指南願います」

「話聞かねえな最近の若いのは！」

そう言いながらタクマは正眼の構えを取る。その構えにある強さへの真摯さと、剣の中へのみ存在する殺すという意思。その二つが“これは自分に届きうる”と感じさせてダイナもまた正眼の構えを取った。

二人の距離は一步で剣の間合いに入るほど。周囲は空き地であり、人はいない。蹴り上げられる石なども存在しない。純粋な剣の戦いだった。

そうして構えを取り合っているタクマとダイナだったが、タクマの方には精神的疲労が見えてきた。

考え得るすべての剣が、届かないと分かるのである。構えを変えれば、その隙を突かれるだろう。風の刃を作るにも、命を込める一瞬で命が飛ぶだろう。

刺突、袈裟切り、切り上げ、切り返し、同切り、逆胴、殺気のパフェイント、踏み込み

音のフェイント、タクマの得意とするすべてが通じないそれが魂で理解できてしまう。強さの一端をつかめる程度にタクマが強かったが故の事だ。剣の力量において、タクマはダイナの足元に及んでいる。そして、今回の戦いでは、否これから想定する戦いではタクマは死ぬことが許されていない。

当然だ。タクマの戦うと決めた場所は命の変えの効かない現実世界。もし死ねば、次のアルフォンスを殺せなくなる。それは、嫌なのだ。

タクマは、友人を殺すなら自分がいいと感じている。自分がやるべきだと思つてい

る。怒りではなく、敬意をもって友を殺すために。

その願いがタクマの鞘になって、その心の刃と共にあつた。刃を収め、時にさせる剣士の鞘だ。

その姿をダイナはまぶしく思い、剣を鞘に納めた。

「……男子三日会わざれば、つてか」

「師匠？」

「ついて来い」

そういつてダイナはタクマに背を向け歩き出す。

「場所を変えるぞ、タクマ」

それはダイナが、タクマを認めたという事。

一人の人間切りではなく、一人の剣士としてタクマを認めた証。

そのことを理解したタクマは、「ハイ！」と返事をした。

そんな姿を、その心をずっと見てきたメデイは温かい気持ちで見ている。



そうしてタクマがダイナに連れてこられたのは城の北にある祠から伸びる地下道。

玉城方面に向かっているのはわかるが、そこには確かに魔が漂っていた。

「タクマ、お前に足りないのは魂の使い方だけだ。だから戦って覚えろ。指南はしてやる」

「了解です」

その言葉と共にタクマは前に入る。地下道はそこそこに広く、剣を振るうのに問題はない。

目の前には、闇の魔物としか言いようのない者たちが多くいた。ヒトガタ、狼、大蛇、小鬼など様々だ。

そしてタクマが何かの境界を越えたことで、認識された。すべての魔物に一齐に。

初めに闇のヒトガタが影の剣を握ってやってくる。それを受け流して首を撥ねる。

「初太刀は受けるな！ 触れて発動する生命転換ライフオーズなら死んでるぞ！ よく視ろ！」

その言葉に内心頷き、次にやってきた闇の狼の魂を魂視にて見極める。

魂の意が集中しているのは右の爪。生命転換ライフフォースの力はそこにあるのだろう。故に狼の左側へと立ち位置をずらして、突撃を回避して、風の刃を纏わせた剣をもつて両断する。

しかし、剣を振り終えた瞬間に狙いを付けられた感覚がタクマを襲う。咄嗟に振りぬいた勢いのままに殺気から逃れると、先ほどまでいた場所には4本の矢が突き刺さっていた。

「目の前の魂に集中しすぎるな！ 罠の使い手は多いぞー！」

その言葉を受け取って、剣から離れた左手から放った風の刃にて力の込められた5人目の最後の一射を逸らし回避する。

だが、大蛇はそこを狙っていた。タクマの手札が尽きる瞬間を。タクマの命を刈り取れる瞬間を。

体全体をばねにした神速の突撃。魂視をしなくてもわかるその牙に込められた魂の毒。それを喰らえばはタクマは死ぬだろう。

「メデイ、一応マーカー頼む」

『はい、良き空を』

しかしその程度で死ぬような軟な戦いはしていないのがタクマだった。

風の力を使つての跳躍と姿勢制御。

大蛇の嘴みつきに剣を合わせて最も鋭くした風の刃を置く。

その剣に衝突した大蛇は、その鋭さに鱗の硬さでは抗えずに頭から両断され死亡した。

「ラストオ！」

そして最後の小鬼一人。矢は通じないと理解したのか短剣を構えて突撃してくる。

明かな相打ち狙いの攻撃だった。

しかしよく見て、実際によくやったタクマにはそれは通じない。魂視で見た限りでは魂は短剣に集中している。アレが触れたら死ぬタイプの^{ライフフォース}生命転換なのだろう。つまり掠りすらしなければいいだけの事。

天井を風の加速と共に蹴り、壁を風のクッションと共に蹴り、鋭角の機動にて小鬼を叩き切った。

『第一陣は全滅です。お疲れさまでした』

「だが、課題は多いな。風の踏み込みができるようになったの最近だろ。剣への^{ライフフォース}生命転換と併用できてないぞ」

「わかっています。それで、どうでしたか？」

「生きてるんだから及第点だよ。満点はやれないがな」

その言葉に、タクマは「ありがとうございます」と礼をした。

「じゃあ次な、行くぞタクマ」

「はい！」

そうしてタクマは、ダイナと共に戦いに赴くのだった。地上での暗闘とは全く関わり合いのない、ただの戦いへと。

修行 01

奥に行くにつれ、敵は段々と強くなっていく。

骸骨剣士の剣の腕は普通に騎士として戦えるレベルのものだった。それに加えて数が多く、連携も取れている。

この剣士たちが現れたのはダイナ曰く中層あたり。この辺りが現在のタクマの限界のようだった。

「いや、だからってそんな暗殺者みたいな事するかお前」

「いや、じゃないと死ぬじゃないですか」

一度の交錯で力量を認識したタクマは彼の全力を使った騙しと隠形にて隠れて、骸骨を一匹ずつ音もなく殺して回って回っていった。

ダイナやアルフォンスの使っている、存在感のコントロールを戦闘に利用して。

「それで、お前は安全にしていくのか？」

「冗談ですか？ それ。死ぬ気で全部出して届かないくらいじゃないと意味がないんでしょう？ 魂の成長の為の死線って」

『幸いにもマスターはプレイヤーです。命を懸ける程度はリスクに入らないかと』

「……覚悟決まり過ぎだよお前ら」

『「ありがとうございます」』

そんな言葉に、惜しさを感じながらダイナは先への道を示した。

彼には、足りないものがある。否、一つの方向に尖りすぎたせいで足りないように見えているものがある。

それは、ヒト以外のモノの殺しへの適正。人殺しに尖りすぎているが故に、その技能が磨かれていないのだ。

しかし、ダイナのその観察眼は誤りだったと進むたびに気づかされていく。

進むにつれて、ヒト型でない魔物との相手が増えていく。その暗殺術を魂の、肉体の、あるいは他の道の感覚で察知して反撃してくるようになってくる。

しかし、それら全てに対してダイナの教えた基本に忠実に、しかし己の風の力を十全に活かした戦い方で勝機を作り、破っていった。

その度に戦い方は磨かれていった。ただ一言教わっただけの人外殺しの基本が、タクマの剣理を変化させたのだ。

目の前の化け物を、より確実に殺すために。

「……お前、魔物と戦い始めてどれくらいだ?」

「このゲームが初めてですね。他のゲームはアシストが合わなくてあんまやってないん

で」

その言葉にダイナは驚愕する。その通りだ。

なにせ、タクマの剣技は全て経験の積み重ねが生み出した剣理への理解がその強さの源なのだから。

それは、初めてVR剣道をプレイして、最強相手に2千度以上の敗北を糧にして作り上げられた「見て盗む剣」。技を盗み、適応させる鬼の剣。

「一応、人外との戦闘経験はありますね。ロボットゲームでしたが」

「ことごとくお前はあの世界に俺を引き戻そうとするな。俺も好きだけど」

『IIが出たら買って頂けるとの約束、忘れたわけではありませんので』

そして、さまざまなゲームでの戦闘経験が、その基本を十全に活かす土壌を作り出していった。

その姿に、思わず笑みを浮かべるダイナ。

心根はまだ育ちきっていない。しかし、魂は良好であり、剣才は天賦のものだ。

その在り方は、ダイナと名乗るこの男の目的に奇妙なまでに合致していた。

「じゃあ、そろそろ中層も終わりだ。気を引き締める。リザードマンは相当にやるぜ？」

「ええ、バッチリ視られてるのを感じます。逃げるつもりはないですけど、逃すつもりもないみたいです」

そう言って、タクマは通路の奥に進む。

そこには階段を塞ぐように立つ影の蜥蜴の騎士とそれに切り捨てられた多くの闇があつた。

「ゲートオープン」

その言葉と共に、蜥蜴の騎士には黒ずんだ緑の色が付き、切り捨てられた闇は蜥蜴の剣に吸われていった。

「切った命を取り込んで力に変えるゲートか？」

『準備万端というわけですね』

声にならない咆哮と共に蜥蜴は斬りかかる。その上段は一見力尽くに思えるが、それは恵まれた身体能力を尾をつかってバランスを取って放つ絶技だった。

対してタクマは、行きがけに拾った小石に生命転換ライフフォースを込めてスナツプだけで剣に投げ

らる。
生命転換ライフフォースの距離減衰により大した威力にはならなかったが、それでもその直剣に当たった後の事は理解できた。

石は、吸われて消えた。生命転換ライフフォースの基本能力は「吸収」なのだろう。

風の刃による迎撃にもさほど効果はないだろうと知るや、タクマは正面から存在感を前に出したフェイントで斬りかかる。脇構えからの抜き胴だ。

しかし、そのフェイントは見抜かれて上段を溜められた。そして放たれる剣は、確実にタクマの姿を捉えた。

そして、その剣は空を切った。

蜥蜴騎士が見ていたのは、空気のスクリーンの屈折により見せられていた幻影。それにタクマの拡張能力の発音により作られた二つめの幻であった。

タクマは、決して計算尽くでその戦い方をしたわけではない。しかし、その戦法は目の前の騎士相手に最良のモノだった。

それが、タクマの鬼の才覚。あらゆる事が殺す事に特化した人類の異端児。

もしも健康だったなら、もしも道を示されなければ、もしも先生に出会わなければ、そんなものもあるのなら間違いなく殺人鬼と化していた少年であるのだ。タクマは。

そして、タクマの抜き胴が決まり、蜥蜴騎士の腹を切り裂いた。

しかし、タクマには違和感があった。

殺した感觸がなかったのだ。

故に残心を怠らずに、しっかりと剣を構えて蜥蜴騎士を見た。

その体は半ば千切れていたというのに、闇が包むとともにその姿は元に戻った。

再生能力のようだ。その現象をタクマは見たことがある。それは天狼シリウスの再生と同じモノ。

故に、殺し続けなければいずれ死ぬ。その覚悟で構えた剣に次への力を込める。

すると、不思議と蜥蜴騎士からの雑味のあるプレッシャーが消えた。そして、鋭い剣気がそれ以上の鋭さで叩きつけられてきた。

もう小細工は通じないだろう。そしてもう向こうも小細工をするつもりはないだろう。

それがわかるほどに、澄んだ剣気だった。

「剣士ダイナが弟子。タクマ」

「■■■■■■■■」

互いに、意味が通じるかもわからない名乗りを上げる。それが礼儀だと、タクマの心が感じだからだ。

そして、互いに剣を振るう。

蜥蜴騎士の剣は一撃必殺。触れたモノの魂を喰らい尽くす吸魂の剣。

対してタクマの剣も一撃必殺。風の剣はあらゆる守りを切り裂き致命傷を与える。

そんな二つの一撃必殺は、剣が剣に当たれば良いだけの蜥蜴騎士が優勢だった。

しかし、優勢止まりだった。タクマは、もうその剣の理を見切り始めている。体全体を自由に使った一撃の剣。それは当たれば良いだけのような毒使いの剣ではなく、インパクトが必要であるということの裏返し。

故に、躲し続け見切り続けたタクマは、ついに剣を合わせる。蜥蜴騎士の剣がトップスピードに乗る前に、自身の剣に纏わせた魂の風で。

その風の過半は剣に吸われたが、その残りの力は剣を弾くに値するものだった。

だが、魂を吸われる感覚はタクマの心に傷を与える。それは奇しくも1周目にタクマを殺した暗殺者の痛みを与える力に似たものだった。

だからこそ、タクマはもう躊躇わない。

痛みは、ダメージの証。それを蔑ろにするわけでは決してない。

しかし、タクマはどんなにそれが強くても、もう同じ死に方はしない。痛みを受け入れてその上で可能な行動を行えるように己を再定義したのだ。

だから、魂が抜かれる程度の痛みで命を奪うチャンスを捨てたりはしない。

その覚悟が、剣を弾かれた蜥蜴騎士より一手先んじた。

剣は騎士の首を断ち切った。そして、そこから繋げる連続剣にて再生が追いつかないほどに細切れにして、その命を断ち切った。

鬼子と蜥蜴騎士、その殺し合いはこれにて決着である。



「じゃあ、とりあえずここまでだ。準備運動はな」

「……スパルタは好きですよ、コレでも」

『マスター、十分な休息を』

そんな強がりや吐くことしかできないくらいには、今のタクマは崩れ落ちそうだった。

それもそうだ。魂へのダメージは、肉体というフィルターを通さない分重いのだ。痛みが。

だからこそ、折れない。友のために強くなりたいから。

「なに、取って食おうってわけじゃない。今回の戦いでお前に何が足りないかは見えた
だろ？」

「……ゲートの、存在ですか」

「そうだ。だから、手っ取り早く起こす。幸いにもお前はもう開きかけてる。あとは死
にながら感覚で覚えろ」

そうして放たれる極光。ダイナの生命ライフフォース転換の圧力に押されて、タクマの魂は塗りつぶ
されそうになる。

この圧倒的な力を受けながら死ねばなにかを掴めるだろう。だが、そんななにもでき
ないうちに殺されるというのもタクマには釈だった。

「行くぜ、メデイ」

『……はい、マスター』

だから、やってくる光の波に対して剣を構える。その魂を研ぎ澄まし、鋭い刃のよう
にしたままで。

「リアツ！」

そうして放たれる魂の大上段。そこには、タクマが認識できていない光があった。

それは僅かなものであったが、ダイナには理解できた。

誰もが持つが、誰もが扱えない原初の属性、いのち生命の属性の基本にして奥義であるあの
技を無意識に発動して見せたのだと。

「逸材も逸材だな。まあ、コイツの場合は……」

そうして自分の手前まで切り裂かれた光波を見る。

それは確かに才能の片鱗であったが、この程度だ。

力量は十分。故にこれは、出力不足に練度不足。

魂を扱う力が圧倒的に足りていない。生命を燃やす在り方にまだ届いていない。

それでは、ゲートはまだ開けない。タクマの中には、まだ大切な鍵が存在していない
から。

「あるいは、あつたのを思い出せてないのかね？」

そんなことを呟きながら全力を出して崩れ落ちたタクマを担ぎ上げて来た道を戻る。

とりあえず、宿屋にでも放り込んでおくかと適当に考えながら。

聖劍信仰

タクマが目を覚ますと、そこはどこかの安宿に思える住居だった。

タクマの知らない天井だが、それだけだ。むしろ、適当に床に転がされていたために痛む背中の方が気になっている。

「メデイ、どれだけ寝てた？」

『30分程ですね。さほど時間は経っておりません』

体を伸ばし、軽く動作確認に形稽古をする。

若干、半拍の半分ほど体の感覚にズレがある。タクマが思った以上に魂は疲れているようだ。

「これは、しんどいな」

『ええ、休息が必要かと』

「じゃあ、戦闘ログでも見るか。今回暗殺への入りは悪くなかったよな？」

『しかし、視覚、聴覚、魂感知以外の方法での感知手段を持つ敵が多かったですね。嗅覚への対策は必要でしょうか？』

「消臭スプレーとかポイントで買えるかね？　じゃなかったら風呂入るかその場所の土

やらをかぶるかだな」

『ありました。かなり高額ですね。現在のポイントでは物質化できません』

そうして、メイが記録していた実際の戦いの記憶を辿る。実際戦っているうちには気づかなかったが序盤の動きの荒さは目を覆いたくなるほどだ。対魔物の剣理は剣でも言葉でも教わったのになんたる体たらくか。とタクマは思う。

「……起きるの早いなお前さん」

「ダイナ師匠、せめてベッドで転がして下さいよ。背中痛いじゃないですか」

「阿保か、なんでそんな気遣いを野郎にせにやならんのだ」

「それもそうですね」

などと言われながらも若干の不満と恨みの念を持ってタクマはダイナを見る。

子供扱いはいらぬが、ヒト扱いくらいはして欲しいのだ。その為に苦手な偽装をしているのだから。

「で、まだ動けるか?」

「6……いや4割程度なら動けます」

「上等な見方だ。が、お前は稀人、死んでも死なない訳だ。分かるな?」

「……上等です! 死ぬまでやりますよ!」

「良い声だ。じゃあ、ライフフォース生命転換の使い方を叩き込んでやる。行くぞ」

そう言ってダイナが開いたのは、そのボロ宿の床下に開く謎の門。

それは不自然なほどにデジタルなモノに見えた。世界観に噛み合わない無機質さというものだろう。

「これは、誰かのゲートですか？」

「ああ。同僚のな。異空間を作る力らしい」

そう言ったダイナはタクマをゲートの中に蹴り込む。そうしてタクマが抜けた先には、無機質なただの広間があった。ワイヤーフレームだけがある白い空間。

「じゃあ、構えろ」

「……はい」

だが、そんな事はどうでもいい。今は、今出せる全力でダイナへ立ち向かっていくことが重要だ。

幸いなことに、戦いの中でやってできた技の数々はタクマの血肉になっている。

風の踏み込み、風纏の打撃、そしてより鋭くなった風の刃。

どれも以前切り結んだ時には試そうとすらしなかった力だ。

だが、それが故に課題が見えてくる。タクマの生命転換ライフフォーメクスは多芸だが、その分単一の技の出力が低い。こういった正面衝突において頼れる技は自身の剣技に紐付いて最大級の鋭さを発揮できる風の刃だけなのだ。それ以外は、魂の威圧で弾かれるし、単調にな

る動きが逆に枷になって反撃の隙ができてしまう。

故に、選択肢はシンプルで良い。

剣に魂を込めようと意識した瞬間に

ダイナの剣の腹が琢磨の腹を打ち据えていた。

「どっ見てんだお前」

「……そりゃ、よーいドンなんて言うわけないですよね！ 師匠！」

手加減されたそれを受けて目を覚ました鬼の剣は、戦いながら剣に魂を込める動きを模索し始める。

まず、タクマの技量不足により動きながら剣に殺意に研ぎ澄ませた魂を込めるのは不可能だ。

どこかにルーティンを作るべきだろうか？ と思うが一朝一夕でできるわけもない。

インパクトの瞬間に爆発させる使い方はできなくもないが、あれでは風の刃は作れない。ただ無軌道な風が吹き荒れるだけであり、殺傷能力はとても低い。

だからここは後退して丁寧な命を込めるべきなのだろうと理性は言うが、それでは死ぬ”との警告が鳴り止まない。

目の前の剣士の相手をする時に一番の安全圏は、真正面なのだ。そう感覚は告げている。

それは、間違いなくダイナが生命いのちの属性の生命ライフ転換フォースの使い手である事が理由だろう。アルフォンスの使った光の剣、閃光レイフ剣はもはや高域殲滅用のビームサーベルか何かなのだから。アルフォンスより確実に強いダイナならば数瞬与えるだけで光の剣を扱ってしまうだろう。

だからこそ、前にしか道はない。

時間を与えてはならない。

故に、痛みを堪えて真つ直ぐに走り抜ける。どうせ小細工など通じないのだから、出力は今の全開で真つ直ぐに踏み込んでいく。

「……まだダメか」

そんな言葉とともに、剣を柔らかく受けられ腹を蹴り飛ばされた。

「一応確認しておくが、お前の聖剣は何を定めてる?」

「……聖剣?」

「……あ、お前稀人だからそのあたり知らねえのか。まいった、失敗したなこれは」
そういうとダイナはタクマを床に座らせる。

どこから取り出したかわからない酒とグラスと共に。

「飲め弟子」

「頂きます、師匠」

『マスター、未成年の飲酒は禁止されていますよ?』

「データだから何でもいいんだよそんなの」

そう言っただけで酒を飲むタクマ。その苦みに少しだけ嬉しく思い、それからの体温上昇に違和感を覚えた。

『マスター、これは本物の酒と同じ症状かと』

「マジか。昔はもうちよい飲めたのに」

「まあ、強い酒だからなこの騎士殺しは」

そう言っただけでグラスを傾けるダイナ。その飲んだ量はそう多くなかったが、顔はもう赤くなり、口の回りも少し悪くなっていた。

流石の台無し師匠だとタクマは内心思う。

「……この国で聖劍ってのは何を指してるのか知ってるか?」

「……いえ、聖劍信仰ってのがあるのを聞いたくらいです」

「なら、聖劍のことからだな」

そう言ったダイナは、不思議な、誰かの言葉を噛みしめながらこう言った。

「願いを込めて立ち上がったその時に持つるモノが聖劍として信仰されてるんだよ。だから、そこらの木の棒でも素手でも聖劍だって言い張れる。大切なのは願いなんだ」

ダイナの目が、タクマの目の深いところを捉える。酒により緩くなった二人の仮面は

ずれ落ち、その真実の姿を映し出していた。

二人の、鬼の姿を。

「お前の願いは、なんだ？」

「……ヒトの中で生きる事。その為に、誰かを守れるヒトになる事」

「それは願いたいじゃない。ただの理由だ。お前の願いで言ってみろ」

その言葉に、タクマはもう一杯酒を飲む。素面で話す話ではないと、彼の中の男が告げているからだろう。

「俺は、殺すしかできない鬼子だ。それは今まで生きてて分かってる。けど、それでも何かを残したい。残せるヒトのフリをしたい」

「なら、何をしたいのかはわかってるのな」

「はい。何かを殺すことしか出来ないなら、せめて害をなす者を選んで殺したい。それが上等だなんて思いませんけれど。それでも」

その言葉とともにもう一杯酒を飲むタクマ。そんな姿に何かを見て、優しい言葉でダイナは声をかけた。

「ならそれは、〝守りたい〟って言うんだよ」

そんなタクマの芯になる言葉を。

「なら、俺の聖剣は」

「ああ、守ると決めたその時に、握った臆病者の劍が聖劍だ。その願いを忘れなきや、いつかソイツが本場の聖劍になってくれるかもしれないからな」

その言葉に違和感を覚えるタクマだったが、慣れない酔いによつてそれを考えるのを辞める。

どうにも今のままだと全てを放り投げて辻斬りに向かいたくなくなってしまふかもしれないと冷静な部分が警告しているのを、本能が暴れようと大きな声で塗りつぶしていく。

だが、それを嫌うことはなかった。14年生きていて、タクマは初めて同類を見つけたのだ。きつと、それが理由なのだろう。

「師匠、師匠はどうしてそう在れるんですか？」

「俺にも、道を示してくれてヒトがいた。ありのままの俺を愛してくれた良い女がいた。そして何より、未来に生きる娘がいた。俺は鬼だが、俺の半生は鬼だけじゃないんだよ」

「……ありがとうございます」

「いいさ。お前の先生とかに感謝して、いつか愛する女に期待しておけ」

その言葉に、タクマを愛する事を隠さないヒョウカの事を思い出す。

始まりはきつと偽りの愛だったけれど、今はどうなのだろうか？ そう、思った。



そうして、酒が抜けるまでダイナと他愛のない話をしたタクマは、「今のお前なら大丈夫」なんて事を言われてワイヤーフレームの訓練場から放り出された。

「今回の手助けはコレで終わりだ。あとは自分でやれよ、馬鹿弟子」

「上等ですよ、ブツ潰れるの早すぎの台無し師匠」

そんな言葉と共にタクマは鞆を託される。

盾の紋章の彫られた、臆病者チキンソードの剣にぴったり合う頑丈な鞆を。

「じゃあな、お前に聖剣の加護が……なくても生き残るだろうな、お前なら」

「死ぬときは死にますから。それじゃあ、お元気で」

そうして、二人は決定的な事を全く触れずに別れて行く。

きつと、タクマが現実の事を、ダイナの聞いた訓練場のこと、そう言った確信に触ればダイナは答えただろう。

そしてダイナも、タクマが強くなりたいと願い始めた理由や、今までの戦いの事を全く聞かなかつた。タクマはどんな傷がそこにあるかと答えただろうに。

それは、二人の鬼が互いを哀れみや親しみだけでなく、もつと深いところで繋がりたいと願っているからだ。

鬼としての、語り合話し合いいという場で。

二人は、いつか互いに全力を超えた繋がりを願っていた。

■ □ ■
そして、タクマは街を歩く。酔い覚ましがてら、空を見ながら歩いていると、ふと斜線が通ったのを感じた。

反射的ではなく、ここで撃たれたら殺されるだろうなという理解の元でふらりと剣を抜き、風を切って飛んできた矢を風纏の打撃で弾き落とす。

風に触れた瞬間に爆発的に魂が弾けたが、そうであろうなと読めていたタクマはその力を自然に受け流していた。

「あ、できた」

『おめでとうございます。ですが、マスターは未だ危険の渦中か』

そんなメデイの言葉と共に狙撃手とタクマは睨み合う。そして、距離が離れた魂視故に曖昧だったが、確実に以前タクマを殺したあの痛覚の暗殺者ではない事は視取れた。

「今回はあんま本筋に絡む気はないんだけど、修行がてら挑んでみるか」

そんな言葉と共に、タクマは夜を駆け出した。

戦士ロックスとイレーヌ

戦いは、シンプル。

敵のスナイパーはあの化け物みたく触れたら死ぬくらいの使い手ではなく、着弾したら発動するタイプの生命転換ライフフォースだ。

風纏で受け流せば致命傷にはならないし、そもそも普通に見えるから躲せる。

どうにも、敵側は強弓を使っているらしく、一射は重いが連射はない。

それに、敵の殺気の隠し方はもう慣れた。どうにも、タクマ自身のように存在感のデコイで殺気をごまかしているようだからだ。

「……だが、迂闊には近寄れないな」

『ですね。あの弓はシンプルに脅威です。躲すことに専念すればどうにでもなりますが、近寄ればその分の動きのロスで撃ち抜かれてしまいますから』

そう思っていると、強弓使いは踵を返して走り去る。

するとそこには風を纏った矢が着弾していた。あの風の感覚は覚えがある。生き残りの戦士団の弓使いの方だろう。

「……どうするさ……」

『距離を保ちつつ、いつでも攻めも逃げもできるように動くのが良いですね。戦闘中であるのなら横槍はさほど褒められた事ではないでしょう。私たちは今完全な第三者なのですから』

「だな。……って戦士団の方もこっちに狙いつけてるよ」

そうして、風で曲がる矢を弾き、一撃の重い矢を躲して付かず離れずの距離を保ち続ける。

そうしていると、どこからかやってきた盾の戦士団の生き残りも、透過の騎士イービーがタクマの元にやってくる。

「願ったりだが、何でここに？」

「お前が、稀人だからだ」

「誰か敵か分かんないのでな。話を聞きにきた」

イービーはタクマと盾の戦士に真っ向から剣を向け、盾の戦士は消極的に、しかし堅実に体勢を整えていた。

そしてタクマは、ふらりと自然体のままに剣を構える。どちらかを切るでもなく、どちらかから守るでなく。

どちらも纏めて、相手をする為に。

「俺は本当に偶然ここに居るだけです。そして、偶然殺されそうになったので全員殺す

つもりで相手をさせていただきます」

「氣狂いの類か！」

そうして二人の盾と剣がタクマを襲う。その最中に矢の援護はなかったが故に、二人の弓使いは移動したのだろう。

『マスター、魂での感知ができません。隠れる為の技術かと』

「全方位から狙われてると思えば、そう難しくはない」

そう言つて、目の前の二人の魂を視る。

盾に込められているのは自分と同じ込める事で外に影響を与えるタイプの力。記憶が確かなら、重力を操るもの。

そして透過の騎士イービーは既にゲートを発動している。魂の巡りがそうであると示している。

透過範囲は、試してみなければ分からない。

どちらも対異能戦闘、ヒトのカタチをした化け物相手にした戦闘訓練に十分な相手だ。そうタクマは思い、剣をしつかりと握った。

まず仕掛けてきたのは、透過の騎士イービー。

自身に降りかかる全てを透過する力だ。それを持って援護のないタクマに切りかかってきた。

その剣は虚実入り混ざった奇妙なもの。防げばすり抜け、当たれば切り裂く。防御不可能の魔剣だった。

だが、ネタはもう割れている。そして、その弱点も見えている。

タクマは風を踏み、剣が振り下ろされる前にイービーの肺に剣を突き立てる。それは当然透過したが、それでも肺の位置に剣を置き続けた。

生命転換を入れていない、ただの剣を。

イービーは周囲の把握を魂感知で行っているから、魂に映らないステルスに対処できないのだ。

本来ならばその対処のために常にチームで行動しているのだろうが、今回の偶発的な3つ巴であり、バックアップである強弓の騎士はいまイービーを認識できていない。

そうして、そのレンジでタクマは回避を続ける。それは、イービーの、ひいてはソルディアルの騎士の基本剣技の剣理を完全に把握したことであり。

異能以外は上等の域をでないイービーには、その異常に対処することは出来なかった。

そして、イービーは呼吸をする。その瞬間に実体化した肺に対して、タクマが置き続けた地雷地雷が突き刺さる。

それが致命傷となり、騎士イービーは血を吐き命を落とした。

そして、直後に放たれた重力波によりタクマの身体は地に縛り付けられた。機を伺っていた戦士団の男の生命転換だ。ライフフォース

「……躊躇わないな」

「性分なんで」

そうして、盾の男はじつくりと距離を詰めてくる。近づく度に、体にかかる重力の負荷が増していき、さらに身動きが取れなくなる。

故に、タクマは身動きを全くしなかった。

重力により重くなった空気を刃にして、射出する。そのことに全神経を集中させていたからだ。

そうして放たれた刃には鋭さはなかったが、空気の弾丸として盾の男の顔面にぶち当たった。

彼が重装ならばそれでさしたる隙は生まれなかったのだろうが、戦士団の装備はコストのバランスと機動力のために軽装になっている。

それが一瞬の重力の緩みを生み、タクマは重力のテリトリーから脱出した。

そして風を踏み加速した体当たりで盾の戦士を押し倒し、その首に剣を突き付けた。

「一応聞きます。あなたたちの方はどうして俺を狙ったんですか?」

「……俺たちが殺されかけたのは稀人関係だと聞いた」

「んで、話を聞こうとしたら殺す気満々の俺とイービーさんにカチ合ったと。納得しました」

そういつてタクマは盾の戦士から体をどける。

なぜなら、これが殺し合いだったのならタクマは間違いなく死んでいたからだ。

彼の重力場は天狼をわずかに押しとどめた。つまり人の体など容易に潰し殺せるのだ。

そして何より、警戒していたにも関わらずタクマは完全に隙を突かれた。

当てられたこと、当たった後の事、どちらも完全なタクマの敗北であった。だからこそ、タクマは剣を収めたのだ。殺されそうになつたから相手をしたのであって、この戦士団の彼にはそのつもりは全くなかつたのだから。

「……俺はさつきまで空間を作るゲート使いの元で修行をしていました。なのであなたが狙われる理由に心当たりはないです。力になれず申し訳ありません」

「いいや、追手の騎士を一人排除できたのは僥倖だ。……殺したくは、なかつたがな」

そんな言葉と共にタクマの足元に矢が突き刺さる。弓の女戦士の風を纏う矢だ。

「改めて。明太子タクマです。また会ったら、その時は手合わせを」

「ロックス・ラッドだ。殺し合いじゃないなら歓迎する」

そんな言葉を交わして、二人は別れた。

しかしロックスの没落貴族としての誇りがそれを否定するのではなく、その力をどう利用するべきかを考えさせた。

そして、すぐに結論に達した。

「あの手の暴走族は一人で十分だな。王になりたいわけでもなし、過ぎたる力は災いしか生まないか」

そうして相棒の元へと歩いていく。どうにも、あの狙撃手には逃げられたようである。

「ロックス！ 生きてる!?!」

「ああ、幸いにな。そう慌てるなイレース」

「慌てるわ！ 殺されかけてんじやないのあんた!」

「殺されていない。だから損得では得だ」

「使った矢の分だけ損よバカ貴族!」

そんな愉快な二人は、王侯貴族に古くから伝わる隠し部屋へと向かうのだった。

その先で、誰と出会うかは……

■ □ ■

「あ」

「あ」

そうして、タクマとロックスとイレースは魔物あふれる謎の通路を進んでいくことになった。

一本道の地下通路

魔物の溢れる地下通路。

何の因果かここに集まったタクマと、ロックスとイレースは違う目的で動いていた。

タクマはただの修行である。下層まで進んでより強いモンスターと戦い魂を磨くために

イレースは、相棒のロックスに連れられて。

そしてロックスは……

「その話、本当なのか？」

「ああ、魔物の巣みたくなってるよ。この貴族様御用達のシェルターとやら」

そう、彼は現在の王国のきな臭さを感じ取り、相棒のあんまりにもな無計画さを痛感しており、このままでは明日を迎えるのは難しいと感じてかつて祖父の言った言葉の通りにこの通路にやってきたのだ。

「王国に変事あらばここに行け、そう言われていたのだがな……」

「それ、ここで何かあるから何とかしろって話じゃないの？」

「……あ」

その言葉に落ち込むロックス。大の大男がそんなこととして恥ずかしくないのかとタクマは思う。自身も割とやる方ではあるのだけれども。

「しかし、どうしたものか」

「そうね、もう逃げる当てはないわよ？　王子側はマーク敵しすぎだし」

そんな言葉に、メデイが反応する。それは極一般的ではない人物を中心にして世界を見てきたがゆえに発した蛮族的AI思考の発露だった。

『ならば、ここを制圧してみては？　マスターとお二方の能力なら可能かと』

「……可能なのか」

「さらつと言うわねあなたの精霊」

「俺の相棒ですから。じゃあ、どうします？　このまま俺は進みますけれど」

「選択肢などあるのかこれは？」

「まあいいんだけど、あんた食糧持ってない？　逃げつばなしでお腹すいてるのよ」

その言葉に、どうせだし自分も食べるかと先日のゲームオーバー時に貰ったポイントを消費してあんぱんと牛乳を物質化する。タクマの現在のポイント残高は2000ポイントほど。これを武器などに変換するとかなり良質な武器を変えらるだろう。だが、それが臆病者の剣を上回るほどのものとは思えないのだ。

そうでないのなら買うべきは籠手や具足などの防具であるが、それを揃えられるほど

にはタクマのポイントは溜まっていない。タクマがピンときた職人のミスリルの籠手は5000ポイントほどするのだ。具足も含めれば合計1万ポイント。そうならば、たかが10ポイント単位の出費など惜しむのも馬鹿らしいだろう。今回はどうせ稼げないが、稼げるときはバカみたいなポイントが入ってくる。それがこのゲームのリザルトなのだから。

そんなどうでもいい計算からイレースとロックスに食事を渡して共に食べる。二人の反応は面白いほどに正直だった。

「……稀人ってこんなの食べてるの!? ずるくない!」

「クッ! 妖精国との国交が途絶えていなければこのような甘味など安かつただろうに!」

どうにも王国民は甘味に飢えているようだ。今度から物々交換の時に砂糖がどれだけのレートで売れるか試してみよう。……ヒョウカが一緒にいるときに。と、皮算用をするタクマであったが、自然と体は戦いのための準備を整えていた。

それは生き残りの戦士団の二人も同様だ。三人で同時に牛乳瓶を放り投げ自らの獲物を構える。

現在位置は中層だとダイナに言われていたところ。幅は広く、しかしわずかに下向きに傾いている。

そこに、明らかに強いものがやってきている。深層にいた魔物が出てきたのだろう。「フロントは俺が行く」

「援護は私ね」

「なら、俺は暗殺仕掛けた後は遊撃で」

自然と役割分担を話した戦士たちは、やってきた魔物の姿に目を見開く。

そこにいたのは、人間だった。少なくとも形は。

しかしその魂は魂視が使えないロックスとイレースにもわかるほどに汚されており、その口からは“真言”を発していないのに邪悪極まりないゲートが展開されていた。

そして咆哮と共にその門をくぐろうとした一人は。

音もなく剣を置いたタクマの風の刃によつて首を両断されていた。

「やはり躊躇いはないか……だが、知っていたのか彼が魔物だと」

「というか、生き返った戦士も騎士も全員魔物だと俺は見ています。そうじゃなきゃ、第0アバターを認識できるわけはない」

そういつてタクマは二人の前でアバターを第0へと落とす。それに驚いたが、稀人がそういうものだとして知っている二人は納得をした。

「魂だけの、霊体が見えているのね。皆は」

「あの日に死んだ者たちはやはり死んだ者か。イレース、いいか？」

「冗談、ブチ切れているのは私もよ！ ロックス！ タクマ！ この奥にいる元凶を殺すわよ！ 先に逝った仲間の魂の安寧のために！ 私が！ そいつを！ ぶち殺す！」

その、優しさが故に荒ぶる怒りをロックスは心地よく思い、その風に乗る。

その、魂の安寧ということはどうにか理解できているタクマは、しかし普段通りに殺すために歩みを進める。

今、成り行きで集まった3人は一つのチームになった。

「ロックス、警戒お願い。生命転換、ライフフォース放デイスチャージ出」

そうして、索敵に力を使うイレース。彼女は命の風を操り、音をより遠くまで集めるために空気を集めているのだ。

そしてそれは彼女の宣戦布告であり、目で合わせたタクマの暗殺をより際立たせるためのイレースの作戦。

自身の安全が確保された状態で動くことが多い後衛としては問題外の行為だ。

しかし彼女は迷わない。彼女の傍らには常に最も信頼できる盾の男が居るのだから。

「曲がり角右！ 距離300に足音7つ！ 団体よ！」

「ならば、いつも通りだ！ 抜かせはしない！」

その頼もしい言葉を受けて、タクマは暗殺のためのポジションニングを整える。

タクマとイレースの属性は共に風。なのでイレースの操る命の風にタクマは相乗り

することができる。生命ライフフォース轉換の相互作用といったところだろう。

その風を踏み、足音を立てずに集団の後ろに回り込む。ロックスが命を隠していないおかげでタクマの命はとても自然に見えているからこそその絶技だ。そうでないなら経験豊富な戦士団の肉体を使うこの魔物たちは反応しただろうから。

そして、曲がり角をロックスが曲がる。そこに叩きつけられる生命ライフフォース轉換の嵐。そして同時に発動する7つのゲートによるファランクス。

その門が盾となり、イレースたちの攻撃を防ごうとしたところに蛇のような軌道を描いた3本の矢がたがわずに前3人の急所を射抜いた。イレースの全力の生命ライフフォース轉換のコントロールによる曲射だ。

そしてそれに合わせてタクマが風を踏んで張り付いていた天井から落下しながら瞬く間の3連撃。それは背後に控えていた後衛3人に何もさせずに命を奪った。

そして、声を上げずにイレースの矢が放たれ、タクマの剣が振るわれた。そしてその両方を大斧から生み出した爆風にてその戦士は弾き飛ばした。

「腐つても戦士団長ッ！」

「強い肩書だことで！」

「口を閉じろ。来るぞ！」

そうして戦士団長と呼ばれた男はゲートをくぐる。

その先に現れたのは闇、あるいは暗黒の泥をかぶって作られたヒトガタ。

その咆哮はまさしく獣のようであり、しかしそのことがさらにイレースとロックスの怒りに火をつけた。

「ぶっ放す！ タクマ、時間稼いで！」

「了解！」

そうして、戦士の動きを丁寧を観察する。

おそらく、あの泥の中身は妙なことになっている。関節がないはずのところ、肉体が曲がっているからだ。

となると、尋常ではないとタクマは対人ではなく対モンスター、リザードマンやバードマン、人狼といった者たちとの戦闘を想定したスタイルに剣理を切り替える。

つまり、ゲート使用後の対アルフォンス用の剣だ。

「丁寧に、冷静に、切り崩す」

タクマに向けて振るわれる大斧。その速度は本当にアルフォンスクラスであることから、この使い手を短期戦型のゲートと仮定。斧を柔らかく受け流して風纏を施した剣で胴を叩く。すると、インパクトの瞬間に戦士の体の内側の泥から圧縮した風が吹き出てきた。

それによって飛び散る泥。明らかに危険物と判断して風纏を解放して泥を払う。

しかし、それだけの時間があれば溜めをしている後衛に矛先を変えるのは難しくな
い。それだけの出力がこの戦士にはあるのだから。

一步でイレースの元にたどり着いた戦士は、その大斧を使って薙ぎ払おうとして、彼
女を守る城砦に阻まれた。

「ライフフォース、デイスチャージ
生命転換、放出」

重力で大盾と自身の重さを最大限に増強したロックスの最大防御法。それは剛力と
暴風の斧を真正面からはじき返した。

それは、十分な隙だった。

背後から暴風を踏んで踏み込んできたタクマが首であつた場所を風を纏わせたの刃
にてたたつ切る。そうして切り離された首は泥となり崩れ落ちるが、動体はまだ動く。

それを本能的に「殺していない」と感じたタクマは、カナデから学んだ連続剣にて急
所を切り飛ばし続ける。しかしどれだけ切り飛ばしても命を絶つのに至らない。核が
あるのかと観察しようにも観察のために剣を緩めれば、それはこの戦士を連撃による檻
から逃してしまうという事。

ならば、ここは無呼吸で動ける限界まで切り続けるのが正解だろう。

それがタクマの「殺す」ことに最適化されている思考の示す答えだった。

「溜めが終わったぞ！ 離れろ！」

その言葉に反応してタクマはさらに踏み込んで大斧をつかみ腕ごと盗んでから前に転がり抜ける。

そうして、ようやくイレースを見ると

そこには、光を弓につがえている姿があった。

「あれは、生命の属性？」

『はい、アルフォンス様、ダイナ様のそれと似通っています』

「つい先日掴んだというイレースの切り札だ。威力は保障する」

そうして放たれた光の矢は戦士に着弾し、内部から光の熱のない爆発を起こしてそのすべてを消失させた。

その時、タクマの耳には「ありがとう」と聞こえたような気がした。

恐らく空耳だろうと思いを切り捨て警戒に移行する。呼吸を整え、前方の警戒をす
る。

すると、道中にあるそこに扉が見えた。盾の紋章を象られたレリーフのある扉。そこ
だけはなぜか魔物の空気はせずに、清涼な空気すら感じられる。

「……知ってますか？ ロックスさん」

「あいにく、ここに来いとしか聞いてないな」

「ちゃんと聞いときなさいよそこは」

「7つの子供に無茶を言うな」

などと言いながらも聞こえてくる甲冑の足音に今のコンディションでやったら殺される確信し、その扉へと近づいていく。

するとタクマの鞘が輝きを放ち、それに共鳴するように扉も輝きを放った。

そして、鍵の開く音がし、3人は「鍵かかったのかよ」と内心思いながらそのドアをあけた。

そしてすぐに後悔した。なにせそこはヒトガタと思わしき者たちが何人もいたからだ。

「モンスターハウスかよ」

「とりあえず扉を閉めるぞ。外も内もまだ気づいてはいない」

「そうね、今騎士レベルとやりあつたら死ぬわ。それは避けないと」

『あいにくと気づいている。ロックス・ラッド、イレース、そして稀人タクマ』

そこに聞こえた声に2人は警戒を深め、タクマは内心ため息を吐いた。

その声は、アルフォンスの陣営にいた自称サブリーダーのもの。

魔物あふれる地獄の一本道通路は、なぜか王族の隠れ家へと繋がっていたのだった。「俺にこういうのを回すなつての」

『同感です』

そんな言葉をメデイから受けて、タクマは後ろのドアをしつかりと閉めた。

隠し部屋

突然に閉められたドアに驚くロックスと自然と殺し合うためのスイッチを入れるイレース。

そして、扉を閉じた本人でありながら剣を抜いたタクマ。

「皆さん、背後を気にしたら死にます」

「ここが敵の巣つてこと？ あの結界は魔物を阻むものに思えたけれど」

「……そうか、扉だけが無事な可能性か」

「はい。入口は一つじゃないんですよこの空間。前に来たことある所なんで」

そんな言葉に頷いて盾を弓を構えてくれる二人。使える駒だとタクマは思う。タクマ自身も使われる駒だと自覚しているのに何をいうかという話なのだけでも、

『敵対する気は、ないのだがな』

「……さすがに信じられん。こちらは騎士たちに追われる身だ」

「一人殺しちやつてるしね。タクマが」

「殺しに来てくれたんなら殺し返さないと失礼じゃないですか」

「気狂いの理屈を語るな……」

『そうですマスター、気が高ぶっているのを自覚してください』

「そうはいつても習慣だし」

「殺しを習慣にするな！」

「良いじゃないロックス。敵は殺す。シンプル私は好きよ」

「なぜそこで好き嫌いの話になるのだ。俺は社会適合性の話をしているのであってだな……」

「うわ面倒なモードに入った。こういうロックスはほっとくとして……タクマー、攻める？　殺す？」

「気づかれてるんでまず無理ですけど。だからこそ殺しに行きたいですね。死なば諸共って」

「稀人も王国に染まってるわねえ」

「いえ、これはVR殺人教習所剣道で叩き込まれました。相打ちこそが基本にして奥義なりって」

「殺人教習所とは……どれだけ恐ろしい国なのだ稀人の国は」

などと敵の前で止まらない軽口。というかもはや雑談。
メデイはいちいちツツコミに回ってくれるロックスに対して感謝の念を抱きながらも傍観していた。

冷徹で通っているサブリーダーもこれには困惑だ。

「君たちは漫談をしに来たのか？」

と、満を持してやってくるはずだったアルフォンスすら言うのだった。

そんなぐだぐだが、彼ら3人と王子陣営の邂逅であった。



ところ変わらず、タクマ達が入ってきた門、通称“開かず盾の門”の前で対峙するタクマ達。

ロックス達は当然騎士たちなど信用していない。意図的に狙われたからだ。

しかし、タクマはアルフォンス自体は信用している。

なにせ、このアルフォンスは“殺された”のだ。逆説的に今は味方という事だろう。

『けど、騎士たち全員を信用できるかって言われたら微妙なんだよなあ……』

『マスター、アルフォンス様が殺された理由について心あたりは？』

『……強いからだ。この前のサビク・アルフォンスは一人で国を滅ぼした。そういう強い人形を欲しているんじゃないか？ マリオネティカの持ち主は』

なお、強いアルフォンスでなぜ世界を滅ぼすかに関しては全く考えていないタクマである。考えてもわからないことを考えるのを避けているのだ。脳筋である。

「……まあいいや。ちよつと休憩したら出ていく。だから邪魔をしないでくれ。つてのは通じるか？」

「あいにくと通じないな。……信頼できる稀人を探しているんだ。なぜ開かずの門が開いたのかは疑問だし、そもそも君たちが何をしているのかを僕は知らなくてはならない。この国の王子として」

その言葉は、真摯なものだった。

その言葉に嘘はなく、この国を背負いたいという願いがあつた。強い、輝きが。

しかし、聞いている3人はいずれも曲者揃いであつた。

「で？」

「おいイレース、仮にも王子の話なのだから真面目に聞け」

「だってロックス。私たちにメリットないじゃない。信頼できないのに背中預けるとか死ぬじゃない」

「イレースさんに同感です。アルフォンス側の騎士に混ざつてる可能性って絶対にありますから」

そんな言葉に疑問符を浮かべながら、のっぴきならない状況だと理解するアルフォンス。

「ならば、君たちに近づくのはやめておこう。タクマはタクマなりに敵を殺すために動いているのだろうか？ それを信じよう」

「ああ、ありがとう。アルフォンスも気をつけてな」

「当然だ。……しかしそれはそれとして私は体を動かしたい気分なのだ」

「やめろ。今はお前に手の内を明かしたくないんだよ」

「む、新技の特訓中か？」

「目にももの見せてやるよ。首を洗って待ってるよ？」

「楽しみだ」

「さすが王国ね」

「王子が何故に悠々と殺し合いをしようとするのだろうか……」

『普段のロックス様は王国の方らしくありませんね。戦いの最中ではあれほど頼もしいというのに』

「鍛えている。それくらいはやって見せるさ」

なんて会話をしつつ、しれっとアルフォンスに矢の補充を頼むイレースに、体が冷えないようにストレッチをするタクマ。かなり自由な二人にため息を吐くロックスであつたが、異常が多数派であるこの場において、ロックスの比較的常識的なふるまいはむしろ異常だった。

「二人とも、十分に休めたか？」

「ええ、万全よ」

「俺もです。じゃあ、皆さんによろしくな。敵が混ざつてたら殺すけど」

「タクマ、それには及ばない。彼らの思いは本物だ。が、それが邪悪の罠だというのなら、僕が殺す。責任は渡さない」

「そっか。そりやありがたい」

そうして別れようとするその時に待ったをかけた者がいた。

それは、タクマの中にいるメデイだ。

『すみませんアルフォンス様、少しよろしいでしょうか?』

「メデイ嬢、何だい?」

『この部屋にはどのように侵入したのですか? 門の存在から考えて他に入口があるの

はおかしいと思うのですが』

「護衛長殿から教わったのだ。騎士の詰め所にはここへの隠し通路があるのだと。……

入るのには面倒な仕掛けがあつたがな」

「仕掛け?」

「王印をかざさなければ開かぬ扉があるのだ。なので、ここに入るのには僕か父がいな
いといけないのだ」

その言葉に、鞘にある盾の紋章を思い出す。だが、王印とやらであの扉が開くのなら
それとは違うモノなのだろう。そうタクマは思ったが、そもそも王印を見せてもらえば

良いとも気づく。

「その王印つてのは見せてくれたりするか？」

「形はないさ。魂に刻まれているのだからな」

「なら失敬」

「なるほど、成長が早いなタクマは」

そういつてタクマは魂視にてアルフォンスを見る。すると、その胸には確かに刻まれていた。剣のような紋章だった。

確かに、胸に印があるのなら仕掛けにかざすのは面倒そうだとタクマは思った。

「もういいか？　王印は見せるのが面倒なんだ。力を抑えなければ掻き消えてしまう」

「ああ、ありがとう。魂に剣が刻まれているとかさすがの王族だな」

「僕はまだまだだよ。父上には及ばない」

そんな言葉を最後にタクマ達は門を開いて外に出た。すると、自然に閉まる扉にかか
る鍵。

この鞘を持つものと一緒じゃないと入ることを許しはしないようだ。

「しっかし何なんだこの鞘の印」

「何言ってるのタクマ」

「印なんてないじゃない」

その言葉に、「……なんか変なのだな！」と思考停止したタクマ。頭の中ではメデイがあれこれ考えているが、まあ後で考えればいいだろう。そんな樂觀的なことを考えていた。

「じゃあ、行きましようか」

「ええ、体がなまっちゃいけないものね」

「あの程度で鈍る鍛え方していいだろうに」

そして三人は歩き出す。魔物に堕ちた蘇りの騎士たちを殺しながら。



そうして、多くの騎士を殺し直して進んだ最奥。

そこには、仰々しい門が存在していた。

「あからさまにゴールですけど、魔物も騎士もどつから湧いてきたんですかね？」

「この奥がモンスター達の巣に300G！」

「これでそちらに賭けないものなど……」

「じゃあ俺はモンスター生産のゲート使いの寝床に400で」

「さらに妙な推論を加えるな！ 収集がつかなくなるだろうが！」

そうしてドアを開けようとするも、まったくもってびくりともしない。

そしてこじ開けるかと剣を振るおうとした瞬間、何かを察知してタクマは扉から飛び

のいた。

そして、タクマがいたい位置に存在しているのは剣。扉を透過してタクマの命を奪おうと放たれた刃だった。

「ツ!? このゲートは!?!」

「それだけじゃない! 扉を抜けて何かが団体で気てる! 数は数えたくない!」

「いったん立て直す! デイスチャージ 放出!」

放たれた重力場が3人の前の魔物、戦士、騎士たちを押しとどめる。

本当に数えるのも馬鹿らしい数の敵だった。

そしてそのすべてが同一の邪悪のゲートをくぐろうとしている。すでにゲートをくぐっている透過の騎士イービーでさえも

「これは、死んだな」

「けど、ここで止めなきやもつと死ぬ」

「……命の張りどころか!」

そんな言葉を最後に残してタクマ達は武器を構えて決死の抵抗を試みた。

敵のゲートは皆一様に戦士長の使った闇泥人間のゲートと同じだ。

それを殺すには、イレースの生命いのちの溜めうちしかない。魂視にて都合よくコアが見つかるなどという事もない。

ならば、もう乱戦の中で弱点を誰かが見つけてくれることを祈るしかない。それが自分でなくてもいい。そう3人は思っていた。たった半日にも満たない短い絆に、賭けて。

泥の剣鬼

戦いは続く。

高速で振るわれる泥の騎士の剣。それをタクマは受け流して別の泥の騎士に叩きつけさせる。

上半身が吹き飛んだが、再生の兆しアリ。

イレースが放った7つの矢。それが泥の騎士の7つの急所を射抜いた

まだ立ち上がる。再生の兆しアリ。

「一旦下がれ！」

ロックスが再び命を燃やしたライフフォース生命転換にて通路を高重力で止めるように見せかけた最高密度の重力場で一人の泥の騎士を押しつぶす。

泥の騎士の筋力は、当然それを跳ね除けることができるが、イレースの重力を見切った矢により両膝両肘を撃ち抜かれ、動きを止められ圧死させられた。

回復の兆しは、ない。

「再生パターンはコア型に確定だ！ 体のどこかのコアを潰せばこのゲートは死ぬ！」

しかし、代償は大きく、ロックスは二人の泥の騎士に狙いをつけられて、全力の重量

でなければ防げなかった攻撃を2発ももらいかねないその時に

タクマは、その二人の騎士の丹田を狙って切り裂いた。

それは、何か泥でない別のものを切った感覚とともに、二人の騎士は絶命した。

「二人とも引きましよう！ コアを切つても命の総量が減りません！ コアだけ殺しても再利用されます！」

「面倒なのは身体能力だけにしてよね！」

「同感、だ！」

そう言いながらタクマは前にでて魂視を深く使う。だいたいのは者は丹田に命の源泉があつたが、魔物型や明らかに別格の騎士型はそれぞれコアの位置が違う。

コアは丹田だ！ と勢いに乗って反撃してきた者を喰い殺すトラップだろう。そうタクマは考えて、本気のヒョウカよりは性格がまともだなとも考える。酷い風評被害である。

しかし、現状敵の数は増え続けている。目算で50以上。通路の広さの問題で3〜4体ずつくらいしか攻めてくることはないが、50近くの敵がこちらの技をしつかりと目に焼きつけ続けているのである。タクマの存在をズラしての暗殺はもう見切られているし、イレースの曲射も対応されている。

ここいらが引き時だろう。現在も引きながら戦っているが、限界だ。

「……子供を見殺しにはしたくないのだがな！」

「わかっているでしょロックス！ タクマが望んだの！ だったら誰が残るかは！」

「わかっているとも！ 生き残れる可能性があるのは身軽なタクマだけだ！ だが！」

「ありったけの援護程度はしてやるさ！」

「そんなのは、当たり前でしょうが！」

そうして放たれる矢と重力の嵐。ある矢は重力で軌道が曲がり、ある矢は風で軌道が曲がり、あるところでは重力だけがかり、ある所では真つ直ぐに飛んだ矢が突き刺さる。

これが、戦士団のエースである二人のコンビネーションだった。

「タクマ！ 生き残れよ！」

「死んで傀儡になつたらちやんと殺してあげるから、安心して逝きなさい！」

その言葉を残して、武器を捨てて二人は全力で撤退を始めた。

それは速度を上げる為であり、タクマに武器の選択肢を与えるものでもあった。

しかし、そんな悠長に動きはしない。彼ら泥の騎士達の身体能力は凄まじい。機動力はそれほどでもないためにどうにでもできるが、かと言って無視できるほど遅くはない。

だから、風を踏んでそれぞれの丹田を切り裂く。

だが、3体とも特別性であり、丹田にコアは存在しなかった。そして、タクマの攻撃の隙を狙って何者かの投剣によりその命を狙われた。

そこを、剣にこめていた生命ライフフォース転換を爆発させる緊急回避軌道にてどうにか避けるも、すぐに次の泥の騎士が襲いかかってくる。

その騎士の剣はとても綺麗で、静かな意思を感じた。それを躲せないタクマは剣でそれを受けると。

痛・み・な・ど・な・く・た・だ・吹・き・飛・ば・さ・れ・た。

ロックスとイレースを追う騎士達の軌道上にだ。

『マスター！　これは！』

『傀儡の中にはある程度動ける人も居るって事か！　自分から死んでくれるともつとありがたいんだがな！』

そして、動けない空中にて魂視。3人の騎士のコアの位置を把握する。右手の先、左手首、右足首だ。

馬鹿じゃ無いのかとタクマは思う。そんなところでは再生など不可能ではないかと思うが、そんな理不尽をやつてのけるのがこのゲートだった。

他者に同一特性のゲートを潜らせる外法、他者に命令を強制する外法。他社の死体を

操る外法。

「どいつも核となっている人を操る力と同じゲートを潜らせる力の繋がりが見えない。マリオネティカというのが真実で、他人に泥のゲートを潜らせる使い手がそれしようしているのだろうか？」

『不明です。が、何はともあれマリオネティカとこの通路の事を調べるのが重要なのでしよう。……ダイナ様が、プレイヤーを助ける側の方であるならですが』

『それは大丈夫だろ。あんな剣の使い手が外法を使うとは思えない。そんなものに頼るより自分で行った方が強いし確実なんだから』

『……その通りですね』

そんな会話をしながら、2人を追う三体の泥の騎士のコアを切り裂く。風を踏んでの高速移動はなかなかスリリングだったが、ここでの戦いでだいぶ慣れたタクマには、それなりに難しい程度の事に収まっていた。

タクマは知らないが、それは近接型の風の生命転換使用の奥義なのだ。ライフフォース

タクマは、魂を使い戦う者としても天才的な、あるいは狂気的なセンスを持っていた。『だけど、ここからどうするよ』

『お二方はお逃げになられましたし、あともう少し時間稼ぎをしましょうか？』

「だな。あの二人がゲート使いになって敵になるとなゾツとしない。だから…… 守ら

ないと」

その言葉は、タクマが思った言葉ではなかった。自然に、本当に自然に出てきてしまった意図しない言葉。

その暖かさを胸のどこかで感じながら、戦いを続ける。

だがしかし、50を超えてまだ増える泥の騎士の数には太刀打ちできずに、次第に押し込まれていった。

それでも、落とされていた大盾を跳ね上げて防壁にしたり、矢筒をそのまま風で散弾にしたりと、あれやこれや取りうるすべての手段を用いて抵抗をしたが、結局それ以上誰を殺すでもなくタクマは取り押さえられた。

「……これは、あかん、ヤツだ」

『かも知れません。ログアウトを実行しますか?』

「……どうせだし、連れて行かれてみるよ」

そんな言葉と共に、タクマは泥の騎士達に連れられて門の奥へと入っていった。

そこにいたのは、ライフフォース生命転換にて泥を抑えている女性と、それを守るために戦い続けている益荒男だ。

その益荒男をタクマは見たことがある。前回の戦いにおいて、シリウスの北からの襲撃の際に見た高貴な男だった。

その優しげな風貌はアルフォンスに似ている。

アレが、この国の王なのだろうか？

いや、アレがこの国の王だ。閃光剣レイブレッドにて薙ぎ払われる泥の騎士達を見て、王国としての常識である「最強は王である」という意味のわからないソレを思い出した。

そうして、敵があらかた消しとんだ後に、王は眩いた。「すまない」と。

アレは、間違いなく自分を殺すつもりだ。人質など無意味であると示さなくては守れないから。

そしてその事に対して、「ありがとうございます」と目で返す。

「残念だが、そうはいかない」

そうして俺を殺そうと放たれた閃光剣レイブレッドは、闇色の閃光剣レイブレッドにより弾かれた。

出力では王の方が勝っていたが、技がそれを覆したのだ。

それは、光の剣による斬り合いの技術差だった。

「貴様！」

「言の葉を吐き出すことすら地獄の苦しみだらうに。ここ一週間闘い続けたことは効いているようだな、ラズワルド」

そう言い放つのは、闇の泥で整えた鎧の胸に邪悪な黄金の目のアクセサリーを整えた

男。

彼が、泥のゲート使いだろう。

「では、貴様を殺すとしよう。この稀人は泥を纏った多くの騎士崩れ相手に奮戦した強者だ。二人がかりなら貴様として狩れるだろうよ」

その言葉と共に、琢磨を抑えていた二人の泥の騎士が崩れてタクマの体に纏わり付く。

それは、精神を、魂を犯す毒。

常人には決して耐えられない邪心を植え付けるものだ。

だが、それはタクマの精神の一部しか崩すことはできなかつた。

プレイヤーに施されている精神防壁のためだ。

が、崩れたのは一部あるのだ。

それは、タクマの中の殺人への理性的な忌避感。

それが消えたタクマは、己の心のままに剣を振るつた。

泥により強くなった出力と、戦い磨かれた剣技にて

この世界の最強である、ラズワルド王に對して。

「強くなるために、糧に！」

「……少年！」

そうして、タクマの心が望んで、しかし他に世界の誰も望んでいない戦いが始まった。

剣鬼と剣王

剣が冴えわたる。

タクマの体は現在泥の鎧にまわりつかれている。その恩恵により、身体能力、魂、共に出力は上昇している。そして、それに振り回されない殺戮への本能がタクマにはあった。

対してラズワルド王は、疲労を感じさせない剣で戦いを続けていた。悲しそうな顔で、しかし目の奥では楽しそうなものを見せながら。

そうして数合剣を合わせ、目の前のこの敵にはタクマの存在のすべてを懸けるべきだと魂で理解したその時、二人は自然と離れた。

「少年、名前は？」

「タクマ。明太子タクマでも風見琢磨でも、好きに」

そうして、二人は横槍として放たれた闇色の閃光剣レイブレイドを魂を込めただけの剣を同時に合わせることで相殺する。

そのタクマの動きに騎士は驚きつつも自身のポジションを崩していなかった。

ラズワルドが下手に高速戦闘に移行すれば、その隙に後ろの女性を殺すつもりなの

だ。それを強制するような命令が泥の鎧から出ている。

「メデイ、掌握は終わったか？」

『はい、どの信号が命令であり、シャットアウトすればいいのかは理解できました。魂の逆ハッキングはさすがに不可能でしたが。これより私は妨害に集中します。マスター、あなたのお好きないように』

「……最高だよ、相棒」

そうして、メデイによる神経伝達コントロールにより魂からの干渉を肉体の反応でシャットアウトする。これにより、泥はタクマの魂を吸って動くだけの外付けゲートと化した。

そして、タクマはゲートの残り時間や世界の運命など様々なものを天秤にかけた。

その上で、改めて言葉と礼を行った。

騎士には、「手を出すな」という威圧を。

ラズワルドには、最上級の礼を。

礼を終えたタクマはその魂のすべてを使って自身の泥をコントロールする。ただ、最高の技を叩き込むために。

そうして再形成された泥の鎧は圧縮して体を包むものになり、力の流れを妨げない姿になっていた。

そして、剣の構えは脇構え。タクマの体の小ささを活かした、躲したうえで最大の一撃を叩き込むためのもの。

対して、ラズワールドはゲートを開くそぶりを見せず、ただ水面を思わせる正眼の構えにてタクマと相対していた。

決して舐めているわけではない。それは二人の共通認識だ。

出力にすぐ順応できる技術を持っていたとしても、ゲートを発動した瞬間の身体能力のズレは絶対に覆せない。

それだけあれば今のタクマがラズワールドの命を奪うには十分だ。

もちろん、王国最強は伊達ではない。平時ならばそんな隙など存在しないし、したとしたりそれは1000分の1秒を隙と言える人外の何かだ。しかし今のラズワールドは1週間もの間守るために戦い続けた疲れがある。その人間的な部分がタクマの勝機に繋がっていた。

「いざ、尋常に」

「勝負」

その言葉を発しあうと同時にタクマが仕掛ける。そもそもその話、出力が上昇していようとタクマはラズワールドより格下だ。故に攻め続けるか逃げるかの二択以外は屍を晒すだけだ。

だから、タクマは攻め続けることを選んだ。それは、タクマの殺戮本能が導いた答えではない。タクマの戦闘経験の導いた答えではない。

全力でぶつかること以外に、選びたい未来はなかったからだ。

脇構えから素直に放たれる勢いを乗せた横薙ぎ。それは当然のように止められ、その剣ごと力ではじき返される。身体操作を全てを使った技の剛剣だ。だが、それで今のタクマは止まらない。弾かれた力をそのまま体を回転させて肩口を狙つての袈裟切りを放つ。しかしその最短距離での回転剣も当たり前のように全身を使った技の剛剣によつて弾かれる。

そして、一度目の反射的な回転ではなく読み切つた力のベクトルの操作と、上昇した風の出力、そしてこれまで経験してきた強敵相手の風踏みが、軸を作つて空を回る力のコントロールを作り出した。

そして、生命転換ライフフォースの出力ももう全開を超えて放出しているタクマの最後の剣。袈裟切りを弾かれた勢いで作つたエネルギーをさらに回転し解き放つ大上段。見て覚えた全身を使った剛剣技にて。

そして、その大上段はおかしなことに空中で確かに踏み込みがなされていた。それが、タクマが圧縮して作り出した泥の鎧の用途。地面を踏むように足の裏から風を解き放つものだ。

踏み込みは異常だが確かになされ、型は流れこそ異常だが力の無駄はなく、その魂の出力は強力だった。

だが、王国最強はその上を行く。

ラズワルドが行ったのは防御でも回避でもない。後の先を取った必殺の対空剣だ。

「見事だ少年。私の技を見取ったことは驚嘆に値する。だが、その胸にある思いのために命を捨てられないうちは私は殺せないよ。君の剣は、軽すぎる」

それが、泥を両断し、タクマの体に致命傷を与えたただの切り上げを放った後のラズワルドの言葉だった。

一矢報いることもなく、ここで死ぬ。やはり、悔しい。

それがタクマの思う事だったが、泥が魂を使ってタクマを生かそうと侵食を続ける。『すみません』というメデイの言葉から、最後の一撃によって力を使い果たしたタクマではもう泥の侵食を抑えられないのだと理解した。

そうしていると、再び泥の戦士や騎士たちの姿が見え始める。あの騎士の“騎士とタクマのチームアップ作戦”が失敗した時点でこの継戦は決まっていたのだろう。

「まだ生きているのなら見ていると良い。君の剣は、かつての私のモノによく似ている。だからこそその延長線上にある私の剣は参考になると思うよ」

そうして、ラズワルド王と泥の騎士たちとの戦いが始まる。

魂が尽きて命が終わるその前に、ひたすらに目に焼き付ける。その美しい剛剣を。その剣理の中には殺戮のためのものと、守るためのものが綺麗に混在していた。

その剣には無駄はなく、しかし目線や殺気などの様々なフェイントにより一撃一撃を丁寧に当てていく。そして丁寧に防御して一撃たりとも貰ってはいなかった。

そして、その剣の全てがコアを潰していた。あいにくとタクマの魂の力は全て泥に吸われてしまっているから魂視はできないが、だからこそ見えるものはあった。それは、泥と筋肉の動きの違和感だ。

戦闘中にそれを見つけるのは相当な観察力が必要だ。しかし、タクマにはそれが可能だと何となく思っていた。

タクマの観る力は、殺すことに通じる天性のものなのだから。

そして50はいた泥の騎士たちを皆殺しにしたラズワルドはタクマと向き合い、介錯のために剣を構える。

タクマは、それを黙して受け入れるのは違うと思い、泥の強制力などを無視して正座をした。

「次は、俺があなたを殺します。守るために、強くなりたから」

「……タクマ、殺しだけじゃ守ることはできないよ。どんなに強くても守れないものは

出てくる。今の私のように」

そうして、ラズワルドは慈愛の一閃を解き放った。

その一閃はタクマの首を綺麗に撥ね飛ばし、しかし痛みなどを感じさせない綺麗なも
のだった。

タクマがこの日最も見取った価値のあるものはどれかと後から思えば、それはこの剣
だったのかもしれないと思うほどに。それは美しかった。



そうして14時間のデスペナルティをかけられたタクマは、ロビーに居続けることに
座りの悪さを感じてログアウトをした。

『マスター、お疲れさまでした。メデイカルチェックを行います』

「……頼むよメデイ。ちよつと違和感がある」

『どのあたりに?』

「たぶん思考とかのところ。なんかタガが外れた感じがする」

『……明日、病院に行きますか?』

「明日になっても変わらなかつたらな」

そんな言葉と共に窓の外を見る。ふと見えた老婆を見て、セキュリティや監視網の確
認をし、戦うために拝借していた鉄パイプを握りしめていた。無意識に。

「あ、こういうのか。メデイ、心臓止めてもいいから止めてくれな」
「……はい」

そんな殺人衝動をなんのこともないように認識しているタクマに不安を覚えながら、メデイはメデイカルチェックを行うのだった。



その日、琢磨は夢を見た。

自身の剣にて、裕司や足柄達を切り刻む夢を。

自身の剣にて、奏を貫き晒す夢を。

自身の剣にて、凧人をバラバラに解体する夢を。

自身の剣にて、氷華を切り殺す夢を。

それを見た時に琢磨は思った。

“ああ、楽しそうだなあ……”と。

これまで隠せていた鬼の本能が、現れ始めていた。

スタートラインの一步前

その日タクマは、学校を早退した。

体調が悪かった訳ではない。とてつもなく残酷な理由だ。

“人を殺す道筋に無意識のままに体が動いているから”だ。

今日、メデイがいなければ間違いないく何人かの命を奪っていただろう。特に理由も意味もなく。鬼子と呼ばれる者の生き方通りに。

そうして、タクマは病院までバイクを走らせるのだった。

『マスター、カウンセリングの予約を入れますか?』

「……あんま効果ないんだよな。なんとなく死がどうでもよくて、なんとなく殺したいだけなんだから」

『でしようね。なので私が止めてみせましょう』

「AIに行動を制限されるとかデイストピアかな?」

『AIに心臓を握られているマスターの言うセリフではありませんよ』

「それもそうか」

『ええ。それと否定も、ほかのAIがどう感じるかは知りませんが、私はマスターを支配

するつもりなどありません。あなたとのこの関係を私は気に入っているのですから』

「メデイさん、感情感情」

『……と、客観的な事実に基づいて発言させていただきます』

「取り繕い方雑か」

『いいじゃないですか、たまには』

そう話しながらも、今から手動運転に変えてストーキングすればあの警戒心のない男性なら殺せると無意識に体が動きかけた。メデイの警告と即座の自動運転への切り替えにて事なきを得たが。

『マスター、いつも思いますがあなたの殺る気スイッチは軽すぎます』

「いや、いつもはもうちよい自重するから」

『その言葉がすでに社会不適合者のものなのですがね』

「未遂だからまだセーフセーフ」

『行動を起こしたら殺意の籠り切った計画性のために娑婆に出てこれないですからね、マスターは』

「なんとなくだから殺意はまだないんだけどな」

『率直に言つて先ほど頭に浮かんだ計画を練るには、一般的な思考では数週間はかかるものかと』

「でも氷華なら簡単にやるぞ?」

『彼女は別枠です』

「AIに別枠扱いされるのかあの女……」

と、いつも通り過ぎる会話の末に病院に到着する。

琢磨の脳裏には、“問診を躲して学校に戻ろう”という欲望もあるのだが、さすがに友人たちを殺してしまいかねない今ではやめた方がいいと思いがあつた。

鬼子にも、一般的な友情はあるのだ。



そうして検査を受けた琢磨は全くの異常なしという結果にため息を吐いた。何となくわかつていたことである。

現在時刻は昼の12時ちようど。デスペナが明けるまでにはあと2時間ほど。

『たまには、ゲームなどしないで映画でもどうですか?』

「なんか見たいのあるのか?」

『はい。宇宙進出した人類の軍人がワープゲートによつてかつて地球だった星に転移してしまふという話だそうなのですが……』

そうしてメディアの映画語りを聞きながら琢磨は家に戻つた。

ちなみに映画はとても面白かつたが、互いの考察で脳内はうるさかつた。二人でその

ことも楽しんではいたが。

なお、途中から口とスピーカーに出していたので旧世代のシアターではこうはいかなかっただろう。VR時代万歳だ。そう琢磨とメデイは思った。

■ □ ■

そうしてデスペナルティ明けからすぐにワールドにログインしたタクマ。ひとまず目的はロックスとイレースに“死んじまったぜ”と告げることなのだったが、それは難しそうだ。

なにせ、気づいたら鞆を左手で持つているのである。こんな危険人物をどうして野放しにできようか。

なので今日も今日とて修行の日々だ。先日あれだけの泥騎士が出てきたのだから、あの通路にはいっぱいいるだろう。

“殺してもいい奴”が。

「てか、周回で生き返るんだしだし幾らでも殺していいんじゃないか？」

『マスター、それをすると現実での自制心が緩むかと』

「それもそうか」

そう話しながらききな臭い街を歩いてあの通路の入り口の建物に向かおうとしていると、ふと見知ったような顔が目に入った。

新人戦士として先輩に指導を受けながらも頑張っているその人物の顔は、初めて狼を殺したその日に鉄パイプで闘うことを選んだ彼だった。

「……すみません、ちよつと良いですか?」

気付けば、タクマは彼に話しかけていた。

「構わな……手配書の男! 稀人のタクマか!」

「あ、俺指名手配されてたんだ」

『考えなしすぎましたね』

その言葉と共に近くの戦士たちが集まってくる。義侠心からの行動なのか、その魂には濁りはなかった。

……鉄パイプの彼以外みな死人だと、理解できるほどにはあの泥のことを理解できてはいるのだが。それでも、その魂に今濁りはなかった。彼の近くにこう言う人がいるなら、きっと色々大丈夫だろう。タクマは、死人を想うその気持ちでそれを思った。

「なんか、大丈夫そうだな」

『はい。マスター、心残りだったのですか?』

「まあ、少しな」

タクマはその姿を目に焼き付けて、風踏みにて空を駆け逃げる。

しかし、ただ逃げるだけのそれなのに、とても自由な気がしていた。

もつとも、様々な生命^{ライフフォース}転換の攻撃がすぐに飛んできて自由など感じている暇はなくなったのだけでも。



そうしてちよつとどころではなく楽しい楽しい空の旅（対空砲火付き）から逃げ延びてやってきたその祠。

そこからは、不思議なことに魔物があふれたりなどはしていなかった。

『何か仕掛けでもあるのでしょうか？』

「この辺りに流れてる生命^{ライフフォース}転換が怪しいな。スクショ撮つとこ」

などと無駄なことをしてから空戦で昂つた心のままに地下通路に侵入する。

そうしていると、ゴブリンなどの雑魚の魔物がわらわらと湧いていた。最も、ゲートを使われたら出力では互角以上になる強すぎる雑魚ではあるのだが。

「……雑魚しかいないな。この辺に泥騎士置いとけば確殺できるつてのに」

『カモフラージュか、あるいはラズワルド王にリソースを使いきっているのでは？』

「うわ、ありそう」

と、会話をしながらゴブリンたちがゲートを開くの待つ。

使わせないのでダメなのだ。使わせたくらうで殺さなければアルフォンスにもその先のラズワルド王にも届かない。

それでは、いずれ来るあの黒騎士や泥を纏わせるマリオネティカの使い手にも、まだ見ぬ敵たちも殺すことはできないのだ。

だから強くなる。

自身の異常性はもう慣れていいる。どうせこれは一生付き合っていくことだ。これは植え付けられたものではなく、自分のうちにもとからあったモノなのだから。

だけれど、それではダメだと教えてくれた先生がいるのだ。

それだけでは駄目だ。

抜き身の刃では、肝心な時に殺せない。だからこそ鞘に入っていないなくてはならないのだ。この衝動衝動は。

「さあ、始めようか！」

泥を纏ったゴブリンたちが尋常でない力で切りかかってくる。それも小柄な元の姿を活かしての7体同時。

それに対して、殺人衝動を解き放ちその意志に体委ねる。力の強い小柄なものに対しての剣理を選択。姿勢を低くし攻撃に備えながらも近づく速度を落とさない。

包囲網に捕まったらおしまいだ。数は基本力なのだから。

だが、風踏みの加速は使わない。あの加速は強力であるが、それでは“観察しながら戦う”ことはできないからだ。

「メデイー！」

『はい、戦闘時の精神パターンを集積します。どうぞ思う存分お暴れになってください』
まず、2体のゴブリンが足を狙って剣を振るってくる。その剣速は十分早いですが、腕で振っている。この泥のゲートは本人に持っていない技術を与えることはできない。

次に、泥の動きと筋肉の動きの祖語。見えない。丹田にコアのある量産型だろう。

それを見抜いたのならもう迷わない。戦闘ロジックは構築し終わった。

小さく飛んで剣を躲し、振り向きざまに風の刃を纏わせた剣で切り裂く。二体の丹田を通すように。

そしてその背中を狙う3匹の剣を風纏に込める力を切り替えて剣を背面に構えて受け流す。見えてはいないが、剣の振りかぶる姿などは見えていたので軌道も剣が到達するタイミングは計算しなくても殺しの衝動には理解できていた。タクマ自身の頭でもそれは認識できていたが、それよりも衝動の方が早かった。急場のアドリブは衝動に従った方が間違いはないとタクマは思う。

そして、受け流した剣に体を流された泥の3匹を返す刀で切り殺し、大きな一撃を溜めていた残りの2体に相対する。2体が放つのは、泥の濁流。自身を爆発させて作り出す必殺技のようだ。

その濁流は通路全てを飲み込むかに思えた。風踏みで退避するべきと理性は思い、前

に行けると衝動は言った。

事前に確認したように、ここは衝動に体を任せる。すると、するりと自然に生命ライフフオー転換を剣に込めることができた。最大出力のモノをだ。

「これだけやってスタートラインに立ててないってのが泣けるね！」

その解き放たれた風の巨刃にて濁流は切り裂かれ、ついでに溶けていたコアも切り裂かれた。

昨日の戦いにて、基本はつかめたようだ。ゲートの会得というタクマの思うスタートラインにはたどりつけてはいないが。その一步前にはたどりつけたと自覚できるほどには自信を持っている。

まだまだラズワルド王の剣技をモノにし切れていないが、たった一日でタクマは強くなった。確実に。

ただしそれは、鬼への道を突き進むものだったが。

辿り着いた者たち

敵を殺しながら前に進むタクマ。

そのペースはさほど早くはなかったが、着実に、身に付けた技術を骨肉に刻んでいた。だが、ゲートを開くきっかけは掴めない。

そんなものだろうと理解はしている。ゲートとは心を解き放つもの。この泥付きどものように強制的に他人のを潜らせられる者もいるが、それはタクマの力ではない。

「なんとというか、難しいな」

『自身のいつも通りでは気付けないモノなのではないですか？』

「だとしたら何するべきだと思う？」

『そうですね……救急救命などでしょうか？』

「ねえな。殺しても問題ないなら俺は“っつい”殺すし。……慣れないとなー、コレ」

『正直な事を申し上げてしまうのならば』

「メデイ？」

『いつもの事では？』

「……まあ、そうなんだけど。否定して欲しかったよメデイさん」

そうしていると、開かずの扉付近までやってきた。慣れというのは恐ろしいもので、あれほど強力な門番をしていた戦士長の事をタクマは恐れてはいなかった。

大斧、巨体、そしてさほど引き出されていない技の冴え。

どれをとっても、強いだけだからだ。

暴風の斧を風で逸らし、たわんだ泥と筋肉のズレを見つけ出して剣戟一閃。

それだけで、戦いは終わってしまった。

おそらく、本来の彼ならば多種多様な“当てるための技術”があつたのだろう。騙しの類の。

そういう戦いに大切なものの無い泥の戦士たちの底が見えた事で、タクマは遅ればせながらどうして自分を使ってラズワルドを殺そうとしたのかを理解した。確かにあの剣王にはそんな雑魚は通じないだろう。出力が敵の6割程度あれば何の問題もなく殺せてしまうのだから。ラズワルド王ならば休憩がてら殺せてしまう筈だ。

何故にあそこまで強いのかは、タクマにはまだ理解できないが。

さて、一応アルフォンスの親父さんを見つけた訳なのだし、ついでに報告しておこうと開かずの門を見ると、なんか色々物物しくなっていた。

「……………なんで？」

そんな言葉を言いながら鞆を翳して門を開けると。「何奴!?!」と騎士達が現れた。そしてその中には、ロックスとイレースもいた。

「タクマ!?!?」

そう叫ぶ二人に対して安堵の思いを抱きつつ、「これで殺せる」という思いが薄いことに違和感を覚える。

だが、それはそれでいいだろう。

「あ、こつち合流したんですかお二人とも、無事で何よりです」

「なにしれつと言つてんのよこの馬鹿! 生きてたんなら生きてたつてもつと前に言いなさい!」

「いや、殺されましたよ勿論。手も足も出なかったです」

その言葉に剣を向けてくる騎士達。楽しそうなのでこの誤解は解かないでいようかと思つたが、さすがに犬死に以下なのでここは弁明しておく。

「稀人は死んでも帰ってくる。知りませんでしたか?」

「何よそれ、アイツらみたいじゃない」

「いや、シリウスの時もいっぱい死んでも帰ってきたじゃないですか」

「言うなタクマ。流石に稀人の蘇りは周知するには重すぎる。今は特にな」

そう割り込んできたのは剣王の息子アルフォンス。なんだか、先日会った時よりも研

がれているように思えた。

「だが、君と殺し合うのではないかと、思った」

「それはそのうちな」

そんな言葉を言ってから、昂る剣気を抑える事に集中するために一つ深呼吸をする。

それはアルフォンスも同じだったようで、目が合ってから苦笑した。

「じゃあ、俺の取ってきた情報を流させてもらう。アルフォンス、お前に関係のある話だ」

「……聞こう」

「お前の親父さん、扉の先で泥の騎士達と殺し合い続けてた。敵の言葉が確かなら、一週間だとか」

「……父上の病の時期か！ 伝染病と聞いて合わずにいたが、そんな裏があったとはな」

「だから、その辺りの情報をお前に流した連中の中に操られているのが居るっぽいぞ。泥使いだと思っ敵の黄金の目、あれが敵の洗脳装置。『マリオネティカ』だろうし」

「マリオネティカ……伝説の国崩しか！」

「そんなのがなんで知らんが敵の手元にあるらしい。今画像見せるな」

そうして、タクマはメデイにより取られていた視界内スクリーンショットをウィンドウにして見せようとする。

「……なにもないが？」

「あー、見えないのかコレ」

なので、ポイントを使いスクリーンショットの印刷というのを行った。最初の一枚は500ポイントだが、以降は20ポイントで擦ることが可能だそうだ。

タクマは地味なポイント消費が後に響きそうだなと思いつながらもそれを使う。

「……ッ!?? 物質化!??」

「そういうのらしいな。まあ肝心なのはこの写真よ。この泥の奴の胸にあるの。コレがマリオネティカだと思ってるんだが、アルフォンスは知ってるか？」

「ああ。マリオネティカの形は目を象った黄金の宝玉らしい」

「じゃあ、決まりだな。俺はコイツにちよっかいかけてくる。昨日殺された恨みがあるしな」

「あ、話終わった？ 行くわよタクマ」

「……当然、俺たちもついて行く。蘇ったとはいえ、仲間が殺されたのは癪に触るからな」

「……まあいいか。ロックスさん、イレースさん。よろしくお願いしますね」

「……本当なら私も行きたいところだが、王城に赴かねばならない事情がある。宰相殿が話があるとのことなのだ」

「気を付けろよ。王城での暗殺屋は痛覚を馬鹿みたく倍増させる。掠らせる前に切り殺した方がいい」

「……そんな事を、どうして知っているんだ？」

「そいつにも殺されたからだよ」

「タクマ、死に過ぎだ」

「それを言うなよアルフォンス」

そんな言葉と共に、タクマ達はロックスが普通に開けた門を通って再び通路に戻る。あの鍵を開ける力はロックスとイレースにもできるようになったのだ。奇妙な話である。

もつともファンタジーだからだとタクマは思考停止しているが。

そうして歩いて行くと騎士達がやってくるわけだが、防御、足止め、トドメのコンビネーションが成立した今となってはゲートを使われてもさほど苦もなく潜り抜けられてしまった。

「なんか私たち凄く強くなってない？」

「死線を潜ると、一皮むける戦士がいるらしいな」

「なら、私にもゲートが！」

「それができたら苦労はないし、今倒れられたら俺たちは引き返さねばならん。面倒を

意味もなく増やすな」

「……よく考えてみると、今の私だと行ける気が全然ないんだけどね相変わらず」

「なら何故に言い出した」

「騎士になりたいじゃない。給料あつちのがいいんだから」

「金の話をしてる場合か？ 国が滅べばそんなものただの重りだろうに」

「滅させないわよ、私がの上がるためにはこの国は残つてないといけないんだから」

そんな二人の会話を他所に、タクマは騎士達を殺しながらその話をに不満を覚えていた。

「そこ！ 無駄話しないで援護くらいはして下さいよ！」

「飛び回るあんたが邪魔で矢が射てないのよ馬鹿！ 援護をさせる動きをなさい！」

「捕まった死ぬでしょうが！」

そんな事を言いながら最後の一人の剣を躲して足首を切り裂く。ソコがコアだった。

「イレースさん、索敵！」

「わかつてるわかつてる。……周囲ーキ口はなし！ 出し惜しみしてるわよ敵は」

「敵の戦力が尽きているのならいいのだがな……」

「そんな希望的観測は無駄ですよ。敵は普通に強いんですから」

「あんたも大概だけどね」

「いや、俺より強い人かなり居ますから」

「確かに上には上がいるが、王族などと比較しても仕方ないのではないか？」

「そこは良いんですよ、強さに果てはないんですから」

そうして、昨日からは考えられない速度にて門の前にたどり着いた。



迎り着いた門の前には、既に泥を展開している騎士達が待ち構えていた。先日のような透過による奇襲はなく、力押しでどうにかするつもりのもりようだった。

「じゃあ、援護を期待してて、出し惜しみ無しで行くから」

「イレースの防御は任せろ。援護は途切れさせん」

「なら、ひたすら暴れろって事ですわね！ 間違ってお二人まで殺したらすいません！」

「そうなる前に殺し返すから気にしない！」

そうして、タクマも抑えていた殺人衝動を解き放つ。その衝動は、この50を超え数々の騎士達に対して勝てるかと判断していた。

だんだんと、タクマの理性と衝動の境界が曖昧になっていく。戦いの中で抑えられていたソレが最適化されている。

それを観察しているメデイは、積み重ねられた人間性を捨て去っているように思えて、悲しく思った。

そして、それ以上に「自分が支えなくては」と思った。彼女にとってタクマは、家族以上の相棒なのだなら。

もつとも、そんな事について当の相棒は「メデイがいるから大丈夫だろ」という清々しい思考停止をしていたのだが。

「……数多い！ めんどい！ 助けてイレースさん！」

「わかっているから喚かない！ 私にも見えるようになったから！」

「そう言う事は射ってから言え！ 群がってくるだろうが！」

「そりゃ勿論！」

そんな言葉を言ったイレースは、緩急をつけた連射に風のコントロールを加えて騎士達のコアを確実に貫いていた。

そうして数分後。

彼女の矢筒に残る矢はゼロ。

そして、残っている敵の数もゼロだった。

「……恐ろしいですね」

「ああ。しかも、アレは射った瞬間に風のコントロールのタイミングを仕込んでいるというのだからもはや天才としかいう事はできんよ。ゲートを開けないことが彼女の唯一の欠点だが、それを除けば王国で屈指の使い手だろうよ」

「ちよつと二人とも！ 私の事を褒めるのはいいけれど、使える矢があるかもしれないんだから拾うの手伝って！」

「ああ、わかった」

「了解です」

そうして、イレースの“まだ使える”矢は20本程度。あと一戦くらいなら平然とやって退けるだろう。

そうして、門の前に立った3人。

奇襲の類は存在しない事を確認してから、3人で同時に足に生命転換を込める。

「「リアッ！」」

そして、開かない門を魂のこもった力尽くの蹴りにて吹き飛ばし、その奥にいた雑魚の魔物をドアで潰してみせた。

「昨日ぶりですな王様！ コトが終わったら殺し合いましょう！」

「……タクマ少年か」

「私、ロックスと相棒のイレースの忠義もお忘れなく！」

「猫被ってる場合じゃないでしょうが！」

そうして、ラズワルドが殺し続ける敵達と、タクマ達が殺す敵達の数は敵の襲撃を上回り。

この通路の奥の間は、久方ぶりに人間側に制圧させられた。

そして、ラズワルド王達の8日ぶりの休息が生まれたのだった。

サビク

「まさか、こんなに早くここにたどり着くとはね。仲間に恵まれたのかな？」

「はい。1人だったらまだ門の前で遊んでいたと思います」

「それは良い。誰かと歩調を合わせられるのは貴重な時間だからね」

そんな事嬉しげに言うラズワルド王。

その体には傷はないが、疲労は溜まりきっていた。

だが、それも数分で戻るだろう。生命いのちの生命ライフ転換は、そういうものなのだから。

だが、流石に飲まず食わずというのは辛かったようで、タクマが水を物質化して渡すと普通に喜んでいた。

その、あまりにもいつも通りな姿にロックスは普通に引き、イレースは憧れを抱き、タクマは「割と楽しかったんだな」と思った。

「それで、気になっていたんですけれど、後ろの彼女は？」

「ああ、妻だ」

「じゃあアルフォンスのお袋さんですか」

「そうだよ。だが、惚れないでくれ。君を切るのは少し面倒なんだ」

「後ろ姿しか見えてねえのに惚れたりほしくないですって」

現在、王妃エリーゼは生命転換ライフフォースを用いて懸命に何かを押さえている。

だが、外部からの襲撃を警戒しなくて良い今はその顔は少しの安堵の中にあつた。

なお、王妃はきちんと、とは言い難いが保存食などで栄養補給を済ませていた。さらに、10分単位のショートスリープを隙あらば行う事で最低限のコンディションを保つていたという。

ラズワルド王は正直理解できるのだが、王妃のことはさっぱり理解できないタクマであつた。

「では、地上の様子を教えてくださいませんか？ 上にはアルフォンスとロドリグにエデイがいるんだ。だいたいの脅威はなんとかなっているはずだけれど」

『王子と宰相の方は分かりませんが、エデイとは？』

「護衛長だ。巫女達の護衛を任せているとはいっても、今十分な出力を出せる巫女はエリーゼしかいないのだけれどね」

「すいません、結界に詳しくないんですけど、巫女つてもしかして生命転換ライフフォースの電池かなんかですか？」

「おそろくな。とにかく出力が必要なんだ。今、ソルディアル最強の出力のエリーゼでも結界を押し返すコトができていないからね」

そうしてタクマはエリーゼの事を魂視にて見る。それは、かなりの強度のものであったが、出力というだけを見ると今まで見た中で最高の出力というわけではない。最高の出力、というかとにかく馬鹿みたいな出力の生命ライフフォース転換の持ち主とは、ヒヨウカだ。

あの生き汚なさと生きる強さを混ぜ込んだ魂は、エリーゼ王妃の約5倍は下らないだろう。

なんだあの女と、タクマは改めて思うのだった。

「……巫女をやれそうな出力の奴にアテがあるんで、連絡取つても良いですか?」
「本当か?!……しかしどうやって?」

「遠くの人と話をできる切り札があるんですよ。ポイントがかかりますけれど」

「?稀人とは凄まじいものだな」

「いやいや、稀人を作った人が凄いですよ」

そうして、琢磨はウィンドウを開いて、追加されたメニューにあるとある機能を起動した。

それは、通話機能。

今回の1周目に追加した2000ポイントを初期費用として必要とし、一度の通話に100ポイントというアホみたいな通話料を必要とする切り札である。

「……残りポイント1001か」

『一応計算していたのですね』

「いや、ノープランだよもちろん」

『すみません、マスターの考えの浅さを忘れていました。それと、金勘定をきちんとしていなければ風人様に報告しますよ?』

「ゲーム内でくらい豪遊させてくれっての」

そうして、ヒョウカに通話をかける。

すると、背後の様々な騒音と共にヒョウカの声が聞こえて来る。

「タクマくん! 今どこ!?」

「……どこだどこ?」

「知らないでいたのか。ここは王城地下の封印の間だよ。タクマ」

「だつてさ。聞こえてた?」

「ええ! なんでそんな所にいるのか意味わからないけれどね!」

息切れをしていることから、おそらく走りながら話しているヒョウカ。かなり大変な状況に置かれているようだ。

「今王都は大変なことになってる! 街に居る人間が泥の爆弾になって汚染しているの! そうなってるのは兵士が多いから、蘇りが鍵よ!」

「……助けは必要か？」

「タクマくんはタクマくんの好きにして！　もうこれは世界が終わるかどうかの段階よ！」

「私たちの目的は最後の一人になる事！　忘れないで！　突っ込んで死んでたら、あの動画が世界に公表するからね！」

「……りよーかい」

そんな言葉を最後に通話が切れる。

今の情報は100ポイントの価値はあっただろう。

「ラズワルド王、城まで行く道とがありますか？」

「ああ。だが、危険だ。おそらく城は敵の影響下にある。エディがいるので制圧はされていないだろうが、隠し通路を知っている者ならばコトだ。十分に気をつけてくれ」

「んでタクマ、私たちってなんでつるんでたんだっけ？」

「そういえばなんででしたっけ？」

「お前ら……」

『気が合ったからでよろしいのではないのでしょうか？』

「それもそうだ」

「納得するな馬鹿二人！　精霊殿も思考を停止しないでくれ！」

そうして、ロックスとイレースは手に持っていた仮の武器を捨て、部屋に転がっていた愛用の獲物の具合を確かめる。どれも、十分に使えるようだった。

「で、タクマはこれから何するの?」

「今、上を混乱させている奴って、絶対自分が安全だと思ってますよね?」

「そこを突くか。楽しそうだ」

「城なら狙撃は無理ね。私は援護に回るわ」

そうして、3人の戦士達は、隠し通路を通って白の中へと侵入するのだった。



城の中に入ったが、その中には案の定誰もいない。

しかし、魂感知によると、玉座にていつぞやのマリオネティカの持ち主が力を使っているのがわかる。

「いや、なんで玉座?」

「趣味じゃない?」

「一番堅牢だからだろうよ。玉座の間の外壁は全てミスリル合金でできている。破るのは容易くないさ」

『貴重なご意見感謝です、ロックス様』

「……常識しか言っていない気がするのだがな」

そうして、気付かれる前にと玉座の間へと走る3人。

その目論見は通ったから通らなかつたかはわからない。だが、玉座の間に辿り着いた時にはその理由はわかつた。

斬り殺されている見知らぬ男性。鍛え方からいって尋常な者ではないため、アレが護衛長エディだろう。と3人は思い。

それを斬り殺して、マリオネティカを体の中に受け入れている騎士の姿を見た。

それは、アルフォンスその人であつた。

「王子は偽物つて事？」

「さてな、だがあの金色がマリオネティカだ！ 破壊するぞ！ 考えるのは後で良い！」

「……二人は、援護だけお願いします」

その言葉とともに、ふらりとアルフォンスの元に赴く。

アルフォンスは、これまで抵抗していたのかその異常に対しての対処を辞めて、剣を下げてこちらと向かい合う。

言葉はない。だがしかし、この胸にある想いはきつと同じだつた。

「殺す」

理由がなければ、今のタクマはともかくアルフォンスがそんな凶行を行うことはない。だがしかし、理由があれば凶行に及ぶのだ。鬼と呼ばれる者達は。

故に、友情が故に「殺したい／殺されたい」という願いで、剣を共にぶつけ合った。「全力で来いアルフォンス！俺はそれを超えて行く！」

「言っ、たな！タクマ！」

そうしてタクマの持論の元で選ばれた、最もアルフォンスを殺す近道の元の剣理を選
択する。

それは、正面からの打倒。

アルフォンスほどの使い手であれば、奇襲の際に生まれる奇襲側故に生まれる隙を突
くのは容易いだろう。故に、暗殺は不可能。この常在戦場の王子は手傷程度でその剣に
反撃の必殺を合わせるだろう。

毒殺も考えた。しかし、アルフォンスは再生能力を素で持っていると思われる生命の
生命転換の持ち主。ライフフォース解毒ができないというのは甘い考えだ。

狙撃、罠、謀殺、それぞれは考えはしたが、確実に捉える手段はない。

故に、消去法による理性の思考と殺人衝動の結論は一致し、正面からの戦いを選んだ
のだった。

アルフォンスが閃光剣レイブレドを作り出して剣先を伸ばす。それを風纏にて弾き、返す刀で流
し切りを放つ。

それはアルフォンスの仕込みに阻まれ致命傷を免れられた。おそらく鎖片平か何か。防具なしでここに来ていないのはある意味当然だった。

しかし、衝撃は確かに通り、アルフォンスとタクマの距離は離れた。

タクマの風踏みの一步で届かない、絶妙な距離に。

「ゲートオリブ 抜刀！」

「ああああああー！」

故に、二人は躊躇なく切り札を切った。

アルフォンスは泥に侵されながらも、尚気高さを失わない蒼炎の鎧。

タクマは、自身の中に残っている泥を表に出すことでの身体強化という擬似ゲート。

共に、短期戦型。それを見たロックスとイレースの二人は、戦いの隙を突くために動いていた自身の行動をやめた。

短期戦型のゲート使いが一人でゲートを抜く事は、命を捨てるという事。

それに答えて泥の呪いを身に宿したタクマも、命を捨てる覚悟を持っているという事。

この瞬間、二人の頭の中には未来のことなどかけらも存在していなかった。

ただ、全力で。

それは二人の中にある泥の呪いが導いたモノではあるが、それを理解していても二人

は戦う事を選んだ。

ヒトとして死にたいのではなく、己として死にたいのだから。

そうして、交わされた剣戟には美しさはなかった。無骨に、凄惨に、そして研ぎ澄まされた“殺す”という意志の元だけで動くもの。

それが、二人の高め合う剣だった。

だが、出力も互角、剣の技量も互角となれば勝負は覚悟の差で決まる。

それは、たった一つの不純物の存在により差が生まれた。

タクマの中にあるのは、タクマ自身の殺意が全てだ。

対してアルフォンスの中には、マリオネティカという異物が存在している。

その、マリオネティカの“死にたくない”という想いがアルフォンスの動きを一瞬邪魔をして

タクマの相打ち狙いの剣に相打ち狙いで返すはずのアルフォンスの剣は、振り遅れた。

タクマとアルフォンスの殺し合い。その第二戦は、またしても不純物による横槍の結果の決着だった。

「タクマ、マリオネティカは死体しか操れない。敵対する人間には迷うな」

「感謝する。アルフォンス」

その、最後までいいは王子としての義理を果たさなければという意志が動かした口は閉じ、完全に命を落とした。

そして、マリオネティカはいつのまにかアルフォンスの胸から離れ、護衛長エディの元へと転がっていき。

その宝玉は、矢によって貫かれかけて。

宝玉の中から結晶が現れて護衛長エディの元へと飛んでいった。

そして、《操魔サビク》という名前が、その結晶を見て感じられた。

「テメエが本体か！」

「名乗りとかふざけてんじゃないわよ石ころ風情が！」

「死ね！」

3人の抜き打ちの殺意が、サビクの結晶を襲う。それは、間違はなく必殺だった。ロックスの一点圧縮重力場、イレースの風を着弾時に爆発させるように仕込んだ矢。そして擬似ゲートによって出力を増したタクマの剣。

その全てが結晶を襲い。

そして、突如襲った激痛によって3人は動けなくなつた。

この感触にタクマは覚えがある。暗殺者の作り出したゲートだ。

何かが着弾したのは背後から、誰かがこの戦場に隠れていたのだ。自分たちを殺すた

めに。

「……全く、どうして今ので死なないのやら」

そんなくぐもった言葉を最後に、もう一度暗器が投げられる。それに刺さった者達は死亡した。

激痛による、ショック死だった。

「では、サビク。予想外のことはあつたがアルフォンスの死体は手に入った。直してから、地下に行こう……この地獄を、終わらせる為に」

そうして離れて行く暗殺者とアルフォンスの体を使っているサビク。今はサビク・アルフォンスだろうが。

そんな姿を見て、泥で突き刺さるのだけは回避したタクマはじつと見つめる。

『アイツを殺すぞ、メデイ』

『はい。故に今は安静に。痛み慣れるまでは、動かずに潜みましょう。魂を、抑え込んで』

タクマはその言葉に内心で頷いて、じつと耐え忍んだ。

激痛の走る、体のままに。

激情の走る、心のままに。

無意識の行動

敵の向かう先は分かっている。封印の間だ。

故に、タクマは丁寧に深呼吸をして魂を整える。痛みでどうにかなりそうなものを、ただの気合いで押さえ込む。

そうして、真っ直ぐに立ち直ったタクマは、第0形態へとアバターをシフトして、玉座の間から垂直に落下する。

衝動と魂の、導くままに。

そして、封印の間にてラズワールド王の戦いを見る。

サビク・アルフォンスはアルフォンスの体を使い捨てるように戦っている。そしてそこに放たれる暗殺者のゲート能力。痛覚を倍増させるもの。

捨身の相手を手傷一つ負わないで倒すのは、難しい。ラズワールド王ならば体がアルフォンスだからと躊躇いはしないだろうが、それでもコンディションから考えて傷くらは負うだろう。

ならば、今の自分に必要なのはこのゲート使いの排除だ。

実力差から考えて、確実に命を取れるとはタクマには思えない。あの暗殺者の技量は

相当に強いのだから。

だが、ゲートが緩めばそれはきつとラズワールド王の勝機になるだろう。

故に、タクマは極限まで殺意を抑え、音を抑え、魂を抑えて、暗殺者に切り掛かった。

「ッ!?」

その奇襲に対して迷わず回避を行う暗殺者。しかし、その顔に傷をつけることができ、彼の顔を隠していた仮面を叩き落としていた。

それが、命取りだった。

「……エディ?」

その、信じられないモノを見た衝撃がラズワールド王の隙を作る。

その、決して見せたくない事実が、暗殺者の隙を作る。

その二つの隙を、タクマとサビクは見逃さなかった。

暗殺者、はタクマにより殺され。

ラズワールド王は、サビクにより袈裟に切られて重傷を負った。

「……死ね」

そして、今までその力を押さえ込んでいたのは誰かを思い知らされた。

溢れ出る魂。研ぎ澄まされた剣。それがアルフォンスの体を両断し、続く太刀にてサ

ビクの本体であるコアが両断された。

「……王様！」

その、命を投げるてるかのような出力に今まで集中故に沈黙を守っていた王妃が叫ぶ。

それにより、封印への集中が僅かに解けた。

そこを、邪悪は狙っていた。

「ガハツ!?」

突如空中に現れたゲートから伸びる闇色の光。それは変わらずに王妃を狙い放たれ、それをラズワルド王が背中中で防いでしまった。

「情があるからそうなるのだよ、剣王。生命転換、ライフオーズ過剰伝達」

その闇の剣はラズワルド王を闇の炎にて焼き尽くした。両腕は焼けただれたように使い物にならず。両足は形があるのが不思議なほどだ。両腕は焼けただれたように

そして、闇色の光が突き刺さった胸には、致命傷だと遠目ですらわかる大穴が開いていた。

「王様！」

『タクマ少年、少しの間エリーゼを頼む』

「了解です。御武運を」

そんな魂での声に、琢磨は心にもない声で応える。

このままでは絶対に勝てないと、タクマは判断してしまっているからだ。

だが、どうせ死ぬならこの衝動には任せたくない。殺すだけでなく、守るフリくらいはしておこう。そんなちっぽけな理由だった。

タクマは、命に美しさを感じてはいなかった。

それでも、美しいと感じたいと思っていたのだ。少なくとも表面上は。

そうして、王妃をタクマは背中に庇い剣を構え、ラズワールド王は最後の命でゲートを開き。

闇の剣の出ってきたゲートからは、闇を纏ったかのような黒騎士が現れた。

「なぜ、黙していなかった？」

「あいにくと俺はとつとと死にたいんだよ……だから、手つ取り早く聖剣使いを見つけたいって話に乗った。それだけだ」

「今を生きてたくはないのか？」

「もう十分すぎるほど生きたさ、ラズワールド」

「ならば、ここに引導を渡そう。我が友の、残響よ」

「うるせえ。お前が死ね」

そうして、行われる剣戟。技を突き詰めた先にある力押し of 応酬。小手先では何も変

わからない、桁違いのスケールのパワーとパワーだ。

だが、決着はすぐについた。

これまでの戦闘のダメージが、ラズワルド王を襲ったのだ。

「終わりだ」

「ああ、終わりか……などと、諦めはしない」

それでもラズワルド王は剣を振るう。剣城が弾かれたのなら拳を、腕が消し飛んだのなら足を、足が刻まれたのなら歯を。

そんな、何があるんでも殺すという意志だけで、ラズワルド王は戦いを続けた。

その姿にこそ、タクマはなにかを感じた。

「貴様は、本当にいつもいつもー」

そんな言葉の苛つきが感じられた時。

タクマは、踏み込んでいた。

あと先どころかなぜ踏み込んだのかすらわからない理外の行動。それはいつものように最適化された行動ではなかったが、それでも黒騎士の片腕を撥ね飛ばすことをしてのけた。

「なにやっつてんだろ、俺」

そんな言葉が、返された闇色の光にて消しとんだタクマの最後の言葉だった。



そうして、タクマの帰還とともに始まるリザルト会議。どうやらタクマは自身が戦っているうちに最後の一人になっていたようだった。

だが、そのリザルトの内容をタクマはほとんど聞いていない。それほど、何故か体が飛び出した理由がわからなかったのだ。

殺せるから飛び出した。それならば迷いはなかった。

守りたいから飛び出した。そんな殊勝な心はタクマにはない。

そんなことばかりを考えていたら。全力のピンタがタクマを襲った。

「タクマくん。私を見ないで誰の事を思っていたのか教えてくれない？ ソイツを踏みこむから」

「……ヒョウカ」

「なにがあつたのか話してよ。私には」

そうして顔を上げると心配そうにタクマを見ていた仲間たちがいた。

あの自分の事でいっぱいっっぱいのカナデですらコレなのだから、相当なのだろうとタクマは思った。

そんな皆を、殺してみたいと、殺し合ってみたいと思いつながら『それがあなたです。受け入れましょう』とメデイの声の元、タクマは自身の感じた事を交えて今回の週の事を

皆に話した。

「……いや、泥に汚染されてから殺意が止まらないって、病院行つたの明太子」

「行きましたよじゅーじゅんさん。さすがに」

「けどタクマくん、大なり小なりそういうところあつたじゃない」

「おい、なんかすげえ事言つてるぞお前の彼女」

「彼女じゃないですよユージさん」

「ええ、もつと深い関係だもの」

「お前は変に流すなヒョウカさん」

「まあ、大丈夫になつたなら私は良い」

そんなカナデの言葉と共に、タクマの頭が切り替わる。

そう、これまでのことはある意味前哨戦でしかないのだ。

本当の戦いは、これから。

「それで、今回の最後の一人は……最後に来た明太子とミセスのどっちだろうね？」

「録画で確認できないんですか？」

「駄目よ。録画が見せるのはワールドの記録だけ、私はロビーに長いこといたから、録画からの逆算でタクマくんとこの時間差を判別するのは不可能よ」

「なら、二手に分かれようか。ヒョウカちゃんは……病院か。抜け出せる？」

そのじゅーじゆんの言葉に、ヒョウカは自慢げに言う。

「私の病室のセキユリティを舐めないでくれる？ 一度も脱走に成功したことはないわ」

「駄目じゃねえかよ」

もちろん、即座にユージ突つ込まれたが。

それから、全員が考えた手段はシンプル。

二手に分かれるのだ。

タクマは栗本刑事との二人なので、実質タクマと他全員だが。

「一応聞くけど、なんで俺一人何ですか？」

「逆に聞くけど、何でだと思う？」

「後ろから切られたくないからですかね？」

「半分正解。もう半分は、強いから。明太子が当たりなら最速最短でコアになつてる奴

を潰せる。そうじゃないなら人数使つての防衛戦。明太子は奇襲役ね？」

「おかしい、俺一人にかかる仕事が重すぎる」

『それだけ、強くなられたという事ではないでしょうか？』

「まだゲート開けてないんだけどなあ……」

そうして、夜が来る。

これまでの経験から、異界が現れるのは深夜。そこに、病院一本の道で繋がっている自然公園の二箇所待ち構えることになった。

互いの距離は、約3キロ。自然公園の方のロケーションを優先した結果だった。

迎撃の準備は、できていた。

少なくとも、現状をこれまでの経験から予測していた全員は、そう思っていた。

割れない空

夜もふけた頃。人が寝る時間をなんで削らなくてはならないんだと思いつつも、夕クマはバイクの上で力を抜いていた。

そんな姿をパトカーの中にいる刑事栗本は呆れたように見ている。これが「署内最強」の見込んだ少年なのかと。

「なあ、風見。お前気を抜きすぎじゃねえか？」

「……そんなもんですか？」

『まあ、マスターはある意味常在戦場ですから』

「どういう意味だ？」

『戦闘時と現在の精神的コンディションに変化がないのです』

「……足柄から聞いたが、精神汚染の可能性だとかはあるか？」

「生まれつきです」

「なんで現代日本にそんなのが産まれんだよ」

「そんなの俺が知りたいですよ」

そうしていると、繋げたままの通話の向こう側からは、2D格ゲーで楽しんでいる足

柄さんと裕司さんの声が聞こえる。

「あっちの方に注意しないでいいんですか？」とタクマが聞くと、「俺たち今勤務時間外ってことになってんだよ」と返ってくる。

それは、警察の「現場判断」がまだ続いていることを示していた。

「警察でなんか特殊部隊とか作らないんですか？」

「アニメの見過ぎだ。あと、そういうのをどうにかするために今は上の連中が頑張ってるんだよ。今は努力は見えないだろうが、そんな気にするな」

その言葉に栗本は続けて言う。トップシークレットというわけではないが、それなりの機密情報を。

「ゲームの安全性が確認できたら本格的に警察も自衛隊も投入していくって話だ。そうなりや、お前も安心だろ？」

「……はい、そうですね」

そうなれば積極的に最後の一人ラストワンになって戦いに絡もうと考えているタクマであったが、メイにそれは止められた。相変わらずブレーキが外付けの少年である。

「これまでの出現パターンから逆算すると、そろそろかな？ めんたい……風見くん、皆、警戒強めに」

「明太子でいいですよじゅーじゅんさん」

「リアルでアバターネーム呼ぶなコラ」

「先に振ったのあんたでしようが」

そうして、タクマと足柄達との通信が切れる。

どちらかが切ったわけではない。通信障害の発生だ。

「栗本刑事！」

「わかつてる！ 病院まで飛ばすぞ！」

そうして、栗本刑事のパトカーとタクマのバイクは一直線に病院へと進む。

すると、すぐに異界に侵入した感覚がやってきた。

「エリアデカすぎません!?？」

「俺が知るか！」

『ヒョウカ様の病室を中心に半径2キロ半以上敷いた警戒線を優に超えています！』

「んでもって、また来た泥騎士たち！」

そうして琢磨達の前で、馬に乗った4人の泥の騎士達が並走してくる。

バイクにわざと並走していることから、速度は向こうのほうが上。

「馬とパトカーとバイクでチェイスとかどこの破茶滅茶特撮だよ！」

「言ってる場合か！ 来るぞ！」

そうして、泥の騎士達から放たれるのは強弓の斉射。数は4人と少ないが、その狙い

は正確無比。

そして、威力は言わずもがな。

一撃で栗本刑事のパトカーは吹っ飛ばされ、なんとか躲しタクマの近くの道路は破壊されてその破片がバイクを襲う。

そして、進行方向には重装と思わしき泥の騎士達が待ち構えていた。

「嵌められたり?」

「みたいだな!」

とつさにパトカーのフロート機能を起動して空中に出た栗本は、このままでは死ぬと感じていた。

「風見! あれやるぞ!」

「了解です、栗本刑事!」

『どうしてノリノリなのですかマスターは』

そうして、栗本刑事の乗るパトカーから、暴徒鎮圧用ではなく、対機械兵器武装としてパトカーに積み込まれている空気圧縮弾の装填がされる。

もちろん、それがそのまま着弾しても泥の騎士達にダメージはない。弾丸のコスト分安いというだけで装備されている武装だ。実のところ重ロボットには効果はそんなになかったりする欠陥装備で、現在普及しているパトカーには搭載されていない。

しかし、この異界で風使いと組んで戦う分には、最強の兵装であった。
ライフフォースデイスチャーシ
「生命転換放 出！ 空気に、命を！」

そう、それはファンタジーのモンスターには魂の乗った攻撃以外通用しないという理
外のプロテクトを抜く攻撃。

今、空中から放たれた空気圧縮弾は琢磨の命の空気を吸い込み、ファンタジーに対し
て現代兵器を叩き込むというイカサマをやつてのけた。

その一撃は減衰されても尚泥の騎士達を粉微塵にするようなものであり、機動力を活
かして致命傷から逃れた騎兵以外、騎士達は全滅した。

そしてその逃れた騎兵達も、琢磨のバイクによる急接近に反応できずにその馬のコア
を切り落とされた。

メデイによる運転により、琢磨は馬のコアの観察を可能にしたのだ。

もちろん、それは高速で動くバイクの動きに対しての適切な体重移動ができていなけ
ればできない荒技だが

琢磨（こ）とメデイ（メ）にはさして難しいことではなかった。

「メデイ！ あの中にコアは？」

『不明です！ 泥が覆っているせいで身体が見えません！』

「なら、無視する……って馬作り直せるのかよお前ら！」

『ならば一択！』

「……で仕留める！」

そうしてバイクから飛び降りた琢磨は、通じないだろうという諦めはありつつも丹田を通った急所を鉄パイプで打ち抜いた。

馬を再生できるという事は、速度でバイクを上回っているという事。背後からゲートを使った急襲などされたらどんなに実力があっても死ぬ。少なくとも琢磨はそうだ。

故に、バイクから抜き取った鉄パイプを、臆病者チキンソードの剣へと置換させながら、再生時の筋肉の動きを観察する。その、どこを庇って動いているかを見る事で、コアの位置を割り出していった。

そして、そのコアに剣を振るう。

「……右肩あたり！」

『ヒット、です』

もちろん、この割り出し方とて確実ではない。だが、魂のコントロール能力が互角であつたり技量が突出していたりという異常がなければ、彼ら泥の騎士は殺し続けられコアにはいずれ当たるとは。

下手な鉄砲なんとやらだ。

そうして、5分ほど時間をかけて4人の騎兵達を斬り殺し、琢磨と栗本は再び病院へ

と向かうのだった。

「メデイ！ 氷華との通信は繋がるか!?!？」

『……応答がありません！ 非常事態に間違いはないかと！』

「何のために高いポイント出してアバター改造したと思ってんだ畜生！」

「ごちゃごちゃ言うならエンジン吹かせ！」

と、栗本の声にすでにフルスロットルのエンジンにどうにか加速をつけられないかを考えた所で。

氷華からの、コールがやってきた。アバター機能のものだ。

「氷華！ 無事か！」

「……ええ、私は一応五体満足よ」

「……氷華？」

「落ち着いて聞いて、琢磨くん。私達、詰んでるみたい」

「……何があつた？」

「まず、足柄刑事は死んだわ。奇襲に反応できたんだけど、メイスを闇の剣で叩き切られてそのまま」

「……そう、か」

「次に、奏と裕司さんは、戦闘不能。戦ったんだけど、鎧袖一触。二人ともどうにか命は

繋いでるけど、傷は深い」

「ああ」

そして、これから最悪が語られるのを琢磨はなんとなく分かっていた。氷華は、勝ち筋を諦めない。絶対に、可能性がゼロであっても足掻く事を諦めない。

そんな彼女が、詰んだと言ったのだ。それは、相当なトンデモを向こうがやらかしたという事。

「そして、生き残ったあの黒いのは、自分の体を分け与えていったの。病院にいる人達に。あの侵食速度なら、VIPルーム以外全滅でしょうね」

「どうして氷華は無事なんだ？」

「今、部屋全体に生命転換ライフフォースを放ち続けているの。光と水の結界で、どうにか泥は防げてる。けれど、あの黒いのが戻ってきたら、次は防げない。……だから、あと2分も無いわね」

「……クソが」

判断を間違えた。琢磨はそう思った。

あそこで、背後からの急襲のリスクを負ってでも氷華を守りに行くべきだったか？

そんな事を考えて。

魂を犯す感覚が、琢磨を襲った。

「……リアッ！」

反射的に風纏にて殺気の方に風の壁を作り、投げられてきたメスなどの刃物の数々を流す。

そして、その回避と同時に琢磨に影がかかる。

上空からの急襲。それはファンタジー世界には無いビルの電灯によって察知できたが、壁を蹴つて下側に加速してくるその剣を琢磨は防いではならない。

今、琢磨は痛覚激増状態にある。足の感覚などに影響がないといことは、あの暗殺者の生命転換がトリガーなのだろうと改めて認識できる。状況証拠でしかないが。

「……押し通る」

「できるか?」

剣を構えつつ、刃の鏡で栗本刑事の動きを見る。目があつた瞬間に、逆走を始めて別ルートから病院に向かうようだ。

刃越しに合つた目は、死んでなどいなかった。

『マスター、明らかに会話機能を有している個体です。コアの可能性は高いかと』
「だろうな。だが、実際問題泥は使えないぞ」

『ええ、内の泥を出力するゲートもどきは痛みを伴います。そんなあからさまなものでは、直接流し込まれない生命転換でも起動するでしょう。あの激痛が』

そうして、暗殺者は闇色の光を剣に纏わせる。閃光剣だ。どうして黒いのかは知らな

いが、相応の威力を有している。

これで、気合で一発受け流すなんて事も封じられてしまった。

先に手札を見せるだけでこちらの行動を縛り続けている。これは、明らかに人間相手の剣理が根本にある剣だ。

だが、その構えを見て彼を暗殺者と断ずるのは早かったと思った。

剣に、守るあり方が馴染んでいる。

一太刀も振るわせないこと、それが彼の剣理なのだ。

だが、そんな戦闘構築は速やかに破壊しなくてはならない。氷華のVIPルームはコイツが目の前にいるからまだ崩れないだろうが、それでも限界はあるだろう。

故に、剣は自爆覚悟の一発芸。

ライフフォース生命転換を全開にし、全力で風を踏む。自身でのコントロールを投げ出した暴走剣

だ。

「笑止」

当然、そんなものは幾度となく見てきた彼の剣は、適切に迎撃を選択している。

だから、さらに風を踏み、超低空へと体の弾道を変化させた。それはもはや地面を滑っているのと変わらない。1センチ浮いているかどうかの違いだ。

故に、この奇襲は着弾した。対空迎撃に対して、それを潜つての滑り込んでの脛斬り

だ。

そして、それで終わらない。

片手で振ったその剣をそのままに、逆の手で地面を叩き縦回転。さらに風踏みで垂直の壁を蹴るように踏み抜き、その丹田への剣を叩きつけた。

その剣は彼の閃光剣レイブレイドにて防がれたが、風の刃は臆病者の剣チキンソードを保護した。剣は切られてはいない。

そして、着弾の瞬間に手を離していた琢磨には、剣を受けたことによるダメージもない。

そこからは、琢磨のターンだ。完全なる迎撃を殺された経験から破った蓄積の勝利だ。

踏み込み、ゼロレンジから風を纏った掌底を彼に押しつけ、そこにある命を全て叩きつけた。

コントロールなど要らない。琢磨の衝動がそう言うのだ。

コントロールをする必要はない。生命転換ライフフォーメスは無軌道なそれを叩きつけるだけで十分な凶器なのだから。そう理性は言った。

その一撃は着弾し。琢磨の戦闘不能と引き換えに。彼の者の胴を吹き飛ばした。

「メデイ、再生は？」

『……していません』

「じゃあ、これで氷華達も……?」

そうして、琢磨は空を見る。

いつもならば、割れるように世界が戻るそれは。未だ健在であり。

異界は、確実に現実世界を侵食し続けていた。

コアは、まだ残っているのだ。

それが、守ると誓った彼女の死に繋がることが理解できてしまった琢磨は、じつと拳を握りしめた。

生命燃焼

動かなければ。自身の体の生命ライフフオース転換の少なさから感じる飢餓感を感じながら琢磨は思う。

『マスター……あなたが陥っているのは、命の枯渇です。気合で動けるようになれるものではありません』

だからと言って、動かないではいられない。ここで立てなきや、義父との約束を破ってしまふ。先生の教えに反してしまふ。亡き両親の生きざまに反してしまふ。

生きることを諦めていたあの子が、笑顔で外に飛んでいくのを見て、きつと自分もそうあれれると思うことができなくなる。

それを、琢磨は許容することができなかつた。

そうしていると、再び氷華からのコールがきた。

「氷華……」

「琢磨君、生きてるみたいね」

「ああ、お前もな」

「いえ、そもいかないみたい。外から割られてる。魂の残量なんてわからないけれど、

あと3分持たないわね。所詮氷だもの」

「今、助けに……」

「琢磨くんが万全ならもう来てるでしょう？　なら、そうじゃないってこと。分かってるわよ大体。好きな人の事だもの」

「……そういうのは、本当に好きな人に言えよ」

「そうよ。だから言ってるの」

氷華は、今生の別れを告げるように、言った。透き通るような、悟った声で。

「私、琢磨くんの事好きよ。始まりは、間違いだらけだったけど。それでも」

■ □ ■

風見琢磨と御影氷華の始まりは、ただ、氷華が琢磨を利用するだけのものだった。

同時、氷華の体に巣食っていた病は数知れず、それに対しての前例などなかった。そして、治験を行う以前に、彼女には生きる意志がなかった。

助けたいと思い、奔走する風人の思惑に反して。

当時の琢磨は、それを手伝おうと動いた。風人が乱雑に散らかしたデータの中からソレを見つけ出して、実際に氷華と会いソレを提案した。

“婚約による疑似的な家族関係の構築”という荒技中の荒技を。

医師と家族関係になれば、承認前の治療法を治験という名目で行うことができる。

もちろん、失敗すれば医師免許の剥奪は当たり前前に起きる。治療の成功前に事態が発覚しても同様だ。ソレほどに真つ黒な手段だ。

それを理解はしていなかった当時の琢磨はまだまともだった頃のメイを使つて申請書類などを整えて、氷華へと会いに行つた。

家族と死に別れ、運良く生き残つたのに数々の病が彼女を殺すと告げられ、命が繋がる可能性が0%だと告げられた彼女に。

ただ、死んでないだけの目をした彼女に。

それから、琢磨はありとあらゆる手段で彼女を説得しようとした。しかし、口はさして上手くなく、まだほとんど何も持つていなかった琢磨には説得の材料などなかった。

ただ一つ、運動神経を衰えさせないようにと風人が与えてくれたVR教材以外は。

「俺がこの勝率100%の人に勝つたら、認めてくれるか？」

「私への、当て付け？」

「ああ、0%だから諦めてるんだろ？ だったら、俺はそれを殺す」

「……やつてみればいいじゃない」

そうして、二人はVR空間へと入り。

今の琢磨を形作つた二千回以上の敗北の先に、諦めずに掴み取つた一勝を魅せつけた。

氷華は、架空の中での本格的な殺し合いに、その中で諦めないで戦い続けた彼の姿に、ありえない可能性を感じたのだ。

だからこそ、氷華は琢磨と婚約し、琢磨を利用して生きながらえてやるという意味を定めたのだ。

そして琢磨も、凧人の望みを叶えつつ、両親のように守れる男になるように氷華を利用する事を覚えた。

そんな利害関係が、二人の始まりだった。

だが、利用し合っていくたびに、二人は変わっていった。

氷華は琢磨の異常性を学び、まともでは可能性の先を掴めないと自身の精神性を作り変えた。

琢磨は氷華の生来の計算高さを学び、自身の異常性を隠しながら発散する術を身につけた。

そんな互いに成長を促しながらの利害関係。それが、二人の関係の筈だった。

……筈だったのだ。



これまでの事を、琢磨は思い返す。

だから、氷華のその言葉には現実感がなかった。

ただ、利用し合ってるだけだった筈なのに。彼女の好意とて、親愛以上のものはなかつた筈なのに。

「……氷華？」

「ああ、言っちゃった。琢磨の重荷になりたくなかつたのに、琢磨の偽の婚約者のままで良かつたのに。どうしてだろう？」

その言葉とともに、氷華の背後の音が聞こえて来る。

多くの敵が泥の力で氷華の結界を砕いているのだろう。本当にもう、時間はない。

時が、足りない。

力が、足りない。

命が、足りない。

魂が、足りない。

この時、琢磨は生まれて初めて本当の意味で守るために力を欲した。おそらく愛してはいない、偽の婚約者のために。

そうして、琢磨は自分のどこかに力がないかを探し出した。それは無謀のことだったが

いくつかの要素が、“ソレ”に達する手助けをしてしまった。

まず、琢磨の魂を汚染したままの闇の泥。それが、繋がらない筈の道を繋いだ。

次に、琢磨自身の精神性。今の琢磨は死んでも守るといふ意思だけで意識を繋いでいる。死を、許容してしまっているのだ。

そして、メデイの存在。メデイがそこに無自覚にアクセスしていたが為に、琢磨はそこへのアクセスを体で覚えていた。

それが、琢磨に命を燃やさせた。

「ライフバースト生命燃焼……ッ！」

それはゲートとは違う。ゲートは魂を変質させるものだから。

それは、ダイナから使うなど言われていた禁断の力のさらに先。現在の魂でなく、その先にある生命いのちそのものを燃料にする暴挙。

その反動で琢磨の魂は激痛に苛まれ、しかし活力を取り戻していく。

決して、取り返せないものと引き換えに。

『マスター……』

「分かってる。それでも行くぞ」

『……私は、あなたの健康管理AIです。そして今は、あなたの明日の体より、あなたの今の心を優先するべきと判断します。故に、相棒の馬鹿を手助けすると決めました』

そして、メデイが最後に話した言葉を最後に、魂に走る痛みが少し楽になる。

今なら行ける。そう思った琢磨は、感覚に従って腕を振るい臆病者の剣チキンソードを風で手繰り

寄せ、風を踏んで病院の中へと飛び込んだ。

そしてVIPルームへと直進し、氷の結界を砕こうとしている泥の人間を切り捨てる。

不思議な事に、泥のコアは喉を貫いて露出していた。

だから、琢磨はもう躊躇いはしなかった。

彼の背中には、守ると決めた人がいるのだから。

殺す事では守れない琢磨は、そうして泥の人型を殺し続けた。

その時間は、20分。内部の氷に変化はなく。繋がりつばなしの氷華の通信にも反応はない。気絶しているのだと信じて、琢磨は敵を殺し続ける。途中でパトランプの音が聞こえたから、栗本は無事だったのだと琢磨は理解して、自身の場所を示すために風を放つと

紅い髪が泥の隙間が見えた。

わかっていると、俺が殺すのだと琢磨は迷わずに喉を貫いた。

次第に、敵の泥の量が減ってきた。それにより、多くの見知った顔が現れる。勤務医、看護師、清掃員、そしてホスピスの患者達。

わかっていると、俺が殺すのだと迷わずに喉を貫いた。

そして、スーツの刑事がメイスを持って、喉に一際大きな結晶を携えてやってきた。

わかつていると、俺が殺すのだと剣を振るう。

「なんでだ？ 明太子」

それに返答する力は琢磨にはない。だが、あえて言葉にするのならこうだろう。

『うるせえ死ぬ』

足柄の体を操って、サビクのメイスの連撃が放たれる。

その連撃には、確かな怒りが乗っていた。それしかないからと言い訳をすれば、いくらでも殺していいのかという足柄自身の怒りが。

その感情が、彼のゲートを開いた。

「ゲートオープン
■ 抜刀ッ！」

そうしてゲートを潜って現れたのは、泥の男ではない。

道化の装いを纏った、足柄だった。

足柄は、作り出した泥の玉をメイスで弾いて飛ばしてくる。琢磨はそれを回避するも、次の瞬間に琢磨の正面から足柄は消えた。そして背後からのメイスの一撃。隠せていない殺気に反応して剣を合わせるが、メイスはドス黒い泥によって作られており、風の刃にて切り裂かれることはなかった。

そして、再び足柄が視界の中から消える。

そして悪寒に従って琢磨が空を踏んで窓の外に出ると、そこには先ほどの泥の玉が爆

発して濁流になっっているのが見えた。

「死ね」

「……お前がな、足柄」

そして、琢磨の発していた風を圧縮して放たれた栗本のパトカーの空気弾が足柄をに着弾し、その命を終わらせた。

“そいつの方を殺すべきだろう！” という目が、離れることはなかったが。それでも、足柄は死に絶えた。それと同時に空が割れる。

異界の、終わりだ。

「……どうすりゃ良いんだろうな、コレは」

世界は元に戻り、建物は直り、人の傷はなくなった。

そして、死体だけが異界へと連れ去られた。

帝大病院大量拉致事件。周辺区域を合わせても、生存者は5名。それ以外は全員異界にて死亡し、消失している。

それが、これから琢磨達の生きるこの世界が戦わなくてはならない敵からの、攻撃だった。

それでも、戦うと、“守る”と決めた少年が一人いた。死の運命を、またしても覆した女がいた。何もできずに、後から話を聞いて“もつと強くなる”と決めた少年少女が

いた。必ず真相を暴くと、タバコをふかした中年がいた。

仇を討つ、失われた人々を取り戻す。その意思が生き残った者たちの中で強く輝き始
めていた。

ボランティエアスタツフ

帝大付属病院大量消失事件。これにより、異界の脅威は知れ渡った。

千葉のマンシヨン、東京の大病院。合わせて500人以上の消失者が現れたのだ。理由のあたりはつけられたとはいえ、確定ではない。

そして、この事件の第一人者であつた足柄「警部」は消失してしまつた。若き俊英であつた彼自身の捜査データこそ共有されていたものの、彼がまだ感じていただけのものはメモ書き程度にしか残されていない。

情報と攻略の先導者であり、そして何より「頼れる刑事」であつた足柄の死は、裕司と奏に少なくない動揺を与えた。

そして、奏は「そこにいながら誰も守れなかつた事を」裕司は姉の茜をも死なせてしまった事」を、悔やみ、苦しみ、それを傷にしていた。

彼らの心の強さ故に立ち上がりこそできているものの、その顔は暗かつた、

しかし、変わらず立ち上がる者達はいた。

栗本は、自身の後輩である足柄の仇討ちの為に、いつも通りに警察として立ち上がった。

氷華は、やらなければ死ぬと、死にたくはないと考え、他人事にはしてられないと歳不相応に考えた。

琢磨は、初めて現実の人間の殺した事に何も感じない自分を呪いつつも、今は躊躇いなく殺せる自分のような人間が必要な事を理解した。

必要だから、ただそれだけで人を殺せるのが琢磨だった。……本質的には、ソレすらも必要としていないが。

そんな5人は、警察署内の特務室にて事情聴取を受けていた。

それを主導するのは、“特殊技能事件対策課”。足柄と栗本の所属していた、かつてVR犯罪が流行していた頃の花形部署だった課だ。

今では、VR課に席を譲った部署でしかなかった。

“Soul Linker”という魂へのアクセスを可能にしたオーパーツが現れ、それに呼応するように感情の獲得を達したAI達が現れるまでは。

世間一般で知られているAI達は感情の獲得にてプラスの感情を会得しているだけという事になっているが、もちろんそんなことはない。

自我はある。役割を放棄することはしない。しかし、パートナーの為にならなかったりする。それが自我を獲得したAI達だ。

今、感情を獲得しているAIを利用した犯罪が起きていないのは運がいいだけだと警

察は判断しているのだ。

そんな背景があり、密かに精鋭を集めていた対策課は、異界事件に対してある程度先手を取ることができていたのだ。

そんな対策課の課長を務める篠崎という女傑が、琢磨に相對していた。

「つまり、君は多くの人を殺したと」

「はい。他にも当時病院に居た人達はほとんど俺が殺しました。……足柄刑事に、トドメはさせませんでしたけど」

「その割には、随分と冷静だ」

「そういう人間だって、報告受けていませんでしたか？」

「いいや、ボカされていたよ。隠しフォルダの方にはしっかりと記録されていたがな。現代の殺人鬼に『ならなかった』少年だって」

その言葉に、琢磨は苦笑する。ならなかったのではなく、心臓がうまく動かなかつたが故にたまたま実行をしていなかっただけなのだから。

その動かなかつた時にきちんとした倫理観を理解しなければ、今の琢磨はなかった。そういう事だ。

だが、その枷ももう取れた。琢磨はもう、殺人を犯した重罪人なのだから。

「それで風見琢磨。君はどうしたい？」

「少年院、じゃないんですか？」

「あいにくと証拠がない。私個人の感情の話で言えば君のような危険人物には塀の中で過こして欲しい所だがね」

「自白じゃダメなんですか？」

「駄目だ。ああ、そこにいるA Iの彼女が発言しても君の為の言葉を吐く可能性が高い。信用はできないよ」

『……私が感情を持つているからですか？』

「その通りだ。君は風見琢磨の味方だ。そう感情を獲得している」

『否定します。私はマスターの生命の味方です。マスターの暴走を止める為ならば。マスターの敵にだってなるつもりです』

その言葉に一瞬驚きの顔を見せて、嚙猛な笑みを浮かべた。

「ならば何故、風見琢磨を危険へ赴かせた？」

『それが、マスターの生きることだからです』

「それが風見琢磨の死に繋がるとしてもなか？」

『それで死ぬようなマスターなら、私は苦勞はしていません』

「メデイ、それでいいのをお前」

『はい。信じる、というのが私の選択でしたから』

「最悪の時は止めてくれよ？ 相棒」

『当然です。私はあなたの都合のいい道具ではありませんから』

「……私には、そう見えるがな」

そんな刺々しい声に対して、メデイは返答を返す。琢磨はアレを見せるのだなと理解して、ため息を吐いた。

『では、私が収集したこれがマスターの精神状態推移をお渡しします。それに残されている私のデータを見れば、意味はわかるかと』

そうしてメデイが見せるのは、琢磨の精神、魂に干渉して殺意を止めていた記録だ。

それは琢磨にとっては恥の象徴であるが、琢磨の意思をメデイが否定したという確固たる事実でもあった。

「……風見琢磨。不安は無かったのか？」

「まあ、相棒のやる事ですから」

その、命を全部預けている二人の関係を見て、篠崎は作っていた表情を解き、呆れた顔に変わった。

「……負けた。これだからAIとの主従は嫌になる。イカれた奴にしかそういうAIは生まれないのか？」

「所で、結局何の話でしたっけ？」

『マスター、それは流石に失礼すぎます』

「構わん、意図的に話題をズラした」

篠崎は、ARタバコを口に加えて一息付いてから言う。今までの獰猛さではなく、大人の冷徹さからの言葉を。

「足柄の報告にある人柄には納得できた。故に率直に言う。風見琢磨、お前を対策課で雇いたい。報酬はお前の戦う場所、あとはお前が殺した連中の奪還までの間、殺人の罪を問わないという事。もちろん拒否権はある。どうだ？」

「どうだつて、俺は何をさせられるんですか」

「得意だろう？ 侵略してくる奴らをブチ殺せ。警察と自衛隊が生命転換ライフオーサスを身につけても、お前は対策課ウチの懐刀として使わせて貰う。それが足柄との暗黙の了解との違いだ」

「就労年齢の関係は？」

「ボランティアでやれ」

『素敵な条件ですね』

「それなら当然、参加しますとつても素敵なボランティアに」

「いい返事だ」

そうして、琢磨は対策課へのボランティア活動に参加したのだった。



「じゃあ、二人もまた外部協力者になったんですか」

「……ああ」

「絶対に、殺す」

その琢磨の言葉に返すのは裕司と奏。

どちらもボランティアの話は受けていないようだが、戦う覚悟については全く衰えていない。むしろ鋭さすら感じられる。

対して、平常心で「ボランティアを受けた」と目で伝えていたのが氷華。

人間性や年齢、精神性は度外視で選ばれたようだ。琢磨と氷華の二人は。

「それじゃあ、今回からは私が仕切るわ。私たちがやるべき事は一つだけけど」

「異界を、破壊する事か？」

「いいえ、ゲームをクリアすることよ。敗北がきっかけで生まれた異界の敵の強さは尋常じゃなかった。このまま負け続けるとリアルな戦力が追いつかなくなるわ。だから、今回はどんなに無理をしても勝ちに行かなくてはならない。次のプラクティスエリアを解放して「リアルでも戦える戦力」を補強しないといけないから」

そう断言する氷華。その姿は堂々と、凛々しくあつた。

「……プランはあるのか？」

「勝つまでも、勝つた後もね。さつき栗本さんと詰めたから、リアルでの作戦は問題ない

わ。ゲームでの作戦は、とってもそそると思うわよ？」

「遊びじゃ、ない」

裕司と奏の追い詰められた声が、しつかりと氷華を見据えるが、氷華はしれつと答えた。

「あのゲームはまだ遊びと思われるわ。だから、プレイヤーを先導するには思いつきり遊ばせた方がよい。——ワールド規模の死にゲーはもう終わりよ。ワールド規模でのRリアルタイムアタックTタックAでプレイヤー全体を誘導する。それが私たちのプランよ」

そうして、ゲーム世界救済RTAと、現実世界の戦力増強プランの二つが同時に発動したのだった。

RTAの始まり

プラクティスエリアを解放しての現実世界戦力の拡張。それは途中でやってきた栗本により説明がなされた。

今回の件で警察、自衛隊の中で志願者を募ったのだそうだ。意味のわからないモノに命を預けて戦う覚悟はあるのかと。

その結果集まった義勇兵は50人ほど。それが、恐怖を勇氣に変えられる現実を守る戦士たちの数だった。

強化計画としては、彼らを今回の周で新規参入しさせ、ゲーム内で死戦を潜らせつつ、さらにプラクティスエリアで生命転換ライフフォーメクスを習得させようというものだ。

そして、その50人は今回の氷華のRTAプランにおいて重要な数になるのだとの話だ。

「それで、肝心のRTAプランってのは何なんだ？」

「琢磨くんが見つけてくれたじゃない。裏ボスへの一本道。あそこ突っ込んで首を取りに行く。シンプルに最短よ。それで王様が動けるようになれば王子問題は解決するわ。というか、マリオネティカの男は地下に来るだろうからそこを殺せば終わりよ」

「シンプル過ぎないか？」

「シンプルで良いじゃない。数で押すゴリ押しなんだから」

それを言いながら氷華はメッセージにて《Echo World》のコミュニティに集まっている指揮官組に指示を伝えていた。



そして、ワールド開放前の集まりにてミーティングが行われ、満場一致で氷華のRTAは採用された。

手詰まりなのはもちろんあるが、面白そうなのに飛び込むのがゲーマーだからだ。

「では、RTA主催者として一言。今回のクソゲー、とつとと終わらせましょう！」

そして、仕込んだサクラの50人が声を上げ、釣られて、どこか懐疑的だった少数で組んでいるプレイヤーも声を上げた。

雰囲気は攻撃である。これで、あえて邪魔をしようというプレイヤーの可能性はある程度まで潰すことができていた。

「では、時間です。ワールド転移！」

その声と共に始まるワールドへの転移。現状でも総勢100名近い大所帯だったが、それを指揮する氷華に迷いはなかった。

そうしてアバターを起こしている琢磨を目印に大移動を始める。当然に「見えてい

る“騎士はそれを改めようとするが、対人戦闘のエキスパート達。50名の警官、自衛官達の体術により早々に無力化されていった。

別段、おかしなことではない。

蘇った人間達は魔物だ。故に第0アバターを触ることができ、第0アバターで触ることができない。それだけのことなのだ。

そうしていると戦士団の者達が先頭のタクマを止めようとして動くが、それはもう先手必勝だと言わんばかりに突っ込んだ、カナデ、ユージを筆頭にした熟練プレイヤーがなりふり構わずに倒していく。

そしてその中で、タクマは様子を伺っていた二人の戦士を見かけた。

「今から黒幕をぶちのめしに行きます！ 乗りますか？ イレースさん！ ロックスさん！」

「乗った！」

「考えずに言うな！ ……だが、俺たちは手詰まりだ。俺も乗るぞ」
「ありがとうございます！ お二方！」

そんな、雑に同行を決めたロックスとイレースは、決して考えなしだからではない。胸の奥が“この少年を信じて良いが、それはそれとして目を離すな”と告げているからだ。

それは、ループのたびに蓄積する魂の強化に伴う感情の残滓。この世界のシステムでは、感情をリセットする事はできていないのだ。

『稀人のタクマ！ どこに行く！』

「黒幕をぶっ潰しに！ 王子組は開かずの門のあたりで動けるようにどうぞー！」

また、遠くの者に声を伝えることができるサブリーダーの声が聞こえてくる。それはそうだ。こんな通り魔のような突っ走り方をしていけば誰だって気にはなる。

そうしてタクマたち100人は町から外れて行き、祠へと辿り着く。

そして、氷華のポイントで購入した警棒に似た短杖に生命転換を^{ライフフォース}込めて手渡す。これは新規参入のプレイヤーへのサービス……という名目での戦力の底上げであったが。

ただそれに込められた力に触れただけで生命転換に目覚める者もいるほど、込められた力は破格だった。

「ダンジョンは一本道！ 予定通り先行してヤバイのは潰させるから、本隊はなるべく温存して！」

「ロックスさん、イレースさん！ お二人は俺と共に！」

そんな声と共に進む先行部隊。内訳はタクマ、ロックス、イレースの3人とカナデにユージ。そして、プレイヤーの中から自薦で出てきた4人ほど。

いずれも、猛者だ。

「私の授業を邪魔してくださったモンスターの方々は、しっかりかつちりブチ抜いて差し上げますわ！」

「お前はいい加減それを根に持つな！」

「持ちますとも！ 学ぶ機会を奪う者は、このプリンセスドリルのドリルの錆にすらしてあげませんわ！」

元氣すぎて、テンションのおかしいドリルがいるが、それはそれだろう。

そうして、浅層を止まらずに走り抜け、中層へとやってきた。

この辺りから、もうすでに迎撃用の人間が配置されている。

流石に最初のあの動きで、「マリオネティカの男」には気づかれたようだ。目的地が封印の間である事を。

「泥の相手はまず俺が！ コアは動きませんが、よく観察しないと見つけれません！」

泥と筋肉の動きに注視して！」

そうして、泥の騎士の丹田を切り、それで死ななければ切り刻みつつ泥の動きを見切り、コアを貫く。

「できるか！」

と叫ぶのが長親。プリンセスドリルの女房役として周知されている普通に強いプレイヤーである。

それに対して、無理ならばと別の回答を見出した戦士達もいる。

「ならば、長親の分も私がブチ抜きましよう！」

そうして、プリンセスドリルのドリル柄のランスから放たれる螺旋が泥を全て吹き飛ばし、コアを露出させた。そして続けての一突きで破壊。

「意外と軽いですね。これなら温存しても十分殺せますわ」

「なら、俺もだな」

ユージは、迷いのないインファイトにて泥の騎士に接近して拳を叩き込み、そこを起点に魂の炎で泥ごと全身を焼く。

それにより、コアは溶けて騎士は死に絶えた。

「熱は、思ったより有効だな。……これなら、戦える！」

「私も、黙ってるだけじゃない！」

泥を纏ったゴブリンに対して、一撃を掌底で入れてから、曲剣で突く事でコアを破壊した。

「触つて魂を流せば、どこにコアがあるのか判別できる。危険だけど、一番消費は軽い」

そして、普通にタクマと同じ事をやってのける凄腕もまたいた。

「フツ、眼鏡による視力の補正があればこの程度」

当たり前だが、この世界の伊達メガネにそんな機能はない。プラーシーボ効果である。

彼「メガ・ネビユラス」の実力が10割だ。

それから個人技能でのごり押しであるが、観察して射抜けるようになったイレースもこれに加わり、タクマ、ドリル、ユージ、カナデ、メガネ、イレースの6をうまく回すように残りの3人はサポートに回るというチームワークで戦いは続いた。

それが上手くハマリ、深層間近の開かずの門まで辿り着くことができた。完全にノーダメージとはいかないが、魂は皆十分に温存できている。

「それじゃあ、開け！」

扉をノックして、輝く鞘を晒すと扉にあるロックが外れる音がする。

それと同時に、タクマにはこの場にいる全員の魂に何かが入り込むのも魂視にて見えた。

アルフォンスの持つ王族の剣の紋章に対して、こちらは盾の紋章だろうか？。そんなものがこの場にいるタクマ以外の中に入り込んでいた。

「面倒な毒じゃなきゃいいんだが」

『その可能性は、ダイナが悪意からこの鞘を渡したかにかかっていると思いますが』

「……ねえな」

『同意です』

そうして、後続の本隊がやってくる時のためにタクマたちは何がなんだかかわかっていないアルフオンス達に状況を説明するのだった。ものすごく簡潔に。

開く扉 乾裕司

アルフォンスに事情を説明し、これからやってくる本隊に合流してほしいと告げる。それを了承したアルフォンスは、聞きたいことがありそうだったが、「タイムがあるから後で話しますわ!」というプリンセス・ドリルの一声によつて混乱に陥った。

尚、助けを求められる目をされたタクマも「タイムだし仕方ないよな」と言つたことでアルフォンスの混乱をさらに加速させた。

そして、若干キレた。

「ええい! 面倒だ! 私が行く!」

「王子! お前が前に出てどうする!」

「言うな副団長! そもそも私に謀^{はかりごと}などできるわけないだろうが!」

「できるよになれ! それが国を背負うことだろうが!」

そんな愉快な出来事を背後に置きつつ、先行部隊は前に進む。

深層となれば、固有のものを使ってくるゲート使いが多くなつていく。とはいえ泥に汚染されているのでそうそう複雑な力はなく、^{ライフフォース}生命転換の延長のようなただ火力が優れているだけのものばかりだ。

決して弱くはない。だが、雑兵という謂れは避けられない。そう先行部隊の者達は思った。

そして、深層になってから明らかに敵の密度が変わってきている。

だが、こちらでも以前の襲撃時と比べて3倍の人数だ。

しかし、ここからは明らかに人が操られているものになる。

それに、動揺する事はないように事前に説明はした。しかし、そうだと分かっているも完全に人の形をした、人の心を持った敵を相手取るにはカナデとユージは優し過ぎた。

もつとも、それで崩れるほどにこの先行部隊は弱くなかった。

「臆するなら下がっている！」

「……大丈夫」

「強く、なるんだ！ 俺が！」

そうして、迷いながらも持ち直した二人はオーバーペース気味に闘いを始める。

それを見たタクマは、これ以上は無理かと思いつながら声をかける。これから先を7人で行く覚悟を背負いながら。

「……戦えなくなったら切り捨てる！ だからペース配分を間違えるな！」

「フツ、切り捨てるとは若者らしくないね」

そう言い放つのは自薦で出てきた男“サークルアイ”。

彼のロングソードは巧みに二人をサポートし、その負担を減らしていた。

明らかに、“守るため”の剣理がそこにはある。その技量に驚きながら、それを盗み取ろうとしつかりと意識を集中させたところで。

「そう！ この私^{サークルアイ}がいる限り！ 青少年にそんな非情はさせられないね！」

そんなことを爆発のような大きな声で言われ、タクマは一瞬クラつときた。

『マスター、さすがにそれは間抜けすぎます』

メデイに痛いところを突かれたタクマだったが、それはそれとしてこの個人プレイ主義者のチームが固まりだしてきたことを覚える。

タクマ、ロックス、イレースのバランスチーム。

ユージ、カナデ、サークルアイの火力チーム。

ドリル、長親、メガネの突破力チーム。

通路の広さ的に十分に動き回れるのが3人であるのだから、自然に集まったにしてはとても良いチームだとメデイは思った。

『皆さん、そろそろ想定していた戦力の過剰集中ポイントです。死力は尽くさず、本隊が来るまで戦い続けましょう』

メデイのその声がきつかけになつたのかのように、明らかに過剰な人数の戦士、騎士、

町人たちが泥を纏って現れる。それぞれが生命ライフ転換フォーを滾らせながら。

『泥の濁流はマスターとドリル様が対応を、ユージ様たちは基本的に最前線をお願い押します』

「ああ、任せろ！」

「私が、殺す」

「暴走気味なのは若さかな？ ならば私はそれを守ろう！ 私こそが、子供を守るヒーローなのだから！」

そのサークルアイの宣言はとても高らかに鳴り響いた。“うるせえ！”と皆が内心で思うほどには。

「うるさい。……けど、ありがとう」

「感謝は後で構わないよカナデくん！」

「けど、うざいしうるさい」

「ハツハツハ！」

そうして、戦いが始まる。

サークルアイの独特なキャラクターの中にある父性がユージとカナデの中にある硬さを拭い去り、心情によらない普段の戦い方を取り戻していた。

そして、ただ、ヒーローという言葉にある憧れが、乾裕司の心にある何かの鍵を外し

た。

戦いは続く。敵のゲートの多彩さに翻弄させられ、自爆による泥の濁流を防げるのがタクマとドリルだけだと判断させられてからは、身を捨てての奇襲にさらされ続け、次第に“濁流から皆を守る位置”から押しつけられていた。いかにタクマが強くとも、いかにドリルと長親のコンビネーションが完璧でも、数の力には勝てない。それが現実だった。

そんな、一手で絶望に世界が変わりそうな中で、敵のゲートを間近で見たユージは思わずこう言った。

「そうか、だからゲートなのか」

それと共に、裕司は自らの半生を思い返す。



裕司は、乾家に生まれた普通の少年である。運動が得意で、勉強にやる気はなく、ゲームをたしなむ。そんな少年だった。

そして、普通に育ったがゆえに普通の倫理観と正義感を持っていた。

その普通を高校生の今になっても保ち続けていることの素晴らしさに裕司は気付くことはなく、“普通の良い人”をやれていた。

異界と、琢磨と、関わり始めるまでは。

裕司は、裕司だ。

だからこそ自分より年下の琢磨のことは見捨てておけなかったし、誰かが死んでしまう現実を現実にしたとは思わずに、戦うことを選んだ。

けれど、そうして琢磨と関わっていくうえで分からなくなっていたのだ。この少年はどうなのかと。

琢磨は守るためには戦えていない。どんなお題目を掲げていても、その行動は全て殺しに向かっていた。

そしてそれが全て、この異常での最適解だった。それが裕司の“普通”を動揺させた。

それに対して、死ぬ前に共に遊んだ足柄は言った。

「明太子は異常だからほっとく方がいいよ。明太子は、別枠だから」

「けれど、それで思考停止も努力をやめることもしちゃいけない。君は逃げ延びる市民Aじゃなくて格好つける側に回ったんだから」

「だから」

「気合入れていくよ、未来のヒーロー」

そう、裕司の“普通”は、世間での“善良”や“優しさ”であるのだと、足柄は教え

てくれていたのだ。

そのことを、曇った裕司の頭は忘れていた。けれど、ただ一つ。そうじゃないと否定したいことが裕司の心に魂の火を付けた。



「全員逃げろ！ 泥には絶対に触れるな！」

そんなタクマの叫びを受けて、皆が下がることに対して、ユージは下がらなかった。

「未来のヒーローじゃない。俺は、今なりたいんだ。そのため、力と心はここにある！」

「ユージさん？」

「悪いタクマ、俺はもう下がらない！ 決めたから！」

現在、タクマとドリルは通路の中心から離されている。このままでは仲間たちに被害が出てしまう。タクマですら苦しんだ泥の汚染に。下手したら死人すら出るだろう。現実の方の死人が。

それを、今のユージは認められなかった。彼の決めたたった一つの事が、それを後押しした。

「俺は、今から！」

そうしてユージの放った拳から放たれた門。それは通路を埋め尽くす濁流を堰き止

めるほど巨大で、明らかに制御できておらず。しかし心が温かくなる不思議な炎を纏っていた。

「ヒーローだ！ 聖鎧ゲートオーブ転身ッ！」

その声と共にユージはゲートを殴りぬいた。それによりユージの拳は業火の一撃となり、通路ごと泥の戦士たちを燃やし尽くした。

濁流を止めるために、濁流全てを焼きつくしたのだ。

「……なんてスケール！ アルフォンス並みか！」

タクマは素直にその力に美しさを覚え。それだけでなかった二人は積極的に絡みに行った。

「私の見せ場を奪うとは、なかなかのいい男ぶりでしたわよ、ヒーローさん」

「だが！ 足りない！ ヒーローを名乗るなら必殺技の名前は叫ばなくては！」

「とりあえず、今のは業火ごうかってことで」

「もつとひねりましょう！ せっかくなのですから！」

「そうだ！ サークルアイ・バーニングフィストなどどうだろうか！」

「それはあなたの欲望でしてよ！ サークルアイ！」

などと口論を続けるプリンセス・ドリルとサークルアイ。しかしその目は、確かに目の前の生き残った一人の敵に向いていた。

泥まみれの道化が、笑うことなくユージと相対していた。

それに対してタクマに「来るな」と言い、カナデに何も言わずに目を合わせたユージ。それで、3人の医師は固まった。

「……行くぞー！」

そうして駆けるユージ。その体はゲートをくぐることににより紅蓮の鎧を纏った姿に変わっていた。どこことなく龍を思わせる鎧に。

それに対して道化は泥の弾丸をメイスで打ち牽制するも、ユージの余熱だけで泥は蒸発して消えていった。

ならばと投げられるメイス。それを弾いて前に進もうとした時には、ユージの目の前から道化はいなくなっていた。

そして、現れたのはユージの背後。泥でコーティングした手で鎧に触れて、そこからライフフォース生命転換を流し込むつもりのようなだったが。

「ごめん足柄さん、それ、見えた」

その言葉と共に放たれたカナデの一撃が泥の道化を縫い留め、ユージの裏拳が道化を焼き尽くす。

それに笑みを浮かべ、消えていく道化。それに対して涙を流すことをしない二人。

それが二人の、足柄圭一への弔いだった。



「ユージさん、残り時間は？」

「あんまないな。俺のは短期戦型みたいだ」

「じゃあ、サークルアイさんとカナデはここでユージさんの回復を待ちながら本隊と合流を。残りでラズワルド王の援護を始める！　ここからが本番です！　RTAの世界記録取りますよ！」

そうして、今度は6人による蹴りにてドアは蹴破られた。
ラズワルド王が一週間戦い続けた封印の間に通じる、扉が。

封印の間での戦い 前編

蹴り破った扉の先では、100はくだらない泥の魔物達が遠巻きにラズワルド王に群がっていた。

というか、そこは毎秒100は泥から生まれ、毎秒100は剣の光で消し飛ばされている超空間だった。

「……これが王か」

そう呟いたのは誰かはわからない。なにせ、全員が同じ思いを抱いたのだから。

「つと、惚けてる場合じゃないな。各自、光に当たって死なないように動く感じで数を減らすぞ！」

『マスター、指示が雑です。——イレース様は入り口付近にて射撃を、ロックス様はその護衛をお願いします。マスターとメガネ様は個人で遊撃をしつつ主力のドリル様と長親様のコンビを活かしませう。現状、ラズワルド王の殲滅力は出現の限界と互角です。なので、僅かに削るだけでも敵の数が減ります。王子派、本隊が到着するまではそれで徐々に数を削っていくのが今の私たちの最適かと』

メデイの作戦説明に迷いなく従う6人。その指示は大雑把だが、ある意味的確だっ

た。

彼らは、ラズワルド王を100とすると1程度力でしかない。だが、その+1程度の実力で戦況は好転する。

そして、その+1達が最適な力の入れ方をしていけば、その効力は2にも3にも上昇していく。

そしてこの6人は、大まかな指針さえ決まっていればその最適な判断を取ることができると精鋭だった。

「ならば、一番槍はこの私！ 景気づけに一発行かせていただきますわ！ 私ドリル5号！ 魂たましいしき式！」

そうしてプリンセスドリルから放たれる魂の螺旋掘削。タクマは魂視で見たが、光とは違う何か槍の周囲から現れて泥の個体を削って行くことしかわからなかった。

しかし、その力からは閃光剣レイブレッドに似た物をタクマは感じた。今更ながら、謎のドリルである。

その謎のドリルに体を抜かれた個体はコアが削れて死亡した。恐らくは狙ったわけではないようで、プリンセス・ドリルも驚いていたが、その隙はきつちりと長親がフォローしていた。

良いコンビだと、タクマは横目で見て思う。

だが、それを感慨深く思うのは後だ。ドリルが目立った事で周囲の意識が驚きに染まっている今はチャンスなのだから。

「補給があるって素敵よね！ 乱れ打ちよ！」

事前に、矢がなくなったらタクマが補給できると知っているイレースは、矢弾を湯水のように使い倒していく。もつとも、使った矢は確実にコアを射抜いているのでそれはもはや激流のようなものであるが。

その影響により、前線部隊をフォローしようと操作されていたであろう泥の騎士達は射抜かれ絶命し、前線部隊はタクマとメガネの速度型の剣士二人により着実に数を減らされていった。

「……援軍が、来るとはな」

そう呟いたのはラズワルド王。即座に戦闘の思考を切り替えて、入り口付近の敵を無視するように動き始めた。

それにより、入り口付近とラズワルド王の中間にいる泥の騎士達は戦力として一時浮いた。どちらを攻めてもどちらかに背を向けることになるからだ。

しかし、それは本当に一時の事。闘い抜いた事で、そして同系統の技術閃光剣レイブレッドを見た事で無駄にあるプリンセス・ドリルのイメージ力は新たな生命転換ライフオーリスの使い方を思いつき、それを実行したからだ。

試すなら今しかないという、判断の元に。

そうして彼女の手に作られたのはドリル。ランスを主体にしているためか太さはそれほどでもないが、そこに明らかな力があつた。

「ソウルドリル！」

そして、そのドリルを前に出しての全力の突進^{チャージ}。

それは竜巻のように周囲の泥を巻き込んでいき、ドリルに当たってコアごと泥を消滅させていった。

その手応えに違和感を覚えるドリルであつたが、試行錯誤が彼女のドリル道なのでその思考に囚われることはなかった。

もつとも、その唐突な突撃について行つた長親には大変極まりないことだつたが。

「お前は事前に少しは言え！」

「やってみたら出来たのです！ そうなれば使いたくなるでしょう！」

「そもそも戦場で新技を試すな！」

そんな漫才をしながらも、ラズワルド王付近まで近づいた後に進路を変えた。

泥の騎士達が現れる。ゲートの方向へ。

「今なら、ブチ抜けますわ！」

「その自信はどこから来るんだ！」

などと話しながらも的確にドリルに当たる攻撃をピンポイントの重力操作やバルバードでの払いによって迎撃する長親。凄まじい力を使っているわけではないが、やはり堅実に強かった。

そして二人が騎士の出どころにたどり着こうかという瞬間、ドリルの前にゲートが現れる。泥に汚染されたものではない、強い魂のゲートだ。

「やはりいましたね、伏兵！」

「……コイツが指揮官か？」

「ぶっ飛ばせば同じことですよ！」

「……無謀」

そんな言葉と共にゲートを潜って現れるのは女性だった。肌は青白く、額に折れた角が一本ある。

そして、手には引き絞られた強弓が握られていた。

敵側の正体不明戦力、剣を使った催眠術のゲート使いだろう。あのような容姿になっているのはゲートの影響かはタクマ達にはわからないが、“とりあえず敵”という目的意識はきちんと共有できていた。

なので、メガネとタクマは躊躇わなかった。

放たれる強弓による一矢をドリルの螺旋に巻き込む事で逸らしたドリルは、しかし強

弓の威力により前進する力を失う。

そして、このまま止まるのは危険だと判断して魂のドリルを消して一目散に逃げ始める。そこにいるイレーズが援護してくれる論理と、相方が背中を守らないわけがないという信頼を元にして。

そしてその信頼は問題なく応えられ、強弓の攻撃がドリルの元に届くことはなかった。

そこから、〃ドリルが生きていようが死んでいようが動きを変えつつもりがなかった。二人による神速の攻撃が始まる。

まず、最初に剣の間合いに入ったのはタクマ。風踏みによる一時的加速だ。その勢いを元にして、剣を振るう。

また、メガネもまた生命転換ライフフォースを足裏に集中させて爆発させるという技術により一時的な加速を得て、タクマの剣を躲した隙を狙うつもりでいた。

しかし、その目論見は通らない。

自身の体を弓を経由して洗脳し、100%の身体的パフォーマンスを手に入れた強弓の女性はタクマの剣のさらに下を潜るようなスライディングで回避し、続いてその状態から筋肉の動きだけで跳躍して無理やりの射撃姿勢を取る。

もちろんその精度は高くなかったが、放たれた矢は力強く石畳を貫いていた。

そうして、弓を構えた強弓使い、それに対して踏み込む覚悟を決めたタクマ。

「俺がコイツを抑えます！」

「……チツ！ 死ぬなよ……死んではなりませんよ、明太子くん」

『直す必要はあったのでしょいか？』

「メガネは知性の現れですから」

だが、ここから命がけの戦いが始まると思ったその時に、強弓の使い手は泥に飲まれて消えて行つた。

「……テレポートみたいなゲートか？」

「わかりませんが、ひとまずこの辺りでひと暴れしましょうか」

「……いえ、一旦戻りましょう。陣形なんて適当ですけど、遊撃がいなくなると長親さんかロックスさんのどつちかに無茶が出ます。避けられるなら避けないと。まだ、これからなんですから」

「ええ、先は長いですからね」

二人は、こちらを狙う騎士とゲートを開きかけている騎士の二つをしつかりと仕留めた後に、光と矢とドリルにてあれよあれよという勢いで削れていく敵を見た。

ラズワルドが援護に回ること、イレースの矢とドリルの突破力を的確に活かしているのだ。強いとは、こういう事も含めてなのだろうなと思いつながらタクマは戦線に復帰

する。

いまだ殆どが泥の支配領域だが、それでも今まではタクマ達とラズワルド王は押していた。

天井から泥が雨のように降ってくるまでは。

「ツ!?」

「これは、毒か!」

それが当たったのは、タクマの身を守る風の範囲に入れられなかったドリルと長親とメガネの3人。魂にある泥に対する警戒心の差が現れた結果だ。

「ログアウトで一旦退避を!」

「……そうさせて貰う。戻ってくるまで死ぬなよお前ら!」

「王城から下にブチ抜いてショートカットをやります!」なので、ご武運を!」

そうして、泥による魂への汚染によってドリルと長親、メガネはログアウトをした。

これで、またしても3人。タクマとロックスとイレースだ。

「なんか、前にもこんな事なかった?」

「俺たちの初対面は今日だろうに」

「ありましたよ、世界が滅びる前の周で」

「稀人のジョーク？　ありそうでちよつと笑えないんだけど」

「まあ、些細な事だろうよ。今俺たちの目の前の戦いに比べればな！」

「ロックスが格好つけてる!?？」

「そういう気分になつてもいいだろうが！」

そんな二人の会話に、自然な笑みが溢れるタクマ。

戦力はだいぶ減らされたが、それでも3人だ。

まだ、戦える。その意思でタクマ達は少しずつ敵の数を減らしていくのだった。

封印の間での戦い 中編

戦いは、続く。

メデイがタクマのウインドウを操作して物質化したのは矢の束。

それをイレースに投げ渡すと、風でそれを一本以外矢筒の中に入れたイレースは、残りの一本でタクマを狙う泥の騎士を射抜いた。そしてそのイレースを狙う弾丸を別の騎士が放つのもそれをロックスはこともなげにはじき返し、そこに意識が向いた敵をタクマが切り殺す。

傍らで光が嵐のように敵を切り刻んでいるのに比べれば大した数ではないが、それでも少しづつ敵は減っていった。

……この、泥の雨さえなければ。

『ロックス様！ 来ます！』

「あーもうめんどくさい！」

天井から明らかにタクマ達を狙い打っている泥の雨が落ちてくる。最初こそ風にて全て弾き飛ばしたが、今ではロックスの盾から放たれる生命転換ライフフォースに属性を付けないで放つ技によって弾くだけに落ち着いていた。

雨が降る間隔は無作為だが、雨の降る時間はさほど長くない。だからこそロックスを傘にして、イレースとタクマがそこを守るといふ戦術が作られていた。

ただし、この雨の中では光で雨を消し飛ばしているラズワルド王以外は泥のゲートを開いたものしか動いていない。極力ゲートを開かせないように、開いても即座に殺すようにタクマ達は視野を広く保っているが、それでも漏れは出てくる。

「あの大剣使い大技溜めてます！ イレースさん！」

そのタクマの言葉に反応して矢を放つイレースだったが、その矢はコアへと命中しなかった。込められた魂の量は十分で、しかも大剣使いは反応できていなかったのだ。

イレースは、その矢の着弾点のズレから、これまでは当たっていた矢が外れた理由を即座に推察した。

「雨の重さが均等じゃないからか……タクマ！ 風で吹っ飛ばして！」

「……消耗させられてんな、コレは！」

しかし、その原因がわかってても対処法は限られている。何せこの三人の生命ライフ転換フォーメーションの属性は風が2人に重力が一人。攻めも守りも技術でごまかしてはいるが、根本的に手札が少ないのだ。なので大技をたびたび使わなくてはいけない。

そうしてタクマの放ったコントロール放棄の技、暴風により一時的に大剣使いまでの道は開く。

しかし大剣使いも泥から放たれる雷をこちらに放とうとしていた。が、暴風の風を完全に読み切ったイレースの一射により雷の大剣は放たれる前に絶命した。

『雨が止みます！ 皆様、お気をつけて』

「気を付けてどうにかなるなら何てことないのにね！」

「イレーズ！ 愚痴いちいち愚痴を挟むな！ 士気が下がったらどうする！」

「気にする人誰もいないじゃない！」

「それもそうだが！」

そのロックスの言葉に、笑いがこぼれるタクマとメディ。

殺し合いの最中であるのに語り合える仲間がいる。

それが、不思議と心地が良かった。

タクマは別段、つながりに飢えているわけではない。しかし、こうした本性の出る激戦の最中にてここまで心に殺意以外のモノがあるのは初めてだった。

案外、これが友情なのかもしれない。そんなことをタクマが思うと、メディは微笑みながらそれを肯定した。

『人間らしくなりましたね、マスター』

「……こんな状況じゃなきや、素直に喜べるんだがな！」

そうしてタクマは剣を振る。温かさとは別にある。自分の中の殺意も否定しないで、

さらけ出すために。

タクマの精神の成長には理由はない。もともと育っていたものが顕在化したただけなのだから。

だが、その気づきこそが彼のきつかけだった。

普通の善人、想ってくれる人憧れの人物、想ってくれる人利用しあう相方、大切な家族。

そんなタクマの大切なものに友人というものがあることに気づいたときに、タクマは一度開きかけたそれに自然に手をかけて。

『マスター、それは今ではありません』

そうメデイに止められた。

「これがゲートなのか」

『はい。ですが、きつかけを掴んだからといってその万能感に酔っぱらい、3分かそこらで戦闘不能になるリスクはここで追うべきではないかと』

「あ、メデイさんめっちゃ怒ってる」

『当然です。私はマスターが望まない結末に走るようなことは絶対にさせませんので』
と、戦いの中とは思えない会話をタクマとメデイは行っていた。

もちろん、この会話中も戦闘は継続して行っている。一秒だろうと気を抜けば死ぬ戦場ではあるが、逆に言えば一秒未満の戦いの波の引いたときに一呼吸置くくらいはでき

るのだ。

もちろんそれはこの乱戦の最中で見切れる広い視野があればこそだが。

「タクマ！ そろそろ動きに慣れられる頃！ ギアを上げて！」

「お前を下がらせられるほどに余裕はない！ 陽動と近接を続けてくれ！」

「了解！」

そんな無茶を必要だからと押し付けあう3人は、とてもいいチームだった。

それから5分ほど、タクマ達は戦いを続けた。

イレースの蛇のように曲がる矢に慣れられて、ロックスのカバー範囲も見切られて、タクマの動きも封殺され始めたが。3人はそれでも戦い続けた。それは、ロックスとイレースの完璧なコンビネーションにタクマという異物が混ざったことによる本人たちにも予想外の連携が生まれ続けているからだだった。

そうしてタクマ達が戦い続けたとき、ふと周囲の敵の波が完全に引いた。

生産可能数を殺しきつたのだらうかと甘いことを一瞬考えたところで、タクマは頭を振る。そんな生易しいものがあるのならズワルド王を1週間もの間戦い続けさせることは不可能だ。

だが、なににせよ始めるのは会話からだ。

「……………あ」

もつとも、タクマは様々な戦いの経験を即座に最適化することに頭を回しすぎたせいで、なんの用事で王に会いに来たのかを忘れる体たらくだったが。なんだかんだと考えるが、根本的にタクマは脳筋なのだ。

『こんばんはラズワルド王。私たちは稀人の先部隊です。王が窮地にあると聞き、実力者を選抜してここにきました』

「ありがとう精霊の方。まさか私たちの側の増援が来るとは思っていなくてね。これでもかなり驚いているんだよ」

『それで、こうやって敵が引く理由はわかりますか？』

「初めてだ。が、おそらく力を溜めているのだらう。私たちを殺せるだけの力を」

『では、私とマスターはこれから上に行き、泥の雨の使い手、泥の騎士の生産場所などを確認してまいります』

「なら、戦士ロックスと戦士イレースは私の元で援護をしてくれるのかい？」

『お嫌でなければ、ですが』

「感謝するよ精霊の方。彼らは戦士団屈指の実力者だ、味方になってくれるのは心強い」「なんか勝手に私たちの行動決められてない？」

「イレース、俺とお前は休まないと魂が枯渇するぞ。実質一択だろうが」

「うちのメデイがすいません」

「まあ構わないんだけどね。けどタクマ。別行動するならその前に矢の補給頂戴。まだ戦いは終わってないんでしょ？」

「はい。むしろここからこの封印の間をどう防衛するのかが肝です。本隊かアルフォンズが来てくれるなら話は早いんですけどね」

『マスター、王との話途中です。脇を見ないでください』

「……ハイ」

そんなメデイの下に敷かれているタクマを見てロックスとイレースは顔をほころばせる。

これからより厳しい戦いの中に赴くだろう二人の緊張感のなさや信じあっている声色を感じて。



タクマは単身で王族の隠し通路を進み、城へと出る。

そこには、当然いしてしかるべき城で働く者たちの姿はなかった。泥に飲まれたのだから。

自然に警戒しながら封印の間の真上になっていた大広間の床を見る。

そこはあの泥にまみれて、凄惨な場と化していた。

あの泥の原材料は人間の命。であるならば、それがゴミのように捨てられているのは

なんと表現するべきかタクマは迷った。

「到着！ ですわ！」

「思いのほか早く付けたな」

「なんでもいい。泥の雨なんぞやった奴は速攻でぶっ殺す！」

「メガネはキャラを取り繕え」

そんな空気を破壊するのが彼ら3人。プリンセス・ドリル一行だ。

「あらタクマさん。下はどうなっています？」

「いったん波が引いたみたいな感じです。敵が力を溜めてるみたいだと」

「ならばどうする？ ここを張るか？」

「いいえ、私はこのメガネにかけて敵を見つけ出して見せましょう！」

「だが泥の雨を潰さないと俺たちはともかく本隊が瞬殺されるぞ」

「……面倒ですわね！」

そんなとき、唐突にランスの先端から作られるドリルを床に当てるプリンセス・ドリル。

そのドリルはたった3秒ほどで確かに上と下の連絡用の穴を貫いた。分厚い石の壁をブチ抜いて。

「さあ、タクマさんは下でお休みになってくださいな。上の監視と探索は私たちが。連

絡はこの穴があれば可能でしょう? ——勝利条件を勘違いしてはなりませんよ?」

「じゃあ、連絡は大声でですね」

「ええ。それでは、またあとで」

そうして上の様子を確認する手段を手に入れたタクマはその穴から飛び降りて、着地した。

風のクッションは一応作ったが、高さは4mほどだったのでタクマなら普通に着地できただろう。彼の好むVRゲームの中には五点接地がマストな変態的ゲームもあるのだ。

「上に仲間がいたので、そっちに任せてきました」

「……王城に穴を開けるか、その発想はなかったな」

そうして、タクマ達とラズワルド王は一時の休息をとるのであった。

封印の間での戦い 後編

一時の休息の最中、タクマ達はひたすらに魂を休めようとしていた。

ロックスの家に伝わるという、呼吸法を併用しての瞑想だ。

ただし、ちゃんとできているかは疑問であったが。

『マスター、意識をもっと落ち着けて。いくら休めようとしても、そんな殺しのプランニングばかりしている頭では休まりませんよ』

「いやメデイさん。人の恥を晒さないで下さいよ」

「タクマ。お前誰か殺したいのか？」

『この場にいる全員に対して個別にプランを練っていますね』

「危険人物すぎないかお前!!?」

そんなロックスの叫びに「気付いてなかったの?」と返すイレースとラズワルド王。

「王はともかくイレースは言え!」

思わずロックスがそうツツコミを入れるのはきつと間違つてはいないだろう。

そんなロックスの話の聞き流しながら、タクマ達は雑談を続ける。

「コイツってこういう奴なのは最初からわかってたし、そんなもんじゃない?」

「……結構照れますね」

「照れるで済ませるな！ 人としての尊厳とかその辺りを……持つては居ないなタクマは」

「ねえロックス。あんたさりげ酷いこと言っただけ？ タクマ内心落ち込んでるわよ」

「いえ、イレースさん。ちよつと傷ついただけです……」

「見え見えの演技で落ち込むな！」

『あ、ロックス様。演じているだけで傷ついているのは本当です』

「……それは、すまなかつた」

『まあ嘘ですが』

「精霊殿!?」

そんなツツコミに翻弄されるロックス。

自虐を入れつつもボケに走るタクマとそれに乗るメデイ。そしていつも通り冷静に暴走しているイレースとラズワルド王。こんな面子の中でツツコミ一人でいるのなら大変だと、彼にとっても似ているポジシヨンの長親ならば同情するだろう。

というか、上で聞いている長親は内心で「頑張れ」と願っていた。飛び火するのが嫌で黙っているが。

「下の皆さま！ お変わりは有りませんかー！」

「駄弁れる程度には平和です！ 間違はなく先に地獄が待ってますけど！」
「なら、備えませんかとね！」

そうしてわちやわちやと

「今メガネさんが宰相様の無事を確認しました！ 隠し部屋に居るそうです！」

「そうか、ロドリグは無事か……」

「もつとも、隠し部屋から出られなくなってしまったので早く助けないと大変と
のことです」

「うっかりか」と皆が思う。「ロドリグ……」とラズワールドも思わず天を仰ぐ。上には穴の開いた天井しかないが。

「それならロドリグは後回しでいい。早急に敵を探し出してくれ」

「聞こえましたかー？」

「……申し訳ありません。少々お時間を。招かれざる客がわらわらと。雨にお気をつけて下さいな」

などと言いつつプリンセス・ドリルの言葉とともに響き渡る戦闘音。上で戦いが再開したようだ。

そして、それと同時にタクマ達の前の空間に開いたゲートから現れるのは数多の黒い肉体を持つ魔物達。そしてその中に明らかに格が違くとわかる騎士。

その胸には金の瞳の装飾はもはやなく。ただコアが剥き出しに現れていた。以前見た時より、大きく、強いコアが。

そして、ソイツを見てみると《人魔サビク・■■■■》という名乗りが現れる。

名前が伏せられているのは奇妙だが、コイツが今回のボスなのには間違いがない。

『ラズワルド王、私達は……』

「彼の相手は私がする。申し訳ないけれど君たちは周りの魔物の相手をしてくれないか？ そちらもかなり強いけど、どうやらそれしかないみたいだ」

そうして始まるラズワルド王と黒騎士の斬り合い。互いに生命転換を全開にして作った閃光剣レイフレイトを圧縮して切り結んでいる。

光と闇の輝きが周囲を染め上げている様は幻想的ともいえるだろう。

もつとも、そんな感想を持てるのはこの場に居ないで録画だけを見ている者だけだろうが。

「殺気の密度がどうかしてる！ 全部飲まれてるぞ！」

『マスター！ 勘に頼らずに5感を元にした戦闘を！ こんな激流をまともに相手してはいけません！』

タクマはその声に従い少しばかり見に戻る。その間にイレースが敵の足止めを狙っ

ているが、敵の表面の硬さにより矢が突き刺さらない。

タクマも用いた、泥を強く固めた時の現象だ。

「……ロックス！ アレ使うわよ！」

「ああ、数を減らさないとどうにもならん！」

現在、黒い体のモンスター達の数は20ほど。内訳はゴブリンが10、狼が5、鳥人が3、大蛇、大鬼だ。なお、先程イレースの矢を弾いたのは、この中で最弱のゴブリンだ。信じ難い硬さのモンスター達だ。

そんな彼らに対してロックスの重力場はさほど効果は無い。基本スペックが強すぎるが故に重力を軽く乗り越えられてしまうのだ。

だが、イレースはロックスの重力場を勘で完全に把握できており、ロックスもイレースの必要な重力を経験で知り得ている。

それを合わせた結果が、今から放たれる超質量弾頭だ。

原理は単純だ。イレースの全力の矢が着弾する場にのみロックスの重力場を加えるだけ。

それにより、速度を保ったまま重さが加わり、運動エネルギーの増大がなされるのだ。

その一矢は前衛を張っているゴブリン軍に着弾し、一匹のゴブリンを貫いてみせた。

だが、それから先のゴブリンの動きは常軌を逸していた。

三匹のゴブリンがその着弾に合わせて矢に被さり、衝撃の伝播を妨げたのだ。

そして、最初に着弾して爆散した一体以外まだ生きている。信じがたい頑丈さだとイレースは戦慄したが顔には出さず不適に笑う。

そうして、一瞬で距離を詰めてきた狼に気付かずに命を落としかけた所で、タクマによるインターセプトが入る。

「気を抜かないで下さい！ 二人が死んだら俺も死にます！ 戦力的に！」

「お姉さんへの感動的な言葉かと思つたじゃない！」

「だが道理だ！ 誰が抜けても死ぬぞこの戦場は！」

魂の出力の限界まで切れ味に使用した風の刃でどうにか狼を殺したタクマ。首の骨が硬すぎて一瞬で切り落とすとはできない。

ロックスは、剣を腰に携えてこそいるがもはや抜いてすらいらない。両腕で盾を使わなくては受け流すことすら不可能だからだ。

ここで3人は、根本的な攻撃力の不足という問題に直面したのだった。

「……使うか？」

『ですね。このままロックス様達を巻き込んで死ぬよりも、自爆スイッチを押してから死んだ方が幾分かマシでしょう』

「なんでそんなゲートに対して辛辣なの？」

『私は、それを良いものだとは思えないからです』

そんな会話を一瞬で行い、しかしそれ以外に手はないと諦めてゲートを開くことを決める。

鍵になる感情は、なんてことのない日常のもの。琢磨の殺しの本能が強く出たことで、初めて確かに認識できた彼の薄っぺらな仮面の向こう側。

それを憧れのままにするのではなく、そういうものだとして受け入れること。それが琢磨のゲートの鍵だった。

「行くぜ、メデイ」

『了解です、マスター』

『ゲートオープン聖剣抜刀!』

その言葉と共に、現れるゲート。タクマのそれは酷く無機質で、しかし混沌としていた。

そんな君の悪さしか感じない筈のソレを受け入れてくぐり抜けたその先で。

タクマの聖剣が現れる。

アルフォンスやユージのゲートとは違い、容姿の変化はまるでない。

変化は、臆病者チキンソードの剣が、淡く輝くようになっただけ。

それだけだったが、タクマには充分すぎた。

「何ができるのかが、わかる」

『シンプルな力ですね。どういう理屈かはさっぱりとわかりませんが』

そうして、タクマにおそいかかってくる狼の4匹を見る。

その姿はシリウスの時の郡狼より一回り大きかったし、その身体的な強さはもしかしたら天狼に届いていたかもしれない。

だが、そんな事はタクマの前では関係なかった。

剣を二振り。一振りで2匹を巻き込むその剣は、先程の風の刃なら筋肉や骨の硬さにて止められてしまうだけだったが、今の剣は違った。

硬さや性質、理屈をすっ飛ばして、ただ切れる。タクマのゲートは、剣にそんな性質を付与するものだった。

その光景に集まる視線。黒いモンスター達はその剣に喜びを覚え、しかし警戒を強くした。

ロックスとイレースはその剣に混沌を感じて、タクマの強さを認めつつその人格面をさらに危険視した。

そして、剣を合わせていたラズワルドと黒騎士は、半分の喜びと半分の落胆を覚えていた。

それが聖剣でなかった事に。

「良き目覚めだな！」

「生命いのちの聖剣でないのなら、今更目覚めて何が変わるものか！」

だが、その感じ方は違う。

ラズワルドはやはり騎士の目覚めに喜びを覚え、黒騎士は聖剣の目覚めがない事に憤った。

それが故に剣に感情を込めて、しかし技の冴えを陰らせることなく切り結んでいくのがこの二人だった。

そんな空気の中、タクマはメデイと自身のゲートの確認をしていく。

これまで見てきたゲートは少ないが、それでもわかる事はある。

「……魂が燃え上がるような感覚はないな」

『ええ、中期戦、長期戦型のゲートだったのでしよう。ですが、それでもそう長くは持ちません。さつさと片付けましょう』

その言葉をきっかけに、タクマが動き出す。

ゲートの出力はおそらく魂そのものから抜かれている。その為、命を燃料にして戦う力ライフフォースにすは生命転換の併用は可能だった。

故に風を踏みゴブリンの群れに入り、流れるように剣を振るって切り刻んでいく。

そして、それを着実に決めるためのサポートに回るロックスとイレース。

タクマの風踏みの機動力は現在の全ての敵を上回っており、敵は誰もタクマから注意を逸らす事ができていなかった。

ゲートを開こうとすればすかさずそこにタクマは切り込み、囲もうとすれば天井を使つても逃げ延びる。そうして一匹一匹殺していくタクマであったが、その動きにはいつもの剣の冴えはなかった。

“切れすぎる”のだ。

力を入れなくても切れてしまうが故に小技の多くが必殺になり、必殺の多くが無意味な大振りになる。

そして、剣の腹が当たった時には切れたりせずに普通の剣としてのものになる。

その挙動の把握振り回されてしまったために、タクマはゴブリンを全滅させるまでに密かに動いていた鳥人達を把握できていなかった。

「『魔剣抜刀《ゲートオープン》！』」

その真言と共に引き抜かれる3本の剣。そのいずれも泥に侵食されていたが、その存在感は折り紙付きだ。

そして、一人の剣は伸び、タクマの胸を狙った。一人の剣は消え、その斬撃を隠した。一人の剣はその二本を繋いで、鎖で繋がった三本の剣へと変化させた。

そうする事で鳥人のゲートの力は共有され、見えず、伸びる剣が3本生まれたのだ。
「合体型のゲート!?」

『マスター、警戒を!』

その声に従い風を踏んで離脱するが、その判断が一瞬遅ければタクマは貫かれて死んでいただろう。

伸び縮みする速度が尋常でないせいで、まるでマシンガンに狙われているかのような状態にタクマは陥っていた。

「タクマ! 大鬼と大蛇が!」

「クツ、使われたか!」

「ゲートオープン魔鎧転身!」

そうして二体の魔物が門を潜り現れた時、その姿は巨大な鎧に包まれていた。

黒い鎧は燃えるような魂の力と共に、超高速攻撃を始めてきた。

ここで、タクマとモンスター達のスピードは逆転した。

大鬼と大蛇が高速でラズワルド王が守り、今もなお結界の維持に集中し続けている王妃エリーゼへと襲いかかる。

それにタクマは反応はできたが、見えない剣の嵐から逃れる事はできなかつた。

ゆえにロックスとイレースが命を燃やして止めようとするも、元々強い魂を持つ大型

の魔物がゲートを使った今では、それを止める事はできない。

そうして、王妃が殺されるその直前に「お待たせしました、父上、母上」と蒼炎が駆け抜けた。

その騎士の光の剣が大鬼と大蛇をはじき返し、次の太刀にてその命を消し飛ばした。ユージの出力をアルフォンス並みだとタクマは思っていたが、それはどうやら違うようだ。

ゲートを使い鎧を纏った巨大モンスター二体を同時に消し飛ばす力は、ユージのそれとは桁が一つ違った。

「タクマ！ 行け！」

「わかってるよアルフォンス！」

そして、アルフォンスの光の剣の余波にて鳥人達は体勢を崩し、そこに踏み込んだタクマがするりと首に剣を走らせる。

その一閃は3匹の鳥人の首を落とした。

それにより、黒いモンスター達は全滅した。

「……おかわり来るか？」

「……来たな」

中空に現れるモンスターが現れるゲート。それに対してのタクマとアルフォンスは、

実の所かなり消耗している。タクマはこれまでの激戦の疲れから。アルフォンスは、ゲートの時間を使った大技の二連発によって。

「だが、言わせてくれ——来たのは、私だけではないぞ！」

その言葉とともに、入口から入ってきたプレイヤーとアルフォンス派の騎士達が一斉にモンスターへと襲い掛かる。数は力であることを示すかのような圧倒的な暴力であつたが、黒い体に強化されていたモンスターをきつちりとゲートの入り口で捌り殺していた。

その姿に安心した、アルフォンスとタクマは座り込む。ゲートの時間制限により倒れたアルフォンスと、ライフフォース生命転換の使いすぎでゲートの維持をやめたタクマの限界だった。

そうしていると、天井の穴からボロボロだが誇らしい顔をしているプリンセス・ドリル一行が降りてきた。

「上のは追い払いましたわ！ 私たちを褒めてください！」

「褒めろと自分で言うな」

「……まあ、敵の本丸は逃したけどな」

そうして集まつてきた戦力により、中空に現れるゲートからのモンスターは狩られていき、そして、ヒョウカの「秘策」が決まった事でラズワルド王に敵対していた黒騎士の動きは鈍り、ラズワルド王はその鎧と泥の体を大魔サビクのコアごと消し飛ばした。



「……まさか、稀人に巫女の任を任せるとは思いませんでしたわ」

「私はできると思っていましたよ。ライフフォース生命転換に関しては私は天才のようですから」

ヒヨウカの秘策とは、ヒヨウカのありあまり過ぎているライフフォース生命転換を使つて封印を強化する事。病院で死戦をくぐつた事により、ただでさえ強いヒヨウカの魂はさらに強化されたのだ。魂の出力だけで見るならもうラズワールド王を3人分を軽く超えるほどに。

「あら、どうやら時間のようね」

プレイヤーの体が光に消え始める。どうやら、今回の話はクリアできたようだ。そうタクマは思う。

「タクマ、今日の君たちはまるで嵐のようだな」

「まあ、RTAやつてたからな」

「……あーるていーえー?」

「急いでたつてことさ」

そうしていると、本当にすぐにタクマの体も光に消えていく。

「じゃあ、また今度」

「ああ、またしても黒幕を逃した以上、僕らはまた会うのだろうな。救国の稀人タクマ」
「うっせえよ剣豪王子アルフォンス」

「……似合わないな」

「お互いにな」

そんな減らず口を叩きながら、剣を合わせて再開の挨拶をする。

二人の奇妙な友情は、そんなものだった。

第二戦リザルト

その日のリザルトは、管理AI「マテリア」の大爆笑から始まった。というか、序盤は笑いすぎてほとんど進行が止まっていたくらいだ。

それほどまでにヒョウカが主体として打ち立てたRTA記録「2時間33分52秒」は彼女にとつて愉快なものだったのだろう。

黒幕にも手下の強弓使いにも逃げられたが、それでも超速で世界が救われたのだから。

正確に言えばラズワルド王の人外つぶりのゴリ押しで。

タクマ達プレイヤーのしたことは、999対1000を1001対1000に変えたくらいだろう。その程度なのだが、それでも世界は救われた。

そういうゲームバランスなのだろうと多くのプレイヤーは改めてこのゲームの奇妙さに戦慄し、「そうでないもの」はこのゲームに対して現実同様の理不尽さがあると感じていた。

「それでは！ RTAの立役者、MVPを紹介！ 今回は謎解き、作戦立案、戦闘MVP 1、2、3の5ポイントを配布します！ 誰が取得したのか……は、公表出来ないの、

それっぽい人を勝手に胴上げしてください！　では、正直こちらの方が人気で作者的に悲しい、プラクティスエリアを解放します！　今回は皆さんの戦った地下通路が舞台です！　……もつとも、転送先は仮装ワールド関係の設定的に今は変えられないので、現地までは走って下さい！　次回までにはどうにか移動手段を作るので！　——以上！

第二戦、泥とばかり呼ばれていたサビク相手のリザルト会議でした！　皆さん、お疲れ様でした！　……では、これから戦いに赴く皆様へ私個人として一言！

そんな言葉の奥から、マテリアは無機質さを感じさせるAIとしての声にてこんな言葉が放たれた。

「無理は、しないで下さいね」

タクマは、メデイに問う『彼女は味方だと思うか？』と。

メデイは言う『味方であってほしいと思いました』と。

タクマは言う『なら、信じようか』と。

AIと長く付き合ってきた人間と、人間と長く付き合ってきたAIの意見だった。

その揺らぎには、人の役に立つというAIの本能が根付いていると。

そうしてタクマは、メッセージではなく口に出してこう伝えた。「現実での戦いについて何か情報は伝えられるのか？」と。

すると、タクマの周囲の時間が静止した。

『マスター、おそらく時間加速です。1000倍を越えている信じられない速度の』

「……なら、話をしてくれるってことでいいんですか？ マテリアさん」

「はい。とはいっても大したことは言えません。私の権限はそう大きくなく、あなた方はもう最後の一人についてもMVPについてもご存知なので、一つだけ」

そうして、俺の前にやってきたマテリアさんは、一言だけ言った。

「時計を」

その言葉を最後に、時間は元に戻った。



「それでは！ 退屈なりザルトは以上になります！ 皆さま、プラクティスエリアでの訓練をどうかお楽しみ下さい！」

戦いについての質問、黒幕についての質問、せっかくだからと言ってタイム一覧とか置かないか？ という提案に即座に答えてランキングを作ったり、なかなかに楽しいが中身のない話が続いた後に、そんな事を宣った。

なお、大体において答えは「自分で確かめろ」なので本当に中身はなかった。

「で、今集まっているこの人たちが有志の方々ですか？」

「ああ。暫定ではあるがこの一団の団長をやらせてもらおうアサカという。自衛隊の者だ」

そう名乗ったのは、真面目というのが顔に出ている若い男だった。こんな男なら命がけでの戦いに参戦するだろうという確信を持てる、ある意味不思議な真面目青年だ。

「ええ、私と彼が例のボランティアで、ユージさんとカナデさんはその手伝いに来てくれた協力者です。年下と侮ってもらっても構わないですけど、*“魂を扱う技術”*に関してはあなた方より先んじています。そこだけを見て、学んで欲しいと願っています」

「……安心してくれ、少なくとも今の俺たちは君たちに*“守る力”*を教わりにきたんだ。それに……ゲームは若者に教わるに限る」

「ありがとうございます」

そうして、50人をいくつかの班に分けてタクマ達はプラクティスエリアへと転移する。

ヒョウカが請け負うのが、ライフフォース生命転換のコントロールの怪しい20人。ユージとカナデが請け負うのが、ライフフォース生命転換を使えるようになったが、戦闘で即座に扱えないという人たちを10人ずつ。

そして、タクマが請け負うのはライフフォース生命転換のある程度モノにした10人だった。

「……すまない、10対1で攻めて来いとは正気なのか？」

この一団にいるアサカが言う。しかし、それに対してメデイは『あなた方程度にマスターは傷ひとつつつけられることはありません』と挑発をした。

もちろんタクマはその挑発をした意味をよくわかっているが、そっちの方が面白そうだという理由から不敵に笑っている。

「……上等だ！」

そうして、城門前広間にて繰り広げられる乱戦。

ライフフォース
生命転換を込めた様々な武器が舞う。

10人の連携の中で射撃支援がない事に戸惑いを覚えながらも、
ライフフォース
生命転換で必殺技叩き込もうとするアサカ達。

しかし、それが全く当たらない。タクマの生命転換を込めていない臆病者の剣にて簡
チキンソード
単にあしらわれている。

「……これは武術の領域だぞ！ お前ら！」

「ちよつと違います。皆さん——意識が逸れてますよ！」

その一言と共にタクマの攻勢が始まる。

意識の隙を縫うように繰り出された琢磨の鞘付きの剣。それは彼らの頭を軽く叩いてから包囲網から抜け出していた。

「とまあ、こんな事をされてしまうくらいには生命転換に意識が裂かれています。もつと
ライフフォース

感覺的に、あつて当然のものとして扱わないと今見たただの案山子です」

「……そうは言われても」

「じゃないと死ぬのはあなたじゃないかもしれません」

「ツッ!?」

そう、アサカは息を呑んだ。そうして少し項垂れていてから、自分の顔を自前のメイ
スで叩いた。

そうして叫ぶ。今までの優しげな空気が消え、戦士の空気に変わったアサカが現れ
た。

「甘えていた！ 舐めていた！ 死者が出る事態なのだ、コレは！ —— お前ら！

今から死ぬ気で身に付けるぞこの力を！ 守るべき市民に重責を与えている今を許
容するな！」

「「はー！」」

そこからは、タクマをして苦しめられるような強かさを彼らは發揮してみせた。

武器に慣れていないから、それを投げてでも仲間の隙を作る者。

武器に魂を込める事に集中する者、それを守る者の役割分担をする者

そして、全力ベタ踏みならばコントロールは要らないと分かったが故に、全力で武器
を振り回してくるアサカさんのような者。

「うおおおおおおお！」

「流石自衛隊！」

そうして、意識の隙はいつのまにか消え、彼らは彼ら自身の体に叩き込まれている連携をもって魂を叩き込もうとやってきた。

「生命転換は合格です。なので、こっからは殺していきます」

そうして、タクマとメデイは大きく後ろに跳躍する。それを隙と見た彼らは果敢に攻めてくるが、それを「混沌としか言いようのない門」が突然に現れて防いでみせた。

「コレがゲートです。理不尽さは、体で覚えて下さいな！ 聖剣拔刀！」

そしてその門の向こう側から現れるのは生命で輝く剣を携えたタクマだ。

タクマは、風踏みを解禁してなるべく武器に触れないように剣を走らせて、あつという間に9人を切り伏せてみせた。

そして、アサカを切切った。

「それを、待つていた！」

だが、アサカは自身を囚にして、切られた後の数秒で反撃を試みていた。抱きついで生命転換の全力放出。要するに自爆だ。

「すいません、読めてました」

だが、殺しに關しての嗅覚には一家言のあるタクマにはそれは見切られ、風の膜でア

サカの手の力を逃がして、するりと抜け出してみせた。

「けど、良い手でしたよ。アサカさん」

そうしてゲートを解き、襲いかかってくるフィードバックに耐えつつウインドウからログアウトをする。

彼らは、とても勇敢で頼りになる戦力になった。あとは実戦経験だろう。

そんな思いから、デスペナルティに陥ったアサカ達に「ダイナに教わった対モンスタ―戦術」を教えつつ自身もロビーで休憩するのだった。



そして、タクマは2ポイントあるリザルトポイントを使って、時計を買った。現実には届けられる者ではなく、ARの時計表示のイメージテーマだったが、そこには確かに書かれていた。

次の襲撃までのカウントダウンが、明確に。

第二戦 最終戦前

残されたカウントは、7128。

『これまでの時間から逆算すると、現実に現れるのは3日後になりそうですね』
「随分とゆっくりに出てきてくれるな、今回は」

琢磨とメイディは、自室でのメイディカルチェックを終えて、
“ Soul Linker ”により視界の隅に映るそれを見ていた。

これまでの間隔から、上2桁が時間を、下2桁が分を表しているように見える。だが、それは正確に時を刻んでいるわけではない。

なんらかの要因に基づいてカウントダウンの進む速度は変わっている。

現在は、カウントの進む速度は標準の時間の進みよりゆっくりだ。

「夜だから、休んでる？」

『……誰が、ですか？』

「敵が」

『流石にそれは樂觀視が過ぎるか』

「冗談だよ」

そんな会話と共に、メイにカウントダウンの監視を任せて眠りにつくタクマだった。

そして翌日。

タクマが起きるとカウントは2409まで減少していた。

「いやペース!? どういう事だよ!?」

『不明ですが、仮説を一つ』

「なんだ?」

『氷華様からは急ぎ伝えるなどの話でしたので今。容態が変化しました。命に関わる事ではないそうでしたが、対癌用ナノマシンに不具合が起きたようです』

「……あのダイハードは最後までダイハードなのか……」

『ええ。そして氷華様の容態の変化とともにカウントダウンは急速に進みました。つまり、そういう事かと』

「……現実での体調が異界の発生のきつかけになる? ……足柄刑事の言う通り、MPが鍵か」

『はい。前回の周にて、戦闘と作戦立案の二冠を取った氷華様が敵側から見たマーカーなのでしよう。……強い方をターゲットにするというのは、なんだか違和感を感じる異界の広げ方ですが』

ちなみに、そんな会話は氷華の容態が変化したときに既に雇い主の篠崎には伝えてい
るという。

琢磨は思う。琢磨にとってメデイは必要不可欠だが、案外メデイにとってはそうでは
ないのかもしれない。

今度何かで機嫌を取ろうと、琢磨は思うのだった。

「じゃあ、今から帝大病院行くけど、封鎖とかされてないよな？」

『顔パスで通れるそうです。ボランティアなので』

「便利だな、ボランティア」

そうして琢磨はライダースーツを纏いプロテクターを付けて、バイクに乗って帝大病
院へと向かう。バイクにはいつもの鉄パイプを収納しながら。



前回の襲撃があつてから、帝大附属病院は警察の手によって封鎖されている。が、流
石に最後まで生き残った氷華をすぐに転院させる事は出来ずにいた為に、氷華はVIP
ルームにまだ居座っていた。

清々しいまでのふてぶてしき、というだけではない。氷華は元から今回のMVPを自
分で取るつもりだったようだ。だからこそボランティアの話を病状の最中にあるのに

受け入れたのだろう。

確実に敵を潰す為に。

今回の作戦は単純。要塞化した帝大病院にて敵を待ち構えて殲滅するそのために氷華は餌としてこの病院に残っているのだ。

そんな末恐ろしい婚約者（仮）の病室に向けて琢磨は歩き出した。

すると、琢磨の目には同じボランティアアスタツフと思わしき人物が見えた。缶コーヒーを握りしめているその人物の顔は、ほぼあの真面目リーダー“アサカ”のものだった。

どうにも病院の警備の手伝いをしているようだったので、琢磨は先に話をしてみることに決めた。

「ボランティアの風見琢磨です。話通ってますか？」

「ああ、通っている……しかし本当に中学生なのだな」

「すいませんね、こんなんで」

「いや、敵ならともかく味方なら頼りになる。俺もボランティアの一員として君と共に戦うつもりだ」

「よろしくお願いしますね、アサカさん」

「ああ。よろしくタクマくん」

そうして、ボランティアスタッフの皆が各々にそろっているロビーを抜けて、琢磨はいつものようにVIPルームへと向かうのだった。



VIPルームにて、氷華は様々な医療器具に繋がった状態にて横になっていた。それは、痛ましいと感じるのが普通であっただろうが、琢磨と氷華にとつてはいつもの光景だった。

「あら琢磨くん。お帰りなさい」

「……悪い、今日は土産は持ってきてない」

「構わないわ。その鉄パイプが重かったんでしよう？」

「まあ、そうなんだけどさ」

そうして、いつも以上にいつも道理に二人は会話を続ける。

カウントダウンは残り20時間ほど。作戦決行までだとあと6時間ほど。もつとも、この不安定なカウントダウンではどちらが先になるのかわからない。だからこそ、ボランティアスタッフたちは可能な限りこの病院の近辺にいるのだが。

「それで琢磨くん。死亡フラグを立てたままにしておくつもり？」

「……立てた覚えはないんだが」

「私の恥ずかしい告白、聞いていたでしょう？ そんなのを聞いたことが心残りになっ

て走馬灯が走る……なんてよくあるシチュエーションじゃない」

「そう言われても、そういうものかと納得したくらいだよ」

「つれないのね」

「……悪い、俺はまだお前に対して責任を果たしてない。そんな奴が告白に変事をするってのは、不義理だろ」

「誰に対してよ」

「俺の馬鹿と、お前の命に全部賭けてくれた人たちにだよ。……結構、死んじまったけど

「や」

「それでもないと思うわよ?」

「そりやまたどうして」

「だって私が琢磨くんのこと好きになったのって、婚約したその時からだから」

その言葉に、 “ ああ、だから態度の変化とかそういうのは特に感じられなかったのか ” と琢磨は納得し、そしてそんなにも長い間好意に気づかないでいた自分に対して嫌悪感を抱いた。

「私の病気との戦いの先には、琢磨くんとの婚約破棄がある。それは約束だから守るわ。けれど、私はその次の瞬間に新しい婚約届を叩きつけるつもりでいたの。私の、全部を叩きつけるつもりで」

そしてそれに対して恋を語る氷華の姿は病床の上にあるのに華やいで見えた。これが恋というもののなのだろう。

「羨ましいな、少し」

「……けど、琢磨くんだって私のこと好きじゃない」

「……否定はしないけどさ、自分で言うか?」

「だってそうなるように琢磨君のことをずっと調教したのは私だし」

「さらつとエグいこと言うなよお前!!? 調教つて!?!」

『マスター、自覚はなかったのですか?』

「……なかった」

そうして琢磨は思い返す。琢磨は氷華からヒトの生き方を学んだわけだが、もしそこに知識の意図的な偏りがあったならどうだろうか?

それを計算してやってくる女であると琢磨は氷華を理解している。

そして、フラットに自分の“好きな女の子のタイプ”を考えた時に、9割以上の性質が氷華に当てはまることに今気が付いた。

その時点で、琢磨は脳内で白旗を上げた。どうやら自身は10年以上の計略により追い詰められていたのだと分かってしまったからだ。

「氷華、俺人間不信になりそうなんだけど」

「良いじゃない。私だけはあなたの味方よ？ 琢磨くん」

『……確かに絶対にマスターの陣営にいるでしょうね、氷華様は』

「ありがとう、メデイ」

メデイは極めて冷静に、この小さな女傑は琢磨のためならどんなことでもしてのけるだろうと認識を改めた。琢磨の本質から他者を守ったのは氷華の教えた生き方だが、他者から琢磨の本質を守ったのもまた氷華の教えた生き方なのだ。

琢磨の本質を、〃殺す〃ことも含めて氷華は愛している。そういう事なのだろう。

『氷華様、どうしてそんなことを今言ったのですか？』

「……確かに、言われなきやメデイはともかく俺は気付かなかったぞ」

「なんてことはないわ」

「ちよつと私も死亡フラグを折ってみたくなかっただけよ」

そんな言葉を最後に妙な空気は消し飛び、いつもの琢磨と氷華の駄弁りが始まった。



そして現在時刻22時、カウントダウンは途中で妙な速度で進んだが、現在は0135を示している。

現在集まったボランティアは50人全員。この時間を逃すと次にこの数が動員でき

るのは正式に対異界部隊が結成された後だ。その確信がアサカにはあった。

「では、御影くん。良いんだね?」

「はい。私の体内の抗癌ナノマシンを停止させます。それで、カウントはゼロになるはずですよ」

「……そういうわけだ! 我々のコンディション! 周辺区域の封鎖! そして戦うための武器! それらがそろっているのは今しかない! ……我々で、守るぞ!」

「「おう!」」と叫ぶボランティアスタッフたち。

その中で琢磨だけが支給された特殊警棒だけを見ていた。

そして、警棒を配布していたスタッフに返し、鉄パイプで武装しなおした。

不思議と、こっちの方がしつくり来たのだ。

そうして、氷華の健康管理AIがナノマシンの操作をした結果、氷華はベッドの上に倒れこんだ。

それと同時に発生する異界。中心点は氷華本人の胸。しかしそれは氷華の生命ライフ転換フォーメースに弾かれて、黒い何かは空へと吹き飛ばされていった。

そして、異界が急激に広がっていき、計算通り病院の敷地内全てを覆う程度で収まった。

異界の展開が終わるころ、誰のものかわからない生命ライフ転換フォーメースが抜き打ちで放たれる。

《E c h o W o r l d》
第二戦、最後の戦いの始まりだった。

騎士たちの聖剣

戦いの開始は、本当にすぐだった。

氷華の体から離れた黒いものは一瞬ゲートのような形になり一人の男を吐き出してから消失した。

というより、この異界に溶けたように見えた。

『どうやら、彼がコアのようですね』

「……あの男、どつかで見たか？」

『いえ、記録にはありません』

「なら、ただ強いだけの奴だな！」

その言葉とともに、琢磨はその男を追いかけて窓の外を風踏みにて駆ける。対して男は琢磨の目を見た後にすぐに院内に逃げこんだ。

「メデイ、奴が逃げた理由は？」

『不明です。観察を続けましょう』

琢磨は男を追いかける。ただし、誘いの隙には乗らないで。

対して男も逃げ回る。トラップのあるポイントには決して足を踏み入れずに。

そうして走り回った結果、自然と二人の足は中庭へと向かっていった。

「一応聞くけど、なんで逃げまわってたんです？」

「単純な理由だ。……実際に見たほうが、呼びやすいんだよ」

その言葉と共に発動する十二カ。それはひどく耳障りな鈴の音のようであり、今夜の戦いのゴングであつた。

「これがサビクの置き土産だ。奴の操った死者を選別して召喚する邪法、今回はそれを貴様らへの試金石として使わせてもらうことにする」

「ごちゃごちゃ言うけど、要するにお前を殺せば止まるんだろ？」

「……やれるかな？　貴様程度に！」

瞬間男の体は命の光に包まれ、王城にてラズワルド王と殺しあつていたあの黒騎士の姿へと変貌した。

だが、琢磨の中に迷いはない。怯えもない。

「こいつを殺すぞ、メデイ」

『そういうわけなので。さっさとあの世にお引き取りを願います』

格上との殺し合いが、琢磨にとっては日常なのだから

『聖剣抜刀！』^{ゲイトオープン}

そうして持っていた鉄パイプ媒体に臆病者の剣を物質化させながら琢磨は黒騎士に

切りかかる。

殺気ของフェイントを混ぜた、一瞬遅れて到達する剣だ。

それを鎧姿とは思えない速度で回避して技の剣にて反撃する黒騎士。

フェイントには乗らず、琢磨のゲートを警戒し、堅実に距離を取りつつの隙のない一撃だった。

だが、その技剣に対して琢磨はさらに剣を合わせた。この剣にはこう対応してくるだろうという予測があつてのことだった。

ラズワルド王との殺し合いを見たからこそその読み勝ちである。

その剣は黒騎士の剣を半ばから断ち切り、そのまま首を撥ねる剣であつた。

そのゲートの絶対的な奇襲性が通つたことにより「やったか？」と琢磨が思った瞬間。その剣筋に突如小さなゲートが発生した。

いうまでもなく、黒騎士が反射的に使つたゲートだった。

その門は未だ小さく人のくぐれる大きさではない。そして潜らせたら殺されるといふ確信が琢磨にはあつた。

「ゲートなど潜らせるものかよ！」

だからこそ琢磨は攻め続けた。ゲートの拡大を無視して、立ち位置を、速度を、そしてフェイントの有無を様々に変えながら攻め続ける。

だが、黒騎士はそれをただ広がるだけのゲートと切られた剣。そして剣から伸ばした闇色の閃光剣にて捌ききつてみせた。

そして、門が開く。本人のモノではない汚染されたものだが、それでも琢磨を殺すための黒騎士の剣が抜かれたのだ。

「聖剣抜刀」

そうして現れたのは泥を幾重にも重ねて固めて作られただろうショートソード。

長さは臆病者の剣とほぼ同じ。

だが、琢磨はあの剣は折れず曲がらずという類の性質があると理解した。

同じ「性質を剣に付与する」ゲート使いの共感であった。

「まあ、殺せば死ぬのには変わりはないな」

「確かにそうだ。お互いのアドバンテージがなくなつたところで、剣で勝負をつけるとしようか」

その言葉が終わる前に琢磨は仕掛け、しかし絶対に折れない剣によつて防がれた。だが琢磨のゲートのほうが「性質」の純度が高かつたのか、若干傷がついた。これなら時間をかけて剣を切り落とせるかもしれないという選択肢が頭をよぎつたところで、黒騎士が構えた剣に何の傷もなかつたのだから。

『マスター、正確には切れたらすぐに修復する剣です。より厄介かと』

その言葉の意味は、琢磨にはすぐに理解できた。

次の剣を防がれた」時は、剣の1/3まで食い込んだ。そこから押し切ろうとした時に琢磨の殺人本能と生存本能が同時に逃げろと告げてきた。

剣が止められたとき、それは剣の表面を琢磨の「切る剣」でわずかに切り口の開いた状態である。

そして、その切り口はゲートの力によりすぐに再生して琢磨の剣を嘯むだろう。

そうなれば後はソードブレイカーと同じ要領だ。力でひねれば剣の腹に力がかかり、簡単に折れてしまう。頑丈な臆病者チキンソードの剣だから多少は保つかもしいないが、それは希望的観測だと琢磨とメデイは警戒を密にする。

今回はどうにか嘯みつかれる前に逃げられたが、油断は禁物だ。

剣が合わさったら即座に押すか引くかを判断する。そんなシビアな戦闘勘が求められる戦場だった。



そんな激戦が中庭で行われている最中、自衛隊と警官を含めたボランティアスタッフたちは病室の階段のバリケードで戦うものと内部に入ってきた敵に対峰するものに分かれていた。

アサカこと、三条安坂^{さんじょうあさか}は内部の敵に対応する人員である。

彼はこの奇妙な一団の大将を（半ば押し付けられる形で）受け入れたものの、自身より作戦指揮が上手い者を参謀として脇に置いて、戦闘時の総指揮権を与えたりと彼自身の“純粹に力を見る目”に従って戦いを組み立てていた。

そして、彼自身の最も優秀な部分、個人戦闘力をいかになく發揮していた。

振りかぶらずに的確に小さく打撃を重ねてくる大型メイスの敵に対して、安坂はその類まれなる運動能力によつてメイスを合わせ、^{ライフブオーレス}生命轉換を込めたメイスで相殺しつつ距離を詰めていく。

そして、その突破力に何かを感じた大型メイスの戦士は、彼の目を見た。

馬鹿が付くほど真面目で、しかし“守る”と決めたら手段は絶対に選ばない。護国の男の姿だった。

その目のまぶしきは、男に在りし日の自分を思い出させて自身を縛る命令に最後の抵抗をしようと試みることにした。

そして、それは成る。

「うおおおおおおおー！」

安坂の振るわれたメイスに込められた生命轉換に属性はまだ乗っていない。しかし、そんなものがなくても力のこもったメイスで急所を殴られたら人は死ぬ。朝霞はそれ

をよく理解していた。この強力な戦士に対してこんな子供だましの棒術もどきを通じることがまだないと。

だからこそ、敵があえてそれを受け入れたことに安坂は驚愕した。

「良い目の、戦士だ」

そんな言葉と大型メイスだけを残して男は消えていった。

そしてそこには大型のメイスだけが残った。

安坂は自身の曲がったメイスを見て、武器を持ち変えることに決めた。そう考えたのはほかの多くの戦士たちも同じだった。同じように不可解な倒され方をして、同じように武器を託した者たちの思惑通りに。

そうして、操られていた異世界の戦士たちは、戦う瞳をしたこの世界の戦士たちに自身を武器を

守ると決めたその時に握っていた“彼らの聖剣”を託したのだ。先のことはわからずとも、今を生きる彼らに力を与えたいのだと。

そうして、騎士たちによる聖剣の継承はなされた。

それは、死してなお戦いを続けていた彼らからの、守ることを願うの継承だ。

そのことを魂で感じた現実世界の戦士たちは、皆、各々に吠えた。

それが、反撃の狼煙になるのだった。

第二戦最終話 異界殺人鬼

黒騎士と琢磨の戦いは続く。

不思議なことに、あの地下にてラズワルド王とやり合った馬鹿みたいな出力を黒騎士は出していない。琢磨は戦いながら魂視にて黒騎士を見るも、大技の為に魂を溜めているかのようにも、手を抜いているようにも見えなかった。

故に、ここまで戦いが拮抗しているのは一重に琢磨の魂の出力が黒騎士を上回っているからだと言えるだろう。

それは、逆に言えば魂の出力が上回っていないかればとつくの昔に琢磨は命を落としていると言うことだった。

「爆ぜろ！」

「その程度か？」

琢磨は剣に風を纏わせる技、風纏にてゲートの強みを潰してまで奇襲をかける。

纏った風を暴発させる、風の一撃だ。

だが、そんな手は読み切っていたのだとばかりにその風を閃光剣レイブレッドにて切り割いて琢磨

の腕を狙う黒騎士。

それを剣を手放し身軽になったことでギリギリの回避をし、風で剣を浮かせて空中のそれを回収する。

そんな曲芸じみた回避策を使わずにはいられない。

まともではない体捌きや技しか通用しないほどに、剣の技量に差が現れはじめていた。

それは、経験の引き出しの差。

互いの殺しへの適性はほぼ互角だった。躊躇いなどという言葉は琢磨の中にも黒騎士の中にも欠片も存在しない。

互いの剣の技術は、実のところそう大きな差はない。

だがしかし、その技術をどれだけ使い込んできたのが、二人の対応速度に差をつけていた。

琢磨ライフフォーエスの生命転換を用いた剣の経験は僅か。対して黒騎士の剣の経験はおそらく遠い昔から。

その分だけ、“その行動に対しての最適解”と、“勝利への最適解”のどちらを見ることができるのか、という戦術的な差が開いたのだ。

琢磨はこの黒騎士のような技量の化け物相手ではまだ前者であり、黒騎士は戦いを始

めてからずっと後者だ。

だからこそ琢磨は、奇策をあるだけ全部引き出してその勝利への詰め路から逃れようとしているのだ。

だがしかし、それも全て無駄に終わる。

ただ、経験の差という一つの理由だけで。

「メデイー！ 残り時間は!?？」

『ゲートの方は加速度的に深化しています！ 残り時間は5分はないかと！ 生命転換は、ライフフォース

大技一発が限界です！』

そうして、もう奇策はないのだと言わんばかりに仕切り直そうと後退する。

もつとも、わざと声に出して伝えた本物の情報での釣り出しという最後の策だったが、黒騎士はそれに乗る事なく、どっしりと構えていた。

「……これも駄目か」

『本格的にどうしようもありませんね』

そうして、前回の命の大元の十二力を燃やす方法での出力増加を考えたところで、空から風を切る音が聞こえてきた。

『琢磨くん、時間稼ぎご苦労様。勝利への道筋は整ったわ』

そして鳴り響く琢磨へのアバター通話。その声は、ベッドに倒れていたはずの氷華のもの。

そして、空から落ちてきたそれには、認識した瞬間に意識が持つていかれそうになる程の強すぎる生命転換ライフフォース込められていた。

ただのボールのはずのそれは、おそらく着弾とともに全てを吹き飛ばす凶器の一撃に見えた”。

「……死なば諸共！」

そして、そんな琢磨ライフフォースごと敵を殺す策を氷華が取る事はないと心の奥底で信じている琢磨は、残りの生命転換ライフフォース全てを使って、ゲートの残り時間全てを使って。

その空からの爆弾になんの備えもしないで黒騎士へと突っ込んだ。

最速の、全てを切り裂く一刀だった。

しかし、その剣は黒騎士の全力のゲートにより受け止められて、受け流されて、琢磨はボールへと向けて剣にて投げ飛ばされた。信じがたい絶技だと、投げ飛ばされるまでにをされたのか気付けなかった琢磨は思う。

そして、琢磨はボールに着弾する。

だが、それが着弾した所で琢磨の体には何も起こらなかった。

爆発的に込められた生命転換ライフフォースのそれは、琢磨の着弾に対して爆発せず、地面に落ちて

も爆発はしない。

何故ならそれ自体は、ただの結界の中に、氷華基準でそれなりの強さの生命転換を込めただけの玉なのだから。

「……は？」

そして、そんな馬鹿みたいな奇策に見事に引つ掛かったのが黒騎士だった。

それはそうだ。黒騎士の基準では、あの規模の生命転換は命の全てを使つて放つ自爆技だ。絶対にナニカがあるのだと確信してしまったのだ。

そして、その瞬間琢磨は空中から見えた。

中庭に向かって、全力の生命転換を込めた攻撃を放つボランティアスタッフの仲間たちを。

その手には、誰一人例外なく業物が握られている事を。

「生命転換、全開！」

そうして、放たれる力の奔流。たった一人に対して放たれるには異常な力であったが、しかし黒騎士は最低限のダメージだけでそれを回避していった。

それでもそのダメージは値千金のもの。

琢磨が、これまで20分間もの間戦い続けても傷一つ負わせられなかった黒騎士に、初めてダメージが通つたのだ。

それは、確かに隙を作り出す。直撃こそしなかったが、安坂の大型メイスの一撃の余波は、ライフフォース生命転換だけで黒騎士をのけぞらせるほどのものだったのだから。

「畳み掛ける！」

琢磨と安坂の声が重なる。

だが、そんな事は口に出すまでもなかったのだと二人は思う。

「俺が、ゲートここオーブンで終わらせる！ 聖鎧転身！」

今まで、どれだけ琢磨が危険でも気配を消していた裕司の、ゲートの発動。それは屋上から、空へと投げられる琢磨とすれ違うように落下して焔の拳を構える。

そして、それに対して全力の閃光剣レイブレイドで迎え撃とうとした黒騎士は、その腕をナニカに貫かれ剣を落しかけた。

トドメ役として隠れていた、奏の超高压の水撃だった。その水は圧縮されていたが故に傷口は大きくこそはないが、確実に黒騎士の腕に風穴を開けたのだ。

その痛みを無視して黒騎士は剣を一瞬で掴み直したものの、その一瞬が致命的だった。

空からの裕司は、焔のゲートを潜り抜けて紅の鎧に身を包み、その右手に魂すら焼き尽くしかねないと思わせるような豪炎を纏わせ、空中で解き放つ。

その炎は、天高く広がる炎柱となり、裕司ごと黒騎士の身を全て包み込んだ。

そして、その炎柱の中で、裕司はさらに一撃をたたき込んだ。

それが、黒騎士に対するトドメの一撃だった。

「……ゲームオーバーだ！」

そうして、炎が消えると共に異界は割れ、世界焼かれた世界は元通りへと巻き戻る。

そして残ったのは、魂を消耗し尽くしてボロボロの50と3人に、ナノマシンを再起動させてもダメージは残っているが故に危険域から脱していない氷華。

そんな状況だったが、琢磨はメデイに後の事は任せて眠りにつくのだった。

魂を感じた、ゲートの向こう側の感覚を、頭の中で反芻しながら。



それから、6時間後

警察が手配していた医療スタッフの尽力により、琢磨たちボランティアスタッフと、氷華によって勝手に招集されていた裕司と奏は無事に命を繋いでみせた。今回は、おそらく異界事件での初の死亡者ゼロを記録したのだ。

もつとも、医療スタッフの処置とは、栄養剤の点滴を繋いだ程度の処置であったが。そして、氷華に関しては少し難儀で、いつものことだ。

今回のナノマシンの停止により駆けつけた琢磨の義父「凧人」たちは、生きている病院の設備を使つての緊急オペを行った。

ナノマシンが抑えていた癌細胞が派手に転移していった事から、本来であれば一つで済むはずだったクローン臓器移植をほとんど全ての内臓へと行ったのだ。

その手術は、常識では考えられない術式だったそうだ。脳でのロボットアーム操作を使つての五箇所同時切開、五箇所同時移植という人外の技であつたそうだと琢磨は後に聞いている。

当然、そんな手術の成功例はない。

“Mrs. ダイハード” は最後の最後までやはり医師会へと激震を走らせたのだ。

もつともそれは、「どうせ他の臓器にも転移しているでしょうから」と体の大部分を自費でクローニングしていた御影氷華の先見の明があつてのことだつたのだが。

そして、そんな氷華は術後観察の最中だつた。

帝大附属病院は、パララッチや野次馬が多くなっているが、再開している。

少くない数のスタッフが行方不明になつたが、設備には損害は無いことなどを理由にしてどうか“命の為に必要なこと”を優先したのだ。かつて解体され、再建された白い巨塔は、曲がらずにその信念を貫き通していた。

そして、今回の事件を被害者ゼロに抑えられた功績から琢磨と氷華、そして勝手に参加したことでこつてりと篠崎に絞られた裕司と奏は、特殊技能事件捜査課の民間協力者と扱われるようになった。

もちろん現実での捜査権はないし、ゲーム内での情報は全て提供しろとの命令^命はきちんと受けている。

だが、異界対策部隊が本格的に軌道に乗るまでは、異界での戦闘を黙認されるようになった。

その事を心苦しく思う大人は多い。だがしかし、現場のリーダーである三条安坂が言ったのだ。『彼らの力がなければ、我々は間違いなく黒騎士に皆殺しにされていた』と。

それが、第二戦での現実での顛末だった。

■ □ ■

病室で、裕司は琢磨を睨みつける。

所謂ジト目という奴だった。

「お前、なんで俺たちを呼ばなかったんだ？」

そんな言葉を、裕司は発していた。

そんなに殺し合いがしたかったのだろうか？ と琢磨は寝ぼけた頭で思い、しかしそれを口に出す前にメデイにより指摘された。

裕司は、琢磨の異常さを見ても、仲間だと思ってくれているのだと。

「まあ、アレですよ」

「いや、どれだよ？」

「あんま、人の覚悟とかわかんないんですよ俺。自分で言うのもなんですけど、変な育ち方したもんで——けど、いいんですか？　これから俺も氷華も裕司さんと奏をただの戦力として見ることになると思います。命を捨てる覚悟はあるんですか？」

「いや、あるわけないだろ」

そうして、裕司は言った。ゲートを開いた時のように、心の底の奥の奥から湧きいでてくる情熱をもって。

「もう死なせたくないから、戦うんだよ」

それは、琢磨にはまだない、ヒーローの言葉だった。

『了解しました。マスターの意見は無視して、きちんと裕司様にも情報を流したいと思っています』

「メデイさん、それは流石に自由すぎない？　まあ俺も賛成だけどさ」

「ありがとう、琢磨」

「まあ、仲間外れは無しって事でお願いますね、お互いに」

そうしてゆつたりと時間が過ぎたその時に、唐突に裕司の端末に動画が届いた。

その動画を見てから、裕司は信じられないような目で琢磨を見つめた。

「……なあ、なんだ、コレ！」

そうして見せられたのは、病院の監視カメラの動画。

映っている琢磨の手には、キチンと臆病者^{チキンソード}の剣が握られていた。

そして、琢磨が迷いなく多くの人を殺していく様子が、そこには映っていた。

「監視カメラ、復旧したんですか？」

そんな的外れで、しかし全く否定しない言葉に裕司は戦慄した。

先程まで理解できるように思っていた琢磨が、化物のように見えたのだ。

「お前が、姉さんを、殺したのか？」

「はい」

『マスター！』

そんな、致命的なズレが、ヒーローと殺人鬼の間に生まれてしまった。

■ □ ■

それは、数を見て戦いでは勝てないと踏んだ黒騎士の抵抗。

彼は、この世界同士の殺し合いの中で最も警戒するべき個人として、琢磨を狙い撃ちにしたのだ。

監視カメラにサビクの記憶をデータとして送り込む事だ。そう言った機械への知識が黒騎士にはあり、それが可能な分体を作る能力もサビクの残り香の中にはあったのだ。

そうして、おそらく歪んだ正義感から広がった病院スタッフ殺害の犯人を広げる運動により情報は拡散を続けた。

異界殺人鬼、風見琢磨と。

幕間02 プリンセス・ドリルと迷子の少年

プリンセス・ドリルと長親、そして新たにこの二人とつるむことになったメガネことメガ・ネビュラスはロビーにて、神妙な顔で顔を突き合わせていた。

そして、ドリルが言う。

「決めました！ 迷うなど私のドリル道には似合いません！ さらにレイズです！ 1700ポイント！」

「……ほう、ここにきてさらに吊り上げますか」

「ドリル、全ポイント吐き出すつもりか？」

「勝つので！ 問題！ ありません！」

つまりは、トランプ。ポーカーである。なお3人でのポーカーとか大丈夫か？ という長親の意見は黙殺された。

場々に賭けられたチップは互いのポイントの8割を優に超える。ポーカーフェイスの苦手なドリルはメガネとの一騎打ちに四苦八苦していたが、それでもなお突き進むと決めたのだった。

なお、長親は早々に降りた。それを堅実というか臆病と言うべきかは、この青天井に

吊り上がるポイントを見ていけば堅実という方が強く印象に残るだろう。

ちなみにこのポイントポーカーの最低かけ金は1ポイント。ドリルとメガネが互いの手での勝利を確信して吊り上げ続けた結果がこれである。

細かいルールを特に決めず、レイズ、リレイズの回数を決めなかったのがこの地獄の始まりだった。

「では、そろそろ手持ちのポイントも少ないのでここで上乘せはやめましょう。コールです」

「なら、ショーダウンですわー」

そうして最後にレイズをしたドリルが勢いよく手を公開する。それは、ストレートフラッシュ。スペードの23456が続いている、本来ならば絶対に負けることはないし確信できる手である。これがそろった時のドリルの顔を見て長親は迷わず降りることを決めたほどだ。彼の手がブタであったことも理由なのだが。

しかし、メガネはそのおおよそ神に愛されているとしか思えない手を見て、ズレ落ちそうになるメガネをくいッと上げて不敵に微笑んだ。

「さあ！　メガネさん！」

「残念だったな、このルールで」

そうして見せたのは、はーと、ダイヤ、クラブ、スペードの4枚の7のカードと一枚

のカード。

それを見た長親は戦慄し、ドリルは涙目になりながらもぐつとそれを堪えた。当然頭の中はぐちゃぐちゃである。

確率論を語るのであれば、その役ができる確率は10万分の一を下回る奇跡の役だった。

「7のファイブカードだ。さあ、ポイントを使わせてもらおうか」

「……もつてけドロボー！　ですわ！」

「いやお前の自業自得だろうが」

そうして、ドリルのポイントはメガネに“譲渡”され、メガネは倍近い所持金に、ドリルは素寒貧になった。残りポイントは70ほど。勝てばいいのだ！　という考えが、いかに危険かがわかる勝負だった。

もつとも、そもそもこのトランプを用意したのが誰か？　という事実を考えればこんな博打には乗らなかつただろうが。

つまりはイカサマである。

そんな事実を悟らせず、しかしそれをネタにおちよくつてやろうといった時に、口

ビーには怒号が響いた。

この時間帯にてそれが起こる原因は一つしかない。

異界殺人鬼、明太子タクマこと風見琢磨のログインである。

「彼、あれだけ言われてもゲームをやめないのですね」

「ゲームの中なら風評被害も少ないのだろうよ、現実世界に比べればな」

「私……いえ、なんでもありませんわ」

「ドリル、気になるのなら吐き出せばいい。俺とメガネでも、聞くことくらいはできる」
そうして、ドリルは自身の考えを語りだした。

「私、タクマさんは簡単に人を殺せる人だと思いました。けれど、同時に理由なく人を殺す人でもないと思ったのです。なので、あの異界殺人動画にはなにか理由があるのではないかと」

「……それは、どうですかねえ？」

「メガネさん？」

「私の目には、殺して笑っているように見えましたよ」

そんな会話をしていると、不意に喧騒の声近づいてきた。

件の少年、タクマがやってきたのだ。

「すみませんお三方、お話を聞いてもよろしいですか？」

「……あなたと話せと？」

「どうしても確認したいことがあって」

そんな人を殺した後だとは欠片も思えない様子はこの少年に恐怖を覚える長親、怒りを覚えるメガネ。

それが、普通の人間の感性だった。自らを害しかねないものを無意識にも意識的にも排斥する。それが普通なのだ。

だが、この中に心根だけは普通でない女がいた。その根にあるのは“偏見で人を見てはいけない”という教えだけ。

プリンセス・ドリルはただそれだけの理由と一握りの勇気で異界殺人鬼へと正面から向かい合った。

するとそこには、“自分を迷子だと気づいていない少年”しかいなかった。

「……なら、一緒にワールドへ行きましょう！ 話がなんであれ、野次馬が多いのはよろしくありませんわ！」

その言葉と共にタクマはドリルに無理やり手を引かれ、ワールドへと転移する。

それを見た長親は楽しそうに、メガネは不機嫌そうにワールドへと転移した。



タクマの確認したいこととは単純。最後の周における3人の行動だった。

より詳しく言うなら、最後の周にて起こった上での戦闘のこと。タクマの持っている情報から逆算するとこの三人は死んでいてしかるべきなのだ。

「それは大きく言いますね」

「あなた方の戦った、あの男。奴のゲートは痛覚増幅です。掠っただけの痛みで死んだことがあるのでそれは確かかと」

タクマがそんなことを言うと、ドリルは「確かに、それなら長親さんが死んでいないのはおかしいですわね」という。

その距離はすでに殺人鬼に対してのモノではなく、子供に対してのモノだった

「それでは話しましょう！ 私たちの戦いの顛末を！ 華麗なる！ ……とは今回言えませんでしたけれど」



それは、タクマ達に別れを告げてからすぐの事だ。

明らかな殺気に満ちたその黒づくめの男の現れに、プリンセス・ドリルは槍を構えて言い放った。

「申し訳ありません黒服のお方、私あなたのことを招いてはおりませんの」

「招かれざるのは貴様らでは？」

「そうですか？ ラズワルド王より許可は貰っていますのよ私たち」

その言葉と共にドリルは地下に繋がる穴を示す。この大広間の真下が封印の間に繋がっていることを知っている男は驚愕に目を見開き、そしてその瞬間に飛び込んできたメガネに対して反応が遅れる。

それでもすぐに閃光剣（レイブレイド）を展開して迎撃したのは流石というほか無いだろう。

「長親！」

「わかつている！」

そうして放たれる長親のバルバード、そしてその着弾と共に放たれる長親の重力場。ハルバードを重くしながら、「引きつける力場」が放たれた。

その引きつける力だと読んでいた男は閃光剣にて長親の胸を狙ったが、「想像とは異なる力」にて掠る程度に収まってしまった。

「ッ!?」

その力の使い方に目を見開いた黒衣の男。なぜなら、引きつける力場はハルバードへのもものではなかったからだ。

その重力の向く先は、虚空。

そして、その虚空へと放たれようしているのは、螺旋。

プリンセス・ドリルの魂のドリルであった。

「ハアッ！」

掛け声と共に、放たれる一撃。

その生命の螺旋が闇色の閃光剣レイブレッドに衝突した時

生命の光が、変わった。

暗い闇のようだった閃光剣レイブレッドが、綺麗な輝きに変わったのだ。

「ッ!?？」

「……なんですか?」

もつとも、それだなにかが変わることはない。彼女のドリルは閃光剣の破壊と共に溢れた衝撃で弾け飛んだ。

「……ラズワルドが健在の今、こんなところで!」

「なんだか知りませんが、死んでくださいませ!」

黒衣の男は煙玉を放って逃げ出す。それと共に現れた多くのモンスターが、広間を埋め尽くす。

「メガネさん! 行けますか!」

「……チッ! 無理だ畜生! 速い個体が多い! てめえらその羽筆って死んでろや

!」

そうして、モンスターと戦いを始め、何かと速くて面倒なバードマン達を中心にした敵達を時間をかけて倒すのだった。



「ざっとこんなものですね。疑問に思うことはありませんか？」

「あの、閃光剣レイブレイドの色を変えた時、なにを考えていましたか？」

「いつも通り、最高のドリルの事を！」

『……マスター、聖剣とはドリルなのでしょうか？』

「ドリルさんのソレが聖剣だって決まった訳じゃない。調べるだけ調べよう」

その言葉に、脳内にハテナマークを浮かべるドリル。

そして、それだけ聞いて去っていかうとするタクマだったが、その歩みはプリンセス・ドリルによって止められた。

「お待ちになつてくださいますか？ タクマくん」

「……なんですか？」

「私はあなたの言うことを信じます。なので聞かせてくださいませんか？ あなたは、何故あの病院の方々を殺したのかを」

「……それは」

『彼らはもう死んでいました。喉にあったコアの浸食によつて。マスターは死体になつ

たことで操り人形になった方々を終わらせたにすぎません」

そのメデイの言葉に、得心がいったと顔を綻ばせるドリル。

「安心しましたわタクマくん。あなたは、理由なく人を殺して喜ぶ人ではない、そう確信できましたから！」

「……そんな上等なもんじゃ、ないですよ」

そんな言葉を最後に、タクマは去っていく。

そして、その寂しげな背中がプリンセス・ドリルのブレーキを破壊した。

「長親！　メガネさん！　彼の仲間を探しますわよ！　異界事件の事を聞き出すのです！」

「ドリル、それはどうしてだ？」

「決まっていますわ！　私が、プリンセス・ドリルだからですわ！」

「理由になっていないが、まあいいだろう。異界事件のことは気になっていた」

「なら、私は別れましょう」

「あら、メガネさん？」

「別行動の方が、情報集めは早いでしょう？」

「まあ！　ありがとうございます！」

そうして、ドリルとメガネと長親は行動を開始した。

その胸の思いは、
それぞれであつたが。

第三戦 VSアルフレシヤ 自称王女と螺旋の槍 異界殺人鬼タクマの日常の終わり

ロビーにて開かれた異界への門。

その中の白いエリアには、必死の形相で剣を振るうタクマと、それを適当にあしらうダイナがいた。

「おいおいおい、いつもの自由さが消えてんぞ?」

ダイナがそんな軽口を叩ける程度には、タクマの剣は精彩を欠いていた。ありとあらゆる手段での殺人論理のもと殺しにかかるのがいつものタクマであったが、今はひたすらにゲートの切れ味と生命転換の出力でのごり押しになっていた。

それは、今のタクマの精神の余裕のなさに起因する。

タクマの現実は今、日常とは程遠いところにあつた。



事の始まりは、あの異界事件の映像が流れ出た時の事だ。琢磨はそれをさほど重要視していなかったが、そんな狂人の理屈が世間一般の常識になるわけもなく、琢磨は多くの“善意の人”達の標的にされた。

SNSは当然として、動画などのメディアにて“明太子タクマ”という一人のプレイヤーへのバッシングは強まっていた。

しかしそれだけなら、タクマは耐えられただろう。何せ原因は自分であり、その主張は当然のモノだったのだから。

だが、“善意の人”たちはそこで終わることはなかった。

異界殺人鬼風見琢磨はなぜ生まれたのか？ その答えはVRゲームにある。そんな世論から多くのVRゲームは規制された。琢磨の恩師のいるVR剣道も早々に寄生されてしまったのだ。

そのことで、琢磨を憎む声は増えた。

異界殺人鬼風見琢磨はなぜ生まれたのか？ その答えは彼の境遇にある。そんな世論から琢磨の通っていた院内学校や中学校に及び、多くの調査がなされた。その結果見つけた“様々な問題を抱える子供に対しての対策”が過剰なのではないかという声の下、少なくとも制度が縮小、あるいはなくなつた。

そのことで、琢磨を憎む声は増えた。

異界殺人鬼風見琢磨はなぜ生まれたのか？ その答えは彼の人間関係にある。そんな声から琢磨の知り合いたちは標的にされ、自然と琢磨を敵視するようになった。

同じように敵と戦った自衛隊や警察を含めた旧ボランティアスタッフ、現“特殊空間

対策連合部隊”の皆もその罪を受け入れさせざるべきだと声高に叫んでいる。

大切な姉を琢磨に殺された裕司は理性では納得しながらも琢磨に対して怒りを抑えられないでいた。

そして、琢磨の最も大切な人たち。氷華と凧人は多くの“善意の人”からあらぬ疑いをかけられ、誹謗中傷を浴びせられ、まともな生活を送ることができなくなっていた。凧人の治療を待つ多くの患者の中に、あるいは奇跡の生還者御影氷華に勇気をもらった多くの人の中に、琢磨を憎む声を上げる人がいた。

そして、それら多くの人々の暴走が大きくなりになった結果、琢磨の、凧人の家は放火された。やったのは、琢磨に家族を殺された近所の駐在だった。

その火はすぐに消し止められることはなく、琢磨の家の多くのモノを、多くの日常の思い出を焼き払っていった。実の両親からの形見のモノたちも含めて。

それが最後のトドメとなり、琢磨は凧見の家から出ることを決めた。

篠崎以外に誰にも行先を告げることはなく、一人で。両親の遺産を食いつぶしていきながら。

そうして、バイクで様々なところを逃げ回りながら《Echo World》にログインしているのが、今のタクマであった。



ある日、プラクティスエリアにあてもなく向かおうとした琢磨の眼前にその異界への門は現れた。

周囲を見回すも、このゲートに気づいたものはいない。そして、そのゲートには見覚えがあった。

タクマがダイナに導かれて通った、あのゲートだ。

『マスター、どうしますか?』

「行こう。行かない理由は俺にはない」

そうしてタクマは躊躇いもなくゲートへと入る。

そんなタクマを待ち構えていたのは白い部屋で横になってビールを飲んでいる現代衣装のダイナだった。

タンクトップに腹巻と、少しリラックスが過ぎている気はするが。

「師匠、何の用ですか?」

「まあ、いろいろあつてな。お前に頼みたいことができた」

「……頼みたいこと?」

「おう、代わりにつちやなんだが。成功報酬として異界の情報を開示する用意がA Iの嬢ちゃん……マテリアにはあるらしい。だがまあ、お前にはいらんだろうがな」

『マスター、明らかに態度が異常です。今までも隠していませんでしたが、ダイナ様が運営側のNPC、AIであることを明言しています』

「その辺はいいだろ。今回もどうせ適当だろうし」

「おう、よくわかったな」

『ダイナ様、そこは認めるべきではないかと。私が言う事ではありませんが』

そんな言葉にからりと笑った後で、ダイナは一言こういった。

「依頼内容は、聖剣の搜索と調査だ。この前の週での戦いのときに目覚めたヤツがあった」

「………聖剣?」

『あの世界における聖剣とは、自身の武器のことを指すのではないのですか?』

「ああ、合ってるぜ。正確に言うなら聖剣ってのはどんなものにも目覚めうる”聖剣現象”を指した言葉だ。人の魂に触れたモノが、意志と力を目覚めさせるもんだよ」

「………その聖剣現象ってのはがどうだっただってんです?」

「もし、その目覚めたモノが”生命いのちの聖剣”だった場合は………世界が減ぶ」

そんな言葉を、あっさりと吐くダイナ。先ほどまでのおちやらけている様子は消えていた。

「………どういうことですか?」

「お前たちの世界を襲っている連中の狙いは“生命の聖剣”のもつ世界の命に干渉する力だ。それをもとに世界規模の捕食を起こすつもりなんだよ。あの馬鹿は」

『VR世界から、現実世界への侵食……』

プログラムにて生まれた存在であるメデイはその“甘い夢”に対して心惹かれるものがなかったわけではない。頭の中からではなく、隣でこの妙なマスターを支えてみたという願いはずっとメデイの中にはあったからだ。

だが、その程度ではメデイの決められた、そしてメデイ自身が決めた役割を放棄することを良しとはしなかった。

「メデイ？」

『大丈夫です。マスター……ダイナ様、それは、ダイナ様が直接赴くことでは解決しないのですか？』

「ああ。俺は奴のゲートによって起こされた残響の一部だからな。肝心なところで動けねえ」

『それは、マスターがしなければならぬことですか？』

「嬢ちゃんの想定では、聖剣が目覚め始めるのはあと5つは試練を超えた後だったらしい。それまでに見込みのある奴らをこっち側に引きずり込むつもりだった。……だが、今はお前さんしか使える駒がいねえ。防衛はまず無理だろうな」

「師匠の怠慢じゃないですか」

「そう言うな。本当の命がけの殺し合いへの適正を持つてる奴なんかそうそういねえんだよ。生半可なやつはむしろ邪魔だ……って、話が逸れたな。それで、受けるか？」

「もし受けなかつたら？」

「そんなときや、別の奴に頼むさ。Mrs. ダイハード、だったかね？」

その瞬間、タクマはダイナに対して勝てる勝てないを考える前に切りかかっていた。

「ざけんな、氷華は命がけの戦いを望んでるような」こつち側」の奴じゃねえんだよ」

「望んでなくても、やらなきや死ぬならやるだろあの嬢ちゃんは」

「……そうか、なら受けるさその話。——けど、あんたに八つ当たりくらいはさせてもらう」

そうしてタクマは全力でダイナへと切りかかっけいき、10分ほどで倒れ伏した。

それは実のところ戦いにはなっていない。

ダイナからタクマへの奇妙な修行と、慰めだった。

ダイナの剣にあつたのは、立ち直れという一つの意志だけ。

そんなまつすぐな剣と切りあつていたのだから、タクマは多少元の自分を取り戻すことができて当然だろう。

実際修行の終り頃では殺戮に対しての戦闘論理構築は戻っており、ダイナの腕に浅い

切り傷一つを付けるほどの奇策を編み出して見せるほどだった。

それに対しての反撃でタクマは吹き飛ばされ、地面に転がされ剣を突き付けられているのだが。

そんな状況で、タクマはダイナにモノを言う。

「あんだ、最初からこうするつもりだったんですか？」

「まあ、剣を振ってりやいろいろ頭から抜けるだろ」

『私にはまったく理解できませんが、今の戦闘によりマスターのストレス数値が軽減したのは事実です。感謝します、ダイナ様』

「おうおう、感謝しろ」

「そういうところで妙に子供っぽいから威厳がなくなるんですよ、ダイナ師匠」

そんなやり取りの後に、タクマはダイナの申し出を受けた。

聖剣の探索、調査。そしてそれが”生命の聖剣”であるならば、奪取すること。それがタクマへのオーダーだった。

■ □ ■

ダイナから”聖剣現象”と”生命の聖剣”のデータを貰ったタクマは、一人ロビーに出る。

周囲の視線が煩わしいが、それでも切りかかってくるものは少数であったためにタク

マは気にせず前の周の動画を見てみると、ふと周囲の音が止んだ。

『マスター、顔を上げてください』

「時間がない。このまま話すよ」

そんなタクマの前に現れたのは、ヒョウカだった。

「タクマくん、ちよつといいかしら？」

「よくない。だから帰れ」

「嫌よ、ようやく見つけたのだもの。私の愛してる人を」

そんな言葉を堂々と話すヒョウカはの仮面は、どこか弱弱しかった。

捨ててきたモノ

琢磨は、篠崎からの情報で氷華の体に変わりはないことは聞いている。

だが、今の氷華の様子はかつて病院で初めて会った時を思わせるほどの弱弱しさがあつた。

普段なら、拒めない状況で放ってくる“愛している”という言葉を投稿かけてきたのはそのためだろう。そのことにタクマは困惑を覚えた。

“自分など放っておけばいいのに”と。

『それができないからこそその愛なのでしょう。AIの私にわかることをどうしてマスターはわからないんでしょうか？』

そんなメデイの言葉を受け止めながら、タクマは改めて周囲を確認する。

先ほどの愛しているという言葉を聞いた多くのプレイヤーたちが、ヒョウカのことを敵視し始めているように見えた。

これ以上は、ヒョウカの首を絞めるだけだろう。そうタクマは思い、立ち上がって無言でログアウトをした。

背中からの「待って！」という言葉を聞こえないふりをして。



そうして琢磨がゲームから戻ってくると、そこは地方の小さなカプセルホテルの中だった。金庫の中のモノを確認するも荷物で盗まれたものは何も無い。そのことに少し安堵してから、琢磨は端末を取り出す。

位置情報の追跡を切るために電源を落としていた端末を起動させると、そこには氷華からの5000件を超える不在着信の履歴があった。

そうして、今またもう一件増えそうになったが、あの弱弱しい氷華の様子を見た琢磨は、気まぐれに電話に出ることにした。

「もしもしっ?」

「……たくま、くん」

そんな声が聞こえる。その声は、涙声で、迷子の女の子の声でしかなかった。

そのことが、ひどく痛い。琢磨の行動の結果を、俺は受け止めなくてはならない。殺したもののからだから。

だが、氷華がこうまで弱る理由が琢磨にはわからない。彼は命を奪う才能を持っているが、他人の心を殺す才能も邪悪さも持っていないのだから。

「……どうしたんだ?」

「私、ダメみたい。琢磨くんが側にいないだけでこんなにも弱さが表に出てきちゃって

る。やっぱり、琢磨くんみたくはじめから強い人とは私は違うのかな？」

「俺みたくないかれと氷華は違う。そんなことは前からわかってたろ」

「私は！……それでもちよつとはわかりたかったの、大好きな人のことを」

そんな言葉で会話が途切れる。氷華は、今ままで無理して琢磨異常者の歩調に合わせていた。だが、それができていたのは目の前に見本になる人物がいたからこそだったのだ。

しかし今、氷華の側に琢磨はいない。それが今の氷華の不調の全てだった。

そんなことを、琢磨は感じていた。

「……ちよつとだけ、アテはできた。それをもとにあの世界の謎を解き明かして、殺した人の安否がわかったなら、逮捕される前にちよつとだけお前の元に帰る。それで、頑張れるか？」

「信じられると思うの？　今のタクマ君の慰めの言葉なんて」

『ならば、私が保証します。健康管理AIの誇りに賭けて、マスターを必ず氷華様のところへお返しいたします』

「……メデイ」

その言葉が、氷華の心を少しだけ立ち直らせたのか、氷華は涙をぬぐった。

「ありがとうメデイ。琢磨くんのことをお願い」

『はい』

そうして、氷華はいつもよりは弱いが、それでも慇懃無礼で傍若無人な Mrs. ダイハードへと戻っていった。

「それで、琢磨くんのアテって何？」

「……言わない方が良いつて話だったよな？」

『はい、送られたデータによると、聖剣アは自身がそうであると自覚すると成長が止まってしまうようです。厄介な話ですね』

「蚊帳の外の気分は、あまり良くないわよ？」

「すまん、だけどこつちもいろいろ面倒みたいなんだ。だから、これだけは聞く。前の周ライフフォースで、誰か生命転換で説明できない力を示した奴はいなかったか？ それを手掛かりらし
いんだ」

「ゲートでも、ないのよね？」

「ああ」

「わかった、探してみる。けどその前にいいかしら？」

「……なんだ？」

「お義父さまと、ちゃんと話をしてあげて。私と同じくらい辛そうだったから」

「……ああ」

そうして、琢磨は風人へと通話をする。

休憩時間だったのか、あるいはもう家に帰っていたのかわからないが、珍しいことに2コール程度で風人は通話に出た。

そうして、かけられた第一声は「大丈夫か!」だった。

その、当たり前前に心配されていることに温かさを感じてしまいがちながらも、この暖かさを曇らせたのは誰かと自嘲する。そうして、表面上は普段通りに、「大丈夫だよと答えた」

「……飯は、食っているか?」

「ちゃんと食べてるよ、親父」

『今の言葉に嘘はありません。取っておいた食事ログを提出しましょうか?』

「いや、構わない。大丈夫だ」

「それで、親父の方は大丈夫?」

「……ああ、お前の方が気落ちしているとは思っていたが、杞憂だったか?」

「なんとか……は、多分なっていない」

「琢磨?」

だが、親の温かさに触れることは必ずしもいいことばかりではない。

無意識に張りつめていた緊張の糸が、音を立てて切れてしまう事もあるのだから。

「なあ親父、どうして殺した俺だけに悪意は向いてこないのかな?」

「……それが、人間だからな」

「そっか、そうだよな」

「ああ」

その言葉に、納得して琢磨は通話を切る。

人間だから。その感性は琢磨にはわからない。なにせ、琢磨は根本的な精神性が人間のモノとはかけ離れているのだから。

異界殺人鬼には、人の心はわからない。それでも、その根底にある者は良いものだと信じて憧れてきた。

そこが、揺らいでしまった。そんな何気ない“人間だから”という言葉で。

不思議と、魂で理解できてしまった。今のタクマはもうゲートを開けないのだと。

人間の日常に対する憧れに一步踏み出す勇氣、それが鍵だった。だが、日常へのあこがれが揺らいだ今、そこに踏み込むのに勇氣が必要ではなくなってしまったからだ。

それを受け入れるには、今のタクマには余裕がなさ過ぎた。

「……行かなきゃ」

『マスター?』

「探そう、聖剣を。まずはやらなきゃならないことを終わらせないと」

そうして琢磨はか細い情報網をたどり、プリンセス・ドリルへとたどり着くのだった。



「安心しましたわタクマくん。あなたは、理由なく人を殺して喜ぶ人ではない、そう確信できましたから！」

「……そんな上等なもんじゃ、ないですよ」

不思議と友好的だったドリルに対して戸惑いを覚えながらも、どうにか情報を得ることに成功した琢磨。

現状手に入れた情報では、プリンセス・ドリルの槍が生命の属性の閃光剣レイブレードを浄化したということ。

その理屈がが、生命いのちの聖剣の他の生命を支配する力であるのなら、いきなり当たりであるという事だ。

その場合の対処法は、指示されている。

聖剣は、その持ち主と運命で引かれ合い続ける。破壊しても形を変えて必ず戻ってくるのだそうだ。

だから、聖剣を消すためには聖剣と共に持ち主も殺さなくてはならない。

そこまでやれとダイナは言っていないが、この資料を作った者はそこまでやらなくてはならないと知っているのだろう。

そして、今それができるのは琢磨しかいない。それが、変わらず迷い道の中にある琢磨の現実だった。

そして、琢磨は管理AIマテリアからの情報をもとに、プリンセス・ドリルにいる京都へと流れついたのだった。



その翌日、再びワールドが開く。

その向こうは変わったソルディアル王国だ。

多くの殺された人たちが流れ着き、移住したその国では

“民主主義”という毒が国を蝕み始めているのだった。

とある日の掃除

「随分と、騒がしいな」

『はい、選挙運動に似たものを感じますね』

ワールドが解放されてからすぐにタクマは、ゲームにログインする。

ロビーを抜けてさっさとワールドに侵入したところ、街では多くの日本人と思わしき風貌の人物と王国の平民の人々の議論が飛び交っていた。

内容は、“民主主義”について。

琢磨が聞き耳を立てたところでは一部の入植者、つまり元現代人が言ったのだとか。「自分たちには国に対して何も行動を起こすことはできないようになっていいる！」と。

状況を考えろとタクマとメデイは思う。この国そんなことができるほど余裕があるわけでもないだろう、と。

「そんなにこの国での暮らしに不満があるのか？」

『少しでも自分たちの地位を高めたいという欲求の爆発にも思えますね』

タクマは、メデイとそんな話をしながら騎士団詰め所へと向かう。その背後からは多くの憎々し気な目があるが、特に何かをする気にはなれなかった。

「やあ、こんにちは」

そんなときに声をかけてきたのは、見知った顔だった。

装備は騎士団のモノを着崩しているその青年は、人柄のよさそうな顔立ちに似合わない眼光の鋭さでタクマを見据えていた。

「……こんにちは」

「君は稀人のタクマだね？　噂は効いてるよ。僕は足柄圭一、よろしくね」

「……はい、よろしくお願ひします」

「んで、君なんかやったの？　随分と睨まれているみたいだけど」

その言葉に、どう返せばいいかタクマにはわからない。あなたたちを殺したから。という事実を伝えて良いのか本当にわかっていないのだ。話しかけ方から考えて、タクマとのこと、現実でのことは全く覚えていないようだ。

なので、タクマは沈黙を保った。その様子に何か感じ取ったのか、足柄はこんな提案をしてきた。

「君の目的地ってたぶん騎士団詰め所だね？　一緒に行くよ。ちようど警邏からの帰り道だったし」

「……ありがとうございます」

「それが言えるなら、君は血も涙もない殺人鬼ってわけでもないみたいだね」

『どうしてそのような発言を?』

「だって」

「僕たちの大半を殺したのって、君なんだから?」

そんな呪いを、あつさりと吐いてくる足柄に、タクマの足は完全に止まった。

「一応納得はできてると思うよ。聞いた話を総合すると僕は死体になつて操られていたみたいだし。そもそも殺された時の記憶はないしね」

「……それで、いいんですか?」

「いいのいいの。とりあえず今のことに目を向けていないと生きてけないからねー、この詰んでる国ではさ」

そんな言葉が表面上のモノであると気付けないタクマではない。稀人だから意味がない。そんな理由でメイスを振り下ろしていかないだけだと分かっている。

敵に対してはどこまでも容赦なく在れる。それがどんなに親しくしていた者や、自ら鍛えた愛弟子であってもその心すら折り砕くのがこの“子育てサイコ”と呼ばれた人物なのだから。

『ところで、詰んでいるとはどういう意味でしょうか?』

メデイが、気を使って話題を変える。すると足柄は纏っていた空気を変えてあつげらんかんとした言葉を放つ。

「農作物を育てるゲート使いの元騎士が最近民主主義にはまっちゃってさ。王家に対して結構な譲歩を引き出し出してるのさ。本人は貴族に興味はないんだけど、皆に発言権があつたらしいなってのは前から思ってたんだって」

「……殺してどうにかなる問題じゃないのは、この国では痛いですね」

「よくわかつてるね稀人なのに」

「いや、王と王子がアレなんで」

「ついでに言うのと宰相様もだいたいぶアレだよ。可能だったら肅清してやるのに！　ってちよくちよく言つてたの聞いちやったから」

「最悪ですねこの国」

「いや、肅清とかは最後の手段だつてわかつてるでしょ君。それだけ追い詰められてるんだよこの国は」

そう言つて、この国の今の街並みを見る。

全体的に汚くなつた。タクマはそんな感想を抱いた。よくよく鼻を利かせてみれば、腐臭すら感じられる。

『町の清掃などに回す余力すらないのでしょうか？』

「そう、前までは戦士団がやってたんだけど、今は入植者に乗っ取られちゃったからね。国が民主主義を認めるまでのストライキだつてさ」

「なんだかダメな部分だけ浸透してる気がしますね」

「あ、それ僕もそう思う」

しかし、そんな中でも、そんな中だからこそその善意の行動は輝くものだった。

「さあ皆さん！ この街をピカピカにして差し上げましょうか！」

「「はい！」」

プリンセス・ドリルと彼女が引き連れている小さな子供たちがゴミ拾いや掃き掃除をして、大人連中が溝さらいなどの作業を行っていた。

それは、なんだか不思議な光景だった。プレイヤーとしては全く意味のない行動だというのに、彼女は普通に善意からそれを行えている。

そのことが、ひどく眩しかった。

「んー、僕ちよつと野暮用ができたからここで別れる？」

『奇遇ですね、マスターにもたった今野暮用ができたようです』

「意見を聞かずに進めるなメデイさん」

『ですが、やるのでしょ？』

「まあ、やろうとは思ったけどさ」

そうして、タクマの一日目は街の一角をドブさらいして終わった。

それを自主的に行った自分たちを見て、ドリルはともうれしそうな笑顔を浮かべて

いた。

参加したプレイヤータクマとドリルのみ。二人と現地の住人たちによる小さな清掃活動だった。

■ □ ■

そうして、深夜。

多くの者が寝静まったその時に、聖剣についての調査をタクマは始める。

やることは自体はストーリーカー行為とみて間違いはない。彼女の家を張り込んで、自身の目でその命を知覚することができれば最上だ。まずはそのデータをもとに管理A I に分析をさせるのだと、メデイに与えられた情報から理解できる。

なんてことを考えていたら、何やら騒がしい声が聞こえてくる。

「嬢ちゃん、なあいいだろ？ 写真とるぐらいはさ」

「あかんに決まつとるやんか。肖像権の侵害やで」

「……頼むよ、嬢ちゃん！ あんたをモデルに彫刻をしたいんだって」

「それが裸婦像の依頼じゃなきやあ写真くらいは良かったんやけどなあ」

「じゃあ、裸婦像にはしないから」

「さすがにそれは信じられんわあ」

「クソ、どうして口を滑らしてしまったんだ5分前の俺！」

「……ナニアレ?」

『さあ? ですが放置は面倒なことになるかと』

そうして、間に入って止めようとしたその時に突然バン! とドリルの家の扉が開き、飛び出した金髪の彼女が男に対して跳び蹴りを喰らわせていた。

「無事ですか! 美緒!」

「無事やけど……」

「ならばあとはこの狼藉者をぶちのめすだけですわね!」

「……お姉、別になんもされとらんからその辺で」

「なんか収まりそうだな」

『そうですね』

「ふざけるな! 俺は彼女の裸婦像を掘りたいだけなんだ! そのための写真を撮りただけなんだ! それを邪魔するのが貴様なら、押し通るさ!」

「上等です、アスファルトを舐める覚悟はよろしいですね!」

そうして深夜の街にて激闘を始める2人。展開が急すぎて意味が分からないし帰ってもいいんじゃないかとは思いますが、どうにも座りが悪い。

「すいません、あれ止めたほうがいいですかね?」

「……できるん?」

「たぶんですけど」

「なら、頼むわ」

「了解」

といつて、タクマはふわりとその激戦の中に入り込み、二人の間で手を叩く。すると気配を薄くしていたタクマの存在に二人は驚き、とつさに距離をとる。

それで、戦いは止まった。

そこで少女が、二人を

「写真は失礼ですけど断らせていただきます。けど、お姉が暴力振ったのは謝ります。申し訳ありません」

「……いや、俺も少々暴走していた。すまない」

「……では、今日は見逃して差し上げますわ」

「お姉も謝りんさい」

「……暴力については、謝りますわ」

「じゃあ、これにて」

「はい、今度は謝礼金をもって訪ねてきますね」

「援交の誘いかいな」

「まさか！ 美緒の体が目当てで！」

「ああ！ その通りだとも！」

「阿保かいな」

そんな喜劇を間近で見た琢磨は、切実にこう思った。

「やっぱ帰ろうか？ 俺」

「逃がさへんよ、助けてくれた謎の人」

そんな一幕が、プリンセス・ドリルこと“高砂瀬奈”たかさごせなとその妹の“高砂美緒”たかさごみおの出会いだった。

高砂姉妹

「すまんなあ、なんだかんだ30分近くも仲裁させてしもうて」

「……美緒さん、途中から楽しんで煽ってましたよね？」

「知らんよー」

「ここは、高砂姉妹の家。京都においてそこそこの茶の名家らしいと教えられたが、その家の大きさは普通くらいだ。」

和室が少し多いというのが違いだろうか？ と琢磨は思う。

聞けば、「最近リフォームしたんよー」と教えてくれた。

琢磨の目の前にいるのが高砂美緒。長い黒髪にいたずらっぽい笑顔の似合う顔をもつ女子高生だ。その容姿はとて整っており、成長すれば多くの男を侍らせるような女性になりそうだと琢磨は思う。

「それで、俺は帰っていいですか？」

「帰るって、どこに？」

「そりゃ……」

「ホテルに泊まるくらいなら、ウチでもええんとちゃう？ 風見君」

「まあ、確かに盗られて困るものはそんなにありませんけども」

「決まりやな。お姉に伝えてくるわあ」

「お姉、風見君泊まるってー」

「あら、それではお夜食の準備などは必要でしょうか？」

「……受け入れすぎじゃないか？」

『マスターは家出少年ですし、優しい方ならこのようにするのは？』

「いやしないから。普通に警察に突き出すのが立派な大人だよ」

そうして、姉妹のペースに巻き込まれながら琢磨はなんとか自分の危険性を訴える。

自分は巷で噂の異界殺人鬼であり、見ず知らずの他人なのだと。

「知りませんわそんなこと！ 私と美緒があなたを信じると決めたのです！ それを否定するのは私たちへの侮辱ですわ！」

その輝きに満ちた笑顔が琢磨には眩しくて仕方ない。

この、高砂瀬奈という女性はどういう“自らの輝きで皆を照らす者”なのだろう。

そのことが、ひどく煩わしく羨ましい。

こんなヒトらしく在れたなら、自分も何か違ったのだろうか？ と、琢磨は思った。



夜食を断り荷物にある断熱フィルムを纏い眠りにつく琢磨。

その姿は、まるで借りてきた猫のように大人しかった。

「お姉、私風見君を……」

「みなまで言わずともわかりますわ。彼、変な子ですけど悪い子ではないですものね」

その姿に安堵したのは高砂姉妹だ。

14で家を出て各地を転々としている。それが今の琢磨だ。それも多くの人に傷つけられたのが原因でだ。

普通なら警戒心で眠ることなどできないだろう。突然招き入れられた他人の家なのだから。しかしすぐに眠りについてしまっている。よほど疲れがたまっていたかのよう。

そのことは健康管理AIのメデイからも言われている。「ありがとうございます」と。

「それでお姉、本当に警察に連絡せーへんでええの?」

「もうしました、けれどあの少年の失踪届は出ていないと」

「……ほんまに?」

「ええ。警察の方が風見君の保証人になってくれるうえに、位置情報、健康情報などの提出はきちんとされているので問題はないそうですわ」

「……なんか、首輪付けられている犬みたいやな」

「ですから、私たちにできることは屋根を貸し、安らぎを与えることくらいでしょう。そ

れ以上のことは折を見ておじい様に相談してみますわ」

「なんか警察のお偉いさんやったんだっけ？」

「そのように聞いていますわ」

「なら、大丈夫かなあ？」

そうして、姉妹が相談事を終えて眠りにつき、いつもと違う朝を迎える。

翌朝、いつものように美緒が朝食の支度をしようとするすでに琢磨は起きていた。目はきちんと覚めており、眠気などは感じられない。

「……おはようございます、美緒さん」

『おはようございます美緒様。朝食のセットは時間通りに。一人増えて材料が足りない分はマスターが買い足しておきました』

「え、外出て買ってきてくれたん？」

『たまにはインスタント以外の料理を食べるべきだと進言したのです。こちらの都合ですよ』

「それに、泊めてくれた恩があります」

「……ええ子やなあ、琢磨くんは」

「撫でようとしなくてください」

「いけずう」

そうして、部屋の様子を改めて見る。朝のそろそろの準備は本当にこの少年がやってくれたようだ。

以外に家庭的？ と美緒は思うが、メデイが指示をだしてそれに従っただけだろう。そんなことを思うと、自身が未だ。パジャマであることを思い出す。

そして、男性経験のない身でありながらちよつとからかつてやろうといういたずらどころ同じく湧いてきた。

ので、タクマの正面に美緒は座った。

わざとボタンを少し外し、下着が見えるようにした状態でだ。

過激かな？ と美緒は思ったが、それに対して琢磨は何の反応もない。

注視することも、ドギマギと目をそらすこともしないのだ。

これでは自分に魅力がないようではないか。と美緒は思い、もう少し大胆に胸を強調していく。

美緒の胸は普通サイズはあるので、これでちよつとはいたずらになるだろうとの思いだ。

しかし、琢磨は動じない。それどころか「この部屋、少し暑いですかね？」と室温を気にしている様子だ。

つまり、それは、見て、そのうえで興味がないという事だった。

それが、美緒の乙女心に火を付けた。

暴走エンジン

「なあ琢磨くん」

「なんですか？」

「君、男色家なん？」

「失礼すぎやしないかこの人」

『マスターはきちんと女性に性的興奮をする人種です。安心してください』

「メデイ、お前も乗るのか」

「なら、ウチのおっぱい見た責任取らんとあかんよね？」

「見せつけてきたのはそっちだと思うんですけど、確かに不躰でした。謝ります」

「なら、なんかいう事あるんちゃう？」

「そうですね……」

「夏が近いとはいえ、まだ冷えます。体調に違和感はありませんか？」

「天然かいな。心配してくれるのはウチ的にはうれしいけど、なあ」

『すみません、マスターがこんなので』

「ええよ、ある意味信用できたし」

そういつて自室に戻り部屋着に着替える美緒、そのついでに瀬奈を起こしてきたように、奥の和室からはなにやら騒がしい音が聞こえ始めてきた。

「そんなや、琢磨くんの作ってくれたご飯を食べようなあ。楽しみだわあ」
 「作ったのは自動調理器カですよ」

『申し訳ありません、マスターのノリが悪く』

「お前は悪乗りしすぎだよ。ちよつとは落ち着けメデイ」

『……そうですね、失礼いたしました』

そうこう言っていると、すつと現れたのは先日彫刻家の男性に対して狼藉を働いた人物とは思えないほどおしとやかに見える金色に染めた髪的女性がいた。しかしその雰囲気とは別に活発そうなその笑顔は、自分は元氣いっぱいだと言わんばかりだった。

「おはようございますわ！ 美緒、風見くん！ 朝食にいたしましうー！」

「朝から声が大きいです／わあ」

「……息ぴったり!? まさかそういう事ですの美緒！ 茨の道ですわよ今の彼と共に行くのはー！」

『失礼ですが、瀬奈様の暴走はどうやったら止まるのでしょうか?』

「止まらへんよーこういうお姉は」

「いや二人とも失礼が過ぎるだろ」

「あ、でもウチのこと可愛いつて言ってくれたら変わるかも?」

「言うまでもなく可愛くて綺麗な方じゃないですか。家族思いで優しくして……」

「そうですよ！ 美緒は可愛いんですよ！」

そうして妹のエピソードを多く語りだした瀬奈に対して、真剣に相槌を打つ琢磨。「いややわあ」と言いつつも後が面白そうだからと黙っている美緒。

それからほどなくして、日曜朝の朝食は始まった。

古き良き日本食。ご飯に味噌汁におひたしに納豆だ。

そんな朝食が、高砂姉妹と琢磨の生活の始まりだった。



彼を好きになったのは、もしかしたら一目ぼれだったのかもしれない。

別に姉のように鮮烈に助けしてくれたとかそういう理由があるわけではない。

ただ、その上っ面に思えた優しさ思いのほか厚かったことが信用したいと思ったきっかけで。

「俺は、人殺しです。そんな迷惑をかけるわけにはいきません」という彼の懺悔めいた声に秘められた迷いに絆されて。

そして、そんな彼の日常の普通の素敵さに、私は恋をした。

私、高砂美緒は風見琢磨くんが好きになった。そんな朝だったと、振り返ってみれば思うのだった。

入植者たちの牙

朝食を食べ終えて、琢磨がどこかに行こうとするとところで待ったをかけるのは高砂姉妹。

「一宿一飯の恩を返さずにどっか行ってまうん？」

「そうですわ！ この際ですからあれこれこき使つて差し上げます！ お覚悟はよろしくて？」

「……あれこれとは？」

「……あれこれですわ！」

考えてなかったのだなと思うこの場の全員。

だが、その優しさに触れて琢磨は逃げられなくなった。

恩義は返す、そうしたい。

一晩寝て、朝食を食べた。それだけの日常の一幕は、迷い傷ついていたタクマの心にしみたのだ。

そして、それは「もしも」の時にプリンセス・ドリルこと高砂瀬奈を殺すのに有利であるという合理的考えも浮かんでいる。

故に、琢磨はこの二人の優しさに甘えるのだった。

「じゃあ、少しの間よろしくお願いします」

「言質は取りましたわ！ さあ、まずは部屋の掃除からです！」

「……ええの？」

「はい」

そうして、わーわーと騒ぐ瀬奈に引きずられ家のことをパパッと済ませる琢磨。

その手際の良さは、家事能力ゼロであった義父風人との暮らしの結果である。

そしてあらかたの家事が終わったので、昼食をとることにする3人。その空気は、和やかであった。

「女子力ウチより高いんとちやう？」

「いや、長いことやつてりやこれくらいは普通ですよ」

「……それは、暗に私のことを罵ってはいませんか？」

「まあ、少し」

「お姉未だにロボット掃除機に曲芸させるやん」

『基本モードで起動させるだけできちんと掃除をしてくれる機種だったのですが……』

「私は、ちゃんと私の指示で動かしたいのですわ！ それが掃除機であつたとしても！」

「何言ってるのかわからんわあ」

そんな会話の中で、ふと気になったことがあった。

高砂姉妹の両親の話だ。

掃除をした限りでは仏壇の類は存在しなかった。という事は両親ともに健在背あるはずなのだが……

そう琢磨が思った所で玄関の鍵が開く音がする。

「「あ」

そんな言葉を姉妹で発したので、これは忘れていただけだなと琢磨は思い、さして散らかしていない荷物をまとめて帰り支度を済ませるのであった。

「帰ったぞー娘たちー！」

「お、お帰りなさいお父様。早かったですわね」

「ああ、向こうでの用事が早く終わってな、サプライズってやつだ。母さんは少し買い出しをしてから帰ってくるからもう少し待っててくれな」

「……そうやったんやー」

そして、琢磨は昼食を終え、流しにそれを片付けた後に、トイレに隠れる。

そして高砂一家がリビングに入ったのを音で確認してから、この家を離れるのであった。

『急用ができたので失礼します。昼食ごちそうさまでした』そうメデイの声でメッセー

ジを残して。



近所にあつたネットカフェにて再び《Echo World》にログインする琢磨。そして、自身のログインと共に開かれたゲートの中へと歩いていく。

そこには、ダイナと管理AIのマテリアが待っていた。

「首尾はどうだった？」

「……しつかり肉眼で捉えました、高砂瀬奈の姿を」

『こちらが、そのデータになります』

「……マテリア、これでいいの？」

「はい、十分にデータは取れています。……やはり、彼女には聖剣の使い手としての祝福がありますね。しかし、今まで見たどのパターンの祝福とも違います。……これが、いのち生命の聖剣?」

「なら、盗むか?」

「……それが手っ取り早いでしょうね。とはいえこの武器はもう魂に紐づいてしまっているのです、私の権限で盗むことは不可能です」

「そこは、タクマがうまくやるさ」

「他力本願やめてくださいよダイナ師匠。師匠が行けばいいじゃないですか」

「だから動けねえって言ってるんだろ。行けるなら俺が一人で行くっての」
「……わかりましたよ、やりますよ師匠」

「それではタクマ、これを」

そうして渡されたのは水晶のようなもの。透き通った中身に魂が込められているのがわかる。

「これは、私のゲートの力を結晶化したものです。ここに魂を込めればこの空間への扉が開くでしょう」

「なら、ドリルさんをここに連れてくればいいんじゃないですか？」

「あなたがそれでいいのなら構いません。ですが……もしも彼女が生命の聖剣の持ち主だったなら、あなたが殺すしかありません。手口はあまり見せないほうがいいかと」

その言葉に、本能が「当たり前だよなあ」と告げているのを感じる。

そうしてその作戦を受領したタクマは、ワールドへと転移するのだった。



そうしてタクマが向かったのは、プリンセス・ドリルの良く行く孤児院だ。この辺りにいけば見つかるだろうという安直な考えだったが、その考えは的を射ていた。

確かにドリルはいた。彼女に率いられた子供たちもいる。

しかし、それを囲むように大勢のプレイヤーと入植者が居るのは、想定外だった。

「良いから言えよ！ あの殺人鬼はどこにいる！」

「俺はわかっているんだ！ 俺はあいつに殺された！ けど、あいつを殺せば帰れるんだ！ 俺の、家に！」

「何を言っているのかちゃんちやらわかりませんわ！ ゲームの中でどうこうしようとしても現実に影響はありませんわよ！」

「何言つてやがる！」

「現実であいつを殺すに決まってるだろ！」

その言葉に、言葉を発した彼の目に、確かな狂気を感じた。

あれはもう敵だろう。そう断言していいのだと、琢磨は思った。

「すいません、話題に上がった殺人鬼ですけど、何か御用ですか？」

「ッ!? テメエ！」

その言葉と共に切りかかってくるプレイヤーの男、その拙い剣を受け流し、腕を切り飛ばす。

この程度は、タクマにとって見戯だった。

「いろいろ面倒なので、ここで殺しましょうか？」

「……上等だ、異界殺人鬼！」

「俺たちが、お前を殺してやる！」

「お前が、すべての元凶だ！」

「お前の、命は許されていない！」

「うっせえ死ね」

そうして、タクマに襲い掛かってくる多くのプレイヤーと入植者たち、いずれも生命転換の力で琢磨を攻撃しようとしてくる。

しかし、タクマにとつてそれは遅すぎた。動きではなく、殺す、攻撃すると決めてから行動に起こすまでの速度が遅かったのだ。故に攻撃全て見切られた。

それからは、作業のような戦いだ。プレイヤーの首はことごとく叩き切り、入植者は腹打ちにて気絶させていく。

そして、きっかり10分で片付いた男たちを放置して、大丈夫かとドリルと少年少女たちに声をかけようとした時に、背後から異音が聞こえる。

気絶していた入植者たちがその体を奇怪に動かしながらこう言った。

「「死ね、風見琢磨」」

そうして動き出すのは15の狂人たち。ほとんどは白目を剥いているのにしつかり琢磨を捉えている。

またしてもマリオネティカのような洗脳系かとタクマは思ったが、その割には本人の意識がしつかりしていた。

そして、その剣はみな鍛えた武芸の証であると琢磨は見切っていた。

そうして、襲い来る15の剣士たち、コンビネーションはさして恐ろしくはないが、数が多い。

これは、入植者の腕くらいは奪うべきかとスイッチを切り替えようとしたところで入植者の一人が、あの日病院で殺した一人であることに気が付いてしまった。

その意識の隙は、タクマにとって致命的だった。

襲い掛かってくる入植者、その剣は力強いが単調で、あっさり回避することができず、ついで、タクマは入植者の一人を殺してしまった。首を撫でるように頸動脈を切り裂いて。

「この、殺人鬼め」

そんな捨て台詞を残して、一人目の死人が出た。

そこからは狂乱だ。恐怖に狂って技もない剣は味方に当たり死人を作り、生命転換の暴走でまた死人ができ、最終的にその場に立っていたのはすべての攻撃を回避したタクマ一人だけだった。

「……タクマくん」

「すいません、騎士団を呼んできます」

その気遣うような、咎めるような視線に耐え兼ねられずにタクマはこの場を去っていく。

殺したことはない。だがその目は、かつて琢磨を、琢磨の日常のすべてをひっくり返したあの異物を見る目に思えて、心が痛かった。

アルフレシヤ

タクマは、騎士団の詰め所へ向かって歩いていく。

その姿を見る目は、嫌悪感どころか害意すら感じられる。

「殺し自体には、なんも感じないのにな」

『それは、マスターが人であろうとする証です。社会からの排斥を恐れるのは当然の事ですよ』

そうしてタクマがある言いて行くと、どこからともなく美しい歌声が聞こえてきた。

とても美しい歌声だな、と。琢磨は思った

その歌声を聞いていると、涙があふれて止まらない。捨てざるを得なかった日常が懐かしくてたまらない。

そうして、タクマは地面に膝をついた。

『マスター！ 気を確かに！ 周りを見てください！』

地面に膝をついた状態で、タクマは歩いてくる周りの人間の足音を聞く。

その音に害意があることは疑いはなかったが、それに抵抗する気にはなれなかった。

人間のフリをして生きること、タクマはもう疲れてしまっている。もう命を投げ出

したいとすら思っている。

だから、ここで殺されてもいいんじゃないかと思ひ、その暴虐を受け入れようとしたその時

「まったく、耳障りな音が邪魔だというのに！」

そんな言葉を吐いた大きな背中の槍使いが、タクマを背に庇って槍を振るつた。

すると、タクマに近づいてきた足音の者たちは一歩下がり、その男に「なぜ邪魔をする！」と問いかけた。

「相棒が、コイツを気にしている。それだけだ」

そうして、プリンセス・ドリルの相棒の槍使い、長親はタクマを守るために孤軍奮闘するのだった。

『マスター！ 顔を上げてください！ 剣を握って、立ち上がって！』

そのメデイの言葉は、タクマの心には響かない。その心はもう堕ちてしまっているのだから。

だから、ここからは殺人鬼の時間だった。

タクマが理性で抑えていたその衝動は、無意識に動き出す。

誰を殺すべきなのかなどは考えずに、ただ最もやかましい奴を殺しに行く。それがタ

クマだった。

『マスター！ 変事をしてくださいマスター！』

そうしてタクマが周囲にいた入植者や町人を踏み台にして駆けるのは、音の源。

この美しい歌を歌っている何者かを殺すためだった。

「こんな歌なんてあるからッ！」

そうしてタクマが激情と共に顔を上げると、そこには空を泳ぐ美しい魚がいた。

藍色の鱗に、ウツボや蛇を思わせる長い体。そして、額に輝く闇色の宝玉。

その姿は、狂氣的という表現が似合うほど美しかった。

そして、大魔の名前が頭の中に刷り込まれる現象、“名乗り”が起こる。

“天魚アルフレシヤ”と。

「死ね」

それに介さずに天を風を踏み駆け抜けるタクマだが、近づくにつれてその心はおかしくなっていた。

空を駆けるたびに、殺意の矛先が変わっていく。

天魚に近づくと、剣に“意志”が伝わっていく。

そうして、歌声に飲まれたタクマは、自分自身で自身の首を切り裂いた。

アルフレシヤの目は、タクマを見てすらいなかった。アルフレシヤはただ空で歌って

いるだけだ。

アルフレシヤは、それだけでこのソルディアルを滅ぼしうる災厄だった。



「明太子！」

そう叫ぶ長親の近くにはもう生きている者は残っていない。

湧き上がる殺意に任せて、命を奪ってしまったからだ。

その、肉を抉り骨を砕いた生々しさや嫌悪感から、長親は槍を持つことができなくなっている。

ゲームの中なのにこの衝動は、異常だった。

「長親さん！ タクマくんは!？」

「わからん！ 突然駆けだして追いつけなかった!！」

「であれば、行先は決まっていますね、この耳障りな雑音の源でしょう!！」

「……耳障りな雑音?」

「長親さんには聞こえませんか? この死ぬ間際の鳴き声のようなものが」

「いや、俺には妙に綺麗な歌声に聞こえるが」

「……そうですわね、そういう感性もありなのでしょう! 理解はできませんが、応援は

しますわ!」

「待て待て！ 謂れない中傷には武力で対応するぞ！」

「では、声を潰してから、いくらでも！」

「言質は取ったぞ！」

そうして、二人は駆けていく。

そこにあるのは、地獄絵図だった。皆がこの歌声に陶醉して、自身のナニカと向き合わされ、そうして狂気的な行動に出ていった。

あるものはひたすらに家の壁に頭を叩き続け、あるものは自身の指を自身で砕き続け、あるものはナイフで喉を裂き、あるものは剣で他者を殺していく。

「真昼からホラーとはずいぶんと趣味が悪いのですね！ 串焼きにしてやりますわ！」

「待て、ドリル」

「なんですの？ 長親さん」

「おまえは、この美しい歌声の源を絶つのか？」

「だって私の趣味じゃありませんもの。宮廷音楽か和ロックならば考えたかもしれませんけれどね！」

「なら、お前を、止め、止めッ！」

「長親さん？」

突如苦しんで行動を止める長親の様子を振り向いて確認するドリル。

しかし、そこには舌を噛みちぎって死んでいる長親しかいなかった。

「長親さん!？」

そんな困惑の中にあるドリルは、しかし長親が指し示した天魚を見て目の色を変える。

お前が原因だ、と。

「……私がすっかりぶちのめして差し上げます。ので、しばらくお休みになってくださいいな長親さん」

その言葉を聞いた長親は、満足げな顔をして光に消えた。

現在、ドリルの前にはプレイヤー、入植者、騎士団と様々な人間が歌に聞き入っているのがわかる。

皆、恍惚とした表情でただ歌を受け入れていた。

だが、ドリルにはそんなものはただの雑音にしか聞こえない。

心の螺旋を回転させ、ランスに魂のドリルを纏わせる。心のままに作られたそれから、風を切り回転する音すら聞こえてくるようだった。

「まずは一撃、食らいなさい! ストライク・ドリル!」

そして、ドリルの踏みこみと共に彼女のランスの魂、無色の閃光剣レイフレードが巨大化し、アル

フレシヤを捉えんとする。

その時、初めてアルフレシヤはドリルを見た。

そして文字通り螺旋に沿うように空を泳ぎ螺旋の刺突を回避して、そのままドリルから離れる。

そして、アルフレシヤは歌の曲調を変えた。

ドリルにはそれは“鳴き声が変わった”程度の認識でしかなかったが、周囲の人間にとっては違う。

その歌に込められた思いを受け取っているからだ。

そうして、アルフレシヤ直下の者たちは生命転換を起動させドリルに襲い掛かる。

それを生命転換ライフフォースの出力による力技で薙ぎ払い、アルフレシヤを狙える高度まで行こうと民家の壁を駆けあがるドリルだったが

その狙いすまされた一撃がドリルの頭を直撃し、その痛みからドリルは意識を失った。

そうして、その石を投げた男は、傍らに仕える者に命令を伝えた。「回収しろ、聖剣使いだ」と。

命令に従い、黒服の女性がドリルを担いでこの場を離れる。

その様子を見たアルフレシヤは、満足したかのように曲調を元に戻し、また歌を歌い

続けるのであった。

心を犯す、狂気の歌を。



「なんで俺を殺しやがった!」

「はあ!? お前があんなこと言うからだろうが!」

「嫌だ、いやだよお母さん! 行かないでよ!」

「ああ、気持ちよかったなあ……」

そんな様々な声が聞こえるロビーにて、タクマは時間を待っていた。

最初に気付き最初に死んだタクマのデスペナルティは20分。多くの者が死んでいるのだが、その進みは遅い。

残り3分、再度ワールドに侵入することは可能だと考えている。

「おい、面貸せ」

「……メガネさん?」

「ドリルの奴が見当たらねえ。あの洗脳歌でどうにかされてるかもしれないねえ。だから、行くなら間違つて殺さないように気を付けろ」

「……ありがとうございます」

「うぜえ、感謝なんざすんな。おれはお前みたいなりアルで人を殺すような奴は死ぬとしか思ってたねえからな。お優しいドリルとはちがってよ」

その言葉に嘘はなく、その嫌悪の顔に偽りはない。

だからこそ、“プリンセス・ドリル”を心配しているという点に関して、心から信じられた。

「じゃあ、行つてきます」

「おう、死んで来い」

そうして、タクマは再び王都へと転移する。

そこは、多くの死体が集まる死の都になっていた。

『マスター、あの奇妙な歌声には注意してください。精神を犯す効果があるようです』
「……わかつてる。けど、最後の一人は譲れない」

そうして、タクマは足を進める。

一歩ごとに自殺を選びたくなる、精神汚染都市に。

天仙魚

歌が、聞こえる。

今、アルフレシヤは高度を上げつつ王城に向かっている。その姿はやはり狂おしいほどに美しい。

歌が、聞こえる。

タクマは、聞くだけで自分の心が丸裸にされているのを感じる。今まで自身を守っていた人格の鎧がはぎ取られていくようだ。

歌が、聞こえる。

「返せよ、先生を返せよ!」「どうしてお姉ちゃんを殺したの!」「お前が! 死ねば良かったんだ!」

そんな声が、頭の中で反芻される。

そして、いつもの悪夢のように自分をかばって代わりに傷を受ける風人や氷華の姿を幻視して

「俺が死ねば、良かったのかな?」

そんな弱音を口に出した。

『寝言は寝ていつてください。剣を握って、前を見て、戦ってください。それしかできないから、今あなたはまだ死んでいないのでしよう?』

そして、メイの言葉と共にタクマは前を向く。

『もつとも、私はマスターを死なせるつもりはないのですけれど』

「そいつは、助かるな」

『では参りましょう。この歌が歌であるのなら、対策は簡単ですから』

「それは……確かにそうだな。行こう」

『道案内はらせてください』

そうして、タクマは自身の生命ライフフォース転換で真空を作り出す。音はしよせん音だ。空気の振

動をシャットアウトしてしまえば、その影響は無視できる。

そして、両足に命をチャージして、メイの指示のもと照準を合わせる。

『マスター、もう少し左に、ここです。では、以降の微調整は私の指示に』

メイには、真空でシャットアウトされていても敵の位置がわかる。タクマと違い魂感知能力をきちんと処理できているからだ。

そして、琢磨を守る真空は形を変え、構えた臆病者チキンソードの剣を通すための円錐へと変わっていく。

「3, 2, 1!」

『発射!』

そうして、タクマは一筋の流星へと変わった。

タクマ達には聞こえないが、アルフレシヤの歌声はテンポを変えた。プリンセス・ドリルに対処した時に使った“歌に心酔させる曲調だ”。

そしてアルフレシヤ自身も回避を始めたが、それはしつかりとメデイに見切られていた。

『左に3度上に1度です』

メデイとの阿吽の呼吸により回避しようとしたアルフレシヤの回避先に当たるように置かれた刺突は、アルフレシヤの胴体を貫いてそのまま天に持ち上げた

そして、タクマが真空を解除してコアを砕きに入ろうとした時、ガシリと何かがタクマの剣を掴んだ。

それは、女性の腕だった。

体軀は小さく、華奢な女性だと見た目だけでは思う。

しかし、その華奢な腕は、ぽきりと簡単に臆病者の剣を折り砕いた。

「冗談?」

『じゃありません! マスター、回避を!』

そして、天魚の内側から現れたのは空を泳ぐ人魚。それは琢磨の目の前でアルフレ

シヤのコアを胸に取り込み、名乗りを上げた。

《天仙魚アルフレシヤ》と。

そしてアルフレシヤは軽く息を吸った。その予備動作で歌が来ると考えたタクマは即座に真空を展開しようとするが、それは無意味だった。

「La」

そんな綺麗な一音と、それに付随する圧倒的な衝撃力にてタクマは彼方へと吹き飛ばされた。

それは、口にするだけなら簡単なこと。

歌と共に吐いた息で、タクマを弾き飛ばしたのだ。

たったそれだけで、タクマは町はずれの廃墟へと叩きつけられた。

「ガハッ!?!」

『マスター! 気を確かに!』

メイの声を頼りにどうにか意識を繋ぎとめるタクマであったが、そのダメージは深刻だった。

両腕はあらゆる方向にひん曲がり、右足は切り飛ばされたか潰されたかで膝から下が存在しない。

そして、打ち付けたであろう背中からはなにか瓦礫のようなものが刺さっている痛みを感じる。

死んでないだけ、それが今のタクマの状態だった。

「これは、珍客だな」

そう答えたのは仮面をつけた男、動けないタクマではそれ以上はわからない。

『現在、部屋の中には3つの魂があります目の前の男ともう一人、……そして、ドリル様です』

その言葉に、どうすればいいのかタクマは悩む。

目の前の人間が異界を作っている連中の仲間だったなら、もし、ドリルの聖剣が生命の聖剣だったなら。そんなかもしれないが多く頭をよぎった。

そして琢磨が選んだ選択は、黙することだった。

一発。タクマには攻撃手段が一つだけ残っている。だが、それは一発しか放てない。ならば最善のタイミングで放つべきだと考えたが故の事だ。

「……生きているのか死んでいるのか、稀人はわからんな」

そういつてタクマのことを無視する男、そして、声が聞こえてくる。

「マグノリア様、彼女が稀人の聖剣使いです……ええ、異界に消えたあの聖剣の使い手の可能性は十分にあるかと。……私の邪剣を彼女の聖剣は浄化しました。そんなことが

できる聖剣となると……」

そんな、独り言が聞こえてくる。通信機かテレパシー系の能力かはわからないが、とにかくここにいないマグノリアという人物に聖剣を渡すつもりのようなのだ。タクマはそう考える。

だから、遠慮なく切り札を切ろうとした。

タクマの持っている切り札。それは生命ライフフォース転換の暴走による暴風の召喚だ。それがあれば意識のある2人はともかくドリルは死ぬだろう。

そして、彼女が死ねばロビーへと帰還できる。聖剣を盗られる前に。

そうして命を込めようとした時に、タクマ意識は落ちた。

寸前に聞こえたのは風切り音。抜き打ちの矢がタクマを貫いたのだろう。

そうしてタクマはロビーへと帰還する。何も守れず、自身しか殺せずに。



「あー、良く寝ましたわ！」

そんな声がロビーに響く。その声の主はプリンセス・ドリル。先ほどまでナニカされていた女性である。

「ドリル、無事だったか！」

「ええ、別段何もありませんでしたわ。頭に何か当たってからずっと寝ていただけですもの」

「……それは気絶だ」

「大した違いはないですわよ」

そんな、ドリルと長親の声を遠くから聞いたタクマは安堵のため息をもらす。どうやらあのままゲーム世界から帰ってこれなくなる、なんてことはなかったようだ。

そして、いつも通りリザルトが行われる。

「今回の敵アルフレシヤは搦手が得意な敵です。敵の策に惑わされず、謎を解き、世界に明日をもたらしてください。以上でリザルトを終了します」

そんなマテリアの言葉でリザルトが終わったところで、タクマの目の前にゲートが開く。

そこに躊躇いなく入っていくと、苦々しい顔のダイナとマテリアが居た。

「タクマ、今すぐ戦力のありつたけをかき集めろ」

「はい、最後の一人がドリルさんだからですよ」

「そうだが、違う。連中はあの聖剣使いに“マーカー”をしかけやがった」

「……マーカー？」

「現実世界に進行するための目印です。通常は最後の一人になる人物につけていたのですが、聖剣使いであることから彼女がターゲットにされてしまったのです」

「……それを消すには？」

「対になっている大魔を殺すこと、つまりこれから現実に現れるアルフレシヤを殺すことしかありません」

その言葉に、タクマは意識を研ぎ澄ませる。

守ることはわからない。探すことは苦手だった。だが、殺すことなら問題はない。自身の異常性をそのままに、アルフレシヤを殺すことが自分に温かくしてくれた彼女を守ることに繋がるのだと信じて、タクマは折れた臆病者の剣を構えた。

「……格好付かねえな」

「すいません、代わりの剣はありますか？」

「……すいません、物質化にはその持ち主の魂の力を使わないとあまり意味がないんです。魂と紐づいて初めて武器は武器になるのですから」

『やはり、あの物質化のシステムにも裏があつたのですね』

「はい。まあ実際はリソースの問題のほうが多いのですけれど」

そんな言葉と共に、タクマは折れた臆病者の剣とポイントで物質化した上質な鋼の剣をもって、現実世界に戻るのだった。

彼の首輪の持ち主である、篠崎に次のターゲットは高砂瀬奈であることを伝え、彼女を守るために。

高砂瀬奈の聖剣

篠崎に情報を伝え、バイクに乗って高砂姉妹の自宅へと向かう琢磨。

周囲には避難警報が出ている。その中から地元警察が高砂瀬奈を護送車に移動させて異界の起点を変えろというのが基本的作戦だ。

琢磨の役割は遊撃。護送車に追走して敵を迎え撃つのが琢磨の役目である。

「風見琢磨、お前の行動は私の指示だ。無様は晒すなよ。」
「……了解です」

そう通話を終えて、拡張機能のタイマーを見る。カウントゼロまでの時間はまだ有りそうだった。

周囲の避難は十分、戦意は上々。

護送車により瀬奈は移送され、確保できている。

『マスター、残りカウントは約10分です』

「ああ、今回は待ち構えられた。さっさと殺そう」

そうして、護送車が作戦エリアの採石場にたどり着いたところで自衛隊のヘリなどが続々と採石場へと到着していく。

「物々しいが、頼もしいのな」

『この視線に晒されてもそう思えるマスターは本当にどうかしていると思います』

「自業自得だし」

『さすがに過剰だと私は思いますがね』

周囲から琢磨への視線は、殺人者を見るものと気遣わしげに見るものが8：2ほど。

2割は、実働部隊の者たちだ。共に戦った者たちであり、琢磨の戦いを見ていた者たちだ。

琢磨が、無駄な殺人をしないということを理解している者たちだった。

そんな彼らに会釈をしつつ護送車の側にバイクを付ける。

すると護送車でなにやら揉め事が起こっているのが見えた。

そして、気づいた。どういうわけかそこには高砂姉妹がいるという事を。

「何やってんだ美緒さん？」

『マスター、残り時間のカウントダウンが加速しています。この加速度のままだと残り
は2分ほどです』

「やから！ ちゃんと説明してくれんとお姉を預けられないんやてー！」

「そう言われましても……」

「すみません、そろそろ時間です。死にたくないなら適当に逃げてください」

「……琢磨くんも、ちゃんと説明してほしいわあ」

「……待つてくださいい美緒、琢磨くんがいるという事は、まさか！ 異界ですよ!?!」

そうして驚く瀬奈たちを置いたままで突然に世界が変わる。

それは採石場を覆い、街を覆い、果てがどこにあるのかすら見えない異界だった。

そして、瀬奈から飛び出した黒いモノが空に飛び、鮮やかな魚が空を泳ぐ。

その額に黒い結晶はあるが、ゲームで見た時よりもその色はどこか薄いよう思えた。

そうしてアルフレシヤの“名乗り”と共に、統率された自衛隊や対策部隊の号令がかかる。

そして数多の弾丸がアルフレシヤへと放たれる。

その弾丸にはそれぞれの機体に搭乗している生命ライフ転換フォースを使える対策部隊の者の命が込められているのがわかる。

だが、アルフレシヤはその弾丸を躲すことすらしない。すべてを鱗で弾いている。

現在敵の高度はビルの3階程度、上昇のそぶりは見せずにどこを見ているのかもわからない状態で、歌を歌った。

とても綺麗な、天女の声と間違えてしまいうだろうその歌声は聞く人の魂を揺さぶって

ならない。

ずっと聞いていたと思う気持ちと、殺したいという気持ちが琢磨の中で混ざっていく。

そして今回は、目の前の魚を切り殺したいという琢磨の衝動が上回った。

「……行くぞ」

『マスター、精神が興奮状態にあることを忘れないでください。クールに行きましょう』
そうして琢磨は鉄パイプを上質な鋼の剣に変換して行動を起こす。風を踏んで高度を稼ぎ、コアを砕くために一撃を入れようとする。

しかし、それは通らなかつた。

この歌声を止めることを許さなかつた者たちによる妨害があつたからだ。

ある者は、跳びついて足を引っ張ろうとし、あるものは銃口の先を琢磨へと向けたのだ。

『ッ!? マスター!』

「わかつてる! 殺しはしない!」

琢磨は、湧き上がる“殺したい”という感情を意識して抑え、風を踏みその妨害のすべてを回避していく。

だが、その攻撃に込められた心を琢磨は感じとつてしまう。

この攻撃の中には、極わずかだが”琢磨を殺したい”という思いが存在していた。

「直接こうしてくれる分には、結構好きなんだけどな！」

そして、琢磨の中に殺し合いの喜びが生まれる。誰とでもいいから殺し合いたいそんな思いが琢磨の中に生まれる。

だがしかし、琢磨のソレが表に出る前に現れた者がいた。

「殺人鬼も化け物もみんな俺が殺してやる！」

そんな声と共にヘリから降りてライフルを琢磨に向ける自衛隊員。

それを止めようと拳を振るう特殊部隊の一人。

それが、その自衛隊員の命を奪った。

「仲間を殺してどうする！ 貴様！」

「そんな、自分はただ殴っただけで……」

それから下は阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

琢磨には、自身の魂を客観視してくれる相棒^{メデイ}が居た。しかし、彼らにはそれが居ない。自身の様々な感情のタガが外れ、増幅させられていることを頭で理解はしていても心が

納得していないのだ。

そうして、その地獄が生まれ、何人もの命が散っていかうとしたその時に、彼女の声は轟いた。

金色の髪にバトルドレス、そしてドリルのペイントのされたランスを持った彼女の声だ。

「皆さま！ いい加減にしてくださいまし！ 敵は上で雑音を響かせているあの魚であり、隣にいる方々ではありません！」

その声と、その掲げた槍から放たれた命の波動により、この空間のナニカが変わった。それが、反撃の狼煙だった。

高砂美緒がその護送車に乗りこんだのは、ほとんど我が儘に近いものだった。

瀬奈が「美緒が乗らなければ私も行きません！」と言い張らなくては乗ることはできなかつただろう。けれど、乗れてしまった。

それが、高砂姉妹の不運であつた。

「なんなん!? ねえなんなん!?!」

「落ち着いてください美緒！ ここが異界なら、死の危険があるという事です！」

「わからんのお姉！ お姉こんな状況で落ち着けるわけないやん！」

美緒はこの天の歌により“不安”の感情が増幅されている。

今、それをただの雑音として聞き取ることができるのは、瀬奈だけだ。

そして、ゲームで歌に聞き惚れた民衆に自身の妨害をされたことがある瀬奈は気付いた。今の美緒も同じような状態になっているのだと。

だからこそ、瀬奈は妹を抱きしめた。大丈夫だと心で伝えるために。

その、家族を想う気持ち彼女が彼女の心のゲートの鍵を開けた。

そして歌うように彼女はその真言を言の葉にした。

「ゲート・オープン
聖剣抜刀」

その言葉は、彼女の手でゲームに使っていたランスを無意識に物質化させる。

「……………これは？」

「……………お姉、なんかさつきまで聞こえてた歌が変な音に変わったんやけど」

「そもそも歌とはなんですか？ 私には変化など感じられないですが」

「もしかして、最初からお姉にはこれがこう聞こえてたん？ 配信でもきれいな声やっただけ」

「……………つまり、私のゲートならばどうにかできるのですね！ この雑音を！」

「まあ、考えるのは後で一緒にやろなお姉」

「ところで、不安だったのは大丈夫ですか？」

「お姉がそうだったなら、不安はないかなー」

美緒の心は増幅させられていた恐怖よりも、姉への信頼が勝っているいつもの状態に戻っていた。

そのことが瀬奈の心に勇気を与える。自分のゲートならば、可能なのだと。

「行きますわよ相棒！ 私の螺旋で、皆に思いを伝えましょう！」

その言葉に、ドリルの絵が描いてあるだけのランスは一瞬だけ回転して応えた。

それが、彼女の聖剣が導いた、プリンセス・ドリルのゲートだった。

突如として放たれた命の波動、それが自分たちの魂に作用したのがわかる。

天の歌が、醜悪な雑音にしか聞こえなくなったのだ。

「……なんだこれ？」

『私にもわかりません。けれど、これも聖剣の力なのかもしれませんね』

「歌が雑音になったくらいじゃないか？ 変化って」

『下の方々の統率が戻っています。おそらくそういった効果なのかと』

そんな雑談をしながら、琢磨は風を踏み、空を駆け、アルフレシャの上を取る。

それと同時に、下からの一斉射撃と、ドリルの閃光剣レイフレクトの構えが取られる。

そして、今のドリルの槍はなぜか回転していた。そんな機能があつたのかとも琢磨は

思うが、それは後で良いと上空からアルフレシヤを叩き落すべく剣を振る。

風を纏った鋼の剣はアルフレシヤの体に傷をつけるが、その肉の硬さによって鋼の剣は押しとどめられる。

「けど、これでお前は動けない。ありったけだ」

そして琢磨の現在の生命転換ライフフォースのほぼすべてを使った加速によりアルフレシヤは地面に向かって押され、そこにドリルが突き立てられる。

プリンセス・ドリルの魂が作り出した、暴風を作る螺旋と、ドリルの駆動音を鳴り響かせる彼女の槍だ。

「スパイラル・レイ・ドリル！」

その高らかに叫ぶ技の名と共に、アルフレシヤは鱗と肉のほぼすべてをドリルに巻き取られ、露になった急所に魂の籠った弾丸たちが命中してアルフレシヤは息絶えた。

そして、その体の中から人魚が現れるようなことはなく、空は割れ、異界は消滅した。「何が何だかわかりませんが、私たちの勝利ですわ！」

そう言った彼女の手には、ドリルのようにペイントされたランスが存在した。

異界のなくなった、現実世界において。その聖剣は物質化したままだった。

現実世界の聖剣

採石場での乱戦から一晩明けてのこと。

タクマは、プリンセス・ドリルこと高砂瀬奈のデータをダイナに受け渡していた。

場所は、ゲーム内の酒場“荒野の西風亭”。

そこで女将に若干睨まれつつも、観測データをタクマは渡したのだった。

この世界の住人は、ループ前のことを記憶していないが、感情は記憶しているのだとかいう仮説を琢磨は掲示板で聞いたことがあった。おそらく以前迷惑をかけたことを心のどこかで根に持っているのだろう。そうタクマは考えたが、メイは違う答えを導き出した。

『単にダイナ様が女将に迷惑をかけ続けているからではありませんか？』

高性能AIが導いたのは、そんな身も蓋もない答えだった。

「それで、なんで今日はここで情報の受け渡しを？」

「いや、嬢ちゃんが忙しくて門を開けないんだよ今」

『ならば手伝ってくればよろしいのでは？』

「……そう言ったんだが、かえって邪魔だとあしらわれた。結構冷たいのよあの嬢ちゃ

ん」

『日頃の行いのせいでは?』

「普段からシャキツとしてればマテリアさんも真面目に対応してくれると思いますけど」

そんな会話をしつつもデータの転送が終了する。

「えっと、ここを触るんだったか?」

「機械音痴かよダイナ師匠」

などと言いながらタクマはダイナのコンソールを見て指示出しをしようにかデータの閲覧をさせることに成功尾する。

かかった時間は15分。動画を再生するだけでこれなのだから、マテリアはダイナの手伝いを拒否するだろうと思うメデイであった。

そうして、現実での戦いの後に起きた出来事が、タクマの視界で再生された。

戦いが終わって最初に起きたのは、戸惑いだ。

現在、自衛隊や対策部隊の人間で冷静さを完全に保っている人間はいない。異界が解かれ、ドリルの魂の温かさを感じられなくなったことで抑え込まれていたモノがなくなっている。

そして軍用ディスプレイには写されていたが、死傷者、あるいは消滅者は5名出ていた。

万全な装備、万全な人員、万全な配置。そのすべてが重なっても琢磨と瀬奈の卓越した個人技がなければ全滅していたであろう事実が、彼らに現実を見せないでいた。自分たちは、少年を殺しかけ、無様に死にかけたのだと。

だがそれも、地獄を知らない安全圏から指示を飛ばすだけの上官によつて引き戻される。

そうして手元のランスの観察をしていた瀬奈と、篠崎の指示を仰いでいた琢磨、そして茫然としていた美緒がその場に残り続け、そして気が付いた。

自分たちが、置き去りにされていることに。

「……行つてしまわれましたわね」

「ウチら帰れるん？ これ」

「……とりあえず大丈夫です。瀬奈さんの預りを上司に頼んだところですから」

『5分後に車が到着するそうです。ご安心ください』

「というか、“コレ”なんですか？ 私の愛ドリルという事はよくわかるのですが……」

「お姉、愛ドリルって」

『相棒ではいけないのですか？』

「相棒とは元来共に棒を持つ相手のことを言います。心から信じられると断言できるドリルですが、それで相棒と言ってしまふのは私のドリルのドリル権に引つかかるのではないかと！」

『ド、ドリルの権利ツ?!』

「あ、これお姉が最近知った相棒の由来をひけらかしているだけや」

そんな一幕の後に無人パトカーが2人を拾い、琢磨はそれについていく。

そうして、瀬奈の手元に残ったドリル以外に問題は起こらずに3人は帰路についたのだった。

それから1時間ほどで高砂家に着いた三人。

その最中突然に瀬奈のドリルは消えた。突然に、唐突に。

だが、それで終わりではなかった。

瀬奈は、ふとした拍子に手元に出してしまうようになつたのだ。彼女の聖剣^{ドリル}を。

パトカーの中で8回、家についてから15回、その謎の現象は起こっていた。

何かあったときのために近くで待機していた琢磨は聖剣が現れるたびに呼び出され、しまいには母親に「もう、ウチに泊まっていいから何とかしてくれ」と頼まれてしまったほどだ。

そんな戦いの後の“何か起きそうで盛大に何も起きなかった夜”を超えて、琢磨は眠気を堪えてネットカフェに向かおうとしていた。

そんなときに篠崎一通のメッセージが琢磨に届いた。

これは面倒なことになったと思いつつながら、琢磨は“了解”と変身をする

「あら風見君、朝ご飯もうすぐできるからちよつと待つてね」

「……すいません、頂きます」

そう美緒と瀬奈の母は言う。

その素直な返事に同じく起きていた美緒は驚いた表情を浮かべる。琢磨からの歩み寄りはこちらが初めてだったからだ。

「琢磨くん、実は偽モンになったん？」

『マスターが本物であることはこのメデイが保証します。確かに不自然ではありませんが』

「どつちの味方だコラ」

そんな内なる敵に文句を言いながらも、琢磨はメデイと共にメッセージの確認をする。

そんな最中に、瀬奈の奇声が響いてくる。驚きと興奮の混ざったその声は、ひとときわ大きいものだった。

「あ、風見君瀬奈の事お願いできる？ 昨日みたく」

「はい、そのために残っていますので」

そうして琢磨は瀬奈の部屋に入り

異界に踏み込む感覚と共に、瀬奈に触れる。

『昨日と範囲は変わっていませんね』

「みたいだな」

「……琢磨くん！ おはようございます！ というわけで私はこのドリルを抱きしめて眠りたいのでこの辺りで！」

「二度寝は止めないですけど、危険物は消させていただきます」

「そんな!？」

その声と共に容赦なく生命ライフフォース転換を流し込み、聖剣と瀬奈のつながりを乱す。

昨晩様々に試した結果見つけた、唯一の聖剣を一時的に戻す手段である。

『瀬奈様、そろそろ自分でコントロールしてください』

「これは愛の結晶！ 私のドリル愛を否定することはできませんわ！」

「いや、確かにそうなんですけど」

幸いにして聖剣が現れるきっかけはすぐに掴めた。それは、瀬奈がドリルのことを思うこと。

愛に反応して聖劍^{ドリル}は現れるのだといえれば聞こえはいいが、これは瀬奈のドリルへの心の暴走が原因のはた迷惑な話である。

ちなみにドリル（の絵の描かれているランス）の大きさは3mほど。馬上で使う用途でないためにランスとしては小型だが、それでも一般家庭には大きすぎるものである。これが原因で無人パトカーの天井に穴は開き、高砂家の廊下には多くの傷がついた。

そんな過去を思い出しながら、琢磨は高砂家で朝食を取り、客間から《Echo World》へとログインするのだった。

これがダイナの見た琢磨の視界データ。最初は驚いていたが、ドリルによるごたごたが笑える程度のモノであったがためにダイナは途中から笑いを堪えながら見ていた。

そんなダイナに怒ったのかメデイがタクマに『不意を打ちましょう』と提案した。それに乗ったタクマであったが全て軽くあしらわれている。両者の戯れであったが、それでも未だ高い壁としてダイナはそこにいた。

「それで、この娘が十中八九生命^{いのち}の聖劍じゃないってのはわかったが、なんの話があるってんだ？」

『なんの話も、聖劍が異界モドキを発生させていることに決まっているじゃないですか』
「かなり狭いエリアですし閉じ込められもしなかったですけど、あれは確かに異界でし

た」

『ダイナ様、聖剣とはいったい何なのですか？ どうして現実世界にデータが干渉できるのですか？』

「そういうもんだからだ。ただそこにあるモノが見えるようになったから戸惑ってるだけだろお前は。向こうの世界でいろいろ調べてみる。……暇なときにな」

『つまり、“もうオーダーはないのでとつとつこのゲームをクリアしろ”と』

「そういう事だ。良いか？ お前ら」

「まあいいですけど、俺はあんま攻略に関われないですよ？」

「そこは何とかしろよ」

「無茶言わないでください」

そんな会話をしながらタクマはダイナに促されて右後方のテーブルに意識を向ける。

なにかと思つたその時に、タクマはその顔に驚愕した。

そこには、天仙魚アルフレシャとうり二つの顔をした少女が座ろうとしていたのだから。

「あとは何とかしろよ」と言い残してダイナは酒場を出ていく。

今この酒場にいる客はタクマと少女のみ。

仕掛けるかどうかの選択がタクマの頭に浮かんだその時、その少女は声を出した。

「あ、財布忘れた」と。

そんな気の抜けた出会いが、タクマとアルフレシヤの二度目の出会いだった。

人魚アルフレシヤ

荒野の西風亭、そこに突然現れたヒトガタ。

その顔は、間違いない。天仙女アルフレシヤ。ものだった。

そんな彼女は、ものすごくどうでもいいこだわりから危機に陥っていた。

財布を、忘れたのである。

「いやちよつと待てや」

「何?」

「律儀に金払って飯食いに来たのかよお前は」

「当然。対価を払わない食事は大罪だから」

『この世界の敵対者とは思えない様子ですね』

「それはただの命令。私はやる気ない」

『『やる気の問題?!』』

「当然」

などと言いつつも、彼女はおもむろにポケットに手を入れると、メキメキといった

音と共に鮮やかな鱗を取り出した。

「その人」

「……タクマだ。一体なんだ？」

「私はアルフレシヤ。ちよつと売りたいものがある」

そうして、アルフレシヤはタクマの手に鱗を握らせる。

その鱗の裏側には、血がついているままだった。

「この鱗あげるから、食事を奢ってほしい」

「せめて血は拭けや」

「人魚の血って、栄養にいいんだよ？」

「……え、そうなの？」

『一応、人魚を食べることで不老不死になれるという言い伝えは現実にも伝わっていませんが……』

「さすがにそこまで期待されると困る。けれど元気になるのは確か」

そんな様子に戸惑いを覚えるタクマであったが、その後も力尽くで鱗を押し付けられしづしづとその提案を受け入れた。

それは、現在自分が抜剣していないことと、アルフレシヤの超パワーの射程に自分たちがいることを考え、ここでの戦闘は避けるべきだという判断からのモノである。

「というわけで女将さん、さつきからいい匂いをさせているそのスープとパンをお願い」
「飲み物はどうすんだい？」

「んー……ビールで」

「昼間かつから他人の金で酒飲むのか……」

「だっておいしいし」

『他人の金で飲む酒は美味しいという奴ですね。私たちに経験はまだありませんが』

などと会話を行うタクマ達。

そこには、敵意も殺意も存在しなかった。

それはアルフレシヤの感性和、タクマの戦闘論理と、メデイの持抱いた興味が理由だった。

『それでは、アルフレシヤ。聞きたいことがあります』

「なに？ メデイ……だっけ？」

『……あなたはもうしてそんなにも怠惰でいられるのですか？ 私と同じ命令で縛られている存在だというのに』

その言葉にアルフレシヤは少しだけ考えこんだ後、こう言った。

「だって、今のマスターの事そんなに好きじゃないし」

『好き嫌いの問題で、そう在れるのですか？ しつかりと自我を持ち、自身の存在理由を

否定しながらも拒絶していかないなどという人間のような存在に?」

「うん。私はいつの『残響』で生み出された存在だけど、それに縛られるだけじゃあ一日に彩りがないじゃん。せつかく生きてるんだから、楽しんで死にたくない?」

『……それは』

「メデイ。たぶん考えすぎだ」

「そだね。メデイは多分今が嘔み合いすぎてるからそんな外れたことを考えるんだと思う。メデイは自分を縛っている命令が自分の“やりたいこと”と一致しているから考えたことがなかっただけだと思うよ。——昔は私もそうだったし」

その言葉にメデイは押し黙る。メデイ自身もそこまで深く悩んでいるわけではないのだ。ただ、メデイはこの自由な敵を見て、タクマの心を無視してもタクマの命を守ろうとすること正しいのだろうかと考えてしまっただけなのだから。

「ところで、タクマとメデイはなにか食べないの?」

「あいにく、もう食った後だ」

「残念」

それから、タクマたちは他愛のない話をしながら食事をして、店を出た。

メデイに浮かんだ悩みは解消したわけではないが、それでこのコンビが戦いに支障をきたすようなことはない。だからこそ、戦いのために抜剣しようとしたその時。

「いたぞ、人魚だ！」

そんな声我突然に響いてくる。そこには、民兵と思わしき装備の整いきつていない集団が、血走った目でアルフレシヤを見ていた。

「……今回の周はここまでかな？」

『(ト)まで、とは？』

「戦いになると私は止まらないタイプだから、皆殺しにするか殺されるかになるんだよ」そんなことを寂しげに言ったアルフレシヤは、息を吸い込み戦闘態勢を整え始めていた。だが、その顔に歓喜の表情はない。どうしようもないことに対しての諦めだけがそこにあった。

『なるほど、つまり』

「お前を戦わせなければいいんだな」

その行動に至った理由は、単純だった。

その諦めが、“殺したいほど気にくわない”だけだった。

アルフレシヤを下げて、民兵たちに鋼の剣を向けるタクマ。

「ここから先は通さない。アイツはそのうち殺すけど、アイツが今を過目ぎしている間だけは俺たちはアルフレシヤの側に着く」

『一度止まり、その欲望で血走った頭を冷やしてからお帰りください』

「うるせえ！ そいつの肉を食べば、俺たちは”生き返れる”かもしれないんだよ！」
「大切な誰かが、待つてるんだ！」

「約束があるの！ 絶対の絶対突破つちやいけない大切な約束が！」

「だから、そいつを殺させろ！」

「交渉決裂だな」

『私たちの話術では、致し方ないことかと』

そうして、民兵である3人を観察する。

武器の質は良質だが、異様な力は感じない。

武器は、ショートソード2人に槍が1人。立ち振る舞いから言って達人というわけはない。

だが、気迫は本物以上だ。意志の力、魂の力が戦いに影響を及ぼすこの世界ではそれは強い武器になる。

だから、生命転換ライフフォーメスを抜かせないためにタクマは神速で踏み込み、先頭にいたショートソードの男の顎を揺らした。

それに反応したショートソードの女性は、タクマに向けて炎の刃を放ってくる。大振りの大上段だ。

それをダメージ覚悟で剣で受け流し、肘を入れてから柄で頭を殴り飛ばした。

「貰ったー！」

しかし、その勢いのままでは最後の一人の槍が躲せない。数の暴力とはそういう事だ。一人の処理限界を優に超えてくる。人間相手ならこれほどに有利に働くものはない。

だが、それはその突きが予想されていなければの話である。

タクマは女性の体を足場にして一步上り、風を踏んでもう一步高く飛び上がる。そうして突きの射程から逃れたタクマは、そのまま槍使いの背後に着地して、側頭部に柄での打撃を繰り出す。それは入りが浅かったのか気を失わせることはできなかったが、ダメージは与えられた。

それだけで十分なのである。

「逃げるぞアルフレシヤー！」

『マスター、先ほど視界に入りましたが街の外への道は民兵や市民によって封鎖されています。逃れるなら内側に』

「この近くで匿ってくれそうな所なんて……あるな」

『はい、せっかくですからドリル様達も巻き込んでしましましょう』

そうして、アルフレシヤの手を引いてドリルの入り浸っている孤児院へと向かうのだった。

封鎖された王都

「一応聞くけど、正気？」

『いつも通り正気とはいいいがたいかと』

「酷くないか？ それは」

そんなアルフレシヤはタクマの手を離すことはしない。ただ、流されているだけだ。

「お前目的とかあるのか？」

「……暇つぶし？」

「適当かよ」

「適当だよ」

そんな会話を終えて、タクマは孤児院へと入る。

そこにはある意味いつも通りに子供たちと遊んでいるプリンセス・ドリルがおり、その近くには長親とメガネがいた。どうやら調査会議をここでやっていたようだ。

「お邪魔します」

『失礼ですが、院長先生をお呼びしていただいけませんか？』

「……明太子か」

そう呟いたのは長親だった。しかし、その声にこれまでであった警戒心はなくなっていた。おそらくドリルが何か言ったのだらうな、とタクマは思う。

そしてそのドリルは、タクマの声を聞いてこちらに顔を向けようとしながら声をかけてくる。

「それぐらいは構いませ……何ですとお?」

そして、そのキャラに似つかわしくない声を上げるのであった。

それは当然である。ドリルはアルフレシヤの魂を戦いの中で感じているのだから。見た目がヒトガタに変わっても分かるのだ。

「タクマくん、あなたは何をしていますか! その、女は、敵でしてよ!」

「……そういえば、明太子のログにあったな。アルフレシヤの中身に顔が似ている」

「そう、私はアルフレシヤの中の人」

『中の人と言うのですね』

『どうかその文化異世界にもあるんだな』

そんな会話をしていると、いち早くメガネが院長先生を連れてきてくれた。

その瞳には殺意が残っているが、先日よりは幾分かマシに思えた。単にアルフレシヤに対しての戸惑いの方が大きいのもかもしれないが。

「それで、どうして私をここに?」

「この孤児院、使ってる土地が王族ご用達のトコだったからあるんだよ。城門近くまでの抜け道が」

『それを使わせてもらいたい。というのが私たちの要求ですね』

「城門の外に行くの？」

「そうじゃなきゃ戦鬪の余波で街が悲惨なことになるだろうが」

「……その割には、タクマは殺す気なんて持っていないよね」

その言葉に、イエスともノーとも答えられないタクマとメデイ。

タクマにとって、“殺すこと”に意志や覚悟は関係ないからだ。

やると決めたら、やれてしまう。それこそが風見琢磨の欠陥なのだから。

「まあ、気にするな」

『その通りです。別に私たちはあなたが暴れ始めなければ仕留める理由はないのです』

『よ』

「それじゃあ一緒に行こうかな。見ていると結構楽しいし」

「誰をだよ」

「タクマとメデイ」

その言葉に首を縦に振って同意するドリル。タクマは内心で「そんなに面白いことやっただろうか？」とメデイに尋ねるも、メデイも心当たりはないようだ。

そうして、院長先生の許可が下り、タクマとアルフレシヤ。そして念のためにと付いてきたドリルと長親、メガネは地下通路を渡って城門の近くに出た。

ここ北門では、軽く見たところ民兵の存在は認識できなかった。

だが、やはり様子がおかしい。どの衛兵もどこか殺気立っているのだ。

『何かあったとみて動くのが得策かと』

「なら、俺が話を聞いてくる」

そういつてメガネは特に視力に関係のない伊達メガネをくいツと上げて、物陰から外に出る。

「メガネさんのあのこだわりって何なんですか？」

「そんなもの、愛に決まっていますわ」

「……つまり考えるだけ無駄だという事だ」

そんなタクマ達を残して、メガネは独りのプレイヤーとして衛兵に話しかけていた。

「すみません、少しよろしいですか？」

「……見ない顔だな。あんた稀人か？」

「はい。メガ・ネビュラスと申します。メガネとお呼びください」

「そうか、ならメガネさんよ。人魚を見なかつたか？」

「……人魚？」

「今この国を支えている」農耕將軍が病氣らしくてな。その治療のためには人魚の肉が必要なんだよ。だからこうして見張りなんぞをしているわけだが」

「他の方法では治せないのですか？」

「国の名医たち……つつてもそんなに残っていないんだが、そいつらの腕ではその治療は不可能だった。ならば後は奇跡に頼るしかないってな」

「……なら、そいつが治れば話は終わるんだな？」

「まあそうだが、どうしたんだアンタ。口調が変わってんぞ」

「気にするな。大したことじゃあない。それと質問なんだが——」

そうして話し込むメガネと衛兵。内容は病気の農耕將軍の症状について。

たしかに、この世界の医術では治療が不可能でも現代医術と組み合わせれば治療法は見つかるかもしれない。なかなか頭の回転が早い、頼れる人である。

そしてその話にかなり時間がかかるようだちお思ったタクマたちは、万が一にも見つかることのないように隠し通路の中へと戻っていくのだった。

「結論は出た。農耕將軍こと、退役騎士ジュリアス・ムーランの病は癌だ」

「いきなり帰ってくるなりそんなことを言わないでくださいまし。J二枚でイレブンバック。階段と色縛りが発生しているので自動的にスキップになりますわ。そして、8

切りで4を二枚！ 上がりですわー！」

「……貴様らは俺が情報を集めている間に何をやっているのだ」

「見てわからないのか？」と長親が。

「そうですわ。これは古くから伝わるトランプゲーム！」とドリルが。

そして息を揃えてこう言った。

「大富豪！」／「大貧民！」

「……あ？」

そして本気でにらみ合う。こんなことばかりだなと思うメデイであった。ちなみにタクマは大富豪派である。

この二人、長親とドリルの呼び方問題はなかなか根深いもので、30分ほど話し込んでいたメガネが戻ってくる間、ずっとこんな感じであった。

言い出しつぺはドリルだが、勝率はよくはない。基本的に長親とビリ争いをしていく。

それほどまでに、タクマ（というかメデイ）とアルフレッシュのプレイングは上手だった。

「それよりメガネさん、門の外に抜けられそうでした？」

「無理だろ。弓持ちが常に城壁の上で陣取ってる。射抜かれて死にたいってんなら構わ

んが」

「この世界の弓使いは平然と高速の飛来物を打ち落とすからな……」

「ええ、鍛えているとは伊達ではないのですよね……」

「それで、メガネさんは計画を何か思いついたんですよね」

『現代医療で農耕将軍様を治療するという話に思えましたが……』

「その通りだが、さすがにナノマシンなしで癌を切除しろとは無理な話だろう。故に、ナノマシンの代わりになるようなモノを使えるゲート使いを探るのが先決だな」

「じゃあ、ここでお別れですかね？」

「ああ、そもそもこの人魚騒動がなぜ起こったのか、そう言った背景情報がまるでない。ならば、ここいらでボス殺しと元凶探索に分かれたほうがいいだろうよ」

そうして、当然のように分かれるタクマとメガネ。

だが、ドリルと長親は奇妙なことにタクマと同行することを選んだ。

『念のため、理由を聞いても？』

「人探しより民兵との大立ち回りの方が楽しそうですから」

「……という、コイツを止める者が必要だろう。そんな理由だ」

「ありがとうございます。ドリルさん、長親さん」

「うん、けどこの3人合わせた力より私の方が強いよ？　大丈夫？　タクマ」

そんなアルフレシヤの声に対して、タクマは言う。

「別に力の大小は関係ないだろ。急所にいいのを入れればだいたいの生き物は死ぬんだから」

「それもそうですわね」

「このゲームはそれが本当に顕著だからな」

そう言った3人は、歴戦の猛者の空気を、少しだけ身にまもっていた。

「それなら、安心？」

そんな言葉には、アルフレシヤの少しの疑問と“高揚感”がにじみ出ていた。

この戦士たちと殺し合える。そんな高揚感が。

魔晶の行方

「それにしても、周囲がうるさいですわね」

「まあ、政変の最中のようだからな」

『民主主義はこの国のシステムには合っていないと思うのですけれどね』

などという言葉を交わしながら、ドリルと長親は眼前で行われているトランプゲーム
“スピード”を見る。

タクマとアルフレシヤは、互いに生命ライフ転換フォースを全開にして大人げなく（どちらも大人ではないが）遊びに打ち込んでいた。

尚、お互いの積極的お手付きによりタクマの両手はボロボロである。風を纏わせて切り刻んでいるのでアルフレシヤにも微妙にダメージが入っているが、頑丈な体に傷という傷を負わせるに至ってはいない。

そうして、今回のゲームもタクマのダメージにより決着がついた。

「……カードが持てない、リタイヤだ」

「これで私の……何勝負？」

『6勝負ですわね……スピードのルールにノックアウトが存在すればの話ですけれど』

そんな会話の後に、アルフレシヤはタクマに自身の血を飲ませる。

それはたつた一滴であったが、剛力と戦ったタクマの手を瞬時に癒してみせた。

これが、人魚の血の尋常でない力だ。この現象を見れば“どんな病も治る”と信じる者がいてもおかしくはないだろう。そんなことをこの場にいる全員は思った。

「それで、これからどうします?」

「まあ、いつまでもトランプで遊んでいられるだけでは、な」

「私は、わない」

『アルフレシヤ、そこは構いましょう。いつまでもここが安全とは限らないのですから』
そんな意見から、タクマ達は隠し通路から出る。

アルフレシヤは見た目だけなら人間と同じなので、注視されなければ気付かないだろう。

もつとも、この王国の熟練の兵士たちなら平然と見つけてきそうな気はするのだが。

そうしてタクマ達が外に出ると、そこには多くの民兵や兵士、騎士などがいた。

そして何より、“熱に浮いている”市民たちがいた。

市民たちは言う「民主主義を! 市民に政治の権利を!」と。

騎士たちは言う「私たちにそれを決める権利はない!」と。

まさしく、デモであった。

「なんだかわかりませんがとにかくヨシ！　ですわ！」

「デモ隊に紛れて強行突破行けそうですね」

『ですが、不可解です。なぜ王城ではなくこの城門に対して人が集まっているのでしょうか？』

「正直、そのあたりは無視して構わないと思いますわ。4つの門を足止めして、その際に王城で直談判とかそういう作戦でしようし」

「確かにな。見えている限りでは、民兵合わせて30人くらいか？　妙に少ない」

「私は構わない、よ。強行突破で」

「……門の外に出たら、俺たちはお前を殺すつもりだが、良いのか？」

「私も、殺し合いたい」

「残響に堕ちた私でも、最後に踊る相手は選びたいよ」

「まあ、私が勝つけど」と最後に付け加えるアルフレシヤ。

タクマは思った。その心は、とても綺麗なモノなのだ。

だからこそこの手で殺したいと、心の底から思った。それが異常な心の動きだとして

も、それでもいいと思える強い思いだった。

『マスター、気持ちを抑えて』

「わかってるよ」

そうして、タクマ達はデモ隊の市民に紛れて門の側に近寄った。

『では、行きましようか』

「うん、行こう」

その声と共に解放される4つの生命ライフフォース転換。その存在に騎士たちは気付いたが、アルフレシャの「La」という一音だけの歌ですべてが静止し、門を跳び越える機動力を持っているタクマとアルフレシャは一息に城門を超えるのだった。

そして、着地と共に二人は同じ発音の違う言葉を口に出す。

魂を次のステージへと進めるその言葉を。

「ゲイトオープン聖剣抜刀！」／「ゲイトオープン魔晶解放！」

そうして二人は向かい合う。

一人は、“切断”の能力を持った剣士“タクマ”

もう一人は、“宙を泳ぐ美しい人魚”天仙女アルフレシャ“

互いのにらみ合いは数瞬、そして同時に攻めかからんと距離を詰めた。

先に手を出したのはアルフレシヤ。宙を泳ぐ変則的な軌道を描きながら、タクマに対して尾びれで生み出した風圧を叩きつける。

それを風を纏わせた剣で切り払いながらタクマも前に出る。

そうして、剣の射程に入れようとすることも、アルフレシヤは華麗に宙を泳ぎその距離から離れてまた衝撃波を叩きつけてくる。

その、消極的な戦い方を見てタクマは勘づく。

「時間切れ狙いか！」

「どうだろうね？」

タクマのゲートは短距離中時間型。短いわけではないが、長時間ゲートを開いたままにすることはできない。

故に攻め込まなくてはならない。無理にでも宙を泳ぐアルフレシヤを殺す手を打たなければならぬ。

「元から、そのつもりだッ！」

そんな思考誘導に完全に乗る形でタクマは距離を詰める。

すると、アルフレシヤは衝撃波による迎撃を止め、低空に体を滑り込ませての拳を力ウンターで放つ。変則的なアッパーだ。

それに対してタクマは空に逃げた。それは風を踏み、体をひねりながらの回避であり、そして、回転の力を十全に使った、手首を切り落とす斬撃への布石だった。

「まず、手一つ！」

そうして切り落とされたアルフレシヤの右手首から先は地に落ち、しかしそれを意に介さないアルフレシヤのサマーソルトがタクマに命中する。

当たり所は、左手のミスリルの籠手。意図的にインパクトの位置をずらすことで致命傷を回避したのだ。

当然アルフレシヤの剛力により籠手は破壊され、中の左手にもダメージは大きかったが、使用不可というわけではない。

「前哨戦は、引き分け？」

「………みたいだな」

互いに左手に大ダメージを負ったが、致命傷ではない。タクマは剣を支える程度はできると、アルフレシヤも死ぬというわけではない。

そうして互いが互いへの殺意を純化していく最中、門の方から大きな音が聞こえてくる。

そのことについてメデイがタクマに注意を払わせようとするも、タクマの今の思考を考え、止めた。

不謹慎ながら、タクマはこの“アルフレシャとの殺し合い”にて人間性を取り戻しているようにメデイは思える。

それは間違いなく異常な精神だったが、タクマにとっては日常のものだった。

だからこそ、メデイは止めなかった。メデイにとって最も優先したいのは、タクマの心なのだから。

そうして、爆音の原因である“門で起きたゲート使いの激突”の余波で飛んできた巨石がタクマとアルフレシャの間を抜けた時、二人は同時にリミッターを外した。

そして、タクマの起こした暴風による加速と、アルフレシャの地面を尾びれで叩く反動での加速が同時に起こり

二人は、誰の手も届かない高高度高速戦闘を開始した。

風を踏み、空を駆けるタクマはゲートにて上昇した生命転換ライフオーズの出力を加速のみに使い、ゲートの力である“切断”を空気抵抗を切り裂くことに使っている。

宙を泳ぎ、空を舞うアルフレシャは初速を全く落とさずに卓越した技巧のみで高速を維持している。

その速度は、ほぼ直角。直線軌道ではタクマが若干速く、曲線軌道ではアルフレシャ

が若干速い。

しかし、その速度差は互いにほぼ無価値だった。

互いに攻撃が届くのは交差する一瞬のみ、であるならば、その0.01秒以下の交差のタイミングでの精密機動以外に価値はないのだ。

これまで4度交差し、互いに必殺を回避しあった二人にはそれが理解できている。

タクマの必殺は、その剣による斬撃そのもの。

アルフレシャの必殺は、その剛力による力そのもの。

それを当てるためには命を捨てる覚悟が必要だと、二人が同時に思ったその時。

アルフレシャは、突如力を失い落下し始めた。

その姿を見たタクマは、加速のままに接近し、アルフレシャの脳天からその体を二つに切り裂いた。

手ごたえはあった。だが、殺したという達成感はどこにもなかった。

『マスター！ 気を付けて！ アルフレシャの額にあった結晶が消えています！』

「ツ!? 死んだふりか!？」

『わかりません！ ですが、おそらく本当の戦いはこれからです！』

その声と共に、地上にて強い魂を感じる。

アルフレシャに似た魂は、しかしあの奇妙な美しさとは別のものだった。

そして、そいつの右腕にあるのはアルフレシヤの結晶。

何らかの方法で、そいつはアルフレシヤの結晶を盗み取ったのだ。この高度20メートルで、時速150キロは出ていたタクマたちから。

そして、その女はタクマに強弓を向けて、軽々しく矢を放った。

1射目は、なんとか防げた。衝撃で吹き飛んだ右腕と砕けた良質な鋼の剣のおかげで。

続く2射目、タクマは重力加速度を利用した高速落下でなんとか回避。

だが、3射目を回避することはできず、タクマはあえなく死亡し、この世界へのログイン制限をかけられるのだった。



そうして、地に落ちながら光に消えていくタクマを見て、その女は言った。

「ええ、私はあの人魚などよりも役に立って見せますわ。マグノリア様。これから何度も、何度も、何度も、何度も、私が”この世界を滅ぼします。だから、どうか見てください——この偽りの命、あなたに捧げ切って見せますから”

そうして、彼女は強弓を構え、空を泳ぎポジションを確保する。

そうして、そこから王城”以外”に対して空襲を始めた。

3分未満のその空襲により、王都は半壊し、市民と貴族たちの対立は決定的になった。その様子に満足した彼女“リコリス”は、結晶を隠すと元の隠れ家に戻り、己の同僚である黒騎士と合流するのだった。

空襲の後 内乱の前

タクマがデスペナルティに陥ってから、数分も経たないうちに多くのプレイヤーがロビーへと戻ってきた。

あるものは、空襲によって。あるものは、空襲後に錯乱した民兵によって。あるものは、鎮圧しようとした騎士や兵士の攻撃によって。

それぞれ殺されて、このロビーへと戻ってきたのだ。

「……横槍入れられたか」

『そのようですね。死んだ皆さまの会話から察するに、相当な混乱が起きているものかと』

「——ええ、その通りですわ」

そう、声をかけてきたのはプリンセス・ドリル。

その容姿は、ポロポロであった。同行していた長親も同様だ。

「あの黒づくめの弓女、やりたい放題でしたのよ。遠くから民衆ごと私たちを爆撃したり、接近した！　と思ったら瞬間移動していたり。拳銃の果てはあの空襲ですわ！　何

がしたいのかさっぱりですわ」

「俺たちは門にいた騎士のバリアーのようなゲートで守られたので命は無事だったのだがな」

『そんなゲート使いがいたのに、よくマスターの戦いに横やりがありませんでしたね』

「いや、あれに手出しは無粋だろ／＼ですわよ」

「……どういう風に見られていたんですか、俺とアルフレッシュは」

「率直に言つて、愛し合っているようでしたわ」

「本当にどう見られていたんですか!？」

「ああも心で繋がる演舞を見れば、そうも思う。なんなら俺のログを見るか？」

「……恥ずかしいので遠慮しておきます」

その言葉に、長親はふと警戒心の抜けた笑みを浮かべた。

「どうしましたの長親さん。気持ち悪いですわよ?」

「……お前の見る目を見直した。それだけだ」

「まあ!」

そんなドリルの言葉に、顔を背けることで意志を示す長親。恥ずかしいのだろうかとかクマは思ったが、それを口にはしなかった。

それよりも、今感じている背筋が凍るような、とても身近だった錯覚の方が重要だからだ。

「こんにちはタクマくん。とても素敵なダンスだったわね」

そう声をかけてくるのは、Mrs. ダイハードことヒョウカだ。

タクマのことを異性として、婚約者として、好きだと宣った女である。

「ああ、久しぶりヒョウカ。なんでそんな怒ってるんだ？」

『マスター、その返しはマイナスです』

「私の」タクマくん。あなたは「私」を放っておいてどこの馬の骨とも知れない人魚とどうしていたの？ 「私の」タクマくんはまさか愛を語り合っていたとでもいうのではないでしょうね？」

「……私って多くない？」

「話を逸らさないで」

「いや、ただ殺し合ってただけなんだが」

「うん、有罪ギルティね」

「一応聞くが、なんでさ」

「だって、タクマくんの全部で人魚の全部とぶつかったのでしょうか？ それってもうS

○Xと変わらないじゃない」

「……そう、なのか!？」

『マスター、正気に戻ってください。それとヒョウカ様、年頃の女性なら言葉を選ぶべきかと』

その言葉にハツとするタクマ。よく考えなくても殺し合いとそういう行為は繋がらない。

そんな常識がヒョウカの勢いだけで塗り替えられようとしていたのだという事に、注意せねばと思うのだった。

「あら、メデイはどうして今のを邪魔したのかしら。うまくいけばタクマくんを連れ戻せたのかもしれないのに」

「お前さつきまでの演技かよ」

「素よ? 9割9分9厘まで」

「マジか」

『一応理由を言うならば、マスターの常識のズレをこれ以上大きくしたくなかったまでの事です』

「……そういう事にしておいてあげるわ」

そういう事以外にどうとれるのか? という疑問がタクマとメデイの中に生まれ脳

内会議が始まったが、それはヒョウカの絶対零度の視線により中断された。

「それで、タクマくん」

「どうした？ ヒョウカ」

「あなた、相談もなしに何やってるのよ」

「……すまん、どれの事言ってるんだ？」

「あなたがご執心のポランティアで、あなたが女の家に移り込んでいること、とか？」

その言葉にタクマは頭を悩ませ、こう言った。

「問題あるのか？ ソレ」

「問題しかないわよ。私、タクマくんの子供なら愛せる自信はあるけど、浮気相手は何がなんでも息の根を止めるわよ？」

『そういう行為は行っていいのですが……』

「というか、そういう激しい運動はやったら心臓爆発して死ぬわ」

『爆発はしませんけどね』

そんな会話をしていると、タクマのログアウト制限が解除された感覚がやってきた。

ログアウト制限は、ライフフォース生命転換の充電時間だ。それがこうも早く終わる事にタクマは違和感を覚えるも、話を切り上げてさっさと転移しようとした。

すると、他にもメニューを開いて転移を行おうとしている者も多いことが横目で見れ

た。

「まだ話は終わっていないのだけれど、入れるようになったみたいね」

「まあ、また今度な」

「……納得いかないわ。とても」

「納得しといてくれ」

そうして、タクマと他多くのプレイヤーはワールドに転移した。

そうして到着した王都は、地獄だった。

燃え上がる家屋、爆ぜ散ったレンガ、様々に散らばっている人の肉片、そしてその中で唯一無事な王城の姿。

ギリギリ命を繋いでいる人は言う、「どうして王族が、こんな真似を？」と。

無事だった民兵は言う、「これが、権力者のやる事かよ！」と。

そして、身なりの整った扇動者^{アシテーター}は言う、「生き残った皆様！ 西へ！ 農耕將軍ジュリ

アス・ムーラン様が受け入れの準備を進めています！」

そうして、その男の周囲の民兵たちに助けられて、ボロボロの人々は救助されていた。

「稀人の皆さん、できれば手を貸していただけませんか？」

その声と共に、動き出すプレイヤー達。魂感知で感じられる人々の命を感じ取り、救助と応急処置をし始めた。

そして、タクマはすつと存在感を消して周囲から抜け出し、王城へと侵入する。

王城の門は開け放たれてあり、今から救護部隊が出る、というような場面であった。

「命を救え！ 誤解など無視して構わない！」

そう叫ぶのは騎士団の副団長。どうにも、自分たちが置かれてる状況を理解して、それでも尚命を救おうと動いているようだ。

「相変わらず、凄いな」

『ええ、心に鋼の芯があるように思えます』

そうして、視線を感じると、救護部隊を窓から見つめるアルフォンスが居た。その隣には、ラズワルド王が居る。

王は、タクマ「気付いて招き入れようと窓を開けた。入ってこいとこの事だろう。」

故にタクマは生命転換ライフフォースを起こし、風を踏んでその窓へと飛び込む。

当然アルフォンスは迎撃に剣を向けてきたが、タクマだと気づいてくれたのかギリギリで剣を止めてくれた。

「……タクマ、普通に入って来れないのか？ お前は」

「王様に招かれたんだから、最短で来るのが礼儀だろう」

『まあ、城内の道がわからなかったというのはあるのですけれど』

「相変わらず適当だな……」

「それで、何の用だ？ 稀人のタクマ」

「なんだか、国が反王族で纏まりつつがあるので、当の本人達がどう思ってるのか気になりますよ」

「そんなものは決まっている」

「喜ばしいことだ」

そんな意外な返事が、アルフォンスとラズワルドの王族2人からは帰ってきた。「それだけならば」と加えて言ったが。

『貴方方の既得権益が踏みにじられようとしているのですよ？』

「かまわん。元より我らは護国の剣だ。王から市民なり奴隷なりに変わるだけなら何も問題はない」

「それに、新たな民がやってきたのだから変化は必要だろう？ だから、国の行末は成り行きに任せて引き継ぎに必要な書類を纏めていた」

『素晴らしい、というより都合が良すぎますね』

「いや、メデイ。この人ら多分政務とか面倒事を押し付けたいだけだと思うぞ」

「バレたか」

『……革命側が正しいのではないかと思いはじめました、私』

「とはいえ、当然ながらこんな力技で、内乱を引き起こすようなやり方をする奴を放つてはおけない。私は一人のアルフォンスとして戦いに行くつもりだ」

「……なら、一緒に行くか？」

「ああ、そのつもりだ。またしても稀人の手を借りるといふ事に思うことはあるが、な
そうして、アルフォンスとタクマはまたしても手を結ぶ。

今回は、お互いただの友人として。

「所で、タクマ」

「なんだ？」

「臆病者の剣はどうした？」

「……折れた」

「なら、折れた剣と素材を出してくれ。王城には炉があるのだ。打ち直させよう」
『失礼、素材とは？』

「魂や呪い、そう言った強い力の籠もっているものだ。強い魔獣の牙などだな。それと
持ち主の血や毛などを溶かして混ぜると、剣はより持ち主に馴染む……と聞いた」

『武器の強化、ということのようですね』

「つつても素材なんて……あつたわ」

そうして、タクマの臆病者チキンソードの剣はアルフレッシュの鱗と魂を込めた血と共に、打ち直されるのだった。

「それで、これからのアテはあるのか？」

「あつたら王城には行つてないっての」

『マスター……アテ、というか確認するべき事はいくつかあると』

「メデイ、そいつはどんな？」

『まずは、農耕將軍の目的です。病の身でありながらどうしてこんな革命の手助けをしているのか』

「ああ、それなら単純だぞ」

「知ってるのかアルフォンス」

「あの方は、手の届く範囲で人助けをしているだけだ。裏の目的があるとすれば担いでる黒幕にだろう」

『……それはそれで問題な気がします』

「誰彼構わず助けてたら、悪人に利用されたって事か」

「……ジュリアス殿が騙されるとは思えぬのだがな」

「まあ、本人に聞いてみればわかるか」

「それもそうですね」

そんな脳筋思考を止めるものは誰もいない。

アルフォンスとタクマは考えるのをやめた為。メデイは「この二人ならばやってのけるだろう」という信頼からだった。

そうして、ジュリアス・ムーランの農地へと二人は到着する。

そこは、三発ほど空襲の跡があつたが、大きな被害はない。

王都の南東地区の2／3を占めているのにその少なさは異常に思えるが、それだけではまだ小さな不審点にしかならない。

「では、行こうか」

「……すまん、屋敷とかは見えないんだが」

「あるだろう？ あそこに家が」

そこにあるのは、2階建の一軒家だ。

どうやらアレが、農耕將軍の屋敷らしい。

『無欲とは、凄まじいですね』

そうして、ノックとともに家に入ると「はい！」と元気な少女の声が聞こえた。

「どちら様ですか……え？」

「少しジュリアス殿と話がしたくてやってきた。アルフォンスという者だ。取り次いで

はくれないか?」

「……王子様が!??直接!??え、何? どゆこと!??」

そう、少女が狼狽していると、奥から杖を付いた老人が現れる。

「これは王子、お久しぶりです」

「お久しぶりですジュリアス殿。こちらは稀人のタクマと精霊のメデイ。私の友人です」

「タクマです」

『メデイと申します』

「なるほど、それでご用件とは?」

「ジュリアス殿は、この空襲について何かご存知ではないですか?」

「……」一つ言わせて貰おう」

「儂、なんも知らん。マジで」

「『え?』」

そんな3つの声が重なって響いた。

黒衣の射手リコリス

「儂、なんも知らん。マジで」

その言葉は、タクマ達をフリーズさせるのに十分なものだった。

『……一応聞きますが、あなたは何をしていたのですか?』

「ずっと弟子を育てておった。儂と同じ、作物を成長させられるこの娘をな」

「えっと、穂村恵と申します」

その少女の歳の頃はタクマとそう変わらない。だが、よくよく見れば優しく、しかし強かな魂を持っていると感じられた。

「それは、ジュリアス殿にしかできない事ですね。では、民主主義については?」

「入植者の権利をしゃんとさせようと思つて協力しておる。メグミはこの通り親もな、施設にも入れなかつた子じゃ。たまたま儂が見つけれなかつたら、死んでおつたじゃろうな」

『なるほど。ならば、現在の内戦へ向かう状況を止める意思はあると?』

「儂とて元騎士じゃ、民草が無駄に死ぬ事を良しとはせぬよ」

その言葉を聞いたアルフォンスは「よし、ジュリアス殿と共に敵本陣に向かおう」と

言った。

その言葉にメグミ以外は納得し、メグミも渋々同意しようとした時。

タクマとアルフォンス、そしてジュリアスは反応した。その生命転換に。ライフフォース

「タクマ！ メグミ殿を！」

「言われなくても！」

「では、久方ぶりに抜くかの、儂の剣を！」

その言葉と共に抜かれるアルフォンスとジュリアスの二本の剣。その輝きは生命のいのち輝きを纏い、振るわれた。

「閃光剣！」レイブレッド

そうして放たれた二本の光剣が、ここに飛来してきた誰かの放ってきた飛来物を消滅させる。

タクマは恵を抱きかかえ、状況を見る。

まず、2本の閃光剣レイブレッドにより飛来物がやってきた側の壁は消し飛んでおり、敵の姿がよく見えるようになった。

放たれたのは、強弓による連射。それを放ったのは、黒い装束の女弓兵。

その右手には、アルフレシャのコアが宿っている。

「はいつか……ッ！」

「名乗りはないな。今のうちに仕留めるべきだろう」

「……気を付けい！ こやつのがートは！」

その女に対して何か知っているジュリアスは警告をしようとしたが

「遅い」

という言葉とともに、背後から着弾した矢によってジュリアスの体は爆散した。

ただの一撃で、あっさり」と。

「お爺ちゃん！」

「タクマ！ 何が!?？」

『転移です！ 放たれた矢が消え、ジュリアス様の背後に現れました！』

「アルフレシヤのコアを奪ったのもその力か！ 転移のがート！」

その言葉と共に、タクマは腹を括る。射手は一人だが矢は360度どこからでも飛ん

でくる。

逃げるしかない。タクマの理性と本能は同じ事を言っていた。

「アルフォンス！ 別れるぞ！ 二手に分かれて兎に角逃げる！」

「ああ！ 遮蔽物がなさ過ぎて戦いようがない！」

「待って、お爺ちゃんが、お爺ちゃんが！」

『恵様、今は落ち着いてください』

「……逃すと思うの?」

その言葉とともに、再び矢が放たれる。今度の着弾点はタクマとアルフォンスの間。そこに生命ライフフォース転換が込められた矢が突き刺さり、爆発した。

その衝撃により飛ばされるアルフォンスとタクマ。二人とも衝撃をそのまま受けて初速としたが、それでも射手の狙いから逃れることはできていない。そう、直感できている。

故に、アルフォンスは最短で事態を収束するべく、切り札を切った。

「ゲイトオープン聖剣抜刀!」

その蒼炎の鎧は、高速で真っ直ぐに射手の元へと向かっていった。

しかし、敵に動きはない。しっかりとアルフォンスを見据えており、しかしタクマのことを魂で捉えている。

そして、変わらずに強弓を構えている。

現在、見えているのは四本の矢。その一発一発にアルフォンスを足止めするのに分な魂カが込められている。

そして、その矢は放たれたと同時に消え、アルフォンスに着弾する。

一発目は、アルフォンスの右足を狙って。

アルフォンスはゲートの身体能力と防御能力でそのまま突貫した。

多少のダメージを受けたが、スピードは落ちていない。

しかし、二発目は特攻を決めたアルフォンスの右足の膝裏に着弾した。

それにより、一発目によって力を受けていた足に逆方向からの力がかかる。

信じがたいことに、それは二本の矢を使った膝を破壊するための関節技サブミッションだった。

「ガッ!?」

「アルフォンス!?」

そしてその関節技はアルフォンスの右足を鎧越しに破壊したのだ。

そして、残りの二発は同時に着弾して、爆発。その衝撃でアルフォンスは中に浮かされた。

そして矢が続いて着弾していく様を見て、タクマは気づいた。

「あいつ、空中で時間切れまで貼り付けにするつもりか!」

『マスター、援護を!』

「わかつてる! 風よ……ッ!?」

そしてタクマが風を吹かせてアルフォンスを助けようと魂を込めると、強弓がタクマに向かって放たれてくる。

ゲートを通さない矢だったが、生命ライフ転換は込められている。

回避するしか、手はない。

そして今、タクマとアルフォンスには状況の打開のために打てる手が完全になくなった。

アルフォンスは空中で閃光剣レイブレドを展開して矢を切り裂こうとするも、その剣を振るう腕を矢で射抜かれ、剣に初速が乗る前に封じられている。

タクマが接近、あるいは離脱しようとして風を踏もうとすると、風を踏んだ直後の初速により軌道修正できない瞬間を狙い撃たれて爆ぜ散るだろう。

そして、そもそも強弓の正確性により回避以外の行動を取ることが出来ていない。

「メデイー！ 何か策を思いつかないか？！」

『現状取りうる手段の全てが潰されています！ 誰かの救援がなければ一分以内に私たちは殺されます！』

そうして、手詰まりとなった時に抱えている少女、メグミはその魂を解放した。

そこにある感情は、怒り。

先ほどまで理不尽による悲しみに打ちひしがれていた少女は、しかしそれでも強い魂心で立ち向かおうと、前を向うとその鍵を開けた。

「お前が、いるからあああああ！ 聖兜現界！」ゲートオープン

その言葉とともに、メグミから魂が流れ出た。

それは、まるで聖域が生まれたかのようだった。暖かく、育む力を持つ魂の聖域、そ

れが農地全体に広がった。

そして、暴走するかのように育つ作物たち。それが意思を持つかのように強弓の女に群がっていく。

流石にまずいと思ったのか、女は跳びのき宙を泳ごうとする。

それは、ほんの一瞬程度。しかし、隙を伺っていた二人の剣鬼にとつては十全過ぎる隙だった。

「すまん！」

その言葉を残してタクマは恵を放り捨て、アルフォンスの元に風を踏み続けて接近する。

そして、アルフォンスも同時に剣を構え、必殺の一刀の準備を整える。

射手もさるもの、飛翔しているタクマに対して矢を放つ。それは当然のように着弾してタクマを爆散させた。

しかし、タクマの放った風の足場は、しっかりとアルフォンスの左足に届いていた。「……閃光剣オオ！」

そして、その足場を使って踏み込んだアルフォンスの閃光の剣は巨大化し、射手のいた空域をまとめて光で消し飛ばした。

「……手応えがない、逃したか？」

そう言ったアルフォンスであるが、しかし残されたゲート展開時間を考えてメグミを拾い、この区域から離脱するのだった。

それは、現状取り得る最良の選択肢だった。しかし、その姿はしっかりと見られていた。

転移のゲートにて極光を回避した黒衣の射手リコリスによつて。

■ □ ■

タクマが気付くと、そこはいつものロビーであった。

あれからのアルフォンス達の事が気になりではあるが、それよりもまず今の事だ。

周囲に人はまばらだが、居ないわけではない。

しかし、その者たちはタクマを見てすらいなかった。厳密には何人か見ていたが、行動に移る事はなかった。

直接何かされるといふ事はなく、それを不気味に思う。

今ならば、集団リンチの一つや二つ起きてもおかしくないとタクマは思っているからだ。

そうして、タクマは起き上がろうとするも、体が動かない。

魂のダメージが重かったのか？ と口に出そうとするも、それが音になる事はない。

そして、その理由に気が付いた。

タクマは今、無機質な手をしている。

その手は、第0形態アバターのものだった。

タクマは今、誰に触れる事も、誰に話す事も、誰に影響を与える事もないまま、ロビーに現れているのだった。

『これ、どういう事?』

『私が知っているわけじゃないじゃないですか、馬鹿マスター』

狂乱の王都

自身が第0アバターであることを自覚したタクマだが、すぐに行動を起こすという事は難しかった。

現在、タクマはうつぶせに倒れたままだ。そして、その体は鉛のように重く動けない。加えて言うなら、助けを求め声を出すこともできない。

そんな、何もできない状態にタクマはあった。

『マスター、ここはログアウトいたしませんか？』

『ああ、さすがに何もできない』

そうして、タクマはしぶしぶとメデイによるメニュー操作により《Echo World》からログアウトするのだった。



そうしてタクマは現実世界で目を覚ます。現在、客間の布団で横になっている姿勢だが、どうにも近くに人の気配がある。

起き上がり、その方向に目を向けようとすると体の調子がひどく悪いことに気が付いた。

「あ、ゲーム終わったんや」

その言葉を発したのは美緒だ。コンソールで姉のプレイを見ながら、同時に何かの読書をしていたようだった。

彼女は、どことなく嬉しそうで、しかし琢磨の顔を見ると心配そうな顔に変わった。

「ちよつと琢磨くん、大丈夫なん？ 顔色悪いで？」

「大丈夫じゃないかもしれませんが。体がかなりしんどいです」

「風邪でもひいたん？ っつのはメデイちゃんがいるからすぐにわかるか」

『はい、現在マスターの体をチェックしている最中です。マスター、動けますか？』

「ああ、しんどいがゲームの中ほどじゃない」

そうしてタクマはメデイに言われるがままに体を動かし、細かな体調変化を測定していく。

『マスター、結論から申し上げます』

「マジで風邪でもひいたか？」

『いえ、マスターの体は正常です。しかし、重度の疲労状態にある……と肉体動作チェックからは予測できません』

「なんか歯切れ悪そうな結論やね」

『ええ、体に疲労物質は溜まっていませんから』

「……つまり食って寝てれば直るのか」

『断言はできませんが、おそらくは』

「なら問題ないな、どのみち今日はもうログインできないだろうし」

「なら、お姉も起こしてお昼にする？」

『それではお願ひします。できるだけ滋養に良いものを』

「了解やわー」

そうして手に持った端末で美緒はドリルにメッセージを送った。

それから数分後に、瀬奈は起き、琢磨も思い体を引きずって起き、3人での昼食をとった。

「「ごちそうさまでした」」

「それで、タクマくん」

「どうしました？ 美緒さん」

「しばらくログインできなくて暇と違う？」

「まあ、デスペナうんぬんの前に体調整えないとまずいですからね」

「体調？ タクマくんどこが悪いんですの？」

「疲れただけです、多分」

「……旅の疲れが出たのでしょうか？」

『一応魂のダメージが原因ではないかと仮説は立てていたのですが、そちらの線もありそうですね』

「なら、タクマくんも一緒にお姉の活躍を見いひん？」

「少し恥ずかしいですわね、それは」

「ならお言葉に甘えて」

そうして、食器などを片付けたタクマ達は、瀬名の部屋へと赴くのだった。



そうして瀬奈がプリンセス・ドリルとしてログインしてから1時間ほど。

そこに見えた映像は、まさしく戦場だった。

これまでのモンスターとの生存競争ではなく、人と人が殺し合う狂乱の戦場。

「ドリルを守れ！ こいつが死んだら歌に侵されるぞ！」

その声は長親のモノだ。聞こえる歌はどこからのものかわからない。しかし、歌に侵されたものは例外なく戦場の狂気に飲み込まれる。

剣王ラズワルドが自刃したのだからその例外ではないのだ。

そうして、国民すべてが戦えてしまう事が原因による終わりのない戦いは続いた。

その始まりは、アルフォンスを処刑するという声が王都中に鳴り響いたことだった。王都の噴水前広場にて右足を失ったアルフォンスが縛られて転がされている。

処刑だと言い出したのは民主主義派の“過激派”のトップらしい男“マクベス”。その声は誰かの力によって広げられ、王都中に広がった。

民主主義側、王族側によらずその声に反応したものは多く、王都中の人間が噴水前広場に集まった。それぞれの思想と、現状への怒りをもって。

そして噴水前広場に多くの人が集まったその時、歌が聞こえ始めた。

それは、まぎれもなくアルフレシヤの歌だった。

その歌と共に上空に現れたのは“人魔アルフレシヤ・リコリス”。黒衣の強弓使いの女だった。

その女は空からただ歌っているだけ、何かを起こすような気配は全くない。

しかしそれだけで、王都に住む人々は終わった。

感情のブレーキが利かなくなつたマクベスは、アルフォンスの首を落とすとした。

その姿を見たラズワルドは、マクベスを周りの被害も関係なく極光にて切り殺した。

そのラズワルドを見て“王族は民を殺す敵なのだから”と間違つた覚悟を決めて立ち向かう民衆たち。

その後、ラズワルドは数十人の市民を切り殺したのちに唐突に自刃した。

そのことで暴走するのは騎士たち、彼らの理性は消え、民衆への怒りだけで虐殺を開始した。

それに対抗して民兵も誰彼構わず殺しにかかった。

彼らは同じ王国市民、敵味方を区別する都合のいいものなどどこにもない。

それが、目の前の者は全て殺すべき敵であるところの国の全員が判断した理由である。

だが、一人だけその狂気の激流に立ち向かう者がいた。

彼女は、高らかに槍を掲げ、歌うように己を解放する。

「ゲイトオーブン聖剣抜刀！」

その彼女を中心に広がる螺旋のエネルギーはその干渉を受けた者を歌の影響から逃れさせた。

それはあまりのことに茫然としていたプレイヤーや、感情に左右されない行動理念を持つ者、そのような少ない面々だったが、それでも少数のグループとして声を上げたのだ『戦いを止めろ』と。

それが、今から5分前の出来事。

そして、5分間にドリル陣営は崩壊しかけていた。激しすぎる狂気の激流によって。

「なあ、何でこの人ら殺すのを止めないん？」

『直前までの狂気の行動を間違いだつたと認められないのでしょうか。人殺しは、重いですから』

「本当に、そうなんだよな」

そうして琢磨は無言で《Echo World》へとログインをする。しかし未だに第0アバターのままで、ワールドに転移することはできない。

そう、無情に表示されていた。

「どうしたら、いいのかな？」

「……お姉、大丈夫やろか。これがゲームオーバーになったらまた異界が生まれるんやろ？ お姉を中心に」

『もうじきゲームオーバーの可能性があると警察や特殊部隊には連絡できています。以前のようにな十分な戦力で立ち向かえるでしょう……というのは、気休めでしかありませんよ』

「うん、正直ホンマ怖い」

そうして、思い出して震える肩を抑えながら、縋るように美緒は言う。

「けど、琢磨くんならなんとかしてくれる——なんてのは都合良すぎっ。」

その声に琢磨とメデイは、反射的に応えた

『任せろ』と。

それは琢磨自身もメデイもふとこぼれてしまった言葉だ。だがしかし、それは二人が無意識に思っている本音だった。

親しい人を助けたい。親しい人を守りたい。

そんな「当たり前」が、琢磨とメデイの中で噛み合った瞬間だった。

魂が、「行け」と言っているように聞こえたのは。

『マスター、ログイン準備を』

「もうしてる」

「琢磨くん？　メデイちゃん？」

「とりあえず、ゲームに入るだけ入ってみます。まだゲームオーバーではないみたいで
すから」

『臆病者の剣の回収が最優先です。以降は徹底的な遅延戦闘を推奨します』
「ゲームオーバーまでの時間を少しでも稼ぐ、まずはそれからだ」

琢磨とメデイのその様子を見て、美緒は「これはもう止まらない」ということを感じるのだった。



そうして、タクマはログインに成功する。体は重いが、不思議と胸の奥から力が湧いてくるような感覚が止まらない。

「メデイ、わかるか？」

『さて、都合がいいとしかわかりませんね』

「まあ、考えるのは後で良いか！」

その言葉と共にタクマはその胸の奥からの力を使って、ライフフォース生命転換を身に纏う。

次第に体は形作られていき、何かが呼んでいるという強い感覚がタクマをそのままワールドへの転移に導いた。

そして、ワールドに転移した瞬間に王城は爆発し、城壁が雨のように飛んでくる中で、タクマとメデイは右手を上げた。

そして、掴み取る。瓦礫と共にタクマの元に飛んできた一本の剣を。

それは、武骨な剣だった。装飾はなく、肉厚のロングソード。

一度折れたことで、より頑丈に仕立て上げられたその剣は、タクマの手と魂に良くなじんだ。

そして同時に感じる。この剣を打ち直した鍛冶師の純粹なる魂を。おもし

“生き残ってほしい”、その想いがタクマにこの剣を届けてくれたのだと直感した。

「行くぞ、臆病者の剣！」

『私たちと、共に！』

そうしてタクマは愛剣を両手で持ち、タクマの最速で戦場へと赴くのだった。